

ポケットモンスター
青いアヒルと燃えるヒ
ヨコ

サムハル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ポケットモンスター、縮めてポケモン。

この星の不思議な不思議な生き物。

海に、空に、森に、街に、世界中の至る所でその姿を見ることができると。

人間となかよく暮らしていたり、野生のポケモンもいるが、その生態については、まだわかっていない事が多い。

これは、とある地方で、ポケモンと旅に出る事になった、少年と少女のお話。

「よし！相棒になってくれよ！」

「これからよろしくね！」

目次

157	10.	まさかの再戦、れおん対ナブ	138	11.	ナブの切り札	181
	9.	決着、ハルヤジム	113	12.	怪しき者	205
	8.	初めてのジム戦	95	13.	オアシティへ	232
	7.	特訓	78	14.	ラミア	244
61	6.	vsぬしポケモン	61	15.	ターナ	261
	5.	クモの巣の町？ハルヤタウン	44	16.	ターナとほのか	276
	4.	次の街へ	25	17.	ターナとれおん	296
	3.	一緒に来てくれる？	19	18.	傷だらけのミミツキュ	318
	2.	設定	1	19.	待ちぼうけ	340
	1.	出会い		20.	鉱山の街、ガーネシティ	352
				21.	ジム対策	370
				22.	ガーネジム戦	389
				23.	ガーネジム、突破	413

2 4.	街巡り	440	3 7.	クルーズバトルディナー	666
2 5.	暴れるポケモン達	457	3 8.	れおん&だいき	677
2 6.	暴れるポケモン達2	475	3 9.	ほのか&ワグ	698
2 7.	収束	497	4 0.	大混乱、レイロウシティ	723
2 8.	共に修行を	506	4 1.	大混乱、レイロウシティ2	
2 9.	バトル大橋	530	4 2.	746 計画的な犯行	767
3 0.	バトル大橋2	547	4 3.	動き出す悪魔	781
3 1.	レイロウシティへ	571	4 4.	帰省	795
3 2.	水族館	594	4 5.	帰省2	814
3 3.	マントイン	607	4 6.	ゴルダックとの出会い	836
3 4.	緊急会議	621	4 7.	海底の異変	857
3 5.	会議2	640	4 8.	貿易都市エステロシティ	870
3 6.	ストラー団	652			

6 1.	旅、再会	
6 0.	キャラ設定 2	
5 9.	報告会	
5 8.	キリキザン襲来	
5 7.	イワンコとコマタナ 2	
5 6.	イワンコとコマタナ	
5 5.	イワンコ	
5 4.	解決	
5 3.	助っ人登場	
5 2.	遺跡の戦い 2	
5 1.	遺跡の戦い	
5 0.	目撃者	
4 9.	消えゆく人々	

10901064105110221004 987 973 961 943 923 910 897 882

7 1.	エスパーク	
7 0.	真夜中の戦い	
6 9.	ほのかとムンナ	
6 8.	ムンナ、別れの時	
6 7.	ムシャーナ	
6 6.	マボロシ山	
6 5.	タッグバトル	
1138		
6 4.	レイロウシティに向けて 3	
1121		
6 3.	レイロウシティに向けて 2	
1106		
6 2.	レイロウシティを目指して	

1247122912141201118011691152

1. 出合い

ここはガルドア地方

大きな島の周りが海で囲まれた自然豊かな地方。どこの場所でも季節がはつきりしており、自然界の力を感じることができる

大きな街には空港や巨大な船が行き来しており、他の地方からも観光客がよく訪れる。街から離れば自然が広がっており、たくさんのポケモン達が様々な所で過ごしているのを見ることができる

そんな大きな街からは遠く離れた小さな港街、タジュールタウンで一人のトレーナーが旅立とうとしていた

黒の短い髪をして、オレンジ色の半袖と白いミニスカートを履いた女の子がベッドに

座り、呆れたように話している

ほのか「も〜！起きてよ、ムンナ！私、とつくに支度できたんだよ！ねーえ！起きてつたら！」

そこにはピンク色の体に花柄模様がついたポケモン、ムンナが寝ていた

ムンナ「ムナ……ムウ」

ほのかはムンナを揺らすがムンナに起きる気配は無い

ほのか「私の大切な旅立ちの日にこんな熟睡するなんて信じられない！お母さん！！ムンナを抱いて行くね！」

ほのかはムンナを抱き上げて部屋から出た。階段から降りると、ほのかとどこか似た雰囲気をした黒い髪をしたほのかの母と父が穏やかに見守っていた

ほのかの母「あら、ムンナちゃんは本当のんきさんねえ。まあ、外の空気を吸わせれば起きてくれると思うわ。準備はできたの？テントは？着替えは？」

ほのか「お母さんも昨日の夜確認したでしょ？ほら！このカバンに全部入ってるよ！」

ほのかはバッグの中を見せて確認させる。中には小さく折り畳まれたテントやたぐさんの着替え、ポケモン用の餌やきのみなどが入っている

ほのかの父「ついにほのかが旅立ってしまっんだな。父さん、応援してるからな！」

ほのか「うん！私、頑張って夢を見つけてくるね！」

ほのかの母「ランタナ博士から最初のポケモンを貰ったら、しつかりお礼を言いなさい。ちゃんと体を休めるのよ？怪しい人についていけないでね。そして、偶にはこの家に帰ってきてくれると嬉しいわ」

ほのか「うん！必ず帰ってくる！じゃあ、行ってきまーす！」

ほのかはムンナを抱いて元気に飛び出していった

タジールタウン

ここは小さな港町。町自体小さく、港以外は特に何もないが海からの風は心地よく、住む人々を安心させている

タジールタウン 入口

ヒュウと爽やかな潮風が吹いてきた

ほのか「うん！今日も風が気持ちいい。最高の旅日和だね、ムンナ」

ほのかはその潮風に少し目を細めるが、すぐに笑顔に戻った

ムンナ「ムウ……」

ほのか「まだ寝てるよ。まあいいか。山を越えれば、ランタナ博士の研究所がある
ギツタンシティ！」

まずは、そこで新しい子を貰っちゃおうー！誰にしようかなー？」

トウ山

タジールタウンとギツタンシティの間にある山、トウ山をほのかは楽しそうに進んでいた。山道ではあるが、綺麗に整備されて歩きやすいようになっていた

ほのか「あ、スバメの群れ。可愛い、遊んでるわ。あ！あつちにはオタチ！ここにも
いたんだ！」

ほのかは周りをキョロキョロと見渡しながら野生ポケモン達の様子をニコニコと見ている

ムンナ「ムウ?..... ムン!?ムー!」

ムンナは目を覚ますとキョロキョロと辺りを見渡して家にいない事に驚いている

ほのか「あ。ムンナ、起きた?おはよう。もう旅に出ちやったよ。ムンナがいつまでも寝てるからだからね!」

ムンナ「ム.....」

ムンナは少し不満げな顔をしている。どうやら自分もほのかの母達ともつと話したかったようだ

ほのか「え、怒らないでよ、ムンナ。ほら、自分で浮いて」

ほのかは手を離すとムンナは渋々といった感じで浮き上がった。ムンナは自分の周囲にだけサイコパワーを使い、少し浮く事ができる。ムンナはふよふよとほのかの肩周りを浮いている

ほのか「今、この山を超えた先にあるギツタンシティに向かっているの。ムンナの新しいお友達ができるよ」

ムンナ「ムムウ!?ムンナ!ムンナ!」

お友達という言葉にムンナは嬉しそうにクルクル回っている

ほのか「やっぱり嬉しいよね。私も楽しみろ!」

ムンナ「ムンナ!!」

ピシュー!

ムンナの額から小さな波の形をしたサイコパワーが放出された

ほのか「あ！嬉しいからってサイコウエーブ使っちゃ駄目！」

ドサア！

ほのかの目の前に謎の塊が落ちてきた

ほのか「え？何この巨大な……巢？いや、餌？」

ギヤイイイン!!!

金属音のような嫌な音が上空から聞こえてきた

ほのか「何!?!」

エアームド「ギヤイイイン!!」

ほのかが空を見上げると、大きな鋼の体を持った鳥ポケモン、エアームドが怒った表情でこつちに向かってきていた

ほのか「キヤーツ!! エアームド!! めちやくちや怒ってる!! まずいわ! ムンナ、逃げるよ!……あれ? ムンナ?」

ムンナ「ムウー!!!」

さつきまでほのかの側にいたムンナは既にずっと先の方に逃げていた

ほのか「えー!?! ムンナ、先に行きすぎ!! 逃げるの早いよ!! 置いていかないで!!」

ほのかも大慌てで走り出した

ギツタンシテイ 入口

エアームド「ギヤイイイイ!!!」

なんとかギツタンシティに到着するが、ずっとエアームドが追いかけてきた

ほのか「ハア……ハア! どうしよう、町に着いても追いかけてくる!」

疲れて遅くなったほのかに向かってエアームドが向かってくる

エアームド「ギヤウウウ、ギヤイイイン!」

シユイイイ……

エアームドの前に銀色の塊が形成されていく

ほのか「あれってもしかして、ラスターカノン!? キャーツ!!」

ドカーン!

エアームドのラスターカノンがほのかの僅か後ろの地面に炸裂した。その勢いでほのかは大きく前に飛ばされた

ズザアアア!!

ほのか「痛った〜い。避けれたけど、どうしよう。擦り剥いちやった」

ほのかの両膝からは擦りむいた傷から血が出ている

ムンナ「ムウウン！」

その様子を見たムンナは急いで戻ってくるとサイコウエーブを繰り出した

ビシユツ

エアームド「ギャ？」

エアームドの体に当たるが、エアームドはほとんど無傷だった

ほのか「あ、ムンナ！無理しないで！あなたじゃ無理よ。サイコウエーブも上手く使
いこなせないんだから」

ムンナ「ムウウ……」

エアームド「ギヤイイイン!!」

シュイイイ……

エアームドの前に銀色の塊が形成されていく

ほのか「あ、もう一発くる！」

ほのかがムンナを抱きしめて覚悟を決めると

ドバア!!

ほのかの上空を激しい水流が通っていった

エアームド「ギャアアウン！」

ドサ

ほのか「え？」

ほのかの近くにずぶ濡れになって目を回したエアームドが落ちてきた

ほのか「今のは？」

ゴルダック「ぐわ。ぐわぐわ」

ほのかの前には青いあひるのポケモン、ゴルダックがいた

ほのか「ゴ、ゴルダック？こんな所にどうして。それと、今のみず技はあなたが？」

???「お！間に合ったみたいだな、ゴルダック。よくやった！」

ゴルダックの後ろから、水色の髪をして紺色のジャケットに黄色と赤のネックリングをつけた青年が走ってきた

ゴルダック「ぐわ」

ゴルダックはその青年に振り返ってコクリと頷いた

???「大丈夫か？エアームドの怒鳴り声が聞こえたからな。何事だと思ったら、君が襲われていたんだ。怪我は：足を擦り剥いたみたいだね。後で手当てするよ。立てる？」

青年はほのかに手を差し出した

ほのか「あ、ありがとうございます。助かりました！」

少し呆然としていたほのかは慌てて青年の手を取って立ち上がった

ムンナ「ムウ！ムムウ！」

ムンナも嬉しそうに浮き上がった

??? 「ん？ムンナか。まだ子どもなんだな、可愛いポケモンだね。新米さん？」

ほのか「はい！私、今日からトレーナーになって、今からこの町にある研究所でポケモンを貰いに来たんです。」

だけど、森の中でムンナが喜んでサイコウエーブを暴発させてエアームドの巣？を落としちゃったんです。本当にありがとうございます！私、ほのかっぺいいいます」

れおん「そうだったんだな。ほのかちゃん、よろしくな。俺の名前はれおん。普通のトレーナーだ。こっちは俺のポケモンのゴルダック。よかったら、研究所までおぶって行こう。擦り剥いた所、痛いだろ？」

ゴルダック「ぐわぐわ」

ゴルダックも片手をあげてよろしくと挨拶している

ほのか「え、いいんですか？」

れおん「もちろん。いきなりエアームドに襲われて怖かっただろ？ゴルダック、少し傷を洗ってやってくれ」

ゴルダック「ぐわ」

ゴルダックは水かきに水を出し、傷に水滴を落とした

ほのか「うっ…。ありがとう、ゴルダック。……あれ？何だか色が違う？普通より濃
いような…」

れおん「おお！よく気づいたね！いい観察眼だよ。そう、このゴルダックは色違い。
普通のゴルダックより色が青がかったるんだ。クチバシも実は少しピンクっぽいんだ」

ほのか「ええ!?色違い!!凄い！私、本でしか読んだ事ないですよ！珍しい!!」

ほのかは興奮した様子でゴルダックをまじまじと見つめている

れおん「まあ普通はそうだな。さあ、背中に乗ってくれ」

れおんはほのかに背中を向けてしゃがんだ

ほのか「ありがとうございます、れおんさん」

ほのかもゆつくりと背中に乗った

れおん「ハハハ！さん付けなんかいらさないさ。俺は18だ。まだまだ若いんだぞ」

ほのか「でも、私より8も上ですよ。さん付けはさせてください」

れおん「そうか？まあ、俺としては構わねえけどな」

少し歩いて行くと

れおん「さあ、見えてきたぜ。あの建物がランタナ博士の研究所だ」

れおんの先には紫色の少し屋敷のような建物が見えていた

ほのか「本当だ！よくし！待っててね、私の可愛いポケモン！」

2. 設定

簡単な設定を載せます。ネタバレはしていません

主人公 れおん

年齢 18

身長 174 cm

体重 67 kg

髪色 水色

ほのかとギツタンシティで出会った青年。ポケモンや人に関係なく、誰にでも優しく隔てなく接する。口調は多少荒い事もあり、基本子どもからは最初は怖がられる。また

周りを気にしない事が多く、空気が読めない事も。それが原因で相手を怒らせる事もあ
る。本人は悪いと思つてやつていないため、急に怒られて驚く。

リーダーシップ性が高く、状況判断能力に優れている。今何をしなければいけないか
をすぐに判断して行動に移す。バトル経験は豊富で、技の知識や応用を利用する。ポケ
モンそれぞれにあつた戦い方をする。

手持ちの皆とは誰でも仲良しだが、特にゴルダックとは相性抜群でバトル中に指示が
無くともゴルダックは完全に理解する事ができる。

困っているならポケモンも人も関係なく助ける。また、悪い事をする奴らに対しては
過剰に怒り出す。普段は色々と適当に過ごしており、ゴルダックによく怒られている。
しかし、やらなければならぬ時はしっかりと動く。

好きな事は海に潜る事、嫌いな事は高い所全般

手持ち

ゴルダック Lv??

性別 オス 性格 がんばりや

特徴 色違い、れおんの世話係

特性 ???

技 ???
???
???
???

他のポケモンはまだ秘密です

ヒロイン ほか

年齢 10

身長 130cm

体重 言わないっ!!

髪色 黒

タジールタウンから来た新米トレーナー。礼儀正しく、ポケモンが大好き。小さな頃からポケモンに興味があり、図鑑や本などを読みあさっていた。本を読み漁る姿を見たほのかの父親が旅行先で子どものムンナを捕まえ、プレゼントする。それ以降、ムンナと友達になる。

ギッタンシティでランタナ博士からポケモンを貰いに行く途中でエアームドに襲われ、れおんに助けられる。バトル経験やトレーナー設備、道具など知識しか無く、戦う、使う、見るは初めてであり、パニックになる事もある。

夢がまだなく、この旅を機に見つけようと思っている。何になりたいなどは、その時

に決めるらしい。観察眼に優れ、違いや仕草などを気付きやすい。好きな事は、ポケモンと遊ぶ事。嫌いな事は、洞窟などの暗い所にずっといる事

手持ち

ムンナ Lv5

性別 メス 性格 のんき 特徴 眠る事が大好き

特性 シンクロ

技

サイコウエーブ まるくなる おまじない

こつちもまだ秘密です。二匹目は次に出てきます。

ポケモン達

すみませんが、ガラル地方の新ポケモン達は出てきません。

剣盾はやったのですがまだ考えが出てこないのです、無しにさせていただきます。

他の地方のポケモン達は出そうと思っています。全匹は無理です。

また、鳴き声は適当に決めているので、え？こんな鳴き声でいいの？と思われるかもしれませんが、どうか見逃してください。

性格はありますが、個体値はありません。それまでいれてしまうと少し話がややこしくなってしまうと判断し、無くしてしまいました。

また持ち物の追加効果などはゲームなどを準拠としながら、多少現実よりの設定に置き換えてあります。

は？そんなのありかよ。と、思ってもらって大丈夫です。

少し強引ですが、よろしく願います。

3. 一緒に来てくれる?

ランタナ博士の研究所

ガチャ

れおん「おーい、婆さーん。怪我した新米トレーナー搬送だ」

れおんが扉を開けて大声を出すと

ヒュン!

れおん「おっと、危ねえな」

ビイーン!

れおんの頭に向かって羽ペンが飛んできた。れおんの避けた後ろにある壁に勢よく音をたてて突き刺さった

ほのか「ええ!?何か飛んできた!」

ランタナ「何だい、れおん!人の事を婆さんと呼ぶなどあれだけ言ってるのに、まだそう呼ぶのかい!?って、君は確か今日来る予定のほのかちゃんかい?」

奥からは紫と黄色の編み込みをして白衣を着た女性が歩いてきた。その顔は少ししわが目立ってきているが、化粧などで隠しているのがわかる

ほのか「あ、初めまして、ランタナ博士。ほのかといいます。ポケモンを貰えるとの事で、こちらに伺いました」

ほのかはれおんの背中の上で小さくお辞儀をした

ランタナ「ええ、よろしくね。私は知ってると思うけど、ランタナ。ポケモンの持つ

不思議な力を、私達にも上手く使えないか研究してるの」

れおん「この博士の研究は凄くてな。有名なやつなら、ヒマナツツの種つてのがあるだろ？あれは本当にヒマナツツが稀に出す種を使っていて、植えると知ってる通り向日葵が咲くんだ。それを見つけて商品化した人だ」

ほのか「ええ!?凄いい！それって、結構人気商品ですよね！どんな場所でも向日葵が咲くって話題じゃないですか！」

ランタナ「ふふ、ありがとう。私はそんな感じでしたっせん研究してるの。もちろん、ポケモンの事もよく知ってるわ。さあ、こっちに来て。あなたにプレゼントするポケモン達が待ってるわ」

ランタナはそのまま奥に行こうとする

れおん「ちよつと待ってくれよ、ばあ」

ランタナ「ん？」

ランタナはニコニコしながら何に使うのかわからないメスを見せた

れおん「いや……ランタナ博士。ほのかちゃんはさつきエアームドに襲撃されていてな。俺が追い払ったんだが、その時に足に怪我をしたんだ。ちよつとだけ治療させてくれ」

れおんはその姿に恐怖を覚えつつ、さつき起こった事を説明した

ランタナ「おや、そんな事が。いきなり災難だったねえ、ほのかちゃん。他に怪我とかはないかい？」

ほのか「大丈夫です！ご心配ありがとうございます」

れおん「礼儀正しいね、ほのかちゃん。絆創膏を貼るからね。はい」

れおんは持っていた絆創膏をほのかの両膝に貼った

ほのか「ありがとうございます！」

ランタナ「さあ、この子達だよ。名前は知ってるかしら？」

ランタナが隣の部屋に案内すると、そこには三匹のポケモン達が並べられていた

ほのか「わあ!!知ってますよ！右が、モクロー」

モクロー「クロー」

小さなふくろうのような姿をしたポケモン、モクローは横に羽を広げてほのかを威嚇している

ほのか「真ん中が、アチャモ」

アチャモ「チャモ！」

赤いひよこのようなポケモン、アチャモはほのかに名前を呼ばれて元気に鳴き声をあげた

ほのか「左が、ケロマツ」

ケロマツ「ケ、ケロ……」

青いかえるのようなポケモン、ケロマツはモクローの後ろに隠れて怖がっている

れおん「へえ。流石ランタナ博士。珍しいポケモンを持つてるな」

ランタナ「この子達は各地の博士達からお譲りしたの。可愛がってあげてほしい、と言われてね」

ほのか「うーん……。決めた！」

れおん「早いな。悩んでいたんじゃないのか？」

ほのか「悩んでいたんですけど、皆よさそうだったので直感にしました。君にするね！」

ほのかが抱きあげたポケモンは

アチャモ「チャモチャモ！」

ランタナ「アチャモにするのね。わかったわ。男の子よ。名前はつける？」

ほのか「じゃあ、ヒー君！」

アチャモ「チャモ？」

ほのかはアチャモを一旦離すと

ほのか「私、あなたがいいの。私の旅と一緒に来てくれる？」

ほのかはアチャモと目線を合わせて尋ねた

アチャモ「チャモ！」

アチャモはほのかに嬉しそうに飛びついた

ほのか「キヤツ、可愛い！」

ランタナ「ふふ、大事にしてあげてね。ああ、それとれおん。あなたを呼んだのは別の話です。少し奥に行ってお話ししましょう」

れおん「はい。ほのかちゃん、頑張れよ！」

ほのか「はい！ランタナ博士、れおんさん。ありがとうございました！」

ギツタンシティ

山の中に出来た大穴に家が建ち、町となった。古代にポケモンとの絆に関係するものが落ちた隕石の大穴とも言われている

ほのか「よし、出ておいで、ヒー君！」

ポン！

アチャモ「チャモ！」

ランタナ博士から貰ったモンスターボールからアチャモを早速出した

ほのか「あなたのトレーナーになったほのかといいます。よろしくね！こっちはムン

ナ。仲良くしてね」

ポン！

ムンナ「ムムウ！」

ほのかのもう一つのモンスターボールからムンナが嬉しそうに出てきた

アチャモ「チャモ？チャモチャモ！」

ムンナ「ムウー！」

アチャモとムンナは少し話した後、そのまま追いかけてここを始めた

ほのか「アハハ、追いかけてここ始めた。問題ないみたい、よかったー。あ！ポケモン
センターつてのに行ってみなくちゃ！ショップもどんなのがあるか見てみよう！二人
ともー、ついてきてー」

ほのかは町の入口にあるポケモンセンターへと向かい始めた。その後ろにムンナとアチャモが付いてきた

ポケモンセンター 前

赤い大きな屋根に白いモンスターボールのマークがある大きなお店が立っている

ほのか「え!? 大きいー…。中にカフェとかショップとかもあるし、かなり立派な施設なんだー」

ほのかが中を覗きながら観察していると

れおん「そうだろ？ 町に寄ったらまずは必ずここに行って、ポケモン達を回復させてやるんだ」

後ろかられおんが話しかけてきた

ほのか「あ！れおんさん！追いつかれちゃいましたね。なるほど。ここが私達トレーナーにとって、大切な場所なんですネ」

れおん「そうだよ。中に入ろうか。少し案内するさ」

ほのか「はい！お願いします！」

ほのかはれおんに続いて入っていった

ポケモンセンター

ジョーイ「いらつしやいませ！ポケモンの回復ですか？」

ポケモンセンターに入って正面にある受付にはピンクの髪を束ねて、白いナースの姿をした笑顔の女性とその女性と同じ服装をしたラッキーがいた

ほのか「あ、えっと、そうではなくて」

れおん「ジョーイさん。この子は今日トレーナーになったばかりなんだ。だから、設備の説明にただけなんだよ。ポケモンは俺のポケモン達を回復してほしい」

れおんはジャケットの下からモンスターボールを6つ出して渡した

ジョーイ「はい。わかりました。少しお待ち下さいね」

ほのか「今、れおんさんボール6つも出した。6つって、確かトレーナー一人が持てるポケモンの限界でしたよね？」

れおん「そうだよ。トレーナーが持てるポケモンの限度は知ってるみたいだね。わかった通り、俺は6匹手持ちがいるんだ。そしてポケモンを回復したい時は、今みたいにジョーイさんをお願いすれば回復してくれる。」

それと同時に健康診断もしてくれるから、ポケモンの体調が悪そうな時も預けてみる

「いいはずだ」

「ほのか「はい！」」

れおんはそのまま受付の横に移動した。そこには小さなパソコンが数台並んでいる

れおん「隣にあるのは、ポケモンボックスパソコン。

俺もよく使うが、ここには六匹以上ポケモンを捕まえた時自動で自分のパソコンの中にポケモンを転送する事ができる。ほのかちゃんもこの先、体験するんじゃないかな？」

ほのか「ボックス……パソコン。こんな物もあるんだ」

れおんはそのまま更に進んでいくと、青と白を基調とした雰囲気のある場所にやってきた。れおん「右のお店は、フレンドリイショップ。

トレーナーにとって必要不可欠なモンスターボールや傷薬、生活用品や食料が売られて

いる。ジムバッジを見せれば買える品も増えるんだ」

ほのか「あ、ここがそうなんだ。結構大きいんだね」

れおんはそこから反対方向に進んでいくと、今度は茶色を基調とした雰囲気のある場所にやってきました

れおん「左のお店は、カフェだ。

ここの飲み物は人間だけでなく、ポケモンも一緒に飲めるんだ。また、マラサダやフエンせんべいなどのお菓子もあるんだぞ。町にあるポケモンセンターによってお菓子の内容も変わるから楽しみにしとくといい。休憩するならもってこいだ」

ほのか「ふええ〜。お、多すぎて……よくわかんないです。すみません」

ほのかはいきなりの情報量の多さに少し目を回している

れおん「あ……。一気に言い過ぎたね。ごめんな。まあ、習うより慣れろ。フレンド

リイシヨップとカフェを使ってみるといい。俺が見てやるからさ」

ほのか「あ、そうですね。私、ボールと薬買っておかないと。えっと、お母さんからのお小遣いって」

ほのかはリュックから財布を取り出してフレンドリイシヨップに向かつていった

その後

ほのか「このミアレガレット美味しいです！でも、お金払ってもらってよかったんですか？」

ほのかはカフェスペースで座ってミアレガレットを食べていた。小さなクッキーに砂糖が散りばめられており、甘くて上品な味わいがするカロス地方の名物の一つだ

れおん「ああ、気にするなよ。俺も少し小腹が空いたからな。丁度いいんだ」

れおんも隣で同じくミアレガレットを食べていた

その時、ポケモンセンターに人が入ってきた

ランタナ「ああ、よかった。ほのかちゃん、まだいてくれたわね」

ほのか「あ、ランタナ博士。どうしたんですか？」

ランタナ「今、ほのかちゃんのお母さんから連絡があつて無事にポケモンを渡した事を伝えたの。それと、一人で旅をする事に少し不安がっていたわ」

ほのか「あ、そうだったんですか。お母さん、わざわざそんな事してくれたんだ。恥ずかしいな」

れおん「優しいお母さんじゃないか」

ランタナ「それでね、れおん。あなた、この子についてやりなさい。あなたほどの実

力なら、問題ないでしょ？」

二人「え……」

二人はランタナ博士の発言に同時に顔を合わせた

ランタナ「ほのかちゃんのお母さんも誰か支えてくれる人がいると安心するって言うてたわ。ねえ、頼まれてくれない？」

れおん「……俺は、構わねえが、ほのかちゃん嫌だろ？」

ほのか「いい、いえ！全然そんな事ないです！寧ろ、たくさん教えてもらえるので、こっちからもお願いしたいですよ！私、本当に何も知らないのです！一緒に来てくれませんか？」

れおん「そ、そうだったか。なら、俺もほのかちゃんの旅に同行しよう」

ランタナ「ありがとう、れおん。お礼はまた今度するわ。それじゃあ、気をつけて」
ほのか「ありがとうございます、ランタナ博士！」

4. 次の街へ

一番道路

ポケモンセンターを出た後は、そのままギツタンシティの外に繋がる道路にやってきていた

ほのか「頼んでおいてなんですが、何だか申し訳なくなってきました…」

ほのかは少し申し訳なさそうにもじもじとしている

れおん「気にするなよ。次はどこに向かうか考えてるか？ここから一番近い街はハルヤタウンだ」

ほのか「ハルヤタウン…。あまり知らない場所ですね。どういう町なんですか？」

ほのかは顎に手を置いて考えてもわからないような顔をしている

れおん「タウンと言われてる通り、小さな町なんだ。ただ、周りには草木や花々がたくさん咲いているんだ。草タイプや虫タイプのポケモンが多く生息しているぞ。それに、ジムもあるんだ」

ほのか「流石れおんさんです。よく知ってますね。何だか綺麗な場所みたいですね。そして、ジム…ですか」

ほのかは少し不安げな表情になった

れおん「ポケモンバトルはやりたくないか？」

ほのか「いえ！そんな事ないです！バトルはやってみたいとは思っています。テレビで実況とかをいつも見てました。でも、私はどういいう状況でどんな技を出せばいいとか、わからないです。あんな凄いバトルが出来るとも思えなくて……」

れおん「今日トレーナーになったんだから、そんなのわからなくて当たり前だ。なら、俺が教えてやろう。バトルは得意なんだ」

ほのか「本当ですか！ありがとうございます！」

ほのかはれおんの返答に顔を明るくして喜んでいる

れおん「コンテストには興味ないのか？」

ほのか「私、オシヤレのセンスとか無くて…」

ほのかは少し苦笑いしている

れおん「まあ、俺もよくわからないから何とも言えないな。だが、センスとか関係ないと思うけどな」

ほのか「そうですかね？でも、機会があつたら考えてみたいと思っています。そうい

えば、れおんさんはジムバッジはいくつ持つてるんですか？」

れおん「俺は今、バッジはゼロだ。前に全部集めたやつがあるんだが、期限切れだからよ」

ほのか「ええ!? どうして一年以内にリーグに出なかつたんですか？」

れおん「色々あつて出れなくなつたんだ。まあ別に気にしてないんだがよ」

ほのか「そうだったんですか。なら、ハルヤタウンに向かいましょう! そこでジムに挑戦してみます!」

れおん「おお! 俺も教えるから頑張れよ」

ほのか「はい! お願いします!」

しばらくして

れおん「この先に森を抜ける道と洞窟を進む道があるんだが、どっちがいい？」

ほのか「え……。私、暗い所とか苦手なので、森の方でお願いします」

ほのかはれおんの問いに顔を固くして答えた

れおん「よし、わかった。少し時間がかかるがまあ大丈夫だな。一応ポケモンは出しておいた方がいいぞ。ゴルダック」

ポン！

ゴルダック「ぐ」

ほのか「わかりました！出しておいで、ムンナ！ヒー君！」

ポン！ポン！

ムンナ「ムナ……」

ペタ

アチャモ「チャモ？」

ムンナはボールから出てきても眠っており、そのまま地面にペタリと倒れ込んだ。それをアチャモが不思議そうに見ている

ほのか「また寝てる、ムンナ。こうなったら抱いてないとなんだから、やめてほしいよ」

ほのかは呆れた顔でムンナを抱き抱えた

れおん「なら、ボールに戻していいと思うぞ。二匹も出す必要は無いからな」

ほのか「そつか。同時はずっと見ていられないもんね。休んでて、ムンナ」

アチャモはほのかの後ろに隠れてゴルダックを見つめている

アチャモ「チャ…チャモ」

ゴルダック「ぐわ？」

ゴルダックもそれに気付いたように首を傾げている

れおん「ああ、水タイプだから怖いんだろうな。大丈夫だぞ、アチャモ。このゴルダックは優しいからな。何もしないさ。仲良くしてくれよな」

少し考えたようなアチャモは少しずつ、ゴルダックに近づいた

アチャモ「チャモ…」

「ゴルダック「ぐわぐわ」

「ゴルダックはアチャモを優しく撫でた

ほのか「ふふ、よかった。もしかして、この森を抜けるんですか？道なんて無さそうなんですけど」

ほのかの言う通り、整備された道は違う方へと続いており、ほのか達の前には大きな森が広がっている

れおん「まあ、道というよりは獣道だ。昔はよく使われていたから、一応使えるぞ」

ほのか「なら、大丈夫かな？よし、行こう、ヒー君」

アチャモ「アチャモ！」

芽生えの森

ほのか「確かに道は狭いけど、ちゃんと道になってる」

そこは自然に出来た道であり、木々や草が生い茂る真ん中に細い道が出来ていた

れおん「だろ？ポケモンもよく使うみたいだぞ。何か捕まえてみたりしてもいいかな」

ほのか「そうですね！周りにいろんなポケモンいるし、どうしようかな。あ！ムツクル！」

周りを見渡すとプラスやキヤタピー、ナゾノクサなどがある。その中からほのかは一匹で休憩していたムツクルに目をつけた

れおん「いいんじゃないか？試してみよう」

ほのか「はい！弱らせるのが捕まえる基本ですよ！いくよ、ヒー君！バトルだよ！」

アチャモ「チャモー！」

アチャモはやる気満々といった様子でムツクルへ走り出した

ムツクル「クル？パイイイ！」

ムツクルはこつちに向かってくるアチャモとほのかに気づいた。ムツクルもそのままアチャモへ突っ込んでくる

ほのか「あ、こつちに突っ込んできた！たいあたりかな？避けて、ヒー君！」

アチャモ「チャ！」

アチャモは走ったまま、向かってくるムツクルの体を避けた

ムツクル「クル!？」

ほのか「ひのこだよ！」

アチャモ「チャモー！」

アチャモは振り返り、口から小さな炎を吐き出した

ムツクル「ピイイイ！」バサ！

しかしムツクルは空に飛んでいき、ひのこはそのまま外れていった

ほのか「あああ！飛んで避けた！ずるい！」

ムツクル「ピイイイ！」

ムツクルはそのまま旋回してアチャモに向かってくる

ほのか「あ！またたいあたりだ！避けて、ヒー君！」

アチャモ「チャモ！チャモー!？」

アチャモは避けようとしたが、ムツクルの速度についていけずに突き飛ばされた

ムツクル「クルツ！」

ムツクルはそのまままた空に飛んでいった

ほのか「あ！ヒー君が避けられなかった！しかもまた空に行った。ヒー君！飛んでるムツクルにひのこ！」

アチャモ「チャモー！」

アチャモは空にいるムツクルに向かって小さな炎を出す

ムツクル「クルー」

しかし、ムツクルにうまく狙いがいかず当たらなかった

ほのか「飛んでたら技が当たらないよ！どうしたらいいですか？」

れおん「飛んでいてもこつちに来る時は必ず地面に向かってくるんだ。そこを狙ってみるんだ」

ほのか「と言うと、たいあたりが来る時か！」

ムツクル「クルー！」

ムツクルは攻撃がこないと思い、アチャモに再びたいあたりを仕掛けてきた

ほのか「来た！避けないで狙って、ヒー君！ひのこ！」

アチャモ「…チャモー！」

アチャモは向かってくるムツクルをよく狙い、正確に炎を出した

ムツクル「クルー!？」

ドサ

ひのこはムツクルに当たり、ムツクルは地面に滑り落ちた

れおん「いいぞ、ボールを投げてみるんだ！」

ほのか「よーし！モンスターボール！」

ほのかは倒れたムツクルにモンスターボールを投げた

コッソーン！

ゆらゆら

ほのか「お願い！」

カチツ！

ほのか「あ！やった!!初めて捕まえたよ、ヒー君！」

アチャモ「チャモ！チャモチャモ」

ほのかとアチャモは一緒に喜んでいる

れおん「よくやったな、ほのかちゃん。初ゲット、初バトル成功おめでとう！アチャモ、よく頑張ったな。ほら、傷薬だ」

れおんはアチャモの体に傷薬をスプレーした

アチャモ「チャモ！」

アチャモはえっへんといった様子で胸を張っている

ほのか「よし！早速出てきて、ムツクル！」

ポン！

ムツクル「クルー！」

トサ

ムツクルは元気にボールから出てくるとクルリと旋回してほのかの頭の上に座った

ほのか「あ！私の頭の上に乗ってくれた。可愛い！」

れおん「いい調子だな。さあ、どんどん進もうか。少しバトルもやりながらな」

ほのか「はい！」

5. クモの巣の町?ハルヤタウン

ハルヤタウン

綺麗な花々に囲まれた美しい町。小さいが、ガルドア地方の観光名所の一つでもあり、祭りなどの催し物が開かれる事も多い。またジムもあるため、ポケモントレーナーもよく訪れる

れおん「……何だ、こりゃあ」

周りの建物には大きなクモの巣が広がっており、家や道、花々には大量の糸が絡まっており綺麗な景色を覆い尽くしている

ほのか「これって……クモの糸?」

バチバチツ

ほのか「わ！しかも電気を帯びてますよ」

そのクモの糸は黄色く光っており、バチバチと音をたてている

れおん「エレキネットだ。かなり大きいものもあるみたいだな。こんな事が出来るやつなんて」

ブウウウン！

れおん達の前から白いバイクに跨った青髪の女性警察官、ジュンサーがやってきた

ほのか「あ！ジュンサーさんだ！」

ジュンサー「旅の方達かしら？悪いんだけど、今この街には入れないの。って、色違いのゴルダックを連れたトレーナー……。もしかして、れおん君？」

れおん「ああ、そうだ。ジウンサーさんにはやはり知られてるか」

ジウンサー「ええ。いところから活躍は聞いてるわ。それなら、少し協力をお願いしてもいいかしら? その女の子も、よかつたら手伝ってくれないかしら?」

ほのか「は、はい! 私でよかつたら力になります!」

ジウンサー「状況なんだけど」

れおん「状況はこっちもわかっている。犯人は光の洞窟の奥に住むぬしポケモン、デンチュラだな。しかも群れを作っているのだろう。この様子なら街の人はもういないんだな。」

なら、俺達は巣を壊しつつそのデンチュラを倒そう。原因はわからないが、暴れているなら倒して頭を冷やしてもらわないとな」

ジュンサー「す、凄い……。話は聞いていたけど、判断力は本物ね。そうね。デンチュラには悪いけど少し懲らしめましょう。私も協力します。お願い、ウインディ！ファイアロー！」

ボン！ボン！

ウインディ「ガオオン！」

ファイアロー「アローー！」

ジュンサーが投げたモンスターボールからオレンジの体に黒い線が入った大型犬のポケモン、ウインディとオレンジの翼に白と黒の斑点が入った鷹のポケモン、ファイアローが出てきた

ほのか「凄い！ウインディにファイアロー！初めてみた！カッコイイ！」

ほのかは二匹に目を輝かせている

れおん「ほう。ジュンサーさん、かなり強いみたいだな。この近くのジュンサーさんじゃないな?」

ジュンサー「ええ、そんな事までわかるのね。私はチャンピオンリーグ周辺を取り締まるジュンサーなの。だからポケモン達もそれなりに強いわよ。協力を要請されたからここにいるの」

ほのか「あの!私も巣を壊すなら、このアチャモのヒー君がいます。僅かですけど、手伝います!」

アチャモ「チャ!」

アチャモもやる気充分といった感じで声をあげた

ジュンサー「助かるわ!ファイアロー!空から見える巣を全部燃やして!花の近くの糸は無視していいわよ」

ファイアロー「アロー！」

ファイアローは空に飛び、家に付いた巣を燃やしていく

れおん「花に絡まつてる糸は任せてくれ。頼むぞ、ヤドキング」

ポン！

ヤドキング「ヤドー」

れおんがジャケットの下から出したモンスターボールからピンクの体に大きな貝殻の帽子をつけたポケモン、ヤドキングが出てきた

れおん「サイコキネシスで糸だけを浮かせるんだ」

ヤドキング「ヤドー」

ヤドキングの目が光ると、花々についていたエレキネットが浮き上がり全て一つに集まった

れおん「よし。ほのかちゃん、任せたよ」

ほのか「は、はい！ヒー君！集まった糸にひのこ！」

アチャモ「チャモー！」

アチャモの炎により、糸は全て燃えて無くなった

ジュンサー「ここら辺は大丈夫になったわね。デンチュラを探しましょう」

ほのか「うーん…。居場所がわかれば早いですけど」

ほのか達は周りを見渡すが、近くにデンチュラの姿は見えない

れおん「そうだよな。……試してみるか。ジュンサーさん、ポケモンボックス用のスマホ持ってますか？」

ジュンサー「ええ、交換するの？はい。」

ジュンサーは腰のホルダーからスマホをれおんに渡した

れおん「ありがとうございます。えっと、こいつと交換してつと」

シュン！

ポワン！

れおんは慣れた手つきでスマホを操作すると、れおんの持っていたボールが消え、別のモンスターボールが現れた

ほのか「え?ボールが変わった!これ、何?」

ジュンサー「これは、ポケモンセンターにあるポケモンボックスのパソコンと繋がってるスマホよ。これがあればポケモンセンターにいなくてもポケモンを入れ替える事ができるの。ただ、持つてる人は限りなく少ないんだけどね」

ほのか「そんなのがあるんだ!本にも書いてなかった!れおんさんって本当物知りだな」

れおん「ありがとう、ジュンサーさん。頼んだぞ、マリルリ!」

ポン!

マリルリ「ルリ?」

モンスターボールからは青い体に白い水玉模様がついたうさぎのような可愛らしいポケモン、マリルリが出てきた

ほのか「マリルリだ！可愛い〜」

れおん「耳でデンチュラが歩く音を聴いてみてくれ」

マリルリ「ルリ……………。ルリ！」

マリルリは目を閉じて集中すると、耳が右奥の方に傾いた

れおん「こつちだな。行くぞ！」

ジュンサー「そっか。マリルリの聴力って、僅かな音でも聞き逃さないんだっけ。凄いわ、れおん君」

ほのか「マリルリってそんなに耳がいいんだ、知らなかった！耳がピコピコ動いてて可愛い」

マリルリ「ル、ルリ〜」

マリルリは褒められて顔を赤くしている

ほのか「あ、照れてる。赤くなって可愛い〜」

ハルヤタウン 花畑

れおん「いたな。マリルリ、ありがとう。戻ってくれ」

そこにはデンチュラが十匹以上集まっていた

ほのか「うわ!デンチュラの群れだ!こんなにたくさんいるなんて」

そこには老人が一人立っていた

???「おお、ジュンサーさん!君達は?」

ジュンサー「あ、ナブさん。この人達は、デンチュラ騒動に協力してくれているれおん君と新米トレーナーのほのかちゃん。れおん君がデンチュラ達の居場所を教えてくださいませんか？」

ほのか「初めまして」

れおん「ナブさん、俺の事覚えてますか？」

ナブ「んゝ。すまんう。年で忘れてしもうた」

ナブと呼ばれた老人は少し腰が曲がっているが、優しい顔をしている。深緑の服や帽子を着ている

れおん「まあ、仕方ないですよ。昔、あなたのジムに挑戦して勝ったんですが覚えられませんよ。青いコダックを連れていたのですが」

ナブ「青いコダツク……。おお！あの少年か！大きくなったのう」

ナブは少し考え込むと、思い出したのか顔を上げてれおんの顔を見直した

ほのか「え？れおんさんがジムに挑戦って事は、このおじいちゃんもしかして」

ジュンサー「そう。この人、ナブさんはハルヤタウンのジムリーダー。一緒に調査していたのよ」

ナブ「わしもここにデンチュラが集まっておるのはわかっていた。どれ、犯人を少し反省させようかの。おいで、イワパレス」

ポン！

イワパレス「パツレス！」

ナブの投げたモンスターボールから大きな土の塊を背中に乗せたヤドカリのよう

ポケモン、イワパレスが現れた

れおん「あの時のイシズマイ！進化していたのか！」

ほのか「イワパレスだ！大きいな〜」

ほのかは初めて見たイワパレスを見上げている

ナブ「れおん君はヤドキングか。電気も虫も弱点で相性はあまりよくないが、いいのかの？」

れおん「はい。相性は関係無いですよ。対策もしてありますので」

ナブ「ほほ、それならええんじや。ほのかちゃんだったかの。アチャモはまだ子ども
のようじやな。あまり無茶はするんじゃないぞ」

ほのか「は、はい！足を引つ張らないようにしますね！」

ジュンサー「よし!行きましょう。まず、周りのデンチュラ達を少しどかしていくわ。
ウインデイ!威嚇して!」

ウインデイ「ガウウ!」

デンチュラ「チュ:チュラ」

ウインデイが眼力で睨みつけるとそれに怯えた数匹のデンチュラが逃げていく

れおん「俺もいきます。ヤドキング、サイコネシスで浮かせるんだ」

ヤドキング「ヤードー」

ヤドキングが目を光らせてデンチュラ達を浮かび上げでどかしていき、どんどん道を
作っていく

ほか「ええ!?何?あの奥にいる大きいデンチュラ!」

その先に周りのデンチュラより二倍近くある体格を誇るデンチュラがいた

ナブ「ハルヤタウンの近くにある光の洞窟に住むぬしポケモンじゃ。本来は大人しいのじゃが、急にどうしてこんな事を」

ジュンサー「わかりません。ただ、興奮しているようです。大人しくさせないですね」

デンチュラ達「チュラー」

れおん達の後ろから先程のデンチュラ達が戻ってきた

れおん「!?どうやら、ぬしを守るみたいです。追い払ったデンチュラが戻ってきました。後ろからも来ますよ」

ほのか「ええ!?どうしよう、挟まれる!」

ジュンサー「れおん君!ほのかちゃん!ぬしのデンチュラをお願いできるかしら?」

ナブ「わし達は周りのデンチュラ達を大人しくさせよう」

ナブとジュンサーは振り返り、イワパレスとウインディを向かってくるデンチュラの群れに向けた

れおん「はい。任せてください!」

ほのか「わ、私?!わかりました!れ、れおんさん!手伝います!」

ぬしデンチュラ「チュラー!」

6. vsぬしポケモン

れおん「ほのかちゃん、このデンチュラのサイズになると花畑を巻き込んでしまう！
俺達は少し離れた場所に行くぞ！」

ほのか「わかりました！」

れおん「こつちだ、デンチュラ！」

ヤドキング「ヤド〜」

ぬしデンチュラ「キュルルル…」

デンチュラはれおん達についていった

3 番道路

ハルヤタウンの外に続く広い道路へとやってきた

れおん「よし！ここまで来れば問題無いだろ！」

ぬしデンチュラ「チュラーー！」

デンチュラは触覚を激しく動かして威嚇している

ほのか「頑張るよ、ヒー君！れおんさんのサポートするよ！」

アチャモ「チャモチャモ！」

アチャモはほのかの腕から飛び降りた

れおん「ヤドキング！ド忘れ！」

ヤドキング「ヤー？」

ヤドキングは気の抜けた顔になり、何かを忘れたように首をかしげた

ぬしデンチュラ「チュラチュラー！」

リイン！リイン！リイン！リイン！

周りに大音量の虫の発生していく。音が直接体にぶつけられるような感覚にた
まらずほのかに耳を押さえる

ほのか「きゃあ！うるさい！この技は、虫のさざめき！」

れおん「平気だよな、ヤドキング！大文字！」

ヤドキング「ヤドー！」

ヤドキングは平気な様子でデンチュラに近づいていき、口から大きな大の字を描いた炎を吐き出した

ぬしデンチュラ「デン!? チュラー!」

ボオオオ!

大文字はデンチュラに当たり、デンチュラは周りを転がっている

ほのか「水タイプなのに炎技を使えるの!? 凄い! あ、私達もいくよ! ヒー君! ひのこ!」

アチャモ「チャモー!」

アチャモも転がっているデンチュラに目掛けて小さな炎を吐き出した

ぬしデンチュラ「チュラ……」

デンチュラは嫌そうに体を震わせている

ほのか「やった！効いてる！」

ぬしデンチュラ「チュラ！チュラ！」

怒ったデンチュラが二匹目掛けて電気を帯びたクモの糸を出した

れおん「エレキネットか！なら、大文字で焼き尽くせ！」

ほのか「これ、町に付いてたやつだ！ヒー君！ひのこで燃やそう！」

ポオオオ！

二匹とも飛んでくるエレキネットを燃やした

ぬしデンチュラ「チュラー！」

バリバリバリイ！

デンチュラから周囲全体に電気が走り渡っていく

ほのか「え！嘘！ほうでん!?どうしよう!!」

れおん「ヤベ！ヤドキング！アチャモの前に出ろ！」

アチャモ「チャモ!？」

驚いて動けないアチャモの前にヤドキングが壁となり、アチャモにほうでんは当たらなかつた

ヤドキング「ド……ヤード！」

ヤドキングも少し痺れたようだが無事なようだ

ほのか「あ、ありがとう、ヤドキング」

れおん「ほのかちゃん、すなかけでデンチュラの攻撃が当たりにくくなるようにしてくれるか？」

ほのか「わかりました！ヒー君、すなかけだよ！」

アチャモ「チャモ！」

アチャモはデンチュラの目を目掛けて砂を蹴り上げた

ぬしデンチュラ「チュユ…」

デンチュラは砂が目に入ったのか、目を閉じてアチャモとは違う方を向いた

れおん「よし！ヤドキング、近づいて大文字！」

ヤドキング「ヤドー！」

ヤドキングは再び口から大きな大の字の炎を吐き出した

ぬしデンチュラ「チュラー！」

デンチュラは再び燃えて、地面を転がり始めた

ほのか「たくさんすなかけ！」

アチャモ「チャモチャモチャモ」

アチャモはデンチュラの体にどんどん砂をかけていく

ぬしデンチュラ「チュラー！」

怒ったデンチュラが虫の声をあげるが、砂で見えていないのかれおん達とは違う方向を向いている

ほのか「あれ？虫のさざめき？今度はうるさくない」

れおん「外れてるんだ！すなかけが効いてるぞ！ヤドキング、サイコキネシスで地面に叩き落とせ！」

ヤドキング「ヤード！」

ドガン！

デンチュラはヤドキングのサイコキネシスにより、浮かんだ後勢いよく地面に叩き落とされた

ぬしデンチュラ「チュラ…」

デンチュラはそのまま動きが鈍くなっている

れおん「弱ってきたな。ほのかちゃん、トドメをお願い」

ほのか「わ、わかりました！ヒー君、ひのこでとどめ！」

アチャモ「チャモー！」

アチャモはデンチュラに小さな炎を吐き出した

ぬしデンチュラ「チュ……ラ……」ドサ

デンチュラは目を回して戦闘不能となった

れおん「よし！やったな、ほのかちゃん！ぬしポケモンを倒せたぞ！」

ほのか「はい！でも、ヤドキングの大文字が強かったからですよ！流石です！」

れおん「いいんだよ。ほら、一緒にやって勝ったんだから」

れおんは手を握ってほのかの前に出した

ほのか「はい！！私達の初勝利です！」

ポン

ほのかも嬉しそうに手を握ってれおんの握り拳にくっつけた

れおん「さて、ナブさんの所に戻ろう。デンチュラはサイコネシスで浮かせようか」

ハルヤタウン 花畑

戻ると周りのデンチュラも大人しくさせられていた

れおん「どうやら何とかなつたみたいですね」

ジュンサー「れおんさん、ほのかちゃん！ぬしポケモンに苦戦されるかと思われましたが、平気そうでよかったです！」

ナブ「流石はれおん君じゃな。ほのかちゃんも突然だったのにすまなかつたのう」

ほのか「いえ、大丈夫です。れおんさんがいてくださったので。でも、どうして暴れだしたんですかね？」

ジュンサー「原因はまだわかりませんが、とりあえずこれ以上クモの巣が増える事は無いでしょう。ご協力いただき、ありがとうございました！」

ナブ「わしからもお礼を言おう。れおん君、ほのかちゃん、手伝ってくれて助かった。ありがとう」

れおん「力になれてよかったです」

ほのか「私は大した事出来なかったですけど、町が元に戻ってよかったです」

ジュンサー「それではそのデンチュラは私達の方で預かって、傷が治ったら野生に戻します」

れおん「よろしくお願いします」

ナブ「二人とも、今日はポケモンセンターで休んでくれ。宿泊代はお礼にわしが払っておこう」

ほのか「え!?!ポケモンセンターって泊まれるの!?!」

れおん「いいんですか、ナブさん?」

ナブ「うむ、わしからのお礼じゃ。気にしないでくれ。それと、ほのかちゃん。もし

ジムに挑戦するなら、ぜひジムに来てほしいのう」

ほのか「はい！」

その夜、ポケモンセンター内

ほのか「ポケモンセンター内って泊まる事もできたんだ！ベットが気持ちいい！」

ほのかは初めての泊まりにウキウキしていた

れおん「同室にする事なかっただろ。まあ頼んだのはナブさんだから、仕方ないけど
よ」

ほのか「私は気にしなくてよ！あ！今日のバトルで、ヒー君新しい技覚えたかな？」

れおん「それは明日アチャモに聞いてみるといい」

ほのか「そうですね！そういうえばあのヤドキングもそうですけど、ゴルダックやマリルリも水タイプですよ。かなり偏ってませんか？」

れおん「俺、水タイプが昔から大好きだよ。水タイプのポケモンで全員揃えてんだ」

ほのか「そうだったんですか。でも、それだと今回みたいに電気タイプや草タイプが大変じゃないですか？あ、でもヤドキングは全然何ともなさそうだった」

れおん「そりゃあ、対策はしていて当たり前だろ。弱い所は少しでも補っていかないとな」

ほのか「ヤドキングみたいにゴルダックも強いんですよ？カツコイイなく」

れおん「だとよ、ゴルダック、ヤドキング。よかったな」

れおんはモンスターボールに話しかけた

ほのか「え？ボールの中からでも、こっちの声って聞こえてるんですか？」

れおん「ああ。聞こえてるし、景色も見えてるぜ。覚えとくといいぞ」

ゴルダックとヤドキングが入っているモンスターボールはゆらゆらと揺れていた

ほのか「へー！じゃあ、さっきの話もヒー君に聞こえてたんだ。明日皆で遊ぼうね」

れおん「ジムには行くんだろ？少し対策をしておこうぜ。わかったかもしれないが、ナブさんは虫タイプのジムリーダー。だから、アチャモをメインで戦うといいだろうな。それと、ムツクルもいいな」

ほのか「そうですね。イワパレス使ってみましたもんね。でも、イワパレスは強そうだったしヒー君勝てるのかな？」

れおん「あれはもつとレベルが育ったポケモンさ。ほのかちゃんみたいな新米トレーナーには、それ用のポケモン達がいるんだ。」

ジムリーダーっていうのは、ジムバッジの数や相手ポケモンの平均レベルによって手持ちを変えてくるんだ」

ほのか「そうなんですか!?! 知らなかった。本に書いてない事って多いのね」

れおん「少し特訓してから挑戦した方がいいかもしれないな。明日、俺と簡単に対戦してみようか。もちろん、手は抜くよ」

ほのか「はい! よろしくお願いします!」

れおん「それじゃあ寝よう。今日は大変だったな。おやすみ」

ほのか「はい! おやすみなさい」

7. 特訓

次の日、ハルヤタウン バトルコート

二人は町の中にある公共のバトルコートへやってきて、この後のほのかのジム戦のトレーニングをしようとしていた

れおん「さて、まずはバトル形式だがナブさんのジムはシングルバトル。3vs3で戦い、交代はチャレンジャーのみに認められる」

ほのか「シングルバトルのルールは私も本で調べました。というと、私はムンナもいないとなんだ。ムンナは相性よくないし、バトルもうまくないから大丈夫かな？」

れおん「まあそうだよな。だが、むしタイプってのは複合タイプである事が多いんだ。スピアーやモルフォンのように、むしタイプ以外にどくタイプを持つていたりする。それならムンナでも弱点をつけるポケモンだ。ムンナの特訓からやってみるか」

ほのか「はい！出てきて、ムンナ！」

ポン！

ムンナ「ムウ！」

ほのか「よかった、起きてた。ムンナ、今から特訓でバトルやってみよう！」

ムンナ「ムナア！」

ムンナは嬉しそうに両手をあげた

れおん「やる気は十分みたいだな。なら、俺も出すぞ。カメテテ」

ポン！

カメテテ「テテ！」

小さな岩に二匹の顔がついた爪のようなものが生えたポケモン、カメテテが現れた

ほのか「カメテテだ！可愛い！」

カメテテ「テテ〜」

カメテテは少し嬉しそうにしながら照れている

れおん「さあ、ムンナの特訓開始だ。技を出してごらん」

ほのか「はい！ムンナ、サイコウエーブ！」

ムンナ「ムナ〜！」

ビシユ

ムンナの額から波の形をしたサイコパワーが放出された。しかし、カメテテの方にいかず、見当違いの方向へ向かっていった

カメテテ「??」

ほのか「あれ? どうして当たらないの?」

ムンナ「ム?」

ムンナも当たっていない事に首を傾げている

れおん「今、ムンナは技を出す時に目を瞑っていたんだ。だから、思った通りにいかないんだ。ムンナのサイコパワーがまだ足りないのかもしれないな」

ほのか「そっか。ムンナ、目を瞑ったら見えないよ。ちゃんと当てられるように、目をしっかりと開けて相手を見ながら打とうね」

ムンナ「ムナ！」

ほのか「うん！もう一回サイコウエーブ！」

ムンナ「ム…ナア！」

ムンナは目を閉じそうになるのを堪えて、カメテテを見ながら額からの波状のサイコ
パワーをぶつけた

ピシユー

カメテテ「テテ!!」

カメテテにサイコウエーブが当たり、少し痛そうにしている

ほのか「ほら！目を開けたら当たったよ！」

ムンナ「ムナ！ム…ナア…」

ムンナは喜ぶと同時に大きく口を開けた

カメテテ「テテ…」

それを見たカメテテの瞼が下がってきた

れおん「ん!?おい、今のは技のあくびか？」

ほのか「え!?嘘!いつの間に？」

カメテテ「スウ…スウ…」

カメテテは眠ってしまった

れおん「あちやく、寝ちまったか」

ほのか「ムンナ、やったよ！新しい技だよ！おめでどう！」

ムンナ「ムナア！」

ムンナはほのかと一緒に喜んでいるようでクルクル回っている

れおん「起きてくれ、カメテテ。ほら」

カメテテ「テ…テテ!!」

れおんはカメテテを揺らして起こさせた

れおん「さて、もう少しやったら次はムツクルだな」

ほのか「はい！」

しばらくして

ほのか「ムツクル！電光石火！」

ムツクル「クルー！」

ムツクルは目にも止まらぬスピードで突っ込んでくる

れおん「カメテテ！やさーしくみずでっぼう！」

カメテテ「テテ〜」

ビシユッ

ムツクル「ピピイイー！」ドサ

カメテテのみずでつぼうに当たり、真正面から向かってきていたムツクルはそのまま流されて地面に激突した

ほのか「ああ〜！ムツクル！」

れおん「お、おい、カメテテ。もつとだ、もつと優しくしろ。ほら、俺の手に打って試してみてくれ」

カメテテ「テテ〜…。テテ！テテ！」

カメテテは少し困った顔をした後、優しくみずでつぼうをれおんの手に打った

ピシヤ、パシヤ

れおん「そうそう。それくらいにしてくれ」

みずでつぼうというよりはみずかけのレベルだ

ほのか「ムツクル、まだいけるよね？」

ムツクル「クル……。パイイ！」

ムツクルは起き上がると羽を広げてアピールをしている

れおん「よし、もう一回だな」

ほのか「ムツクル！つばさでうっ！」

ムツクル「クルー！」

ムツクルはそのまま飛び立ち、広げた翼をカメテテに向けていく

れおん「カメテテ、からにこもれ」

カメテテ「テテ！」

カメテテは石の中に引っ込んだ

ガツン！

ムツクル「クルー…」

ムツクルは勢いよく石にぶつかつた

ほのか「あ、こもっちゃつた」

れおん「こんな時はあまり刺激しない方がいい。反撃を喰らう可能性があるからな。折角空を飛べるんだから、空中から攻撃して空中に戻る戦法を使うといい」

ほのか「そつか。ムツクルに最初に使われたもんね。あれなら避けやすいよね」

ムツクル「クルー」

ムツクルはまた飛び立ち、ほのか達の頭上をクルクルと旋回している

れおん「どうだ？バトルの感覚は少し掴めてきたか？」

ほのか「はい！まだ技の使い方とか状況によつて変えなきゃいけないのはわからないですけど、これがバトルなんですね。とっても楽しいです！」

れおん「いい事だな。ポケモンを信じて戦うんだぞ。そうすれば、ポケモンは必ず言う事を聞いてくれるはずだ」

ほのか「はい！」

そろそろお昼を回ってきた頃

れおん「カメテテ！からにこもれ！」

カメテテ「テテ！」

カメテテは再び石の中に引っ込んだ

ほのか「ヒー君！つつついちやえ！」

アチャモ「チャモー！チャモ！チャモ！」

カツン！カツン！カツン！

アチャモはそのままくちばしで石を突つついている

れおん「あまり刺激すると言っただろ？反撃で優しくひっかけ！」

カメテテ「テテ！」

シユ!

アチャモ「パイ! チャー!」

突然出てきたカメテテが自分の爪で優しくアチャモにひつかいた

ほのか「痛かったね、ごめんね! でも、出てきたよ! ひのこ!」

アチャモ「チャモ!」

アチャモはそのまま小さな炎を口から出した

れおん「やさしくみずでっぽう!」

カメテテ「テテ」

ピシャ! ジュツ!

みずかけは向かってくるひのこだけを消した

ほのか「やっぱり水タイプは不利だね。なら戻って、ヒー君！お願い、ムンナ！」

ボン！

ムンナ「ムナア！」

ほのか「サイコウエーブ！」

ムンナ「ムナア!!」

ビー——！

ムンナの前から螺旋を描いたような不思議な色をしたサイコパワーが放出された

ほのか「あれ!?何それ!？」

カメテテ「テテ!？」

指示をしたサイコウエーブとは違う技にほのかは驚いている

れおん「ゲツ!サイケ光線!?!カメテテ、つじぎり!」

カメテテ「テテ!!」

ザシユ!

カメテテも驚いた様子で、黒く爪を光らせるとそのままサイケ光線を切り裂いた
ほのか「今のつてサイケ光線?初めて見た。あれ?サイコウエーブは?」

ムンナ「ムウ?」

ムンナはほのかの問いに首をかしげている

れおん「ポケモンは四つまでしか技を覚ええない。だから、サイケ光線の代わりにサイコウエーブを忘れたんだな。よかったじゃないか！」

ほのか「なるほど！五つ目の時はどうやって忘れてるのか気になったけど、自然に忘れちゃうんだ。指定はできないの？」

れおん「特別な人に頼めばできるぞ。お金もかかるけどな」

ほのか「そっか。綺麗にはできないんだね。っていうか！どうせなら当たってくれてもよかったのに！」

れおん「ハハハ！まあ、そういうわけにはいかないな」

ほのか「しかもつじぎりなんて強い技覚えてたんだね。カメテテ可愛いのに、やるの

ね」

カメテテ「テテ！」

カメテテはえっへんといったように誇らしげにしている

れおん「俺にはこいつみたいな育て途中のポケモンが多いからな。その子達を使えば、ほのかちゃんとの練習相手になると思ってたな。まあ、強い技は少し覚えているけど基本的な技はまだ変えてないぞ」

ほのか「という事は、レベルがそれなりに上って事じゃん。当たってもいいじゃん！」

れおん「当たったらかわいそうだろう！」

ほのか「む。いじわる！」

8. 初めてのジム戦

次の日、ハルヤジム内

ほのか「すみませーん、ジムに挑戦しに来ました！」

ほのかがジムに入ると、そこには受付の人がいた

案内「はい。ようこそ、ハルヤジムへ。ここが初めてですか？」

ほのか「はい」

案内「わかりました。それでは、このまま奥に進んでください。ナブさんが待っていますよ。あ、お連れの方は二階の観客席で見てくださいね」

ほのか「わかりました。れおんさん、行ってきます！」

れおん「おう！焦るなよ。戦況をよーく見て、自分なりに判断してみるんだ」

その後

ナブ「やはり来てくれたか。ほのかちゃん」

ほのかが進んだ先には植物園のような広い空間と暖かい気温が包むバトルコートが広がっていた。地面も草や苔が生えて緑一色となっている。その先でナブが立っている

ほのか「はい！頑張ります！」

ナブ「ほっほ。元気でええのう。そして、初めてのジムなんだね。なら、少し説明しよう。ここ、ハルヤジムは虫タイプのジムじゃ。わしがこれから使うポケモン達も皆、

虫タイプとなっておる。

お主の判断力、ポケモンへの信頼、どちらもバトルを通して試させてもらおう。バトル形式はシングルバトルの3vs3じゃ。交代はほのかちゃんだけ認められる。ポケモンは3匹持っているかな？」

ほのか「はい！大丈夫です！」

審判「それでは、戦闘不能等の判断は私がさせていただきます！」

ナブとほのかの間に公式の服を着た審判員がついた

ナブ「それでは、ほのかちゃん。虫とは小さく、弱い生物。じゃが、その命はとても強く、大きく輝いておる。その命の力、わしのポケモン達が見せてあげよう！」

審判「バトル開始です！」

壁にある電子モニターにナブとほのかの写真が並び、VSと映し出されている。出したポケモンもわかるようになってい

ナブ「ゆくんじゃ、シズクモ！」

シズクモ「クー」

ナブのモンスターボールから小さな水蜘蛛のようなポケモン、シズクモが出てきた

ほのか「(シズクモ、確か水、虫タイプ。なら、ヒー君は出せない。それなら) 頑張るよ、ムツクル！」

ムツクル「ピピイイー!!」

ムツクルは出てくるやいなややる気十分のようで、空を飛んでいる

ナブ「ふむ。弱点はわかっておるようじゃな」

ほのか「はい！ムツクル、飛びまわって！」

ムツクル「クルー！」

ムツクルはそのままバトルコートの上空を飛んでいる

ナブ「ほう、何か作戦があるのかのう。なら、こちらも作戦をしようかの。ネバネバ
ネットじゃ」

シズクモ「クー！」

シズクモは口からクモの糸を吐き出して、バトルコート周辺はクモの糸だらけになっ
た

ほのか「な、何これ！ムツクル！翼でうっ！」

ムツクル「クルー!!」

ムツクルはそのままシズクモに向かって翼を広げて突っ込んでいく

ナブ「シズクモ、避けなさい」

ほのか「なら、こつちも狙いをギリギリまで定めて!」

ムツクル「クルー!」

後ろに跳んだり、左右に動くシズクモに合わせてムツクルも狙いを定めていく

シズクモ「ズー!!」

ムツクルの翼でうつがシズクモに当たり、奥へと飛ばされる。ムツクルはそのまま着地せず空へと戻っていった

ナブ「ほう、すっかり狙ってくるのう。しかもそのまま空へ向かうか。なるほど、ポケモンのいいところを利用してあるね。アクアリング」

シズクモ「クー」

シズクモは冷静に水で大きな輪っかを作ると、シズクモの周りを回り始めた

ほのか「もう一度翼でうつ！」

ムツクル「クルー！」

ムツクルはもう一度翼を広げて突っ込んでいく

ナブ「これは厄介だね。バブル光線」

シズクモ「シズー!!」

シズクモの吐く泡の光線がムツクルに向かう

ほのか「空に避難して！」

ムツクル「クルー！」

ムツクルは翼を仕舞い、再び上昇してバブルこうせんを避けた

ナブ「いい戦い方をするね、ほのかちゃん。ムツクルは空中戦が得意なんじゃ。そこを上手く使うのはとてもいい事だよ。バブル光線を辺りに撒き散らすんじゃ」

シズクモ「シズー!!」

シズクモはくるくると回りながらバブルこうせんを打ち続ける。それはどんどん高い場所を狙い始め、ムツクルの飛ぶ高さまで狙い始めた

ほのか「ムツクル！頑張って避けて！」

ムツクル「クルー!!」

ムツクルは後ろから迫るバブルこうせんを避けていく

ほのか「(どうしよう、バブル光線が激しくて近づけない。近づく……。!!そっか!)
今だよ、電光石火で急接近!」

ムツクル「クルー!」

ムツクルは目にも止まらぬスピードでシズクモへと向かう

ナブ「まずいぞ。シズクモ!バツクするんじや」

シズクモ「ク……」

ほのか「そのまま地上に降りて!」

ムツクル「クルー」

ムツクルはシズクモの目の前で降りた

ほのか「翼でうっ！」

ムツクル「クルー!!」

ムツクルはそこからシズクモを翼で叩きつけた

シズクモ「クー!!」ドサ

シズクモはそのまま倒れて目を回している

ナブ「何と！」

「審判「シズクモ戦闘不能！ムツクルの勝ち」

電子モニターでナブのシズクモが黒くなった。ナブ、残り二匹と表示されている

ほのか「やった！まずは一匹だよ、ムツクル！もう飛んでいいよ」

ムツクル「クル〜」

ナブ「ふむ、やるようじゃな。次はどうか？ツボツボ」

ツボツボ「ツボ！」

ナブは赤いコロコロした岩から黄色い蛇のような姿が出てきているポケモン、ツボツボを出した

審判「交代もできませんが、どうしますか？」

ほのか「交代します！お願い、ムンナ！」

ムンナ「ムンナ！」

ナブ「ほう。弱点がわからなくなったわけでもないだろうに、まさか弱点をぶつけてくるとは」

ほのか「私の手持ちは3匹しかいないので仕方ないんです。でも、負けません！ムンナ！絶対頑張るよ！」

ムンナ「ムナア！」

審判「戦闘開始です！」

ほのか「ムンナ！サイケ光線！」

ムンナ「ムナア！！」

ビシューー！

ムンナの前から出た波状のサイコパワーがツボツボに向かう

ツボツボ「ツボ！」

ツボツボは避けずに喰らうが、ビクともしていない

ムンナ「ム!？」

ほのか「あれ!?!全然効いてない！」

ナブ「ツボツボはこの固さが自慢でとう。さあ、どうやって倒してくるかの。虫のていこう」

ツボツボ「ツボー」

だ
ツボツボが不思議な声をあげると、ムンナの周りに虫が寄ってきてムンナを取り囲ん

ムンナ「ムン〜……」

ほのか「わ！虫がやってきた！ムンナ、耐えて！あくび！」

ムンナ「ム…ナア…」

ムンナはツボツボに向かって大きな口を開けた

ナブ「ほう。厄介な技じゃな。虫のていこう」

ツボツボ「ツボー」

ムンナに再び虫が寄ってくる

ムンナ「ムウ」

ほのか「頑張つて、ムンナ！サイケ光線！」

ムンナ「ムナア！」

ビシユー！

ツボツボ「スウ……」

ツボツボに当たるが、特に気にした様子もないがそのままツボツボは眠ってしまった

ナブ「寝てしまったかの」

ほのか「ムンナ！サイケ光線をずっと打つよ！」

ムンナ「ムナー！」

少しして

ツボツボ「ツボ!? ツボ！」

ツボは目を覚ました様子で周りをキョロキョロしている。まだ元気な様子に見える。

ナブ「おお、起きたかツボツボ。どれ、岩落とす！」

ツボツボ「ツボ！」

ツボツボは足で地面にある岩を砕いてムンナへ投げてきた

ほのか「避けて、ムンナ！（あんなに打っても倒れないなんて！でも、打つしかないよね！）」

ムンナ「ムウ！」

ムンナはヒョイと簡単に避けた

ナブ「虫のていこう」

ツボツボ「ツボー」

ムンナへ再び虫が寄ってくる

ほのか「サイケ光線！」

ムンナ「ムナア！」

ムンナも再び波状のサイコパワーをツボツボへ繰り出した

ドサ

審判「ムンナ戦闘不能！」

ほのか「あ、ムンナ!! やつぱり相性よくなかったね。でも、頑張ってくれてありがとう。ゆっくり休んで」

電子モニターにほのかのムンナの写真が黒くなった

ナブ「あくびは厄介じゃったのう。じゃが、技をしつかりと理解して使いこなすのもまたトレーナーの役目。よかったぞ、ほのかちゃん」

ほのか「ありがとうございます! もう一回お願い、ムツクル！」

ムツクル「クルー！」

審判「それではバトル再開です！」

ほのか「ムツクル、飛んでくる岩に気をつけて！でんこうせっか！」

ムツクル「クルー！」

ムツクルは目にも止まらぬスピードでツボツボへ向かっていく

ナブ「ツボツボ、岩に隠れなさい」

ツボツボ「ツボ！」

ガン！

ムツクルはツボツボの岩に勢いよく当たってしまった

ムツクル「ク……クル〜」

ドサ

ムツクルはそのまま地面に落ちてしまった

ほのか「あ！ムツクル！大丈夫!?!また飛んで！」

ムツクル「クルー！」

ムツクルは何とか立ち上がって空へ飛ぶが、少しヨロヨロしている

ほのか「あ、あれ？どうしたの、ムツクル。疲れちゃった？」

ナブ「いんや、そうじゃないぞ。ほのかちゃん覚えておるかな？わしのシズクモのネバネバネットを」

ほのか「え？……あ、さっきのやつですか？」

ナブ「うむ。あの糸は特別性での。地面にしばらく残り続けて、糸に触れたものに

くっ付くのじゃ。今、ムツクルの体にはそのネバネバしているクモの糸が絡まって動きにくくなっておるのじゃ」

ほのか「ええ!?そ、そんな本当に蜘蛛の罠みたいな技なんですね!ムツクル、頑張つてー!」

ムツクル「クルー!」

ナブ「ツボツボ、いわおとし」

ツボツボ「ツボ!」

ツボツボが岩から出てくると、そのまま岩を砕いてムツクルに岩を投げてきた

ほのか「(!!今、あの赤い岩の穴から出てきた。いくつか空いてるみたいだけど………)」

ムツクル「クルー」

ムツクルは旋回して岩を避けていく

ナブ「ううむ、このムツクル、かなり飛ぶのが上手いのう」

ほのか「(試してみる!) ムツクル、ツボツボのあの穴を脚で掴んで持ち上げて!」

ナブ「む!?!」

ムツクル「クルー!」

ガシ

ムツクルはツボツボの穴の空いた岩の穴に脚の爪を食い入れて掴んだ

バサバサバサ

ムツクルはなんとか持とうと必死に羽を羽ばたかせている

ほのか「頑張つて、ムツクル！」

ナブ「そんな事はさせんぞい。ツボツボ、まきつくんじや！」

ツボツボ「ツボ！」

ぎゆううう

ムツクル「クル〜」

ムツクルの体にツボツボの体が巻きついて締め付ける

ほのか「ああ！ムツクル！」

ムツクル「クル……………」

ナブ「離すでないぞ、ツボツボ！」

ほのか「持ち上げられる!? ムツクル！」

ムツクル「クルー!!!」

ムツクルはなんとか飛び立ってツボツボはそのまま空へと持ち上げられた

ナブ「ぬう!!」

ほのか「やった!! ムツクル、投げ落としちゃえ！」

ムツクル「クルー!!!」

ドスン!

ツボツボ「ツボ……」

ツボツボはそのまま目を回した

審判「ツボツボ、戦闘不能！」

電子モニターにナブのツボツボが黒くなった。残り一匹と映し出された

ほのか「よかった……。倒せた。ムンナ、ムツクル、ありがとう」

ナブ「まさかツボツボを持ち上げてしまうとはのう。ムツクルのパワーを舐めておつた。お疲れじやな、ツボツボ。初めてにしては落ち着いておるのう、ほのかちゃん。次がラストじゃ。気を抜くでないぞ」

ほのか「はい！」

9. 決着、ハルヤジム

ナブ「最後の一匹。じゃが、この子は最高の輝きを秘めておる。この子に勝てるかの？ アイアント！」

アイアント「アント！」

ほのか「虫、鋼タイプ。炎しか弱点が無い子だ。なら！ ヒー君！ 出番だよ！」

アチャモ「チャモ！」

審判「それでは、戦闘開始です！」

ナブ「あなをほるじゃ！」

ほのか「ええ!？」

アイアントは地面に潜った

ほのか「ヒー君!どこから来るよ!警戒して！」

ゴゴゴゴ

ほのか「(ん？右から左に音がする?)」

ナブ「今じゃ、アイアント！」

アイアント「アイアント!!」

アチャモ「チャモーー!!」

ほのか「ヒー君!!立て直して！ひのこ！（左からきた！もしかして）」

アチャモ「…チャモ!!」

ナブ「かわすんじや、アイアント」

アイアント「アント！」

ほのか「速い！なら、ほのおのうず！」

アチャモ「チャモー！」

ナブ「ふむ、広範囲技か。なら、あなをほるじや」

アイアントは地面に潜った

ほのか「(もう一回音をよく聞いて……)」

ゴゴゴゴ

ほのか「(こっちに向かってきてる。という事は)」

ナブ「今じゃ、アイアント！」

ほのか「ヒー君！後ろから来るよ！しゃがんで避けて！」

ナブ「何じやと!？」

アイアント「アントー！」

アチャモ「チャモ！」

アイアント「アント!？」

ほのか「今なら避けられないよ！ほのおのうず！」

アチャモ「チャモー!!」

アイアント「アン…ト」

アイアントは渦に取り込まれ、ダメージを受け続けている

ナブ「くっ！なぜ場所が。もう一回あなをほるじゃ」

アイアントは地面に潜った

ゴゴゴゴ

ほのか「斜め右だよ！」

アイアント「アントー！」

アチャモ「チャモ！」

ナブ「効かないか！なら、そのままかみつくじや！」

アイアント「アント！」

アチャモ「チャモー！」

ほのか「やっぱり速い！負けないで、ヒー君！ひのこ！」

アチャモ「……チャモー!!」

ほのか「えええ!? 凄い数のひのこ！」

ナブ「これは、もうか！避けられるか、アイアント！」

アイアント「アント……。アントー！」ドサ

審判「アイアント、戦闘不能！勝者、チャレンジャーほのか！」

ほのか「やったー!! やったよ、ヒー君!! ムンナもムツクルもありがとう!」

アチャモ「チャモー!! チャモチャモ!」

ナブ「よく頑張ってくれたの、アイアント。おめでとう、ほのかちゃん。わしの負けじゃな。とてもいいバトルじゃった。」

初心者にしては、とても上手だったぞ。どうして、あなをほるの場所がわかったんじゃ?」

ほのか「よく観察して、耳を澄ませたら、地面を掘る音の方向がわかったんです。それでわかりました!」

ナブ「ほほう！他のチャレンジヤーはあれで戸惑い、やられる者も多いのに、よく冷静でいられたのう。大事な事じゃ。どれ、そんなほのかちゃんには、このバッジを渡すにふさわしいのう。このハルヤジムを突破した証、ハルヤバッジじゃ」

ほのか「わあ！本物だ！ありがとうございます、ナブさん！」

ナブ「それと、街を救ってくれた事と、よいバトルをしてくれたお礼にこれもあげよう。これは、技マシン。特定のポケモンに技を教える事ができるんじや。」

これを頭に当て、一部の技と引き換えに技を覚えられる。どの技を忘れさせるかは、自分で判断する事ができるから、もしよかつたら試してみてくれ。

中身は、虫のていこう。これを当てれば、相手の特殊攻撃力を必ず下げるんじや。上

手く使ってほしい」

ほのか「そんな物までいいんですか!?!ありがとうございます!」

れおん「よお、ほのかちゃん。見てたぜ。まずはおめでとう。いいバトルだったな」

ほのか「れおんさん!私、勝ちました!」

れおん「ああ、お疲れ様。いろいろあったみたいだが、判断は正しかったぞ。よく落ち着いていられたな」

ほのか「れおんさんに教えられたおかげですね!」

ナブ「れおん君、お主はまた挑戦しないのかの？」

れおん「え？俺がですか？」

ほのか「そうじゃん！れおんさんもまた挑戦すればいいよ！」

れおん「えええ。面倒だな」

ナブ「ジムリーダー達に前、確認したが、お主は全部バッジを集めたのに、リーグにおらんかったではないか。期限が切れたバッジももう一度ジムに行き、再び勝った証明書を貰えば、バッジは有効となる。どうじゃ？」

ほのか「私、れおんさんのバトル見たいです！」

れおん「…ナブさん。それは建前で、本音はまた戦いたいんじゃないですか？」

ナブ「ほほ。バレておったか。ジュンサーさんに聞いたが、随分有名になっておるよ
うじゃのう。この老人の頼みを聞いてくれんかの？」

れおん「ハア。わかりました。明日にはポケモン達を用意します。待っていてください
い」

ナブ「ありがどのう。レベルはどれくらいなんじゃ？それによつて変えねばならんか

らのう」

「ほのか「そういえば、ゴルダック達のレベルは聞いた事なかった。いくつなんですか？」」

れおん「ゴルダック達の平均レベルは70くらいですよ」

「ほのか「ええー!? 70!? それって四天王さんとか、チャンピオンさんレベルだよ!?」」

ナブ「そ、そうじゃったか。流石じゃな。それなら、わしは本気のメンバーでないと相手ができるのう。わしも明日までに調整しておこう」

れおん「お願いしますよ」

その夜、ポケモンセンター内

ほのか「ゴルダックって相当強かったんだね！」

ゴルダック「ぐわぐわ…」

ほのか「照れなくていいんだよ。カッコイイじゃん！」

ゴルダック「ぐわ」

れおん「まあ、このメンバーでいつか。後は何とかなるだろ」

ゴルダツク「ぐわわ！」ピシ

れおん「痛！何だよ、いいじゃねえか」

ゴルダツク「ぐわわわわ！」

れおん「ん？お前に任せたが、駄目か？」

よ
「ほのか「それは駄目に決まってるじゃん、れおんさん。もつとしつかり考えないよ」

ゴルダック「ぐわ」コク

れおん「え。だってよ、急なんだからろくな準備できねえよ。バトルが久しぶりなやつもいるしな」

ゴルダック「ぐわ、ぐわぐわ、ぐわ」

れおん「お、こいつか。そういえば有効だな。じゃあ、入れてみよう」

「ほのか「こういうのって意外と適当なのかな？ 私は三匹しかいなかったから、わから
ないや」

10. まさかの再戦、れおん対ナブ

次の日、ハルヤジム

れおん「あー、ほのかちゃん。別にこっちに来なくても、街を観光してもいいんだぞ？」

れおんは、頭を掻きながら言った

ほのか「え？どうしてですか？」

れおん「いや…負けたら恥ずかしいというか…」

ほのか「ええ!?!自信無いんですか!?!れおんさんなら大丈夫ですよ!」

れおん「そう言ってくれるのはありがたいんだが…」

ナブ「おお、来てくれたかの。わざわざすまんかう」

れおん「まあ、約束しましたし。公式戦では無いですよね」

ナブ「うむ。審判もいるが、公式戦では無い。気にせんでよいぞ。じゃが、勝てば証
明書を発行しよう」

れおん「それではお願いします」

バトルフィールド

審判「それでは、ナブさん対れおんさんの特別試合を始めてます。ルールはジム戦と同じです」

ナブ「それでは、わしから出すぞ。行くのじゃ、グソクムシャ」

グソクムシャ「ムツシャ!!」

れおん「……」

ナブ「そう露骨に嫌な顔をするでない。勝敗はあまり関係ないんじゃないぞ」

れおん「ハアア。グソクムシヤかく。頑張ってきてくれ、オムスター」

オムスター「ムツス！」

ナブ「ほう、化石ポケモンか。かなり珍しいのう」

審判「それでは、試合開始です！」

ナブ「グソクムシヤ、出会いがしら！」

グソクムシヤ「ムシヤー！」

グソクムシヤはかなりの速度で突っ込んでくる

れおん「それはわかっていますよ！オムスター、周りにだいちのちから！」

オムスター「スター！！」

オムスターの周りから大地が噴き出てくる

グソクムシャ「ムシャ…」

ナブ「ほう！そんな止め方があるとは！しかも、普通のオムスターは大地のちからな
ど使えん。珍しいポケモンの上、さらに特別なようじゃな」

れおん「狙え、げんしのちから！」

噴き上がる大地の中から、岩が飛んでくる

ナブ「シエルブレードではじくんじゃ！」

ガキン！ガン！

ナブ「こちらにも攻撃じゃ。ミサイルばり！」

グソクムシヤ「ムツシヤ！」

れおん「押し流せ、ハイドロポンプ」

ドバア！

グソクムシヤ「ムシヤー！」

グソクムシャはミサイルばりとともに流されていく

ナブ「おお、かなり強力なハイドロポンプじゃな。まさか、こんなに押し流されるとは」

オムスターの周りにはもう何もなくなつた

ナブ「今が攻め時じゃ！避けてみなさい、アクアブレイク！」

グソクムシャ「ムツシャ!!」

グソクムシヤは水を纏い、凄^レい速^クさで突撃してくる

れおん「何も横にしか回避できないと思うのは、浅い考えだ。地面に向かってハイドロポンプ！空に逃げろ！」

オムスター「スター！！」

ナブ「何じやと!?!オムスターが空にいくと!?!」

グソクムシヤ「ムシヤ!?!」

れおん「そのまま狙え！げんしのちから！」

空中から、岩が降り注ぐ

グソクムシヤ「ムシヤー!!」

ナブ「グソクムシヤ!!」

れおん「擬似いわなだれです。今がチャンス！くだけるよろい！」

ピキイ！

オムスターの殻にヒビが入った

ナブ「それはいかん！グソクムシャ！アクアブレイク！」

ドガアン！

グソクムシャ「ムツシャ!!」

グソクムシャは周りの岩を砕いて、オムスターに突撃してくる

れおん「よけろ、オムスター。それからハイドロポンプ」

シュン！

グソクムシヤ「ムシヤ!？」

オムスター「スター!!」

ドバア！

グソクムシヤ「ムツシヤ…」

グソクムシヤはボールに戻っていった

ナブ「むう。ききかいひで戻ってしまったか。これは、強いのを、れおん君。トレ
ナーの血がたぎってきたぞい。行くのじゃ、フォレトス！」

フォレトス「フォーレ！」

審判「交代はどうしますか？」

れおん「このままで行きます。ハイドロポンプ！」

ドバア!

ナブ「耐えるんじや、じならし!」

れおん「やべっ!」

オムスター「スター!」

れおん「げんしのちから!」

オムスター「ムツス!」

ナブ「耐えるんじや、力を溜めなさい」

れおん「何だ、フォレトスで溜める技……………!?マジか！」

ナブ「狙いなさい、でんじほう」

フォレトス「フォーレ!!」

れおん「大地のちからで周りを囲め！」

オムスター「スター！」

ナブ「なら、じならしじや」

れおん「させるな、ハイドロポンプ！」

ドバア！

フォレトス「フォレ……」

フォレトスはじならしをするのに失敗した

ナブ「流石にキツイのう。技の出も速いのが厄介じゃな。なら、上からいくんじや」

フォレトス「トス!!」

れおん「上だと!?!」

オムスターの上からフォレトスが落ちてきた

ナブ「ギガドレイン」

れおん「げんしのちからで追い払え!」

ドサ

大地のちからがなくなると

審判「両者、戦闘不能！ひきわけ！」

ナブ「やはり回復は追いつかんかったか。頑張ったのう、フォレトス」

れおん「相打ちか。お疲れだ、オムスター」

ナブ「これは年甲斐なく、ワクワクしてきたぞ。行くのじや、グソクムシャ！」

グソクムシヤ「ムツシヤ！」

れおん「頼んだ、ブルンゲル」

ブルンゲル「ブールー」

れおん「ブルンゲル、しおふき！」

ブルンゲル「ブールー！」

バシヤアア!

ナブ「ふいうちじゃ」

れおん「くっ!」

グソクムシヤ「ムツシヤ!」

ブルンゲル「ブルー!」

グソクムシヤはブルンゲルの不意をついた

れおん「だが、その近さなら！ちからをすいとる！」

ナブ「何と!?!」

ブルンゲル「ブルー！」

グソクムシヤ「ムシヤ…」

れおん「そのままシャドーボール！」

ナブ「いかん！シエルブレードで切り裂くんじや！」

グソクムシヤ「ムツシヤ！」

ナブ「アクアブレイク！」

れおん「シャドーボール！」

ドサ

審判「グソクムシヤ、戦闘不能！ブルンゲルの勝ち」

れおん「よし！」

ナブ「頑張ったのう、グソクムシヤ。れおん君は意外な事をしてくるのう。わしもとっておきを見せねばな。ヘラクロス！」

ヘラクロス「ロツス！」

ヘラクロスの体には輪っかがついていた

れおん「な!?!まさか、そのヘラクロスは!?!」

ナブ「流石に知っておるか。お主に見せてやろう。わしとポケモン達の絆の力を！」

一寸の虫にも五分の魂！虫を舐めてはならん！油断は禁物じゃ！蝶のように舞い、蜂のように刺す！さあ、ここが正念場！ヘラクロス！メガ進化！！」

ナブの腕輪と、ヘラクロスの体についた宝石がリンクする！

ナブ「メガヘラクロス！！」

メガヘラクロス「ロツス！！」

れおん「嘘だろ、おい」

11. ナブの切り札

審判「交代はどうされますか？」

れおん「……いや、このままでいく」

ナブ「いくんじや、タネマシンガン」

メガヘラクロス「ロツス！」五連続攻撃！

れおん「ブルンゲル！冷凍ビーム！」

ブルンゲル「ブルー！」

タネマシンガンで氷の壁を作り、全て防いだ

ナブ「全て凍らせてくるか。技の精度も中々じゃない。なら、ロックブラスト！」

メガヘラクロス「ロツス！ロツス！」五連続攻撃！

れおん「シャドーボールで壊せるだけ壊せ！」

ブルンゲル「ブルー、ブルー！ブルー！！」

れおん「くっ、きついか。冷凍ビーム！」

ブルンゲル「ブルー！」

ナブ「ロックブラスト！」

メガヘラクロス「ロツス！ロツス！」五連続攻撃！

ブルンゲル「ブルー！」ドサ

審判「ブルンゲル、戦闘不能！メガヘラクロスの勝ち」

れおん「……マジか。お疲れ、ブルンゲル」

ナブ「これでお互いラストじゃな。このままいくぞ、メガヘラクロス」

メガヘラクロス「ロツス！」

れおん「結局は、お前に任せる事になりそうだ。頼んだ、ゴルダック」

ゴルダック「ぐわ！」

ナブ「れおん君のパートナーのお出ましじやな。パートナー同士、本気でいくぞい」

審判「それでは、戦闘開始！」

ナブ「タネマシンガン！」

メガヘラクロス「ロツス！」五連続攻撃！

ゴルダック「ぐわ！」冷凍ビーム！

タネマシンガンで氷の壁を作り、全て防いだ

ナブ「何じゃと!? 指示も無しに!?!」

ゴルダック「ぐわ!」地面にハイドロポンプをし、浮き上がった

ナブ「空にいくか! 狙うのじゃ、ロックブラスト!」

メガヘラクロス「ロツス! ロツス!」五連続攻撃!

ゴルダック「ぐわ!」ハイドロポンプ!

岩は全て流され、そのままメガヘラクロスのもとへいった

メガヘラクロス「ロスー！」

ナブ「メガヘラクロス！全て押し返してくるか！」

ゴルダック「ぐわー」

ナブ「何故れおん君は指示をしないんじや！」

れおん「いい調子だぞ、ゴルダック。そのまま頑張れ」

ゴルダック「ぐわぐわ」

ナブ「まさか、れおん君の事を完全に理解しておるといふのか。ミサイルばり！」

メガヘラクロス「ロツス！」五連続攻撃！

ゴルダック「ぐわ！」アイアンテール！

ガキン！ガン！

ゴルダック「ぐわー！」

ナブ「メガヘラクロス！タネマシンガン！」

メガヘラクロス「ロツス！」五連続攻撃！

ゴルダック「ぐわー！」冷凍ビーム！

しかし、防ぎきれず数発当たる

ゴルダック「ぐー！」

ナブ「いいぞ、メガヘラクロス！ロックブラスト！」

メガヘラクロス「ロツス！ロツス！」五連続攻撃！

ゴルダック「ぐわー！」ハイドロポンプ！

ロックブラストは全て押し流され、メガヘラクロスを巻き込む

メガヘラクロス「ロスー！」

ゴルダック「ぐわー」

ナブ「そのハイドロポンプ、かなり厄介じやな」

ぐわん！

メガヘラクロス「!?ロースー!!」

メガヘラクロスは突然膝をついた

ナブ「!?どうした、メガヘラクロス！急に倒れて何があったんじや！」

れおん「準備は終わったみたいだな、ゴルダック」

ゴルダック「ぐわ」

ナブ「準備じゃと!?!立てるか、メガヘラクロス!タネマシンガン!」

メガヘラクロス「ロツス!」

ゴルダック「ぐわ!」冷凍ビーム!

氷の壁で全て防いだ

ぐわん！

メガヘラクロス「ロス……」ドス

ナブ「またか!? 何じや、今ゴルダックは何もしておらんかった。まさか……。先程からの鳴き声は……みらいよち！」

れおん「正解だ、ナブさん。そして、次にトドメだぜ」

ナブ「何じやと!?!」

ぐわん！

メガヘラクロス「ロス……」ドサ

審判「メガヘラクロス、戦闘不能！勝者、れおんさん！」

ナブ「何と……。あっぱれじゃ、れおん君。わしの負けじゃ」

れおん「ハァー。危なかった。序盤にオムスターが削ってくれたのが大きかったな」

ナブ「どうしてゴルダックには何も指示を出さなかったんじや？」

れおん「基本、出す必要が無いからですよ。こいつはバトルで俺のやりたい事をほぼ理解しています。どんな時、どんな状況で、どの技をするのかをね」

ナブ「……そんな事がありえるのか」

れおん「ありえますよ。偶にいます、そういうトレーナー。目だけで合図していたりね。エスパークタイプに多いみたいですが、俺達はそれと一緒にです」

ナブ「とても学べる事の多い試合じゃった。わしもまだまだじゃな。どれ、少し待っていてくれ。証明書を書いてこよう」

れおん「ありがとうございます！」

少しして

ほのか「れおんさん！もう、凄いですよ！全部！全部が何起こってるのかわからないくらい凄かったです！」

れおん「あ、ありがとな、ほのかちゃん。少し落ち着こうか」

ほのか「私、こんな凄い人と知り合いになれて本当よかったです！またバトルの事、色々教えてください！」

れおん「ハハハ。ああ、任せてくれ。ほのかちゃんもセンスあるからな。俺も楽しみだよ」

ほのか「やったー!!」

ナブ「待たせたのう、れおん君。ほれ、証明書じゃ。前のバッジは持っておるかの」

れおん「えっと…これですな」

ナブ「うむ。それでは、そのバッジは有効となった。ぜひ、他のジムにもまた挑戦してみてもええんじゃないかの？」

れおん「ええ〜…。それは、考えておきます」

ナブ「ほほ、なにを恥ずかしかつておる。とてもいいバトルじやった。やはりお主なら、リーグでも活躍する事間違いなしじや。ぜひ、リーグに出てほしいのう」

ほのか「そうですよ、れおんさん！私もリーグ目指すんで、一緒に出ましようよ！」

れおん「うーん……。まあ、検討しておきます」

ナブ「楽しみにしておるぞ。ぜひ頑張ってくれ」

その夜、ポケモンセンター

ほのか達は、ほのかの母親とテレビ電話をしていた

ほのかの母「あなたがれおんさんですね。初めまして、娘がお世話になります。ほのかの母です」

れおん「こちらこそ、ご連絡が遅くなつてすみません。初めまして、れおんといいます」

ほのか「見て見て、お母さん！ハルヤバッジ！」

ほのかの母「まあ！ハルヤジムに勝ったの!?バトルもまともにした事無かったのに

!？」

ほのか「そうなの。れおんさんにたくさん教えてもらって、何とか勝てたんだよ！」

ほのかの母「まあまあ。娘が迷惑かけてませんか？娘は知識ばかりで、何の実践もした事なくって…」

れおん「そんな事ないですよ。実践は何年もトレーナーやってないと、慣れません。それに、知識はとっても大切です。」

情報を知る事は、トレーナーになるために重要な事です。ほのかちゃんは普通のトレーナーよりもよっぽど知識があつて、こつちも教えるのが楽ですよ」

ほのか「て、照れるよ、れおんさん」

ほのかの母「これからもよろしくお願いします。ほのか、失礼のないようにね。それと、偶にはこうやって連絡して。いつでも帰ってくるのを待ってるからね」

ほのか「うん！わかったよ、お母さん。おやすみ」

部屋内

れおん「ハァー。何とか勝てたー」

ほのか「ゴルダック、もの凄い強かった！指示無しであんなに動けるんだね！」

れおん「俺とゴルダックの絆の力だな」

ほのか「そういえば、メガ進化なんて初めて見た。あれって、世界でもほんの一握りの人しかできないんでしょ？」

れおん「ああ。まさか、ナブさんがその一人とはな。ジムリーダーの中でメガストーンを持つてるのは二人だ。いきなり一人目なのか。流石じいさん。経験は誰にも負けないという事だな」

ほのか「ナブさんって優しいし、バトルも強いし、いいおじいちゃんだった。ああいう人がジムリーダーなら、こんな素敵な街になるのも納得いくよ」

れおん「もうナブさんとは戦わねえ。ゴルダックじゃないと勝てない可能性がある。しかも、次は多分ゴルダックでも苦戦させられるぞ」

ほのか「え？ どうして？」

れおん「ナブさんはな、技の精度が凄いんだ。的を射抜くかの如く、確実に当ててくる。タネマシンガンとかいい例だな。」

冷凍ビームで凍らせたのを見て、その凍った壁の隙間を通してきた。あんなのが出来るのは、俺のポケモンにはいねえよ」

ほのか「そ、そんな事してたんだ。それは…怖いね。しかもそれって、タネマシンガンが通用しないから、無理矢理通すためだよな？ そんな土壇場で成功できるなんて、確

かに凄いや」

れおん「明日は街を出るぞ。次の街は、遠いんだ。数日は野宿だ」

ほのか「ええー!?なら、ベッドを楽しんでおかなかちや!おやすみ、れおんさん!」

れおん「おう、ゆっくり休めよ、おやすみ」

12. 怪しき者

3 番道路

ほのか「次に向かうのは、どんな街なんですか？」

れおん「次に近いのは、二つあるんだ。大体同じくらいの距離だな。鉾山の街、ガ
ネシテイ。空の街、オアシテイ。どっちがいいとかあるか？」

ほのか「あ！オアシテイなら知ってます！よくテレビで見た事あるんですよ！高い山
の上にある街で、遺跡とかがたくさんあるんですよね？」

れおん「そうだ。まあ、あそこも観光地だからな。有名だ。もしジムに行きたいなら、ガーネシテイだ。あそこにもジムがあるぞ」

ほのか「そつかく。うーん……。今は普通に進んでるけど、道はどこで分かれるんですか？」

れおん「この先に洞窟がある。その中で分岐するんだ。それまでに考えていてくれ」

ほのか「洞窟……。わ、わかった」

とある場所

??? 「今、速報が入りました！ハルヤタウンを襲わせていたデンチュラ達が何者かに倒され、街も元通りになったそうです！」

??? 「ふん、そんな事言われなくてもわかってる。まあ、あそこはいい。オマケみたいなものだ。まだ、バレるわけにはいかんからな」

??? 「あら、いいの？観光地なんだし、もつと被害出させたほうがよかつたんじゃない？」

??? 「あそこでは特に目的もない。もつと大きな街でやった方がいい。そうだな、オアシテイ。あそこなんていいじゃないか」

??? 「確かに。あそこを制圧すれば、古代の文明や力を先取りできます」

??? 「はーい！私、そこにいくわ。オアシテイ、楽しみたいわ」

??? 「いいが、目的は忘れるなよ」

??? 「勿論ですよ。しっかりと、支配してきますわ」

下りの洞窟

キイ、キイ！

ほのか「ヒイイイ！」

ギョツ！

れおん「お、おいおい。ほのかちゃん。急に抱きつかないでくれ。そんなに暗いのが怖かったのか」

ほのか「そ、そうなんですー！私、こういう所本当苦手で！」

れおん「まあ、いいか。出ておいで、ランターン」

ランターン「ターン…」

ランターンの頭にある明かりで周りが照らされる

ほのか「あ、明るい」

れおん「少し重いが、ランターンを持って歩くよ。そうすれば、暗くないだろ？」

ほのか「うう……れおんさん、すみません。助かります」

ランターン「ターン？」

ほのか「あ、このランターンたれ目だ。それに、のんびりしてて可愛い」

れおん「見た目だけだぞ。こいつ、おっとりしてるし、よく寝るし、よく食べるしですぐ太るから、こっちは少し困ってるんだ」

ランターン「ターン!!」ビリビリビリ!

れおん「ギヤアアア!!」プスプス…

ほのか「あ…怒った。れおんさん、大丈夫ですか?」

れおん「うう……。し、痺れる…」

ランターン「ターン!!」

ランターンはれおんの上のり、暴れている

ほのか「今のはれおんさんが悪いですよ。ランターンに失礼だと思えます」

ランターン「ターン」

ランターンはほのかに近づいていった

ほのか「えへへ、擦り寄ってきた。可愛いねー、ランターン」

れおん「ぐっ、悪かったな、ランターン。太ってるの気にしてたか？」

ランターン「ターン!!」

れおん「あー！悪い、悪い!!また十万ボルトはやめてくれ!」

ほのか「あ、この看板から道が分かれてる。じゃあ、オアシティからでいいですか？」

れおん「ああ、構わないぜ。そうだ、オアシティならコンテストもよく開かれるんだ。

試してみたいんだったか？」

ほのか「そうなんですか!?!なら、一回だけ挑戦してみたいです!」

れおん「コンテストはよくわからないから、アドバイスはできねえな。ただ、技を上
手く綺麗に見せればいいんだよな?少しだけなら、わかるかもな」

ほのか「そうなんですか?なら、少しでもいいんで今度教えてください」

れおん「まあ、いいぜ。この後山を登るから、少し寒くなるぞ。防寒具やアチャモを
抱いたりして凌いでくれ」

しばらくして

怪しい男「ふう、こここの洞窟は本当大変だな」

れおん「何してるんだ？こんな所で」

怪しい男「げ！誰かに見られた！逃げろ！」

れおん「お、おい！何だよ、あいつ。ここから上がってきたな」

ほのか「あれ？このはしご、下に繋がってるんですね」

れおん「一体何してたんだ？少し見に行ってみないか？」

ほのか「何だか変な服でしたよね。私も気になります。行ってみましょう」

地下

ピチヨン…

ほのか「うう…ランターンがいなかったら、絶対泣き叫んでた」

れおん「水の匂い…。湖でもあるのか？少し進んでみよう」

地下の湖

ほのか「あ、本当だ。湖がある。こんな所があつたんだ」

れおん「………何だ、あれ。機械みたいなものがあるぞ」

ほのか「水の上に浮いてるのかな？どうなってるの？」

れおん「怪しいな。ほのかちゃんは待っててくれ。調べてくる」

れおんはそう言うど、上を全部脱いだ

ほのか「キャツ!!れおんさん、脱ぐなら言ってください!」

れおん「あ…す、すまない。ゴルダック!」

ゴルダック「ぐわ」

れおん「行くぞ!」

ザバアン!

ほのか「も、もう！ビックリした。ランターンは行かなくていいのかな？あ、でも行ったら私、真っ暗だ」

ランターン「ターン？」

水の中

れおん「(下からも特に何もいないな。ただ、周りの野生ポケモン達がいらない。どうなっている)」

ザバア！

れおん「よし、ゴルダック、壊していいぞ」

ゴルダック「ぐわ！」

バキバキ！

ゴルダックのみらいよちにより、凹んだ

バシヤア！

れおん「ふうう。寒い、寒い。ヤドキング、温めてくれ」

ヤドキング「ヤードー」

ほのか「れ、れおんさん。早く服着てください」

れおん「いや、少し待ってください。乾かしてからでいいか？別に全部脱いでないから、見たっていいじゃないか」

ほのか「そ、そういう問題じゃありませんよ！」

ゴルダック「ぐわ！」ビシ！

れおん「痛え！ゴルダックまで怒るのかよ。いいじゃないか、別に」

ゴルダック「ぐーわー」ピキピキ

れおん「あー！俺が悪かったみたいだな……ほら！服着たから、冷凍ビームはやめてくれ！」

ゴルダック「ぐわぐわ」ペコ

ほのか「もしかして、私に謝ってるのかな？気にしないで、ゴルダック。ありがとう」

れおん「服が濡れて気持ち悪い。ヤドキング、しばらく炎出し続けてくれ」

ほのか「わ、私もヒー君出しますね。乾かすのお手伝いします」

怪しい男「あー!!!」

全員「!?」

怪しい男「お前ら、何て事してくれるんだよ!あの装置はまだ作動してなかったのに!!」

れおん「あの変な機械はお前の仕業か。何だ、あれは。どうして野生のポケモン達も

いないんだ」

怪しい男「そんなの俺が追い払ったからに決まってんだろ！折角この洞窟のポケモン達を操ってやろうとしたのに、計画がパーだぜ!!」

ほのか「操る!? 一体、何をしようとしてるんですか!」

怪しい男「煩え！お前らなんか、俺がやつつけてやる！いけ、ダストダス！スカタンク！」

ダストダス「ダスー!」

スカタンク「ブツピーイ！」

れおん「ダブルバトルか。ほのかちゃん、俺と一緒に戦ってくれるか？」

ほのか「はい！微力ですが、力になります！相手が毒タイプなら、頼んだよ、ムンナ
！」

ムンナ「ムナア！」

れおん「なら、俺はヌオー！頼むぞ！」

ヌオー「ヌオー」

怪しい男「ダストダス！ヘドロばくだん！スカタンク！つじぎり！」

れおん「ヌオー！スカタンクを捕まえろ！」

ヌオー「ヌオー！」ガシ

スカタンク「スカ!？」

れおん「ゼロ距離たきのぼり！」

ヌオー「ヌオー！」

スカタンク「ブツピーイ！」

ほのか「ムンナ、サイケ光線でヘドロばくだんを壊して！」

ムンナ「ムウ！」

バアン！

怪しい男「スカタンク！ムンナにかえんほうしや！ダストダス！ヌオーにのしかかり
！」

ほのか「あ、どうしよう！」

れおん「ヌオー！ムンナをかばえ！」

ヌオー「ヌオー」

ヌオーはムンナに向かってくるかえんほうしやの前に出た

そんなヌオーの上からダストダスが落ちてくる

ダストダス「ダースー！」

「ほのか「なら、ダストダスは任せてください！ムンナ、上のダストダスにサイケ光線！」

ムンナ「ムウ！」

ダストダス「ダースー！」

れおん「いいねえ、ほのかちゃん！これなら！ヌオー、じしん！」

ヌオー「ヌオー！」ドシン！

ダストダス「ダスー!!」ドサ

スカタンク「ブツピーイ!!」ドサ

ほのか「す、凄い。これがじしんなんだ。凄い威力」

怪しい男「な、何で！こんなやつらに！しかも、スカタンクのゆうばくも湖のせいで
発動しねえ！くっそー!!」ダッ！

怪しい男は逃げ出した

れおん「チツ！捕まえられなかったか。まあ、未然に防げてよかったぜ」

ほのか「何なんでしょう、あの人。他にも仲間がいるんでしょうか」

れおん「ああいう奴ら、俺は大っ嫌いなんだ。今度見たら覚悟してろよ」

ほのか「（な、何だか凄く怒ってる。少し怖いな、れおんさん）」

13・オアシステイへ

空への山道

ほのか「やつと洞窟抜けたー！」

れおん「よかったな、ほのかちゃん。もう怖がる事ないもんな」

ほのか「本当だよ。ありがとう、ランターン。助かったわ」

ランターン「ターン…」

れおん「こいつ、眠くなってきたな。ほら、戻れ、ランターン」

ゴルダック「ぐわ……」

ゴルダックが何かに気づき、上を警戒している

れおん「どうした、ゴルダック。何かいるか？」

ほのか「空を見てる？…鳥の群れ？」

空にはたくさん鳥ポケモンがいた

れおん「……!?あれは、ファイアローの群れ!ここの山道のぬしポケモンでもある。普段はこんな近くにこないはずだ。どうして…」

ほのか「ファイアロー達が向かってる先には何があるの?」

れおん「あの方角はオアシティだ。何故ハルヤタウンみたいに、ぬしポケモン達が暴れているんだ?」

ほのか「私達も急いだ方がいいかも」

れおん「だが、まだ時間がかかる。着くのは明日になるぞ」

ほのか「そ、そっか。それなら仕方ないね。初の野宿だ！少し不安だな」

れおん「まあ、それはこれから嫌でも慣れるさ。もう少し進むと森だ。その中で今日は休もう」

実りの森

ほのか「うわあ、この森っていろんなきのみがあるんですね！」

れおん「ああ、オアシティの人達が昔、たくさん植えたらしいんだ。ポケモン達のため」

めだから、俺達はあまり多く取ってはいけないんだ」

ほのか「そつか。あ！メリープ！可愛いなー！チエリンボもいた！」

ゴルダックは奥を指している

ゴルダック「ぐわ！」

れおん「ん？あそこにいるのは、デイグダにヤジロン。それに、シンボラーだ。こんな森に住むポケモンじゃないぞ」

ゴルダックはデイグダに近づいていく

ゴルダック「ぐわ、ぐわぐわ」

デイグダ「デイグ！デイグデイグ！」

ほのか「ポケモンと話してるの？」

れおん「あのポケモン達は普通、森には住まないんだ。だからこんな所にいるのはおかしい。何があったのか聞いてみようと思ってるな」

ゴルダック「ぐわー、ぐわ、ぐわぐわ」

ゴルダックはジエスチャーをしている

れおん「えっと、この先で暴れてるやつらがいるのか？そいつらに追い出されたのか」

ゴルダック「ぐわ」コク

れおん「よし、合ってるみたいだな。そんなやつらがいるのか。許せないな。ポケモン達の住処を荒らしてはいけないって事を知らないのか？」

ほのか「他のポケモン達もここに逃げてきてるのかな？かわいそう。……もしかして、さっきの変な人と関係あるのかな？」

れおん「確かにありそうだな。こりやあ一悶着ありそうだ。ほのかちゃん、オアシティにいったら俺は別行動だ。危険だからな。ほのかちゃんはポケモンセンターで待っているんだぞ」

ほのか「……わかりました。無茶しないでくださいね」

その夜

れおん「テントの建て方はこれで終わりだ。簡単だっただろ？」

ほのか「はい！これなら次には出来そうです。あ、ご飯ってどうしてるんですか？」

れおん「ポケモン達にはフーズをあげてるが、俺は食べない時もあるな」

ほのか「ええ!?!それは不健康ですよ!私、料理ならできるんでれおんさんの分も作りますよ!」

れおん「いいのか?それはありがたい。いつもゴルダックにご飯食えって怒られるんだ」

ほのか「それはそうですよ。トレーナーが力つけてないと、ポケモンも不安になると思います。ゴルダックは正しいですよ」

れおん「全く、あいつは俺の世話係みたいなんだ。少しくらい適当でもいいだろ」

ほのか「意外とれおんさん、自分の事は適当ですよ。ゴルダックも心配してるんですよ」

れおん「そうか？普通だと思ってるんだがな」

しばらくして

れおん「うまつ！え!?このシチュー美味しいな!!」

ほのか「本当ですか？ありがとうございます。お母さんが、料理はできるようになっておきなさいって言われて、色々作れるようになったんです」

れおん「俺、こんな作れねえよ。そこらへんの食べられるきのみ取って、煮込んで
終わりだ」

ほのか「それは料理じゃないですよ。ポケモンのご飯みたいじゃないですか。それで
よく生活できましたね」

れおん「まあ、何とかな。ほのかちゃんがいれば、ご飯に困らなくて済むみたいだ！
ありがたい！」

ほのか「任せてください！これからは私が作りますね！」

れおん「頼んだ！おかわり！」

14. ラミア

オアシステイ

ガルドア山の中腹にある街。晴れている時の景色は、ガルドア地方一とも言われる絶景が広がっている。また、古代からある遺跡もあり、学者達が研究に励んでいる。観光名所の一つでもある。

二人「な!!?」

そこでは、ファイアロー達が暴れており、炎を吐き、風で建物を燃やしていた

ファイアロー「アローー!!」

ほのか「嘘……。ど、どうしよう!」

れおん「ゴルダック、止めるぞ!ほのかちゃんは逃げてくれ!ここから左の方に遺跡がある。そこで大人しくしていてくれ!」

ゴルダック「ぐわ!」

ほのか「わ、わかりました!落ち着いたら来てください!」

れおん「まずは火を消すぞ!スターミー、お前も手伝ってくれ!」

スターミー「ハヤア！」

ファイアロー「アロー！」

れおん「ブレイブバードがくるぞ！」

ゴルダック「ぐわ！」ハイドロポンプ！

ファイアロー「アロー!!」ドサ

周りのファイアロー達がかっちに向かってくる

れおん「全員一気にこい。冷やしてやるよ。スターミー、じゅうりよく！」

スターミー「ハヤア！」

ファイアロー「アロ!？」

ドサドサ

重量が変わり、飛んでいたファイアロー達は全員落ちてきた

れおん「さて、暴れるような鳥達には少し反省してもらおうか」

その頃、遺跡公園内

ほのか「ここが、あの有名なマージニア遺跡……。あ！あの変な服…洞窟でも見た！
隠れなきや！」

怪しい男「ん？今、誰かいたか？」

??? 「ちよつと、そこ！まだ終わってないんだから、ブーツとしてないで手伝いなさい
！」

怪しい男「は！すみません、ラミア様！」

ほのか「……行つたみたいね。奥の方にも結構な人数がいる。こんな所で何してるの？それに、何だか偉そうな人もいるみたい。少し戻らないと。私一人じゃ無理だわ」

ザツザツザツ

??? 「ん？あら、誰かしらあの子。もしかして、見られた？」

その頃、れおん達は

ファイアロー「ピイイイ……」

ファイアロー達は全て倒されていた

れおん「さて、これでぬしポケモンも大人しくなったな。それにしても、焼けた跡が酷いな。住民達は無事に逃げただろうか？それに、どうしてファイアロー達はここまで来たんだ？」

ゴルダック「ぐわ！」

れおん「ん？何か見つけたのか？な！？これは、あの変な機械！？何か書いてあるな。ほのおタイプ……。まさか！これに吸い寄せられたのか！？こんなもの壊すぞ、ゴルダック」

ゴルダック「ぐわ！」

ベキベキ

みらいよちにより、凹んで壊れた

れおん「という事は、こんな事をしたのはあの怪しい奴らか！街のどこかにいるのか？……まさか!!ほのかちゃんが危ないかもしれない！」

実りの森

ほのか「ハア。ハア。ヒー君!!」

アチャモ「チャ……モ……」

マニユーラ「マニユ……」

アチャモはマニユーラにより、ボロボロになっていた

ほのか「もうやめて、マニユーラ! 私達、何もしてないじゃない!」

マニユーラ「マニユー!!」れいとうパンチ!

マニユーラはほのかに向かって攻撃してきた

ほのか「キヤアア!!」

パキン!

ほのか「あ…足が…凍っちゃった…」

ラミア「あら、ここにいたのね、マニユーラ。しかも、ちゃんとあの子を捕まえるなんてやるじゃない。うふふ、ねえお嬢ちゃん？私達の事、見ちゃったわよね？」

ほのか「そうだけど、それと何の関係があるのよ！」

ラミア「あら、気の強い子。嫌いじゃないわ。私達、人に見られてはいけない事してるの。だから……消えてちょうだいね」

ほのか「え……」

ラミア「マニユーラ、あの子につじぎり」

マニユーラ「マニユー！」

凍って動けないほのかにマニユーラの攻撃が向かってくる

ほのか「やだ……。れおんさん……」

ドバア！

マニユーラ「マニユーラ!!!」

バキバキバキ!!

どこからか、ハイドロポンプが飛んできて、周りの木をなぎ倒しながら、マニユーラを吹き飛ばしていった

ラミア「マニユーラ!!? 何、今のハイドロポンプ!?!」

ゴルダック「ぐわ」

れおん「間に合ったみたいだな。その子に手を出すんじゃないやねえよ」

ほのか「れおんさん!! ゴルダック!!」

ラミア「くっ! マニユーラ! 立てる!?!」

マニユーラ「キュウ……」

ラミア「もう！使えないわね！……あら？色違いのゴルダック…」

れおん「誰だ、お前。なぜほのかちゃんを襲った。それと、ここで何をしていた」

ラミア「ふふ、私の名前はラミア。残念だけど目的は達成できなかったわね。あなたが相手だと私じゃあ無理だわ。でも、また会いましょう」

ゴルダック「ぐわ！」 冷凍ビーム！

パキパキ！

氷の壁ができ、行き先を塞いだ

れおん「逃すとも思ってるのかよ。さあ、目的は何だ。吐いてもらおうか」

ラミア「あら、怖い。フワライド！黒い霧！」

フワライド「ふわあ〜！」

モンスターボールから突然現れたフワライドが、黒い霧を周りに撒き散らす

れおん 「ぐっ！ゴホツ！ゴホツ！」

ほのか 「ケホ！見えない！」

霧が晴れると、ラミアはいなくなっていた

ガン！

れおん 「くっそ！！逃したか！」

ゴルダック 「ぐわ」

れおん「……悪い、ゴルダック。落ち着くさ。大丈夫か？ほのかちゃん。ヤドキング、ほのかちゃんの足の氷を溶かすんだ」

ヤドキング「ヤード」

ヤドキングの炎により、足の氷は溶けた

れおん「アチャモは急いでポケモンセンターに連れて行こう」

ほのか「は、はい。本当に助かりました。ありがとうございます」

15. ターナ

次の日、オアシティ町長の家

町長「本当にありがとうございます、れおんさん。ファイアローの群れに襲われた時はどうなるかと思いました。まさかターナ様がいらっしやらない時に、この様な事態になるとは」

れおん「いえ、気になさらないでください。俺も到着するのが遅くなり、建物への被害は防げませんでした」

町長「そんな事ありませんよ、れおんさん。あなたほどの方がいてくれたからこそ、ここまで被害が小さくて済んだのです。少しの間、休んでいてください。ターナ様もこれからここに来るそうです。ぜひ、ターナ様共々お礼をさせてください」

れおん「そうか。わかった。俺達もついでから休んでいなかったからな。ありがたく休ませてもらおう。ターナさんに会うのも久しぶりだ」

その頃、ポケモンセンター内

ジョーイ「はい、お預かりしていたアチャモは、すっかり元気になりましたよ」

ラッキー「ラッキー！」

アチャモ「チャモ！」

ほのか「よかつた〜！ありがとうございます、ジョーイさん、ラッキー」

ジョーイ「いいのよ。街を救うのにほのかちゃんも手伝ってくれたの？」

ほのか「あ……。いえ、私は今回、れおんさんに心配かけさせただけで、特に何も……」

アチャモ「チャモ？」

ジョーイ「あ、そうだったの。ごめんなさい、嫌な事聞いちゃったかしら。そういえ

ばね、そのアチャモ、進化が近いと思うわ。もし進化するなら体への負担があるから、よく様子をみてあげてね」

ほのか「本当ですか!?! やったね、ヒー君! ワカシャモになれるかもよ!」

アチャモ「チャモー!」

ジョーイ「それじゃあ、変な事聞いてごめんなさい。ゆっくりして行ってね」

ほのか「は、はい。(れおんさんに助けられた時、すつごく安心した。怖かったからつてのもあるけど、私のために怒ってくれたのが、嬉しかった…)」

アチャモ「チャモ？」

ほのか「何でもないよ、ヒー君。れおんさんももうすぐ戻ってくるよね。部屋に戻ってようか」

しばらくして

ほのか「ターナさん？」

れおん「ああ。この街に住んでる人で、オアシティを纏める人でもある。その人がこの後来て、お礼をしてくれるらしいんだ」

ほのか「……どこかで聞いたことあるような」

れおん「ハハハ！そうかもしれないな。ターナさんはコンテストでかなりの腕前で、グランドコンテストにもよく出場しているんだ。テレビを見ていたなら、一度くらい目にしてるかもな」

ほのか「ああー！！わかった！！あのトゲキツスをパートナーにしてる、すっごい綺麗な人！オアシティってあの人の住む街だったんだ！」

れおん「お、流石に知ってたか。そうそう、その人にこれから会えるんだぜ」

ほのか「ええ〜！ど、どうしよう！めっちゃくちや有名人！私も綺麗な格好しないとか
な！」

れおん「そ、そんなに慌てるのか？普通にしておて大丈夫だぞ。ターナさんはそんなの気にしてないからな」

ほのか「あれ？そういえば、れおんさんはターナさんの事、よく知ってますね？」

れおん「まあ、知り合いだな。前、一緒にバトルや観光したりした事もあるんだぜ」

ほのか「凄い！！いいなく、れおんさん！私もそんな有名人と一緒に観光したい！」

れおん「ハハハ！だから、そんな有名人とこれから一緒になれるんだぞ？」

ほのか「そうだった!!あ、れおんさん!部屋から出ていってください!私、これよりいい格好になるんで!!」

れおん「お、おお。わかった。そこまで言うなら止めないさ」

その後、オアシティ広場

一匹のムクホークが降りてきて、そこから長く黒い髪を伸ばした女性が飛び降りた

ターナ「ありがとう、ムクホーク。やっぱりあなたが一番速いわね。助かったわ」

ムクホーク「ピイイ!!」

ターナ「それにしても……。くっ！私がない時にここまで被害が出るなんて。れおんさんに助けられたわね」

れおん「おーい、ターナさん！」

ターナ「あ！れおんさん！お久しぶりです！あら？後ろの子は？」

ほのか「あ、あああの、わわ私、ほのかといいます。最近、ととトレーナーになりました！テレビでいつも見てました!!握手してください！」

ターナ「あら、そうなの？ふふ、ありがとう。握手なんて喜んでするわよ」

ほのか「やったー！れおんさんのおかげで、ターナさんと握手できたー！嬉しいー！」

ターナ「あらあら、そんなに喜んでくれるの？こっちも嬉しいわ。ほのかちゃんだったわね。よろしくね」

れおん「この子とは少し縁があつて、俺が今面倒見てるんだ。偶然この街に寄つたら、ファイアロー達が暴れていてな。乱暴だが、頭を冷やさせてもらった。悪い事したな」

ターナ「そうだったんですね。話は町長から聞きました。被害は確かにありますが、それでもれおんさんがいなければ、確かにこれ以上の被害となつて、復興も怪しくなつたはずですよ。本当にありがとうございます」

れおん「少しでも助けになれたならよかったさ」

ターナ「ほのかちゃんも助けてくれたの？」

ほのか「あ……。ううん。ごめんなさい、私は、れおんさんに助けられただけで何もできなかつたんです」

れおん「そうだ。その件で少し話があるんだ。少し遺跡の方に行こう」

ターナ「？わかりました」

遺跡公園

ターナ「そんな!? マージニア遺跡が!？」

遺跡はボロボロになっており、踏み荒らされていた

ターナ「どうして!?! 神聖な場所だから、こんな事してはいけないって忠告もあったのに!？」

れおん「この事はほのかちゃんが目撃している。話してくれるか？」

ほのか「う、うん。実は、」

ほのかは目撃した事を説明した

ターナ「変な服を着た怪しい男達。それに、ラミアという偉そうな女の人。その人達がこの遺跡を荒らしたのね。許せないわ」

ほのか「ごめんなさい。私、何もできなかった。ヒー君も無茶させたし、私がおんさんみたいに強かったら止められたのに……」

れおん「ほのかちゃん……」

ターナ「ほのかちゃん、そんな事ないわ。止められなくて悔しいのはわかるけど、あなた自身が一番大切なのよ。ほのかちゃんが今こうして無事にいるからこそ、その人達のことを私達に伝えられるの。」

その時何もできなかったとしても、無事でいればこうやって、私達にこんな人がいた、と伝える事ができる。情報はとつても大事なの。あなたのおかげで少し前進できた。とつても助かるわ、ありがとう」

ほのか「ターナさん……。ありがとう!!ううっ!!」

ターナ「あらあら、泣いちやったわね。ごめんね、ほのかちゃん。泣かなくてもいいのよ」

れおん「ありがとう、ターナさん。俺、口下手だからこういう時、何て言ったらいい

のかわからねえんだ。助かった」

ターナ「れおんさんはそういう人ですもんね。大丈夫ですよ。ほのかちゃん、とっても可愛いじゃないですか。れおんさんには少しもつたいないですよ。私も妹がいたら、こんな感じに甘やかしたいのにな」

れおん「ハハハ！似合いますよ、ターナさん」

16. ターナとほのか

飲食店

ターナ「どんどん食べてください。私の奢りなんで」

ほのか「そ、そんな！ターナさんに奢ってもらうなんて失礼すぎますよ！」

ターナ「ふふ、気にしないで、ほのかちゃん。見て、デデンネ型のオムライス！可愛いわよね！」

ほのか「うわー！可愛い！！こんなの食べれない！でも、少しだけ。アーン！…んー！

卵がふわふわ！美味しい！！」

ターナ「可愛い、ほのかちゃん！抱きしめたいわ！」

れおん「随分ターナさんに気に入られたな、ほのかちゃん。よかつたじゃないか」

ほのか「えへへ、嬉しいです。そういえば、二人はどうやって知り合っただんですか？」

ターナ「え？……れおんさん、言っていないんですか？」

れおん「ま、まあ自分で言うのも恥ずかしいだろ。言いたいなら、ターナさんから頼むぜ」

ほのか「??」

ターナ「ふふ、わかったわ。あのね、ほのかちゃん。私達は実は、恋人同士なの」

ほのか「ふえ？」

れおん「ブーーーー！な、何言ってるんだ、ターナさん!!ほのかちゃん、騙されちゃダメだ!!」

ターナ「あら？ほのかちゃん?……固まっちゃったわ」

ほのか「……………???'」

れおん「おーい、ほのかちゃん。目を覚ませ」

ほのか「は!!え!?今、ターナさん凄い事言いませんでしたか!？」

ターナ「ごめんなさいね、ほのかちゃん。少しからかっちゃった」

ほのか「あ……嘘ですか。(あれ?私、何で安心したんだろ?)」

ターナ「(あら?もしかして)」

れおん「もう、ターナさん！それは本当にシャレになりませんからやめてくださいよ！俺がファンから闇討ちされたらどうするんですか」

ターナ「うふふ、れおんさんにかかれば、そんなの返り討ちにできるでしょ？水タイプのトップトレーナーさん？」

ほのか「へ？トップトレーナー？何ですか、それ」

れおん「トップトレーナーって言うのは、各タイプ別に分かれたガルドア地方最強の18人の事だ」

ターナ「私は飛行タイプのトップトレーナーで、れおんさんは水タイプのトップトレーナーなの。このトップトレーナーっていうのは、この地方の平和を守るために、選りすぐりがなるのよ」

ほのか「ガルドア地方トップクラス？それって、チャンピオンとか四天王さんとかですか？」

れおん「まあ、そこと同じくらいだな。強さで言うなら、個人によるけどな」

ターナ「私は四天王さんにはあまり敵わないけど、れおんさんなんかは四天王さんと同じくらい強いよ。チャンピオンのアビーさんとよく戦ってましたもんね？」

ほのか「あれ……。私、もしかして……。相当偉い方達に挟まれてる？」

ターナ「れおんさんはトップトレーナーの最年少よ。いいわよね、十代。まだまだ若いじゃない」

れおん「二十代が何言ってるんですか。ターナさんだってトップトレーナーの中で若い方ですよ」

ターナ「あら、聞いた？ほのかちゃん。女性に歳の話題をしてきたわ。しかも、年齢までバラすなんて本当デリカシーに欠けるわ、れおんさん」

ほのか「ふにゃあああ……」

れおん「あ、ショートした。もう、ターナさんからかうからですよ。ほら、ほのかちゃん。頭冷やして。落ち着いて考えるんだ」

ターナ「急にいろいろ情報を言われて混乱しちやったのね。やっぱり可愛いわ、ほのかちゃん」

しばらくして

ほのか「えっと……私、今まで失礼な事ばかりしてすみませんでした!!」

ほのかはれおんに深々とお辞儀をして謝っている

れおん「い、いや、そんな事ないぞ。それに、ほのかちゃんが思ってるほど俺は偉くないからな。ただのトレーナーだ」

ほのか「でも、ずっと疑問に思ってたゴルダック達の強さとか、ナブさんやジュンサーさん達の含みのある言い方が解決しました！まるで、れおんさんが有名人みたいだと思ってたんですが、まさか本当に地方最強の18人の一人だなんて！」

れおん「その肩書き、俺あんまり好きじゃねえんだよな。気付いたらなつてたつていうか、成り行きだ」

ターナ「ほのかちゃん、れおんさんはあまりよそよそしく接されるのが嫌いなもの。前まで通りにしてあげて」

ほのか「ええ!? だって私、新米ですよ!? お二方には到底届かないですよ!」

れおん「そんな事ないさ。俺達だって、特別な事をやってたんじゃない。ただ、ポケモンが好きでずっと一緒にいたいから、強くなった。そうしたら、この地位にいたんだ。ほのかちゃんだってポケモン大好きじゃないか。いつか、俺達の所まで来れる素質はあるぞ」

ターナ「ふふ、相変わらずいい事言うわね、れおんさん。そうよ、ほのかちゃん。私もポケモンが大好き! じっくり私を支えてくれるの。」

そのお礼に、この子達の持てる力を最大限に発揮させてあげるだけ。特別な事なんか無いわ。ほのかちゃんも自信持っていていいのよ」

ほのか「そ、そうですか。えへへ、私もポケモンが大好きです! いろんなポケモンと

仲良くなりたいです！」

れおん「へへ、いいじゃないか。そうやってゆつくり歩いていけばいい。まだほのかちゃんの冒険は始まったばかりなんだからな」

ターナ「お話はこちらまでにして、ほのかちゃんにこのオアシティを案内するわ！れおんさんはどうしますか？」

れおん「俺は少し報告がある。あの怪しい奴らの事だな。俺はポケモンセンターにいるよ。少しの間、ほのかちゃんはターナさんに任せるよ」

ほのか「お願いします、ターナさん！」

ターナ「一緒にたくさんお話ししましょう！」

広場

ほのか「さつきもそうでしたけど、風が気持ちいい！」

ターナ「そうですね！ここ、オアシティは山の上だからいつも風が気持ちいいの。ほのかちゃんも飛行タイプのポケモンを持ってるかしら？出してあげるといいわよ。さつきと喜ぶわ」

ほのか「そうですね！出てきて、ムツクル！」

ムツクル「クルー！」

ターナ「あら、ムツクルじゃない。可愛い。それに、ほのかちゃんに懐いてるわね。いい関係だわ」

ほのか「ムツクル！気持ちいいよね！一緒にお散歩だよ！」

ムツクル「クルー！」

ターナ「この子、風に乗るのが上手いわね。初めてのはずなのに、もう風の流れを感じ取ってる。空中にいるのが好きみたいね」

ほのか「流石ターナさん。よくわかりますね！」

ターナ「伊達に飛行タイプ使ってないわ！それじゃあ、ここを右に行きましょう。私
おすすめの散歩道よ」

ほのか「はい！」

道中

ほのか「あ！ハネツコ達だ！花畑で遊んでる。可愛い」

ターナ「この時期になると、よく飛んでくるの。夜だとフワンテやフワライド達もくるのよ」

ほのか「空にもポツポだったり、ヤヤコマだったりいろんな鳥ポケモン達がいいますね」

ターナ「ねえ、ほのかちゃん。れおんさんの事、どう思ってるの？」

ほのか「え？れおんさんですか？とつてもいい人ですよ。こんな私を助けてくれるし、いろんな事を教えてくれます。とつても強いですし、憧れますね」

ターナ「ふふ、そうよね。私は違うけど、ほのかちゃんはれおんさんの事、好きなのかしら？何だかそんな風に見えたわ」

ほのか「え……。そ、そんな訳ないじゃないですか！だって、私、まだ10歳ですよ？れおんさんと8歳も離れてます。無理ですよ」

ターナ「あら、歳なんて関係ないわよ。恋なんてそれくらい気にならないものよ」

ほのか「で、でも、私じゃあれおんさんの隣には相応しくありません。もっといい人はいっぱいいますよ」

ターナ「そうかしら？私はほのかちゃんどれおんさんは、いい関係に見えるけどね」

ほのか「……私、まだ恋とかよくわかりません。好きなのかもよくわからないから、何とも言えないんです」

ターナ「それなら、さつきれおんさんに助けられたって聞いたけどその時、ほのかちゃんはどうしても嬉しそうな顔だったわ。どうしたの？」

ほのか「それは、私が少しおかしいんです。助けてもらえてとっても嬉しかったし、安心したんですけど、それと同時に、私のために怒ってくれたのが嬉しくて……」

ターナ「それと、私が恋人同士と嘘ついた時、安心してたわよね？」

ほのか「そうなんです。私も何に安心したんだろうって疑問に思ってたんです」

ターナ「そう。その想いは大切なよ。ほのかちゃんはおかしくなんかないわ。その

ままでいいの」

ほのか「そ、そうなんですか？私に変なんだと思った」

ターナ「じゃあ、れおんさんともっと仲良くなりたい？」

ほのか「は、はい！それは思います。ターナさんみたいにとはいかなくても、もっと仲良くなりたいです！」

ターナ「れおんさんは意外と単純だね。周りとは大差ない扱いをすれば、それで仲良くなれるのよ。逆に敬語なんかだと、少しれおんさんも気を使っちゃうわ」

ほのか「あ……。私、ずっと敬語だった」

ターナ「まあ、ほのかちゃんにとつてみれば少し年上だし普通かもしれないけど、れおんさんにしてみれば少し嫌に思ってるかもしれないわ。少しだけでも変えてみたらどうかしら？」

ほのか「な、なるほど。わかりました！それなら、少しはできると思います」

ターナ「後は彼、意外と自分の事は適当だから、そこを補ってあげるといいかもしれないわ」

ほのか「あ、それはわかります。ご飯を食べない時もあつたつて聞いて私がこれから野宿の時はご飯作るんです。前に作ったら、れおんさんにとても喜んでもらえて」

ターナ「あら、いいじゃない！私もほのかちゃん料理食べたいわ」

ほのか「そ、そんな。ターナさんが食べるようなものは作れませんよ。あれ？道はここで終わり？」

ターナ「あら、話し相手がいるとこの道もすぐね。後は帰るだけね」

17. ターナとれおん

ポケモンセンター前

れおん「お、戻ってきたか、二人とも」

ターナ「報告終わりましたか？れおんさん」

れおん「ああ。ついでに遺跡の被害調査と、野生ポケモン達の被害も調べてほしいみたいだ」

ほのか「野生ポケモンの被害っていうと、森になぜかいたデイグダとかヤジロンみた

いって事？」

ターナ「あら、そうだったの？それなら確かに気になるわね。わかりました、それでは遺跡に向かいましょう」

遺跡公園

ほのか「ここってどんな調査がされてたんですか？」

ターナ「ここ、マージニア遺跡は昔の人達が使っていた祭壇みたいなものよ。この地方に伝わるおとぎばなしを知ってるかしら？」

れおん「ほら、希望の光をつてやつだ」

ほのか「ああ、知ってますよ。確か昔にこの地方に大災害がおきて、ポケモンも人も絶滅しそうになっただんですよね。そこに、伝説のポケモン、アルセウスが現れて世界を救った。そんな話ですよ」

ターナ「そう。そのアルセウスはしばらく人とポケモン達を見守り、安全だとわかるまでここに居続けたそうよ」

れおん「この山から見守り、そして来る人達やポケモンに希望を与えた。その事から人やポケモンに讃えられ、伝説のポケモンとして祀られているのさ」

ほのか「そうなんだ！じゃあ、ここつてすつごく神聖な場所だったんだ。確かに……」

こんな事をするなんて、許せないね」

ターナ「本当ね。一体何を考えているのかしら。こつちに、その話の元になった壁画があるわ。みせてあげるわね」

祭壇

ほのか「あ、ここは無事みたい。わく、昔の絵や文字がいっぱい」

ターナ「ここまでは壊さなかったのね。流石に、この祭壇を穢す勇氣は無かったのかしら」

れおん「そのようだな。それにしても、ここに来ると、こう姿勢を正してしまうような、厳かな雰囲気があるな」

ターナ「それは私もそうよ。少し緊張するもの」

ほのか「本で見たものもある。すごい」

れおん「ハハ、ほのかちゃんはそうでもないみたいだな」

ターナ「ふふ、興味深々ね。若い子にこういう場所も、ああやって見てもらえると嬉しいわね。最近の子達は全然興味を示さないから」

れおん「そうだよな。歴史とかも大切なんだがな。今を大切にするのはわかるが、それを築いてきた人達やポケモンの事も知っておけば、必ず役に立つと思うんだけど、どうも興味を抱いてくれないな」

ほのか「私もそう思います！本やテレビでも、そういうのが大事だつて言っていました！私は、こういう場所に興味ありますし、絶対ためになると思いますよ！」

ターナ「ありがとう、ほのかちゃん。私もこの街を知つて、いろんな人に来てもらうために頑張つてるの。コンテストも知名度を上げるためにやつてるのよ」

れおん「え？そうだったのか。てつきり、元から好きなのかと」

ターナ「もちろんそれもあるんだけど、私はバトルも好きよ。最近はやれてないけど

ね。ああ！バトルで思い出したわ！お礼の物を渡すのを忘れてた！はい、これあげる」

れおん「これは……おお！きのみ！しかも、育成に必要なきのみばかりだ！ありがとう、ターナさん！」

ターナ「れおんさんには、これがいいと思ってね。ほのかちゃんにはこっち。はい」

ほのか「え？技マシン!? いいんですか!？」

ターナ「ええ、もちろんよ。中身は、はがねのつばさ。鳥ポケモン達って岩タイプに弱いんだけどこれがあれば、ドッカーン！って壊せちゃうわよ！ぜひムツクルに覚えさせてみてね。使い方はわかるかしら？」

ほのか「ナブさんに聞きましたけど、使うのは初めてです。出ておいで、ムツクル！」

ムツクル「クルー」

ターナ「それじゃあ、技マシンを頭に当ててみて」

ほのか「大丈夫だからね、えい」

ターナ「そのまま当て続けてね。技を何覚えてるかわかる？」

ほのか「たいあたりと電光石火、つばさでうつとふきとばしです」

ターナ「じゃあどれを忘れさせたい？」

ほのか「それじゃあ、ふきとばしで」

ムツクル「クルー！」

ターナ「これで終わりよ。ムツクルはふきとばしを忘れて、はがねのつばさを覚えたわ」

ほのか「簡単！これならすぐにできますね」

れおん「そうだろ？それに、いくら使っても技マシンは無くならないから、好きなだけ覚えさせられるんだ。今度俺の技マシンも使ってもいいぞ。まあまあ持つてるからな」

ほのか「え!?!それは失礼ですよ。自分のだけにしますよ」

ターナ「れおんさんの持つてるやつって水技とか氷技が多いじゃないですか。ほのかちゃんのポケモン達は覚えられませんよ」

れおん「ま、まあそうだな」

しばらくして

ターナ「ポケモン達の調査はこの辺にしましょう。大体わかってきたわ」

れおん「一時的だが、逃げていったポケモン達もいるな。おそらく、時間が経てば戻ら
だろうな」

ほのか「調査つて特別な事しないんですね。見て回ったり、観察したりするくらいで」

ターナ「そうね。特別な事は何も無いの。街を管理する以上やっておかなきゃいけない事もあるけど、基本はそのままポケモン達に任せてるの。その方がポケモン達にも負担が少ないわ」

れおん「先に住んでたのは、ポケモン達だ。そこを譲ってもらってるんだから、あまり荒らしたらかわいそうだろう？」

ほのか「そうですね。確かに、それは失礼ですね。勉強になります」

ターナ「それじゃあ戻りましょう」

夕方、ポケモンセンター内

ターナ「ええー！明日には行っちゃうの？もつとゆつくりしていいのよ？」

れおん「まあ、そう言わないでくれ。山を降りて、次はガーネシティに向かわなきや

なんだ」

ほのか「二つ目のジムなんです。私、頑張ります！」

ターナ「そう。少し残念ね。なら！私が明日山のふもとまで送っていくわ！それくらいさせて？」

れおん「いいのか？」

ターナ「もちろん！山を降りるの大変でしょ？私の鳥ポケモン達ならすぐだわ。あ、でもれおんさんにはあの可愛いペリッパーがいましたね。一人用ですけど」

れおん「まあ…あいつに乗るのは少し控えたいが…そうだな」

ほのか「私、それがいいです！空を飛ぶなんて初めてです！」

れおん「本音はもう暗い所にいたくないんだろ？」

ほのか「あー!!れおんさん!!何で言うんですか!!」

ターナ「あら。ほのかちゃん、暗い所が苦手だったの？それなら、なおさら乗っていつて！快適なのよ！」

ほのか「はい！お願いします！」

ターナ「本当可愛いわ、ほのかちゃん。ねえ、ほのかちゃん。よかつたら、私と友達になつてくれないかしら？」

ほのか「ええ!?!私なんかでいいんですか？」

ターナ「ふふ、私はほのかちゃんがいいわ。それとも、駄目だったかしら？」

ほのか「でも、有名人とお友達なんて…」

ターナ「……やつぱり、有名なのは困るわね。皆と距離がaitaように感じるわ」

ほのか「あ……。ご、ごめんなさい、ターナさん!!私、そんなつもりで言ったんじゃない」

ターナ「いえ、いいのよ、ほのかちゃん。私も少し変な事言ったわね。ごめんなさい」

ほのか「駄目です、ターナさん!!ターナさんに誤解されるのは絶対に嫌なんで、訂正させてください!」

ターナ「ほのかちゃん……」

ほのか「私、すつごく嬉しいです!

ターナさんはテレビで見るよりもずっと綺麗だったし、カッコいいです!

でも、少しイタズラする所や可愛い所も多くて、テレビで見ているのとは違う一面もたくさん見れました！

こんな、何も無い私と友達なんて、ターナさんに失礼だと思ったんですけど、ターナさんにはそれが失礼だったんですよね！

私、ターナさんの事、大好きになりました！

もつというんなターナさんを見たいです！

私でよければ、ぜひ友達になってください!!」

二人「……………」

ほのか「あ、あれ？どうしましたか？」

ターナ「…あれ？私、今口説かれなかったかしら？」

れおん「最後なんて、まるで告白みたいだったぞ」

ほのか「へえ!? そ、そそ、そんなつもりじゃないです!! あ、でも……違うんです、ターナさん!!」

ほのかの顔は赤くなり、焦っている

ターナ「ふふふ、ありがとう、ほのかちゃん。私、とっても嬉しいわ。これからよろしくね、ほのかちゃん」

ほのか「は、はい! お友達ですね、ターナさん!」

れおん「……」

回想シーン

ターナ「私、皆とたくさん喋ったり、街を回って、ご飯食べて、シヨツピングして笑い合いたいです。でも、世間はそれを許してくれない。本当の私を見てくれる人が、いないんです」

れおん「……なら、俺がなろう。俺は別に、周りに何とかわれようが気にしねえ。ターナさんも気にしないでくれ。これは、俺が勝手にやる事だ。行こうぜ、ターナさん。街、

巡りたいんだろ？」

ターナ「れ、れおんさん……。はい!!私、いろいろやりたいんです!」

れおん「おう!どんどんやっていこうぜ!友達になれば、気を使う必要なんてねえからな!」

ほのか「れおんさん?どうしましたか?」

れおん「ん、悪い。少し昔を思い出してたんだ。今思えば、ターナさんと初めて街を

回った時の一言は、もしかしてデートの誘いみたいじゃなかったか？ っと思つてな」

ターナ「……ふふ、そうかもしれないですね。でも、私にとつてあれはとっても嬉しい気持ちが大きかったです。あの時はありがとうございました」

れおん「いやいや、俺こそ配慮とか足りない所多いからな。嫌な所もあつただろ？」

ターナ「そうですね。思う所がありました。でも、楽しかったですよ」

ほのか「気になる…。でも、聞かないでおこうかな。取り敢えず、れおんさんが失礼な事したのはわかつた」

れおん「おい!!」

二人「アハハハハ！」

18・傷だらけのミミツキユ

次の日、オアシティ

ターナ「それじゃあ、山のふもとまでいくわ。お願い、ピジヨット」

ピジヨット「ピジヨー」

ほのか「お願いね、ピジヨット」

れおん「ハア。頼む、ペリツパー」

ペリツパー「ペリ？ペリイイ！」かぶ

ペリツパーはれおんを見ると、頭から大きなくちばしでくわえた

れおん「あああ！だから、俺を食べるな!!舐めるな！ベトベトすんだろ！離せ!!」

ターナ「可愛い、ペリツパー！ふふ、くちばしも毛も柔らかい」

ターナはペリツパーを撫でている

ほのか「だ、大丈夫ですか？れおんさん。凄い甘え方ですね」

れおん「本当だぜ！こんな事してくるのはこいつだけだ。今日は乗せてくれ。上に、乗るからな？くちばしには入れるなよ？」

ペリツパー「ペリ……」

れおん「嫌そうな顔すんな！」

ターナ「いいなあ、そのペリツパー、とつても可愛い。私のペリツパーはそんな事してくれないわ」

ほのか「羨ましいんですか、ターナさん。私は、ちよつと…。れおんさんが嫌々なのも領けます」

れおん「よし、さっさと降りるぞ。こいつも長くは乗せてくれないからな」

ターナ「そうね、わかったわ。さあ、ほのかちゃん、空に行くわよ！しっかり捕まわってね！」

ほのか「わ、わあ！浮いてる！」

れおん「うーごーけー、ペリッパ！あのピジョットについて行くんだ」

ペリツパー「ペリペリ」

ペリツパーは渋々飛び立った

その後、霧の森前

ターナ「到着ね。ここから先に進めば、ガーネシティよ。この森はいつも霧が出てるの。ポケモン達は危なくないから、迷わないようにだけ気をつけてね」

ほのか「はい！空の散歩、とっても楽しかったです！私も空を飛びたいなー！」

ターナ「ふふ、ムックルがムクホークに進化すればできるわ。それまでは楽しみにし

てて。そうだ！私の連絡先を教えるわ。何かあったら、連絡して。携帯はあるかしら？」

ほのか「はい！あまり使い方とか分からなくて、ほとんど使わないんですけど…」

ターナ「大丈夫よ。はい、番号。ほのかちゃんのも教えてくれるかしら？」

ほのか「はい。これですね。すぐに登録します」

ターナ「ありがとう！それにしても遅いわね、れおんさん。ちゃんと来れたかしら？
…あ、来たわ」

れおん「ハア、ハア。疲れた…。サンキュー、ペリツパー。ほら、好きにしていいいから」

ペリツパー「ペリー！」かぶ

ペリツパーは喜んでまたれおんを食べ始めた

ほのか「あ、あはは。お礼になってるんですね、それ。前見えないですよ？大丈夫ですか？」

れおん「少しなら歩ける。このまま、行くか。ありがとな、ターナさん。助かるぜ」

ターナ「気にしないで、れおんさん。可愛い…ペリツパー。またいつでも来てね。また触ってもいい？」

れおん「言いたい事と心の声がどっちも出てるぞ。好きにしていどうぞ」

ターナはペリツパーを撫でている

ターナ「ありがとう、ペリツパー。それじゃあ、またね！」

ほのか「また会いましょうー！ありがとうございましたー！」

れおん「じゃあなー。さて、そろそろいいだろ？戻れ、ペリツパー。ふう、前が見え

るようになった」

ほのか「大変ですね、ペリッパ―は。この森をまつすぐでいいんですか？」

れおん「おう。ポケモンは出しておけよ。ゴルダック」

ゴルダック「ぐわ」

ほのか「ムンナ、起きてる？」

ムンナ「ムウ……」

ほのか「やっぱり寝てた。ならヒー君、お願い」

アチャモ「チャモ！」

れおん「さて、進むか」

しばらくして

ほのか「進むにつれて霧が濃くなってきましたね」

れおん「道自体は複雑じゃないんだが、この霧だからな。迷子になる旅人も多いと聞

く。逸れないように、手を握ろうか」

ほのか「はい、お願いします」

れおん「……ん？ポケモン達が少し集まってるな。何してるんだ？」

ほのか「真ん中に何かいるんですかね？少し行ってみましょう」

れおん「君達、何してるんだ？って、そのポケモン！」

集まっているポケモン達の近くには、ピカチュウのようなきぐるみをかぶったポケモン、ミミツキユがいた

ほのか「ミミツキュ！こんな所にいるんだ！でも、ボロボロだね。治してあげないと」

ほのかが近づこうとすると

ミミツキュ「ミツキュ!!!」

ミミツキュは、思いつきり威嚇してきた

ほのか「キャツ！ミミツキュってこうやって、影を伸ばしてくるんだ」

れおん「ミミツキュ、俺達は何もしない。信じてくれないか？」

ミミツキュ「ミツキュ!!!……キユ」

ミミツキュは少し苦しそうな顔をした

れおん「ほら、痛いだろ？傷を治すから、大人しくしてほしいんだ」

アチャモ「チャモ！」

ゴルダック「ぐわ」

ミミツキュ「ミミツキュ!!」

ミミツキュはれおんにシャドークローを出した

れおん「おっと！おいおい、顔はやめてくれ」

ほのか「どうしましょう、話を聞いてくれませんか。こんな傷だらけのミミツキュにバトルなんてしたくないですし…」

れおん「こういう時、ジョーイさんのラッキーとかがいればいいんだがなあ。……まあ、あの方法でやってみるか」

ほのか「あ、あまり傷を増やさないであげてくださいね！」

れおん「それはわかってるさ。頼んだ、ルリリ」

ルリリ「ルリ！」

ほのか「ルリリ？あれ？水タイプじゃない。珍しいですね」

れおん「こいつは少し前に産まれたばかりだな。これからマリルにさせようと思っ
いたんだ。ルリリ、うたう」

ルリリ「ル〜リ〜♪」

ミミツキュ「ミツキュ……………スウ」

れおん「よし、成功したか。よくやったな、ルリリ。戻ってくれ。さあ、治療するぞ」

ほのか「…………ハツ！私までうとうとしちゃった。手伝いますね」

数分後

ミミツキュ「キュ…………。キュ!!」

ほのか「あ、ミミツキュ、目を覚ました？どう？体は大丈夫？」

ミミツキュ「……………キュ」

ミミツキュは体を動かし、痛くない事を確認している

れおん「多少動けるみたいだな。ほら、ご飯だ」

ミミツキュ「……………」

ミミツキュは餌を前に固まっている

ほのか「あれ？食べないの？お腹すいてない？」

ミミツキュ「……………」ポロポロ

ほのか「え、ええ!?!どうしよう、泣き出しちゃった！」

れおん「おいおいどうした、ミミツキュ。泣かないでくれ。そのご飯は嫌だったか？
フエアリータイプ用なんだが」

ゴルダック「ぐわ、ぐわ」

ミツキユ「ミツキユ……ミツキユ、キユ！」

ゴルダツク「……ぐわ。ぐわ、ぐわぐわ」

ゴルダツクはジエスチャーをしている

れおん「えつと？すまん、わからないな。もう少し簡単にしてくれ」

ゴルダツク「ぐわぐわ」

れおん「俺達？に、傷つけられて……？捨てられた？おお、合ってるか。そうか……。お

前、捨てられたんだな」

ほのか「酷い……。じゃあ、ご飯もまともに食べられなかったんだね。かわいそう。ほら、このご飯は君のだよ。ぜーんぶ食べていいの」

ミミツキュ「ミツキュ!!」

れおん「ハハ、がつついてるな。おかわりもあるからな」

ミミツキュ「ミミツキュ！」

ほのか「元気が出てきたみたい。よかった」

れおん「しかし、ミミツキュはあまり生息地が判明していないポケモンだ。そんなポケモンを持っているなら、しっかり育ててやればいいものを」

ミミツキュ「ミツキュ……」

ご飯を食べ終わったミミツキュは歩いていく

ほのか「あれ？どこに行くの？ミミツキュ。もうご飯はいらない？」

れおん「もう少し大人しくしてろよ。怪我也完治してないんだ」

ミミツキュはどこかに行ってしまった

ほのか「どうしたのかな、ミミツキュ。行かなきゃならない場所でもあったのかな？」

れおん「わからないな。まあ、無事でいてほしいよな。俺達も片付けたらまた進もう」

19・待ちぼうけ

夕方になり

れおん「この近くに大きな洞窟がある。そろそろ休んでおこう。そこに向かうぞ」

ほのか「まだ抜けられないんですか？」

れおん「そうだな……。夜には抜けられるが、街には着かない。それなら、早めに休んで明日に備えておいたほうがいい。薪も集めながらいくぞ」

ほのか「わかりました。きのみとかも、あつたら集めますね」

少しして

れおん「この洞窟だ。ポケモンの住処ではないから大丈夫だぞ」

ほのか「そうなんです。…あれ？中にポケモンが…あ！」

ミミツキュ「ミツキュ？」

れおん「お前、さっきのミミツキュ！こんな所で何してるんだ？ここ、君の住処になつたのか？」

ミミツキュ「キュ……」

ミミツキュは去つていこうとする

ほのか「ま、待って！これから夜になって冷えてくるよ。私達は気にしないから、一緒に温まろう？」

ミミツキュ「……………」

ミミツキュはゆっくり戻ってきた

れおん「ん？この隅にあるのは、モンスターボール？壊れているが…」

ミミツキュ「ミミツキュ！」ダダッ！

ミミツキュは壊れたモンスターボールを守るように前に出た

れおん「…そうか。このボールは君の物だったか。だが、壊れてもう使えないんだぞ？」

ミミツキュ「…ミツキュ…」

ほのか「ミミツキュ…。そのボールつて、前のトレーナーさんがミミツキュを捕まえ
た時のやつだね。酷い事されたのに、まだ大切にしてるんだね」

れおん「…俺達は準備しよう。薪を集めて、料理を頼む」

ほのか「わかりました」

ミミツキュ「……………」

その夜

ほのか「ミミツキュ、君のご飯よ。さつきみたいにとくさん食べていいからね」

ミミツキュ「ミツキュ…」

ほのかは離れた隅にいるミミツキュにご飯を持っていった

れおん「もう少しこっちに来ないか？そこじやあ火の温度も届かないだろ。俺達は何もしないさ」

ミミツキュ「……………」

ミミツキュは恐る恐る近づいてきた

れおん「前のトレーナーが忘れられなくても、人の恐怖はある……か。しかも、もうト
レーナーもここには戻ってこないのだろうか」

ミミツキュ「キュ……………」

れおん「ミミツキュ、わかってるんだろ？ 一体どれだけ待ったんだ？ そのボールの壊
れ具合や、汚れ具合から見ても数日じゃないよな。何ヶ月、もしくは年単位か。来ない
なら、自分から動く事も大切だ」

ミミツキュ「……………」

ミミツキュは俯いた

ほのか「れおんさん、少しかわいそうです。もう少し言い方変えた方がいいですよ。ねえ、ミミツキュ。そのトレーナーさんがまだ好き?」

ミミツキュ「……………」

ミミツキュは黙っている

ほのか「…………じゃあ、嫌い?」

ミミツキュ「……………」

ほのか「わからないか。じゃあ、質問を変えるね。私達の事、怖い？」

ミミツキュ「キュ…」ふるふる

ほのか「ふふ、ありがとう。ならさ、私達と一緒に行かない？もしかしたら、そのトレーナーさんと会えるかもよ？ずっとここにいても仕方ないよ。それなら、私達と探そう？」

ミミツキュ「ミツキュ」

ミミツキュは顔を上げる

ほのか「私はあなたを気に入ったけど、忘れられない人がいるなら、その人の近くにいた方が、あなたにとっていいと思うの。なら、私はあなたを手助けしてあげたいな。駄目かな？」

ミミツキュ「ミツキュ……。ミミツキュ！」

ほのか「よかった！来てくれるの？」

ミミツキュ「ミツキュ！」コク

ほのか「ふふ、それじゃあ、明日から探そうね。そのためには、一時的でもボールに入ってもらわないとな。あのボールはもう使えないから、この新しいボールで我慢し

てくれる？そのボールもちゃんと持っていくわ」

ミミツキュ「ミツキュ!!」コツン

ミミツキュは自分からボールに当たった

ゆらゆら

カチツ!

ほのか「ふふ、少しの間、よろしくね。寂しい思いも、悲しい思いも絶対させないから」

れおん「……よかったのか？その子とは、別れが来るかもしれないんだぞ」

ほのか「そうですね。私、多分そうなたら泣いちやうと思います。でも、それがこの子の幸せで、望む事ならば私は別れてもいいです。それまでは、この子とたくさんの思い出を作ります！」

れおん「そうか。それなら、大丈夫だな。さて、寝るぞー」

ほのか「はい！ふふ、皆、ミミツキユ、おやすみ」

20・ 鉱山の街、ガーネシティ

次の日、

れおん「さて、出発しよう。このままいけば、昼にはガーネシティに着くぞ」

ほのか「はい！」

しばらくして

れおん「お、霧が無くなってきた。森を抜けたみたいだな」

ほのか「よかつた。大丈夫だとわかってても、少し怖かつたです」

れおん「まあ、少し不気味だよな。さて、ここからは真つ直ぐだ。大きな橋が目印だ」

ほのか「はい。……あの、れおんさん。昨日から考えてたんですけど、少しお願いしてもいいですか？」

れおん「ん？どうした？」

ほのか「わ、私の敬語、無くしてもいいですか？失礼…とかじゃないですか？」

れおん「なんだ、そんな事か。構わないさ。むしろ、そっちの方が俺としても気楽だな。もうほのかちゃんも俺という時間にも少し慣れてきただろ？」

ほのか「はい。じゃなかった、うん！これからはれおんさんじゃなくて、れおん君でもいいですか？流石に駄目ですかね？私はそっちの方が楽なんですが」

れおん「俺も気にしないぞ。何とでも呼んでくれて構わないさ」

ほのか「やった！じゃあ、れおん君。…少し恥ずかしいな」

れおん「まあ、いきなりだからな。呼び続ければ慣れるさ」

その後、ガーネシティ

別名、鉾山の街。その名の通り、近くにある鉾山を掘り、発展している街。工事や建設途中の物も多い。ジムがあるため、トレーナーがよく訪れるが、工事中の騒音も凄いため、少し迷惑がられている。

ガガガガ！ドンドン！

れおん「ついたぞ。ここがガーネシティだ」

ほのか「す、凄い音だね。これ、相当うるさくないかな？」

れおん「まあ、最初に来るとそう感じるよな。ここは工事現場とも近いから、そう感じるだけで離ればそこまで聞こえてこないぞ」

ほのか「そうなんだ。じゃあ、まずはポケモンセンターだよな」

れおん「お、わかってきたな、ほのかちゃん。それに、フレンドリーショップで食料も少し買い足しておかないとな。ポケモンセンターはこっちだ」

ポケモンセンター内

ジョーイ「ようこそ、ポケモンセンターへ。ポケモンの回復ですか？」

ほのか「はい。この子達をお願いします」

れおん「俺も頼むぜ」

ジョーイ「はい、お預かりしますね。……あら？このミミツキュ、もしかしてあの霧の森にいるミミツキュですか？似てますけど」

ほのか「え？ジョーイさん、知ってるんですか？」

れおん「この子は少し訳があつて、一時的にこの子のポケモンになったんだ」

ジョーイ「そう、よかつたわ。実はこの子、一年半くらい前にトレーナーに捨てられ

てから、ずっとあの森で待っていたみたいなのよ。

つて、見たんだからわかるわよね。それで、私も心配でたまに様子を見に行つて、餌とかをあげてたのよ」

れおん「なるほど、ジョーイさんも世話をしていたのか」

ほのか「一年半……。やつぱりかわいそう。あの、そのトレーナーさんの事、教えてもらえますか？」

ジョーイ「ごめんなさい、それは個人情報だから教えられないわ。でも、あのミミツキュはもういらなくなって言っていたわ」

ほのか「そ、そうですか。すみません」

れおん「……これはもう、ミミツキユは戻れないな」

ジョーイ「そのトレーナーさん、もうトレーナーじゃないの。ポケモンも、もう一匹も持っていないはずよ。見つけるのはほぼ不可能だと思うわ」

ほのか「教えてくれてありがとうございます」

ジョーイ「こつちもごめんなさい、こんな事しか教えてあげられなくて。ポケモン達は元気にさせるからね」

れおん「今の話はミミツキュにも聞こえていたはずだ。どうするかは、ミミツキュに任せよう。俺達は買い物して、ジムの対策だな」

その後

カフェで座りながら休んでいた

ほのか「このジムって何タイプなの？」

れおん「ここは地面タイプ。ほのかちゃんだと…少し厳しそうだな」

ほのか「そうだね。ヒー君が使えないし、弱点もつけないよ。難しい。……ん？」

れおんの後ろに人が近づいていった

れおん「どうした、ほのかちゃ」

??? 「れおーん!! おりゃああ!!」ガバツ!

れおん「うおおお!!」ゴン!

??? 「グハツ…!」ドサ

れおんは驚きながら振り向きざまに殴った

れおん「びつくりした。何だよ、お前か、ワーグ」

そこには、赤い髪をオールバックにした男性が倒れていた

ワーグ「痛てて。何で不意打ちしたのに反撃できるんだよ。それにしても、こんな所で会うとはな！ん？その女の子は？」

ほのか「あ、どうも。私、ほのかと言います。今、れおん君と一緒に旅してるんです」

ワーグ「れおんと？へー、変わってるな。こんなやつと一緒に旅してもいい事ないぞ」

れおん「どういう意味だ、ワীগ」

ワীগ「おつと、すまねえな。自己紹介が遅れた。俺の名前はワীগ。れおんとは友達なんだぜ。よろしくな、ほのかちゃん」

れおん「話を聞け」

ほのか「よろしくお願いします、ワীগさん」

れおん「もういいや。ワীগは、俺やターナさんと同じトップトレーナーだ。炎タイプ使いなんだぜ」

ワーグ「そう！俺は世界最強を目指す、炎の男！カッコイイだろ？」

ほのか「はい！トップトレーナーなんて凄いです！確かに強そうですね！カッコイイです！」

ワーグ「……ほのかちゃん、すっげえいいやつじゃん！！くう！れおんなんかいるのがかわいそうだ！」

ほのか「ええ!?そ、そうですか？」

れおん「なんかって何だよ。悪かったな」

ワグ 「ほのかちゃん、今からでも間に合う！俺と旅しよう！こいつよりずっと快適だぜ！」

ほのか 「ええ!!?そ、そんな事言われましても」

れおん 「おい、ほのかちゃんを困らせてんじゃねえよ、ワグ」

ワグ 「そ、それもそうだな。ほのかちゃん達は どうして俺の街に？」

ほのか 「俺の？この街ってワグさんが治めてるんですか？」

れおん「勝手に自分の街にすんな。お前が住んでるだけだろ」

ワーグ「え、いいじゃねえかよ。俺の炎ポケモン達も働いてるし、俺もトップトレーナーとして、街のためにいろいろしてるぜ？実質俺の街だろ！」

ほのか「そういう感じですか。でも、街のために動くっていい事じゃないですか！ワーグさんはこのガーネシテイが大好きなんですね」

ワーグ「おう！昔から育った街だからよ！大好きだぜ！」

ほのか「あ、先程の質問にまだ答えてませんでしたね。私、ここのジムに挑戦しに来たんです」

ワグ「ジムか！女の子なのに凄いいじゃないか！ここは地面タイプ使いだぜ。今は何のポケモンを持ってるんだ？」

ほのか「アチャモのヒー君と、ムンナとムツクルとミミツキユです。地面タイプにどうしようかと思っ

ワグ「なるほど。確かに厳しいな。……お、れおん。お前、一匹あげたらいいじゃないか」

れおん「俺が？」

ワグ「お前、この前ルリリと一緒に、ハスポー産ませてたじゃねえか。あの子ならまだほのかちゃんでも大丈夫だろ？」

れおん「あの子か。まあ、悪くないな。俺は構わないが、どうする？ほのかちゃん」

ほのか「え、いいの？れおん君。折角卵から産まれたのに」

れおん「ああ。俺のリンパツパが産んだやつだよ。本当はかなえさんのプレゼントにしようと思っていたが、別のやつでも大丈夫だからな」

ほのか「じゃ、じゃあお願いします！」

れおん「待っていてくれ。ボックスから連れてくる」

21. ジム対策

ワーグ「なあ、ほのかちゃん。れおんといると大変だろ？」

ほのか「そうですか？ 私はそんな事感じないんですが」

ワーグ「うげえ、マジかよ。俺だったらごめんなんだがな。友達としては大歓迎だが、一緒に旅するとなると、少し面倒だな、あいつは」

ほのか「私、まだトレーナーになったばかりなので、れおん君にいろいろ教わってるんです。バトルとか道具の事とか街の事とか、本やテレビでは知れなかった事がたくさんあってとっても楽しいです」

ワーグ「真面目だなあ。でも、それくらいなら俺だつて教えられるぜ？それに、アチャモを持つてるんだろ？炎タイプは俺の専門だ！あいつよりもつと詳しく教えられるぜ。料理もできるしよ」

ほのか「料理は私が作ってるんです。お母さんから教わっていろいろ作れるので。れおん君も喜んでくれるんです」

ワーグ「ハアア!?あいつ、女の子に料理させてんのかよ!?信じらんねえ!!」

ほのか「そんな、大げさですよ。私がいおん君にお礼できる唯一の手段なんですよ。だから、全く気にしてないです」

ワーグ「いや、ほのかちゃんはいつの事をまだ知らねえだろ。あいつはな、人との付き合い方つてのがわかってねえ。失礼な事だつてどんどんやるし、空気を読まねえ事も多い。それに、適當すぎるんだよ、あいつの生活は。」

前に見たが、ありやあ何だ？ポケモンになろうとしてるのかと思つたぞ。全く、ポケモンばかりだからあんな性格になるんだろうな。困つたもんだぜ」

れおん「おい」

二人「あ」

数分後

れおん「この子がハスボーだ。可愛いだろ」

ハスボー「ハボ？」

ハスボーは首をかしげた

ほのか「可愛い!!」

ワグ「あの、れおんさん。悪口言ったのは謝るけどよ、三発も殴る必要ねえだろ」

れおん「悪いな、ノリだ」

ワーグ「ノリか。じゃあ仕方ねえな」

ほのか「（あ、それで許しちゃうんだ）この子、今レベルとか技とかわかりますか？」

れおん「えっと、待ってな」

れおんはバックから小さい棒の機械を取り出した

ほのか「それは？」

ワググ「これはポケモン検査機。これをポケモンに当てると、そのポケモンの名前、レベル、技、特性までわかる優れものだ」

ほのか「ええ!? 凄い! めちゃくちゃ便利です! 私もほしいです!」

れおん「まだ一般トレーナー向けに生産されていないからもう少しだな。まあ、使いたかったら言ってくれば、俺が出すぞ。」

このハスボーはレベル9、特性はすいすい、技はおどろかす、なきごえ、あわ、ギガドレインだ」

ほのか「え? 何だか最後の技、レベルと見合ってますよ!」

ワグ「なるほど、ルンパツパから遺伝したか。いい技覚えてるな」

ほのか「あ、なるほど。遺伝技か。本当に貫つていいんですか？」

れおん「ああ、可愛がつてやってくれよ」

ほのか「よろしくね、ハスボー」

ハスボー「ハボ？」

ほのか「可愛い!!」

ほのかはハスボーを抱きしめた

ワーグ「これからジム対策か？俺も付き合おうぜ」

れおん「ありがとな、まずはハスボーをレベル上げしよう」

ワーグ「それなら、俺を相手にやってみろよ。少し待ってな」

ほのか「ありがとうございます！」

ガーネシテイ バトルフィールド

ワグ「よし、いくぜ、ポニータ！」

ポニータ「ポニー！」

ほのか「よし、ハスボー！バトルだよ！」

ハスボー「ハボハボ！」

ほのか「ハスボー！あわ攻撃！」

ハスボー「ハボ！」

ワীগ「ポニータ、避けて火炎ぐるま!!」

ポニータ「ポニー！」

ほのか「えっと、左に飛んで避けて！」

ハスボー「ハボ！」

ハスボーはギリギリで避けた

ワグ 「おお！よく見てるな！いいじゃないか！」

ほのか 「ありがとうございます！ハスボー、なきごえで油断させて！」

ハスボー 「ハボー」

ポニータ 「ポニ…」

ほのか 「飛びついちゃえ、ギガドレイン！」

ハスボー 「ハボー！」

ポニータ「ポニー！」

ワーグ「振り払え、ポニータ！ふみつけ！」

ポニータ「ポニー！」

ほのか「ああ！ひっくり返っちゃった！」

ポニータ「ポニー！」

ほのか「そ、そのままあわ攻撃！」

ハスボー「ハボ！」

ポニータ「ポニ…」

あわで遮られ、ポニータのふみつけは当たらなかった

ハスボー「ハボ…ハボ…」

ハスボーはジタバタして起き上がろうとしているが、全く動かない

ワグ「…流石に起き上がれねえみたいだな。ほのかちゃん、起こしてやってくれ」

ほのか「は、はい。ハスボー、大丈夫？」

ほのかはハスボーを起こした

ハスボー「ハボハボ」

ワグ「いいじゃないか、ほのかちゃん。バトル思ってるよりできるみたいだな。冷静に考えるのはいい事だな」

れおん「いい調子みたいだな。ハスボーもそうやっていけば、すぐにレベルが上がるはずだ」

ほのか「あの、ワীগさん。よかつたら、他のポケモン達もお願いしていいですか？
まだハスボーは続けるんですけど」

ワীগ「俺は構わないぜ！たまにはれおん以外と戦うのもいいだろうしな」

れおん「メンバーを決めるのか？」

ほのか「はい。とは言ってもヒー君は今回はお休みかな。でも、一番強いしな。それだとまだ慣れてないミミツキユもかな？」

ワーグ「確かムンナもいたよな。ムンナなら浮いてるし、気をつけさえすればいい勝負できるんじゃないか？あと、ミミツキユはばけのかわっていう特性で必ず一回はダメージを無効化する。悪くないと思うぜ」

れおん「ムツクルは逆にやめたほうがいいかもな。飛んでるから有利と考えがちだが、地面タイプは岩技も多く持つ。ほのかちゃんのムツクルなら多少大丈夫だろうが、それでも苦戦はすると思うぜ」

ほのか「なるほど。じゃあ、ムンナとミミツキユ、それにハスボーでいきますね」

ワーグ「俺はアチャモでもいいと思うけどな。少し出してみてくれないか？」

ほのか「いいですよ。おいで、ヒー君」

アチャモ「アチャモ？」

ワーグ「はじめましてだな、アチャモ。どれどれ……。ふむ……。いい感じじゃないか。感覚的に進化はもうすぐぐって感じだな」

れおん「流石だな、わかるのか。だが、進化しても地面タイプは弱点だぞ？」

ワーグ「ほのかちゃんのレベルくらいなら、相手のポケモンもじしんは覚えられない。せいぜいじならしがいい所だ。それなら、ワカシヤモにさせて勝負にかけるってのも男らしくていいんじゃないか？」

ほのか「き、危険じゃないですか？」

れおん「危険だぞ。お前みたいな脳筋じゃないんだから、そういう戦い方は勧めんな。ほのかちゃん、気にしないでいいぞ」

ワーグ「チエツ！何だよ、いいじゃねえか。まあ、慣れてない子にさせる戦い方ではねえな。悪かったな」

れおん「さっきのメンバーでいいと思うぞ」

ほのか「わかりました。それじゃあワーグさん、またお相手お願いします」

ワーグ「おう！どんどんレベルあげていこうぜ！」

22. ガーネジム戦

次の日、ガーネジム

ほのか「すみません、ジムに挑戦に来ました」

そこには、茶髪のウェーブがかかった女性が立っていた

らん「おお、女の子でジムの挑戦か。いいじゃない。私がジムリーダーのらん。よろしくな」

ほのか「はい。ほのかといいます。よろしく願います」

れおん「それじゃあ俺とワグは観客席で見てるからな。頑張れよ」

ワグ「ほのかちゃんなら大丈夫だぜ！ファイトだ！」

らん「おや、随分有名な人達だね。ほのかちゃんは相当期待されてるのかな？ふふ、楽しみだ。ほのかちゃんはここが何個目のジムだい？」

ほのか「ここが二つ目です」

らん「ふむ。大体はわかったよ。それじゃあすぐにバトルに移るけど、大丈夫かい？」

ほのか「はい！お願いします！」

らん「それじゃあフィールドに案内するよ。こつちさ」

バトルフィールド

らん「あたしのジムはシングルバトル。3vs3で交代はほのかちゃんのみ。大丈夫かい？」

ほのか「はい！」

らん「いい返事だね。あたしのポケモン達は簡単には倒れないよ。全力でかかってきな！全てを受け止めてあげる！見せてやりな、ヤジロン！」

ヤジロン「ヤジジ！」

ほのか「ハスボー、お願い！」

ハスボー「ハボ！」

審判「それでは、バトル開始！」

ほのか「ハスボー、バブルこうせん！」

ハスボー「ハボ！」

らん「高速スピンで突っ込んでいきな！」

ヤジロン「ヤジ！」ギューイン！

パン！パン！パン！

ほのか「嘘！バブルこうせんが壊されてく！」

ヤジロン「ヤジ！」

ほのか「ギリギリだけど、ギガドレイン！」

らん「何だって!？」

ハスボー「ハボー！」

ヤジロン「ヤジ…」

ハスボーが当たる直前にヤジロンに攻撃した

らん「それはまずいね。だが、そこからサイケこうせん！」

ヤジロン「ヤジ！」

ハスボー「ハボー！」

ほのか「ハスボー！負けないで、バブルこうせん！」

らん「こつちもサイケこうせん！」

二つの技がぶつかりあう

らん「なら、げんしのちから！」

ヤジロン「ヤージー」

ほのか「出来るだけ避けて！」

ハスボー「ハボ、ハボ！」

らん「高速スピンド突っ込んでいきな！」

ヤジロン「ヤジ！」ギユイイン！

ハスボー「ハボー！」

ほのか「ハスボー！頑張って、バブルこうせん！」

らん「サイケこうせんだよ！」

二つの技がぶつかりあう

らん「高速スピンドよ！」

ほか「近づかせないで！ヤジロンの足下にバブルこうせん！」

ハスボー「ハポ！」

ヤジロン「ヤジ!? ヤジ！」クルツ

ヤジロンは回りきれず倒れた

らん「ああ！ヤジロン！」

ほのか「絶好のチャンス！ギガドレイン！」

ハスボー「ハボー！」

ヤジロン「ヤ……ジ……」ドサ

審判「ヤジロン、戦闘不能！ハスボーの勝ち！」

ほのか「やったよ、ハスボー！」

ハスボー「ハボー！」

らん「ありや、見破られちゃったね。お疲れさん、ヤジロン。いいじゃないか、ほのかちゃん。あたしも楽しくなってきたよ。でも、次は同じようにはいかないよ。ダグトリオ！」

ダグトリオ「ダグ！」

ほのか「ああ！リージョンフォーム！という事は、じめん、はがねタイプ！」

らん「その通り。よく勉強しているみたいだね」

審判「交代はどうしますか？」

ほのか「うーん……」

ハスボー「ハボ！」

ほのか「いけそう、ハスボー？」

ハスボー「ハボハボ！」

ほのか「わかった！交代は無しでお願いします！」

審判「それでは、バトル開始！」

ほか「ハスボー！バブルこうせん！」

らん「させないよ！ふいうち！」

ダグトリオ「ダグ！」

ダグトリオはハスボーの不意をついた

ハスボー「ハボー！」

ほのか「ふいうち！厄介な技ね。でも、今なら近いよ！バブルこうせん！」

らん「だいちのちからで守りな！」

ダグトリオ「ダグ！」

ダグトリオの周りには大地が噴き上がった

ほのか「これ、前にれおん君が使ってたやつ！どうしよう！」

らん「じならしだよ！」

グラグラ

ハスボー「ハボ…」

ほのか「ど、どうしよう…。あの大地が止むまで待つてたら、いいようにやられちゃう。でも、バブルこうせんもギガドレインも届かない。どうにかして上に行ければ…。うーん……。あ！ハスボー、しぜんのめぐみ！」

ハスボー「ハーボー」

青い不思議な波が、噴き上がる大地に向かっていく

らん「しぜんのもぐみ!? 何のつもりだい？」

パキパキパキ!

噴き上がっていた大地は凍りついた

らん「な!? 氷タイプの技になっていたのかい!？」

ほのか「その凍った地面の所から、下にバブルこうせんで空にいくよ!」

ハスボー「ハボ!? ハ、ハボー！」

ハスボーは浮かび上がり、氷の上に乗った

らん「何だって!? 逃げて、ダグトリオ！」

ダグトリオ「ダ、ダグ！」

ほのか「逃さないで、その穴に向かってバブルこうせん！」

ハスボー「ハボー！」

らん「大急ぎで曲がって穴を作って！お願い！」

ダグトリオ「ダグー！」

ボコツ！

別の場所からダグトリオが出てきた

ほのか「ええ!?今の駄目だったの！」

らん「バブルこうせんは地面に当たってくれたようだね。ほのかちゃん、とんでもな

い事をするね。あたし、あんな戦い方初めてだよ。流石に焦ったね。でも、ダグトリオが頑張ってくれたみたいだ。ダグトリオ！トライアタック！」

ダグトリオ「ダグ！」

ほのか「ハスボー！そこからダグトリオに向かって飛び降りて！」

ハスボー「ハボー！」

らん「近づかせないで！大地のちから！」

ダグトリオ「ダグ！」

ハスボー「ハボー！」

ほのか「技の出が速い！でも、これだけ近ければ通るかも。バブルこうせん！」

らん「ふいうち！」

ダグトリオ「ダグ！」

ダグトリオは地面を潜り、ハスボーの後ろに回った

ほのか「ハスボー、後ろにいるよ！ギガドレイン！」

ハスボー「ハボー！」

ハスボーは後ろに向き、技を放つ

しかし、技は外れた

ほのか「ええ!？」

らん「それ読みだよ。ふいうち！」

ダグトリオ「ダグー！」

ハスボー「ハボー！ハ…ボ…」

らん「随分てこずらせたね。じならし！」

ハスボー「ハボー！」ピカッ！

ハスボーの体が光に包まれる

らん「何だって!?!このタイミングで進化かい!?!」

ほのか「ええ!?!進化!?!」

光の中でハスボーの姿は変わっていき、

ハスブレロ「ブロ!」

ハスボーはハスブレロに進化した

23. ガーネジム、突破

ほのか「ハ、ハスブレロになった…。やったー！つて、喜んでる場合じゃないや、いける？ハスブレロ」

ハスブレロ「ブローー！」

らん「ダグトリオ！トライアタック！」

ダグトリオ「ダグ！」

ほのか「進化した力、見せよう！バブルこうせん！」

ハスブレロ「ブロー！」

バババババ！

らん「トライアタックで止まらない!?ダグトリオ、あなをほるで逃げて！」

ダグトリオ「ダグ！」

ほのか「(あなをほるなら、耳を澄ませば、きっと……)」

ゴゴゴゴ

らん「ゴー！ダグトリオ！」

ほのか「左後ろだよ！ジャンプ！」

ダグトリオ「ダグ!!」

ハスブレロ「ブロ！」

ダグトリオ「ダグ!？」

らん「読まれた!？」

ほのか「ギガドレイン！」

ハスブレロ「ブーロー」

ダグトリオ「ダグ……」ドサ

審判「ダグトリオ、戦闘不能！ハスブレロの勝ち」

らん「凄いじゃないか、ほのかちゃん。一匹であたしのポケモンを二匹倒してしま
うとはね。もう負けられないね！暴れてきな！グライオン！」

グライオン「グライ！」

ほのか「グライオン!?結構強いポケモンだ！」

審判「交代はどうされますか？」

ほのか「このままで行きます！」

審判「わかりました。それでは、バトル開始！」

らん「グライオン、アクロバット！」

グライオン「グライ！」

グライオンは空中を縦横無尽に移動しながら突撃してきた

ほのか「軌道が読めない!? ハスブレロ、避けられる?」

ハスブレロ「プロ……ブロー!!」

ほのか「ハスブレロ、持ち堪えて！バブルこうせん！」

ハスブレロ「ブローー！」

らん「避けて、グライオン！そこからつじぎり！」

グライオン「グライー！」

ハスブレロ「ブローー！」ドサ

審判「ハスブレロ、戦闘不能！グライオンの勝ち！」

ほのか「よく頑張ったね、ハスブレロ。後は任せて。ミミツキユ、お願い！」

ミミツキユ「ミツキユ！」

らん「ミミツキユ！珍しいね！」

審判「それでは、バトル開始！」

ほのか「ミミツキユ！かげうち！」

ミミツキュ「ミミツキュ！」

ミミツキュの影がのび、グライオンに攻撃する

グライオン「グラ…」

らん「まずは、ばけのかわを剥がさないだね。アクロバット！」

グライオン「グライ！」

ほのか「また来た！えつと…（攻撃で対処できればいいのに。………ん？攻撃で………）
ミミツキュ、だましうち！」

ミミツキュ「ミツキュ！」

グライオン「グラ!？」

ミミツキュはグライオンの隙を突き、アクロバットを阻止した

らん「くっ！必中技は厄介だね！なら、ほのおのきば！」

グライオン「グライ！」

ほのか「シャドークロー！」

ミミツキュ「ミミツキュ！」ザシユ！

グライオン「グライオン!!」

らん「それなら、接近戦はやめだよ！じならし！」

グライオン「グライ！」

ほのか「地面にいなきやいいんでしょ！ミミツキュ、グライオンに飛びついて！」

らん「なに!？」

ミミツキュ「キュ！」

グライオン「グラ!？」

ミミツキュはグライオンにはりついた

ほのか「あまえる！」

ミミツキュ「キュ〜？」

グライオン「グラ……」

らん「しまった！ふりほどきな、グライオン！」

グライオン「グラ！」

ほのか「シャドークロー！」

ミミツキュ「ミツキュ！」

グライオン「グラー！」

らん「でも、これで距離があいた！じならし！」

グライオン「グライ！」

ミミツキュのばけのかわが剥がれ、人形の首がおれた

ほのか「でも、隙ですよ！ミミツキュ、だましうち！」

ミミツキュ「ミツキュ！」

グライオン「グライ！」

らん「逃がさないで！尻尾で捕まえな！」

グライオン「グライ！」

ほのか「そんな事できるの!?!」

ミミツキュはグライオンの尻尾に掴まれた

ミミツキュ「キュ…」

らん「そのままアクロバットで地面に落としてやりな！」

グライオン「グライ！」

ミミツキュ「キュー！」

ほのか「ああ！ミミツキュ！大丈夫!？」

ミミツキュ「キュ！」

らん「あまえるが効いてるみたいね！じならし！」

グライオン「グライ！」

ほのか「地面に降りるグライオンにつつこんで、ミミツキュ！」

ミミツキュ「キュー！」

揺れる地面の中、ミミツキュはグライオンに向かっていく

らん「何のつもりだい！アクロバット！」

グライオン「グライ！」

ほのか「させない！シャドークロー！」

ミミツキュ「ミツキュ！」

グライオン「グライ!!」ドサ

グライオンは地面に落ちた

らん「まずいね！急いで戻って、グライオン！」

「ほのか「だましうちで突撃だよ！」

「ミツキユ「ミツキユ！」

「グライオン「グライ！」ドサ

「審判「グライオン、戦闘不能！勝者、チャレンジャーほのか！」

「ほのか「やったよ、ミツキユ！勝ったわ!!」

ミミツキュ「キュ？ミツキユー！」

らん「負けちやつたね、グライオン。ごめんね、あたしがもう少し頑張ればよかったね。お疲れ様。いいバトルだったよ、ほのかちゃん。いい観察眼にポケモンの技の事を理解していて、とても楽しかった。これを受け取りな、ガーネバツジだ」

ほのか「やったー!!二つ目のバッジ、手に入れたー!!」

ミミツキュ「キュ！」

その後、ポケモンセンター内

れおん「おめでとう、ほのかちゃん！ハスブレロには驚かされたな！」

ワーグ「本当、熱いバトルだった！こっちも見ていてバトルしたくなってきたぜ！」

ほのか「ありがとうございます！やっぱりバトルって楽しいですね！」

れおん「へへ、ほのかちゃんは素質あるな。リーグ目指してみたらどうだ？」

ワーグ「そうだな！俺もそれがいいと思うぜ！女性のトレーナーなんて珍しいけど、ほのかちゃんなら大丈夫だぜ！」

ほのか「そうですね…。私、リーグ目指してみます！……そういえば、れおん君は今

「回どうするの？ナブさんの時みたいにもまた戦う？」

れおん「あー……。すっかり忘れてた。どうしようか」

ワーグ「何だよ、れおん。お前もリーグに出るのか？」

れおん「二応勧められたんだが、どうしたもんか」

ほのか「でも、トップトレーナーが出てもいいんですかね？」

ワーグ「それは問題ないぜ。だって俺達はその称号の前にポケモントレーナーの一人だからな。自由にしていいんだぜ。まあ、少し制限はあるけどな」

れおん「リーグで普通のトレーナーとバトルの時に、レベル制限がかかるんだ。流石にレベル差が離れていたら有利すぎるからな」

ほのか「そっか。確かにゴルダックみたいなレベルだと、一匹でどんどん勝ち進んじゃいそうですね」

ワীগ「そういう事だな。で、れおん。どうするんだ？」

れおん「ナブさんには悪いけど、俺はやめておこうかな。リーグ用に育てるのも少し面倒だ」

「ほのか「あー、また面倒くさがってる」

れおん「うっ…。ま、まあ許してくれよ。ライバルが一人消えたんだぜ？」

ワーグ「いいように捉えさせようとしてるな。全く、これだからサボリ野郎は」

ほのか「ま、まあでも、れおん君と戦うのは少し嫌だし、確かによかったかも」

ワーグ「いやいや、ほのかちゃん。こんなやつに流されちゃ駄目だぜ。偶には、思いつきり言ってやっていいからな。もっとしつかりしろ！つてよ」

れおん「お前は俺の何なんだよ」

ほのか「ふふっ、れおん君、もつとしっかりしろー！」

ワーグ「そうだそうだー！」

れおん「面白がらないでくれよ、全く」

ほのか「えへへ、ごめんね」

ワーグ「俺は本気なんだがな。まあいいか。ほのかちゃん、よかつたら明日この街を俺が案内してやろうか？ 観光はまだだっただろう？」

ほのか「いいんですか、ワーズさん！お願いします！」

れおん「この街に観光するような場所あったか？ 鉱山くらいなものだろ」

ワーズ「都会と比べんな！ それに、れおんが前に来た時に建設してた物も出来上がったりしてるんだぜ？」

れおん「ほう？ それは楽しみだな」

ほのか「お願いします、ワーズさん！」

ワーグ「任せな！何たって俺の街だ！庭みてえだぜ！」

れおん「また……。ほのかちゃん、ワーグは調子に乗りやすいから、あまり褒めなくていいぞ」

ほのか「褒めてないよ。思った事を言ってるだけよ」

ワーグ「本当ほのかちゃん、いい子だな！れおんにもその成分わけてやってくれよ！」

れおん「うるせえ」

24・街巡り

次の日、ガーネシテイ 公園前

ほのか「あ！ワীগさん、お待たせしました！」

ワীগ「おお、待ってたぜ、ほのかちゃん」

そこには、昨日までの赤い服ではなく、黒を基調としたデザインの服を着たワীগがいた

れおん「ワীগ、なんでそんな綺麗な服装してるんだ？そんな真面目な場所にでもい

くのか？」

ワグ 「女の子と一緒に行動するんだぞ。少しくらいオシャレするのが礼儀だ」

ほのか 「え…。ありがとうございます、ワグさん。とつても似合ってますよ！昨日までとは違って、赤がワンポイントになっててカッコいいです」

ワグ 「だろお？俺のお気に入りだ！しかも、動きやすいんだぜ！」

れおん 「お、俺にはわからん。それが普通なのか？」

ワグ 「ハア。全く、これだから女心のわかってねえやつは。少しでもレディを美し

く見せるために、俺達が導くんだ。そのために必要なんだよ」

ほのか「れ、レディなんて、そんな言葉は私には似合いませんよ」

ワーグ「ほのかちゃん、レディに見た目や性格は関係ないんだぜ。それに、ほのかちゃんには素敵なレディだぜ」

ほのか「あ、ありがとうございます、ワーグさん。照れますね」

れおん「女たら」パシッ！

ワーグはレースの顔面を掴んだ

ワーグ「なあ、れおん。俺、最近空手に目覚めててよ。ちよつとだけ味わつてみたくなえか？」

ワーグはれおんの口を塞ぎ、脅迫する

れおん「ハ、ハハ。ワーグさん、冗談キツイです……。すみません」

ワーグ「たくつ！すぐ余計な事言おうとしやがって。俺が歳上つて事忘れてんじやねえのか？」

ほのか「ワーグさんつてご年齢おいくつなんですか？そこまでれおん君と離れてるよ

うに見えないですけど」

ワーグ「本当か、ほのかちゃん！俺は今27だ！れおんとは9歳も離れてるんだぜ！若く見えるか！」

ほのか「ええ!? 見えないですよ！れおん君と同年くらいかと思いました！」

れおん「……まさか俺が老け顔なのか？」

ほのか「え、そういう事じゃないよ！れおん君は普通だよ！」

ワーグ「やーい、れおんの老け顔！」

れおん「……なるほど。こいつが若く見えるのは子どもっぽいからだな」

ワグ「いいだろうが、別に！つとと、俺とした事が立ち話し過ぎたな。よし、ほのかちゃん！案内するぜ、ついてきてくれ」

ほのか「はい！お願いします！」

れおん「……何だか面白くねえな」

宝石博物館前

ワグ 「女の子ならやつぱりここが一番だよな！」

れおん 「何だ、これ。俺が前に来た時は無かったな」

ほのか 「宝石……。え!?それってダイヤモンドとかですか!?!」

ワグ 「正解だ、ほのかちゃん!ダイヤモンドだけじゃねえぜ。サファイアとかオパールとかあるぜ。ここではいろんな宝石を集めて展示しているんだ。もちろん、この街のガーネ鉱山から採れた物も多いぜ。」

それを見た後で、隣にあるアクセサリーショップだ。ここでは、宝石を使ったアクセサリーを他の店より安く買えるんだ。少し見ていってくれよな」

ほのか「凄い！素敵ですね！早速入りましょう！」

れおん「え？俺もか！待ってくれほのかちゃん、ひっぱらないでくれ」

ワーグ「……え？ここって俺じゃないの？……まあいいか」

館内

ほのか「すごい。綺麗」

ワグ「興味津々だな、ほのかちゃん。そんなに張り付かなくても見えるだろ？」

ほのか「あ、ご、ごめんなさい。吸い込まれそうだったので」

ワグ「そうだよな。俺もここは結構好みだ。見ていても綺麗だし、意味とかも書いてあるからわかりやすいよな」

ほのか「はい。私、宝石は本でしか見た事なくて、実物はこんなにも輝いてるんだって感動しました」

れおん「そうだな。結構面白いな、ここ。俺もこういうのは興味ある」

ワグ「二人に気に入ってもらえたようで何よりだな」

一時間後、アクセサリーショップ

ワグ「ここではさつき見た宝石も使われてるんだ。誰かにプレゼントとして買っていくといいぞ」

ほのか「それなら、お母さん達に買ってみようかな。あーターナさんにもいいかも！」

れおん「楽しそうだな、ほのかちゃん。俺も少し見て回るか」

数分後

ほのか「(これ、可愛いな。お母さんに買っていこう。小さいから安いもんね)」

ワーグ「ん？真珠か。家族にか？」

ほのか「はい。安いから私でも手が出しやすくして」

ワーグ「そうだよな。それに、真珠って健康祈願にもなるんだぜ。家族に向けてならば
びつたりだな」

ほのか「そうだったんですか！それならなおさらですね！買ってきちやいます」

れおん「……………」

ワグ「ん？…おお、れおん。ラピスラズリか。お前には似合うんじゃないか、水タ
イプ使いらしいじゃないか」

れおん「……………」

ワグ「おいおい、無視かよ。…れおん？どうした」

れおん「!?ワ、ワグ！いつのまに。全く気づかなかった」

ワーグ「ええ？ いやいや、俺話しかけてただろ。少しブーツとしすぎだぞ。ヤドンにでもなったのか？」

れおん「そこまでじゃねえよ。いや……少し考え事だ」

ワーグ「ラピスラズリ、気に入ったのか？ 幸運の石だぜ」

れおん「幸運の石……。そういえばそうだったな」

ワーグ「まあ、言い伝えだけだな。でも、効果はあるんじゃないかねえか？ ご利益にあやかってもいいと思うぞ」

れおん「まさか俺にこれをつけろと？ 似合わねえよ。それに、そういう言い伝えは信用してないんでね」

ワグ「全く、冷めたやつだな。まあ……構わねえけどよ。外でほのかちゃんが出てくるまで待つてようぜ」

れおん「ああ、そうだな」

アクセサリーショップ前

ほのか「お待たせしました！」

れおん「いいのが買えたみたいだな。よかったな」

ほのか「はい！喜んでもらえるといいんですけど」

ワーグ「ほのかちゃんか誠意をこめて選んだんだ。絶対喜んでもらえると思うぞ。さて、次にいくか」

その時

男性「ああ!!ワーグさん！お探ししました!!」

ワーグ「ん？どうした？俺に用事か？」

男性「大変なんです!! ガーネ鉱山で突然ポケモン達が暴れ始めたんです!!」

全員「!!」

男性「工事の人達で怪我した人もいます! すぐに救援をお願いします!」

ワーグ「わかった!! すぐに行く! 悪い、ほのかちゃん、れおん。俺、急いで行ってくる!」

れおん「俺も行くぞ! 人手不足なんじゃないか? それに、宥めるならポケモンも必要だろ?」

ほのか「わ、私も出来るだけお手伝いします！連れて行ってください！」

ワーグ「本当か！ありがてえ!!なら、ついてきてくれ！こつちだ！」

25. 暴れるポケモン達

ガーネ鉦山

ワীগ「皆、大丈夫か!!」

工事員「あ!ワীগさん、来てもらえましたか!俺のポケモンが言う事聞かなくなっ
てしまっで!」

工事員「俺もなんだ!」

工員「私のゴローンも！」

ワグ「トレーナーのポケモンが言う事を聞かない？そんな事あるのかよ」

工員「それにモンスターボールにも戻ってくれないんだよ。皆、鉱山の中にどんどん入っていくんだ。野生のイシツブテやダンゴロも暴れてるんだ」

ほのか「中に何かあるんでしょうか。……………はっ！れおん君、もしかして」

れおん「おそらくそうだろうな、ほのかちゃん。中にあの変な機械があるんだろう」

ワグ「何か知ってるのか!？」

れおん「ああ。これから発表されると思うが、ポケモン達を操る変な機械が、怪しいメンバーによって各地に置かれている。その影響のはずだ。だから、中にいってその機械を壊せば元に戻るはずだ」

ワীগ「そんなやつらがいるのかよ！許せねえ……」パシツ！

ワীগは手に拳を打ちつけ、怒りをあらわにしている

れおん「行くぞ、ワীগ。ポケモン達を元に戻すんだ」

ほのか「私もお手伝いします！」

ワグ「わかった、ありがとよ。ほのかちゃんは入り口付近で他のポケモン達が入ってくるのを防いでくれ」

ほのか「はい！お気をつけて！」

鉾山内部

れおん「それなりに広いな。これなら多少暴れても何とかなるか」

ワグ「ああ。だが、気をつけろ。柔らかくなってる場所もある」

れおん「わかった。……お前と一緒に行動するなんて初めてだな」

ワーグ「そーいやそーうだな。気は合うのに、行動は全く合わなかったもんな、俺達」

れおん「ハハ、不思議だよな。少しくらい一緒にいてもいいはずだったのに」

ワーグ「まあな。……おっと、どうやらこの先は通させてもらえないらしい」

ガントル「ガツト!!」

ガントルの群れが守ろうとしていた

れおん「そのようだな。あまり手荒な事はしたくない。ヤドキング、頼んだ」

ヤドキング「ヤド」

ワীগ「なら、俺も出さないと。マグカルゴ！」

マグカルゴ「カルー……!!?カルー!!!」

ワীগ「え!?!ど、どうした、マグカルゴ！」

マグカルゴ「カルゴ!!!」

マグカルゴはふんえんを繰り出した

ワーグ「熱い!!!水、水!!燃える!」

れおん「ヤドキング、ワーグに水をかけてやれ!」

ヤドキング「ヤドー」

バシヤア!

ジユウウ！

ワীগ「ありがとよ、ヤドキング。服が半分燃えちまったぞ。いきなり何すんだ、マ
グカルゴ！」

マグカルゴ「カルー!!」

ワীগ「何だよ、おい！戻れ、マグカルゴ!!」

しかし、マグカルゴは戻らなかった

ワーグ「お、おい。まさかこれって、さつき言ってた」

れおん「マジか。これで共通点はわかった。暴れてるのは岩タイプだ。おそらくその機械が、岩タイプのポケモン達に何かしらの電波を出して暴走させているんだ」

ワーグ「くっそー！ふざけんなよ！！俺のマグカルゴまで操りやがって！！」

れおん「悪いな、ワーグ。手荒だが、大人しくさせるぞ。お前のマグカルゴのふんえんは洒落にならない威力してるからな。このまま暴れさせたら鉱山が崩れる」

ワーグ「おう！一発ぶちかませ！俺はお気に入りの服を台無しにされて気が立ってんだ！戦闘不能にしてやれ！」

れおん「そんな動機でいいのかよ。ヤドキング、ハイドロポンプ！」

ヤドキング「ヤドー！」

ドバア！！

マグカルゴ「カゴー！！」

ガントル「ガツトー！！」

マグカルゴとガントルの群れはハイドロポンプで流され、マグカルゴは戦闘不能に

なった

れおん「特性ががんじょうのガントル達が残ったか。まあ、流石にそこまではしないさ。進むぞ」

ワーグ「今なら戻せるか？……駄目か。完全に受けつけないわけか。さつさと壊さねえとな」

さらに進み、広い場所に出た

れおん「ん？急に広くなったな。ここは何の場所だ？」

ワググ「ここで鉱石とかを取ってるんだぜ。ほら、トロツコとか道具とか散乱してるだろ？はしごで下に降りるんだ」

れおん「なるほどな。そして、ここ先のポケモン達が邪魔してくるのか」

ヨーギラス「ヨーギ！」

サナギラス「サギサギ！」

れおん「ヨーギラスとサナギラス達か。すまないな、通させてもらうぞ」

ワググ「やれー、れおん！」

れおん「相性悪いからって後ろに回って情けねえな。ヤドキング、ハイドロポンプ」

ヤドキング「ヤドー！」

ヨーギラス「ヨギー……」ドサ

サナギラス「サナ……」ドサ

れおん「すまない。機械を壊したら、すぐにジョーイさんに治してもらおう」

ワググ「この奥にも広い空間がある。そこで行き止まりなはずだから、機械があるならそこだ」

れおん「よし、行くぞ」

その頃、ほのかは

ほのか「駄目だよ、イシツブテ。ここは通っちゃ駄目」

イシツブテ「イッシ!!」

イシツブテは岩を投げてきた

ムツクル「クルー！」ガキン！

ムツクルのはがねのつばさで守られた

ほのか「ありがとう、ムツクル。お願い、言う事聞いて？」

イシツブテ「イツシ!!」

ほのか「駄目かし。ごめんね！ハスブレロ、バブルこうせん！」

ハスブレロ「ブロー！」

イシツブテ「イツシ……」ドサ

ほのか「結構来るな。しかも岩タイプばかり。この周りには岩タイプが多いんだ。つて、またきた」

コドラ「コードー！」

ほのか「駄目！通つちや駄目なの！」

コドラ「コードー！」

コドラのアイアンヘッド！

ほのか「キヤア!!」

ほのかはアイアンヘッドが当たり、奥に押された

ほのか「痛ったーい！もう！ハスブレロ、バブルこうせん！」

ハスブレロ「ブローー！」

コドラ「ドラ…」

ほのか「耐えてきた！ムツクル、電光石火！」

ムツクル「クルー！」

コドラ「コド……」ドサ

ほのか「よし。でも、倒さないといけないのは少し心苦しいな。れおん君達、早く壊して」

26. 暴れるポケモン達2

その頃、れおん達は

ワーグ「ここが最深部だ。機械は……あのポケモン達が集まってる所だろうか」

そこには、広い空間があり、その中央付近にたくさんの岩タイプのポケモン達が集まっていた

れおん「そうだな。あの量だと俺一人じゃあキツイ。ワーグ、手伝ってくれ」

ワグ「当たり前だろ。機械を壊すのは俺がやる。周りのポケモン達は頼んだ。あまりたくさん傷つけるなよ？この後も大変なんだからな」

れおん「ああ。………ん？おい、ワグ。あのポケモンの中に混じっているの、まさかドサイドンじゃないか？」

ワグ「なに!?!………本当だ！野生でドサイドンなんてほぼいねえぞ。道具進化を偶然したなんて考えにくい。工事員の中にもドサイドンなんて持ってないはずだ。ここら辺にはぬしポケモンはいねえし、どうなってんだ？」

れおん「少々厄介だな。ドサイドンに暴れられると、俺達鉱山に埋まってしまうぞ。ゴルダック、お前も増援してくれ」

ゴルダック「ぐわ」

ワীগ「危なくなったら俺にも言ってくれ。すぐ援助するぜ。ゴウカザル！」

ゴウカザル「キーツ！」

れおん「よし、二人ともハイドロポンプ！特にあのドサイドンに向かって打つんだ！」

ヤドキング「ヤドー！」

ゴルダック「ぐわ！」

ドバア！

ドサイドン「!?ドサア！」

二つのハイドロポンプにより、ドサイドンや周りの岩ポケモン達が流されていく

その真ん中に、茶色の機械があるのが見えた

ワーグ「よし！行くぞ、ゴウカザル！あの機械ぶっ壊してやる！」

ゴウカザル「キーツ！」

ワーグとゴウカザルはそこに向かっていく

その時

ドサイドン「ドツサア！」

ドサイドンがワーグ達に向かってがんせきほうを繰り出してきた

ワーグ「やべっ!!」

れおん「ワীগ、危ねえ！ヤドキング、サイコキネシス！」

ヤドキング「ヤードー」

がんせきほうをサイコキネシスで止めた

ワীগ「助かった、サンキューれおん！」

れおん「ああ。だが、まだ立てるか。おそらく特性がハードロックなんだろう。効果
抜群を軽減してくる。厄介だな」

ドサイドン「ドサア！」

ドサイドンはじしんをくりだした！

グラグラグラ！

れおん「うおおっ！ゆ、揺れる！」

ワーグ「大丈夫か、ゴウカザル！その技をこんな狭い場所で連発されたらたまつたもんじゃないねえ！ゴウカザル、きあいだま！」

ゴウカザル「キキーツ！」

ドサイドン「ドサ！」

ドサイドンはメガホーンできあいだまを壊した

れおん「あのドサイドン、随分レベルが高いな！二人とも、もう一度ハイドロポンプ
！」

ドバア！

ドサイドン「ドサア！」ドスン！

ワーグ「よし！膝をついた！やっぱりハイドロポンプは特性があっても受けきれねえよな！」

れおん「後は任せろ！ワーグは先に機械を壊すんだ！」

ワーグ「おう！行くぞ、ゴウカザル！」

れおん「ゴルダック、もう一度ハイドロポンプだ。ヤドキングは何かあった時のために待機していてくれ」

ゴルダック「ぐわ！」

ドサイドン「ドサ……」ドスン！

れおん「よし、ドサイドン撃破だな。ワীগも到着したな」

ワীগ「何だよ、この機械。岩タイプって書かれてるな。やつぱり岩タイプだけが操られるようになってんのか。趣味悪いぜ。ゴウカザル、インファイト！」

ゴウカザル「キーツ!!」

ゴウカザルにより、機械は粉々になった

ワীগ「よし！これで一件落着だな。戻って急いで報告するぞ」

れおん「ああ。ポケモン達の被害もある。少し大変だな」

その頃、ほのかは

ボスゴドラ「ドラー!!」

ボスゴドラが入り口近くで暴れていた

ほのか「ハスブレロ、バブルこうせん！」

ハスブレロ「ブロー！」

ボスゴドラ「ドラー!!」

しかし、バブルこうせんはボスゴドラにより全て破られていく

ほのか「どうしよう、このままじゃあここが壊されちゃうのに」

ボスゴドラ「ボツス!!」

ボスゴドラはいわなだれをくりだした！

ほのか「まずいわ！ 鉾山に逃げないと！」

ガラガラガラ！

ドスン！

ほのか「え……。嘘、どうしよう。岩で入り口が塞がっちゃった」

ほのかは鉾山の入り口に閉じ込められた

ほのか「ハスブレロ達、無事かな。逃げていいんだよ。私も早くここから出ないと。」

えいつ！よいしょつ！」

ほのかは岩を取り出そうとするが、大きくて動かない

ほのか「私一人じゃ無理だ。れおん君達が戻ってくるまで、待ってた方がいいかな？……いや、駄目だね。頼りっぱなしつても失礼だもん。よし、ヒー君！ムンナ！ミミツキュ！」

アチャモ「チャモ！」

ほのか「ヒー君はつつくで岩を削って！」

ムンナ「ムナ！」

ほのか「ムンナはサイケこうせんで少しでも岩を壊して！」

ミミツキュ「ミツキュ！」

ほのか「ミミツキュはシャドークロードで壊して。皆、頑張るよ！」

数分後

ムンナ「ムウ……」

ほのか「疲れたよね、少し休んでていいよ。私が代わるね」

アチャモ「チャモチャモチャモ！」

ほのか「ヒー君も休んで。一番大変でしょ？ほら、モンスターボール」

アチャモ「チャモ！チャモチャモ！」ふるふる

アチャモは首を振り、拒否している

ほのか「まだ大丈夫なの？無理しないでね。それにしても、僅かずつしか進めない。

これじゃあこつちが疲れて倒れちゃうわ」

アチャモ「チャモチャモチャモ！」ピカッ！

アチャモの体が光に包まれた

ほのか「ええ!? ヒー君、その光って!?!」

光に包まれたアチャモは姿を変えていく

そして

ワカシャモ「シャモー！」

アチャモはワカシャモに進化した！

ほのか「やった!!ヒー君が進化してワカシャモになった!!」

ムンナ「ムナ!!」

ミミツキュ「キュ!!」

ほのか「よーし、ヒー君!にどげり!」

ワカシャモ 「シャモ！ シャモ！」

ドガン！ ドガン！

ほのか 「凄い！ どんどんヒビが入っていくよ！ そのまま続けて！」

ワカシャモ 「シャモ！ シャモ！ シャモ！ シャモ！ シャモ！」

ドガアン！

ほのか「ああ!! 出れそう! 少し隙間が空いたよ! 外の光が見える!」

ワカシャモ「シャモ! シャモ!」

ドガアン!!

岩は一部が崩され、外に出れるようになった

ほのか「やったー!! ありがとう、ヒー君!」

ワカシャモ「シャモ!」

ハスブレロ「ブロ！」

ムツクル「ピイイイ！」

ほのか「あ！二人とも無事だったんだね、よかった！あ、ボスゴドラは！」

ボスゴドラは集まった工事員達のゴーリキー数匹により倒されていた

ほのか「よかった。もしかして、呼びに行ってくれたの？」

ムツクル「ピイイイ！」

ハスブレロ「ブロ」コク

ほのか「そっか。ありがとう！」

27. 収束

しばらくして、ガーナ鉱山前

れおん「よつと。しかし、この岩はどうしたんだ？人が通れるサイズだが、こんなのは最初は無かったぞ」

ワーグ「ここにはほのかちゃんがいってくれたはずだ。彼女の身に何かあったのか？」

れおん「何だど!?それはまずいぞ！ほのかちゃんはどこだ！」

ワググ「え…。おいおい、落ち着けよ、れおん。まだ確定したわけじゃない。彼女だつて自分で考えて動ける。どこかで無事なはずだろ」

れおん「そ、そうだな。少し取り乱した。ん？こつちに向かつてくるのは……」

ほのか「あー、れおん君！ワググさん！つて、キヤアア!!ワググさん、ほぼ上着てないじゃないですか！ど、どうしたんですか！」

ワググ「あ……。すまねえ、ほのかちゃん！れおん、俺を隠せ！ほのかちゃんの目に毒だ」

れおん「自分で言つて悲しくならねえのか？これはワググのポケモンのマグカルゴが暴れて、ふんえんをワググにぶつけたんだ。そのせいで服は燃えちまったんだ」

ほのか「そ、そうだったんですか。驚いてすみません。怪我はありませんでしたか？」

ワーグ「俺達は頑丈だからな。ちよつとやそつとじゃ怪我しないぜ！」

れおん「俺を含めるな。俺は違うからな。ワーグみたいにそこまで鍛えてねえよ。ほのかちゃんも無事でよかった」

ほのか「はい！いろいろ報告もありますし、ポケモンセンターに行きましょう！ワーグさんの服は大丈夫ですか？」

ワーグ「お気に入りだったんだけどな……。まあ、仕方ねえ。家でまた着替えてから

ポケモンセンターに向かうぜ」

れおん「じゃあまた後でな」

その後、ポケモンセンター内

れおん「おお！ワカシャモ！」

ワカシャモ「シャモ！」

ワグ「進化したんだな！もう少しだと思っていたが、やっぱり俺の勘は当たってたな！」

ほのか「ワカシャモのおかげで助かったんだ！えへへ、ありがとう」

ワカシャモ「シャモ〜」

れおん「それにしても、あの機械には困ったものだな。いつ置かれて、いつ起動されたのかわからねえ」

ワグ「だよな。これからも増えていくとなると、街が大混乱だぞ。早いところ、その怪しいやつらをぶっ潰さねえとな」

ほのか「操られてる野生のポケモン達や、トレーナーのポケモン達もかわいそう。強

制的に暴れさせられるなんて、嫌に決まってるのに」

ワグ「れおん、ほのかちゃん。何かあればすぐに連絡してくれ。こんな物騒な物が出てくる中、旅をするのは少々危険だ。」

それと、れおんがいるからこそほのかちゃんは旅をできるだろうから、ほのかちゃん
はれおんから絶対に離れるなよ。

れおんはほのかちゃんを絶対に守れ。女の子一人守れねえなんて、トツプトレーナー
の恥さらしだぞ」

れおん「当たり前だろ。ほのかちゃんは俺がしっかりと守ってみせるさ」

ほのか「忠告ありがとうございます、ワグさん。私も何かあったらワグさんに連

絡します。これ、私の番号です。よかったら、登録しておいてください」

ワグ「女の子の連絡先！やったぜ!!」

れおん「おい、ワグ？」

ワグ「あ……。へへ、何でもねえぞ。ほら、ほのかちゃん。これが俺の連絡先だ。困ったら何でも連絡して構わないぜ！れおんに飽きたら俺が代わってやるよ！」

ほのか「ふふ、そんな事ありませんよ。ありがとうございます、ワグさん」

れおん「とりあえずこれで一件落着だ。明日は次の街に向かうぞ」

ほのか「うん！」

ワーグ「次だと……。おお、レイロウシティか！あそこはいいよな！大都会だ！」

ほのか「え!?次はレイロウシティですか!？」

れおん「そうなるな。あそこはガルドア地方一の都会だ。たくさん楽しむ場所があるぞ」

ほのか「ずっと行って見たかったです！お父さんが仕事で行って羨ましくて！楽しみだな」

ワーグ「シヨツピングに美味しいもの。綺麗な港に熱いジムバトルにコンテスト！何でもあるからな。楽しんでこいよ！」

ほのか「はい！」

28. 共に修行を

次の日、ガーネシテイ前

れおん「わざわざ見送りなんてしなくていいんだぞ、ワীগ」

ほのか「そうですよ。鉦山が大変なんじゃないんですか？」

ワীগ「そんな悲しい事言わないでくれ。二人は混乱を収めてくれたんだからよ。これくらいはさせてくれ。しっかりとしたお礼は後日な。それじゃあ気をつけて行けよ。あのバトル大橋に行くんだろ？」

れおん「ああ、そうだな。ほのかちゃんには頑張ってもらわないとな」

ほのか「バトル大橋？そんな橋ありましたっけ？」

ワグ「レイロウシティに向かう途中にある大きな橋なんだが、そこではトレーナー達の修行の場所になっていてな。よくバトルを申し込まれるんだ。それでついた名前がバトル大橋。本当の名前は知らねえんだけどよ」

れおん「まあ、バトルは断つてもいいけどどうせなら引き受けてみたらどうだ？レイロウジムへの修行になるぞ」

ほのか「そうだね。それになんだか面白そう。よし、頑張るぞー！」

れおん 「それじゃあまたな、ワীগ。お前も気を付けろよ」

ワীগ 「おう！じゃあな、れおん、ほのかちゃん！」

ほのか 「色々ありがとうございます、ワীগさん！また会いましょう！」

その後、 7 番道路

ほのか 「ヒー君、この先バトルがたくさんできるんだって。頑張ろうね！」

ワカシャモ「シャモシャモ」

れおん「気合入ってるな。いいじゃないか。あそこではダブルバトルをよく申し込まれるんだ」

ほのか「え!?何でダブルバトルなの?」

れおん「これから向かうレイロウジムはダブルバトルだ。そのための練習だな。ほのかちゃんにとって、とても大事になるはずだぞ」

ほのか「なるほど。皆、そこで感覚を掴んでるんだね。じゃあ、レイロウジムは何タイプなの?」

れおん「レイロウジムは水タイプ。ジムリーダーのみすずは、俺のちよつとした知り合いだ」

ほのか「水タイプか。れおん君がいるから水タイプは慣れてるけど、戦うってなると困るな。ヒー君にはまたお留守番かな」

ワカシャモ「シャモ……」

ほのか「ああ、ごめんね、ヒー君！落ち込まないで！次だよ、次！流石にヒー君だつて水びたしになるのは嫌でしょ？」

ワカシャモ「……シャモ」

ほのか「ごめんね、ヒー君。水タイプだとまたハスブレロに手伝ってもらおう。後は………」

れおん「ダブルバトルだから残りは全員だが、ムツクルは少々きついかな。水タイプはよく水技を使う。ムツクルなら避けられそうだが、当たればかなりの痛手だ。ただ、メインの水技を避けやすいのはムツクルだ。一長一短と言ったところだな」

ほのか「そっか、ダブルバトルは四匹だもんね。ヒー君、応援しててね。それじゃあ、最初はバトルに慣れさせるためにミミッキュとムンナで橋を目指そう!」

れおん「そうだな。ハスブレロやムツクルに比べたら、その二匹は各自の問題がある。少し慣れさせた方がいいだろうな」

ほのか「じゃあ出てきて、ミミツキュ！ムンナ！」

ミミツキュ「ミツキュ！」

ムンナ「ムナ……」

ほのか「ムンナったらまた寝てるし。まあ、何かおこったら起こそうかな」

ほのかはムンナを抱き上げた

ミミツキュ「……………」ジー

ミミツキュはほのかとムンナを見つめている

れおん「ん？どうしたんだ、ミミツキュ。ほのかちゃん達を見つめて」

ミミツキュ「キュ……………」

ほのか「どうしたの？ミミツキュ」

ミミツキュ「……………キュ！」ピョン！

ミミツキユはほのかの肩に飛び乗った

ほのか「キヤツ！ミミツキユ、羨ましかったの？ふふ、可愛い」

ミミツキユ「キユ」

ミミツキユはほのかに擦り寄っている

れおん「随分懐かれたな。もうミミツキユは完全にほのかちゃんが好きみたいだな。ただ、少し重いんじゃないか？ムンナは俺が持っていよう」

ほのか「ありがとう、れおん君。ミミツキュはそこにいていいからね。でも、何かあったらよろしくね」

ミミツキュ「キュ！」

れおん「お、奥にオドシシ達がいるぞ。折角だから、バトルしてみたらどうだ？ ノーマルはゴースト技を通さない。ミミツキュにはいい相手なんじゃないか？」

ほのか「そうだね。それだとミミツキュはかげうちとシャドークロウが使えないのか。大変そうだけど、頑張ってみようか。よし、いこう、ミミツキュ！」

ミミツキュ「ミツキュ！」

オドシシ「!?」

ほのか「ミミツキュ、だましうち！」

ミミツキュ「ミツキュ！」

ミミツキュはオドシシを騙して攻撃した

オドシシ「ドシ！オドツツ！」

オドシシはミミツキュにとっしんしてきた

ミミツキュ「??」

しかし、とっしんはミミツキュをすり抜けた

オドシシ「??」

ほのか「そっか、ノーマル技はゴーストに効かないね。とっしんは怖くないって事だね！ミミツキュ、もう一度だましようち！」

ミミツキュ「ミツキュ！」

オドシシ「ドシー！」

ほのか「効いてるよ、ミミツキユ！頑張って！」

オドシシ「ドツシー」

ミミツキユ「キユ!? スウ……」

ミミツキユは眠ってしまった

ほのか「あ、あれ？ミミツキユ!?もしかして、さいみんじゅつ？」

オドシシ「ドシ！」 タツタツ！

オドシシは逃げていった

ほのか「あー、待ってよ、オドシシ！…逃げちゃった」

れおん「催眠術を使われたな。あれは仕方ないんじゃないか？ 残念だったな」

ほのか「うん。ミミツキュ、起きて」

ミミツキュ「スウ……」

ミミツキュはまだ眠っている

ほのか「オドシシってさいみんじゅつ覚えるんだ。今度は覚えておこう」

??? 「ねえ、そこの君。今のバトル見てたよ」

二人「ん？」

??? 「ミミツキュなんて珍しいから見てたけど、タイプわかってるの？ノーマルタイプのオドシシに、ゴーストタイプを持つミミツキュを使うなんてどうかしてるよ」

ほのか「見てたんだね。タイプはわかってるの。それでも、ミミツキユにはバトルに慣れてほしかったから使ったの。それに、さいみんじゅつで眠らされちゃったけどだましうちを使えばミミツキユでも戦えるから」

れおん「修行の一環だったんだ。まあ、何してるんだって思うのは仕方ないさ。君もトレーナーかい？」

だいき「うん。俺の名前はだいき。ギツタンシティから来たんだ。でも、修行のやり方変わってない？別に他のポケモンも使えばいいじゃん」

ほのか「私、ほのか。タジシティから来たんだ。ミミツキユをどうしても使いたかったんだ。他にもいるけど、この先のレイロウジムで使うからね」

だいき「え!?ほのかもジムバトルしてるの!?バッジいくつ!?」

ほのか「私は二つよ。ハルヤバッジとガーネバッジ」

だいき「ええ!?俺と同じじゃん!?じゃあライバルだね!」

ほのか「え?」

だいき「俺もまだ二つなんだ。一緒に頑張ろうぜ!」

ほのか「う、うん。ありがとう。だいき君はなんのポケモン使ってるの？」

だいき「俺の相棒はこいつだ！」

ジュプトル「プットー！」

れおん「おお、ジュプトルか。カツコイイじゃないか」

だいき「お兄さんもそう思う!?俺のジュプトルはシュツとしてて、イケメンだよな！こいつのおかげでガーネジムも突破できたんだ！この先のレイロウジムも草タイプが弱点だから頼りにしてるんだ！」

ほのか「確かにカツコイイね、ジユプトル。私はね、ヒー君！出てきて！」

ワカシヤモ「シヤモー！」

だいき「ええー!?ワカシヤモじゃん！すっげえ！初めて見た！結構可愛い！」

ワカシヤモ「シヤモ？」

れおん「そういえば、ホウエンの最初の三匹のうちの二匹が揃っているな。この地方ではなかなかお目にかかれないぞ」

ほのか「あ、本当だ！凄い！」

だいき「兄ちゃんは？誰を相棒にしているの？」

れおん「俺か？俺はこいつだ」

ゴルダック「ぐわ」

だいき「ああ、ゴルダック。結構大きいんだね。それに、かなり強そう」

ほのか「だいき君、このゴルダックはね、色違いなんだよ」

だいき「ええー!? 本当!? 全然わかんない!」

れおん「まあ色に変化はあまり見られないよな。コダックの時はわかりやすかつたんだがな。ゴルダックは普通より青がかってるんだ」

だいき「そうなんだね。つて、ああ!! 色違いのゴルダックを連れたトレーナー、も、もしかしして……………れおんさん!」

れおん「なんだ、俺の事知ってたか」

だいき「マジ!? え、本物!? 嘘!! 蒼碧のれおん!」

れおん「お、おう。そんな驚く事か？」

ほのか「蒼碧のれおん？れおん君ってそんな名前あったの？」

れおん「トップトレーナーになって、いろんな人から勝手につけられた二つ名みたいなものだ。タイプにそって色々あるみたいだぞ。ほのかちゃんが今まで会った人だと、舞姫ターナ、炎剛ワグ。皆、呼び慣れてないから照れるんだけどな」

ほのか「なんか凄そう。トップトレーナーってやっぱり影響が大きいんだね」

だいき「ほのか凄いな！こんな有名な人と一緒なのか！そうだ!!れおんさん、水タイプ使いならこの先のジムのために俺に修行をつけてください！」

れおん「え、ええ……。大した事は教えられないぞ。自分の力やポケモンはだいきが一番わかっているはずだ。それをうまく使っていけばいい。ダブルバトルはやった事あるのか？」

だいき「ない！」

ほのか「そんな自信満々に言うんだね。それじゃあ私と同じ。この先のバトル大橋で頑張ろうよ」

だいき「はっ！こ、これはまさか、挑戦状!? よし、ほのか、うけてたつぜ！バトル大橋でどっちが多く勝てたか勝負だ！」

ほのか「ふえっ？私、そんなつもりないんだけど……」

だいき「勝った方がジムバトルを先に申し込めるって事で！いくぞ、ジユプトル！
じゃあなー！」

れおん「……嵐みたいなやつだったな」

ほのか「な、なんか勘違いされちゃったよ。私達も行かないと！」

29・バトル大橋

バトル大橋

ほのか「結構大きい橋なんだね。それに、景色もいいよ。風が気持ちいい」

れおん「レイロウシティの近くに行くよ、もつと大きな建物が並んでるぞ。ここはその初めだな。お、橋の前にいるのはだいきじやないか」

だいき「あ！来たな、ほのか。よし！俺とほのか、どっちが多くトレーナーと勝てるか勝負だ！10戦やってその数で決めるぞ」

ほのか「え、ええ。ごめんね、だいき君。私、そんなつもりなかったんだけど」

だいき「な、なに!?俺の勘違いか……。で、でも!レイロウジムに挑戦するんだろ? レベル上げにはもってこいだと思わないか?」

ほのか「それはまあ、そうだけど」

だいき「じゃあ折角だし勝負しようぜ!さっき言ったジムの挑戦権はどうでもいいからよ。な!頼むよー」

れおん「いいんじゃないか?ほのかちゃん。他のトレーナーとの勝負は貴重だ。どんな受けていって、知り合いも増やした方が今後役に立つぞ」

ほのか「……そうだね。うん、いいよ、だいき君。勝負しよ！」

だいき「やった！ありがとう！じゃあ同じタイミングで橋に行こう！」

ほのか「わかった」

二人「せーのっ！」

二人は同時に橋に入った

だいき「よし！勝負開始だ！」ダツ！

だいきは奥へと駆けていった

ほのか「あ！だいき君！……行っちゃった」

れおん「せわしないやつだな。まあ、今も待つててくれてたしこっちは自分のペースでいこう。ほのかちゃん、トレーナーとどんどん戦うといい」

ほのか「うん！お願い、ミミツキュ！」

ミミツキュ「ミツキュ！」

ほのか「連戦だよ！頑張ろう！」

ミミツキュ「ミツキュ！」

男性「あれ、ミミツキュ！珍しいね。トレーナーさん？」

ほのか「はい！あの、バトルを申し込んでもいいですか？」

男性「もちろん！ダブルバトルでいいんだよね？」

ほのか「はい！お願いします！」

男性「よし、いくよ！ズバット！ダンバル！」

ほのか「もう一匹出さないと。ムンナ、起きてる？」

ムンナ「ムナ？」

ほのか「よかった、起きてた。ムンナ、バトルだよ！」

ムンナ「ムナ！」

ほのか「ミミツキュ！ダンバルにかけうち！」

ミミツキュ「ミツキュ！」

ミミツキュの影がのび、ダンバルを攻撃した

ダンバル「ダン！」

男性「ミミツキュは厄介だね。ズバット、ミミツキュにつばさでうつ！ダンバル、ムンナにとっしん！」

ズバット「ズバ！」

ダンバル「ダン！」

ほのか「え、同時!? えっと、ミミツキユ、ズバットにシャドークロー! ムンナ、さい
みんじゅつ！」

ミミツキユ「ミツキユ！」

ズバット「ズバー！」

ムンナ「ムナア！」

ダンバル「ダン？ダン！」

ムンナ「ムナ！」

催眠術は外れ、とっしんに当たってしまった

男性「危ない、催眠術を使ってくるのか。ズバット、ムンナにきゆうけつ！」

ほのか「当たらなかつたか、残念だね、ムンナ。サイケこうせん！」

男性「まずい！ダンバル、ズバットをかばえ！」

ダンバル「ダン！」

ダンバルはムンナの攻撃を代わりに受けた

ズバット「ズバ！」

ムンナ「ムナア！」

ズバットはムンナに噛みついた

ほのか「ええ!?!そんな事できちゃうの!?!ミミツキュ、ズバットにシャドークロー!」

ミミツキュ「ミツキュ!」

ズバット「ズバー!」

ほのか「ムンナ、大丈夫? つきのひかり!」

ムンナ「ム……ナ」パアアア

光を浴び、ムンナの体力は回復した

男性「自己回復か。どちらも厄介だね。ダンバル、ムンナにとっしん！ズバット、ムンナにかみつく！」

ほのか「じゃあ、ミミツキュ！ズバットの前に出て！攻撃を受けてもいいからシャドークロー！ムンナ、そこにサイケこうせんを合わせて！」

ミミツキュ「ミツキュ！」

ズバット「ズバ!？」

ズバットはミミツキュにかみつき、ミミツキュの人形の首が折れた

ズバット「ズバー！」

ミミツキユのシャドークローはズバットに当たった

ムンナ「ムナア！」

そこにムンナのサイケこうせんも飛んでいく

ズバット「ズバ……」ドサ

ダンバル「ダン！」

ムンナ「ムウ！」

ダンバルのどつしんはムンナに当たった

男性「流石にズバツトは耐えられなかったか！ダンバル、ムンナにとつしん！」

ダンバル「ダン！」

ほか「ミミツキュウ！かげうちでどつしんを妨害して！」

ミミツキュ「ミツキュ！」

ダンバル「バル……」

ほのか「ムンナ、サイケこうせん！ミミツキュ、シャドークロー！」

ムンナ「ムナア！」

ミミツキュ「ミツキュ！」

ダンバル「バル……」ドサ

男性「俺の負けだよ。凄いね。ダブルバトルに慣れてないみたいだったけど、途中で
らしっかりできてたよ」

ほのか「本当ですか？ありがとうございます！」

れおん「よかったぞ、ほのかちゃん。ダブルバトルの感覚掴めたか？」

ほのか「少しわかった。かばうとかできるんだね。交互に見て指示を出さないといけ
ないから、かなり大変だよ」

れおん「そこは慣れないと大変だよな。今の感じでいいと思うぞ」

ほのか「よし、この調子でいこう！」

30. バトル大橋2

三十分後

ほのか「これで九戦が終わったね。ミミツキユ、ムツクル、お疲れ様」

ミミツキユ「ミツキユ！」

ムツクル「クルー」

れおん「ミミツキユは最初から戦ってるが疲れてなさそうだな。体力は充分って感じ

だな」

ほのか「でもミミツキュ、流石に疲れたんじゃない？残りはもう大丈夫だから、ポールの途中で休んでいいよ」

ミミツキュ「キュ」コク

れおん「お、あそこで休憩してるのだいじゃないか」

ほのか「本当だ。おーい、だいきくーん」

だいき「ん？お、ほのか、れおんさん。二人もここまで来たんだな。俺はもう十戦終

わったぜ。今はポケモン達を休ませてるんだ」

ほのか「え!? 早いね! まだ私九戦だから足りないわ」

だいき「この奥に一人いるんだが、あの人がかなり強かったぞ。もしバトルするなら気をつけていけよ。俺、負けちまったからな」

ほのか「う……。そう言われると怖いなあ。でも、やるだけやってみようかな」

だいき「勝てたら相当凄いなと思うぞ。頑張れよな!」

ジュプトル「ジュプ!」

ヘイガニ「ハイ！」

れおん「お、ヘイガニじゃないか。水タイプ持ってたんだな」

だいき「そうなんです。ジュプトルは草タイプで、炎タイプが弱点だからそれをカバーするために水タイプを捕まえたんです。こいつ、中々頼りになるんですけど、れおんさんから見るとどうですか？」

れおん「ふむ……、ヘイガニ、少し触らせてもらおうぞ」

ヘイガニ「ハイ？」

れおん「……なるほどな。いい育て方だと思うぞ。甲殻の硬さやハサミにも問題無
さそうだ。それに、もう少しで進化しそうだな」

だいき「本当!? やったな、ハイガニ! お前もう少しでシザリガーになるってよ!」

ハイガニ「ハイハイ!」

ほのか「流石れおん君。やっぱり水タイプは詳しいんだね」

れおん「まあな。さて、俺達は奥に進むか。その強いって人と戦ってみよう。もし負
けても何か学べるものがあるはずだ。それに、だいきも負けたんならおあいこになるし

な」

だいき「ええ?!れおんさん、最後の一言いらない！」

れおん「え?す、すまない。嫌だったか。悪い」

だいき「ま、まあ最初に言ったのは俺だからいいけどさ、そんなはつきり言わなくて
も」

ほのか「ごめんね、だいき君。れおん君に悪気は無いから許してあげて。それじゃあ
行ってくるね」

だいき「おう！頑張れよなー！」

れおん「強いやつか。ここら辺を取り締まってる人とかだろうか？」

ほのか「自信無いなあ。だいき君達強そうだったのに、負けちゃったなんて」

れおん「あまり嫌な方向に考えないほうがいいぞ。それに、俺の見解だと、だいきとほのかちゃんほっぽ同じ強さだ。だから、だいきとポケモンが違うほのかちゃんなら、もしかしたら勝てるかいい勝負をするかもしれないだろ？」

ほのか「そうかなあ？」

れおん「ダブルバトルの感覚は掴めてるんだ。後はそれをどんどん実戦で活かしていくだけだ。頑張れよ」

ほのか「う、うん。……あれ？あの人、ポケモン連れてる。もしかして」

男性「む？お主もバトルか？」

ほのか「あ、はい。忙しくなければ、お願いしたいのですが」

男性「よかろう。だが、わしは強いぞ。先程の少年も悪くなかったが、わしには勝てなかったようだ。女の子相手は気が引けるが、手は抜かん。全力でかかってくるのだ。行け、カポエラー、ハッサム！」

カポエラー「カポ！」

ハツサム「ハツサム！」

「ほのか「うわ、強そうなポケモン達だわ。でも、相性は悪くない。お願い、ムツクル
！ヒー君！」

ムツクル「クルー！」

ワカシャモ「シャモ！」

男性「相性は悪いようだな。だが、それだけが勝負の全てではないぞ！カポエラー、ムツクルに岩石ふうじ！」

カポエラー「カポー！」

ガラガラ！

ほのか「ムツクル、はがねのつばきで砕いて！ヒー君、ハツサムにニトロチャージ！」

ムツクル「クルー！」

ドガアン！

ほのか「そのままカポエラーにつばきでうつ！」

カポエラー「カポー！」

ワカシャモ「シャモー！」

男性「カポエラー！くっ！ハツサム、まもる！」

ハツサム「！」ガン！

ハツサムはワカシャモの攻撃から身を守った

男性「カポエラー、ワカシャモにまわしげり！ハツサム、ムツクルにきりさく！」

カポエラー「カポ！」

ほのか「ヒー君、にどげりに対応できる!?ムツクル、電光石火で避けて！」

ワカシャモ「シャモ、シャモ！」

ワカシャモはまわしげりを蹴り返した

ムツクル「クルー！」

男性「ハツサム、ムツクルを逃すな！追うんだ！カポエラー、負けるんじゃないぞ、まわしげりを連続で出すんだ！」

カポエラー「カポ！」

ワカシヤモ「シヤモー！」

ハツサム「ハツサム！」

ムツクル「クルー！」

ハツサムはムツクルに追いつき、きりさくを繰り出した

ムツクル「クルー！」

ほのか「二人とも！ヒー君、ハツサムにもう一度ニトロチャージ！ムツクル、そこから立て直してカポエラーにつばさでうっ！」

ワカシャモ「シャモー！」

ムツクル「ピイイイ！」

男性「攻撃を合わせるんだ！ハッサム、ワカシャモにきりさく！カポエラー、ムツク
ルに岩石ふうじ！」

ハッサム「……サム！」ズバツ！

ワカシャモ「シャモー！」

ワカシャモの攻撃が当たる前にハッサムがきりさくを繰り出した

ほのか「嘘!?!ヒー君！」

カポエラー「カポツ！」

ガラガラ！

ほのか「ムツクル、そのまままで避けられる!?!あなたならできるわ！」

ムツクル「ピイイイー！」

ムツクルは岩を全て避けた

カポエラー「カポー！」

男性「何と！」

ほのか「ムツクル、もう一度カポエラーにつばさでうつ！ヒー君、負けないでニトロ
チャージ！」

ワカシヤモ「シャモー！」

ハツサム「サムー！」

男性「押されておるか。カポエラー、みきり！」

カポエラー「カポ！」

カポエラーはムツクルの攻撃をみきつた

男性「カポエラー、岩石ふうじ！ハツサム、バレットパンチ！」

カポエラー「カポ！」

ガラガラ！

ムツクル「クルー！」

ハッサム「サム！」

ワカシャモ「シャモ！」

ほのか「ヒー君、ムツクル！立てる!?!」

ワカシャモ「……シャ、シャモ！」

ムツクル「ピイイ！」

「ほのか「よかった！ヒー君、ハツサムににどげり！ムツクル、カポエラーに電光石火！」」

男性「ハツサム、れんぞくぎりで押さえ込め！カポエラー、みきり！」

ワカシャモ「シャモ！シャモ！」

ハツサム「サム！サム！」

カポエラー「カポ！」

カポエラーはムツクルの攻撃をみきった

男性「ハツサム、バレットパンチ！カポエラー、まわしげり！」

ハツサム「サム！」

ワカシヤモ「シヤモー！」ドサ

カポエラー「カポツ！」

ムツクル「クルー！」ドサ

ほのか「ああ！二人ともやられちゃった」

男性「わしの勝ちのようだな。女の子にしては中々やるではないか。じゃが、少しポケモン達の強みをまだよくわかっておらんようだな。ムックルは飛ぶのが得意な事をわかっておるようだが、ワカシャモの方はわかっておるか？」

ほのか「あ、ヒー君の強みか。うーん……」

男性「わしの見立てでは恐らく、走る事や蹴り技などが得意なように見えた。得意な事は同じポケモンでも、一匹事で違う。そこを伸ばしてやるのも大事な事。いい勝負だったぞ」

ほのか「なるほど。ご教授ありがとうございます！」

男性「うむ、いい子だな。先程の少年はわしの話が少しうわの空だったようだからな。人の話を聞くのは大事な事だ」

ほのか「あ、あはは。そうですよね」

男性「レイロウジム、頑張るんだぞ。それじゃあな」

れおん「あの人、中々やるな。いいトレーナーじゃないか。ほのかちゃんも学べる所があつたみたいだしな」

ほのか「うん。怖いと思ってたけど、アドバイスしてくれて応援もしてくれたの。

思ってたより優しくて少し驚いちやった。だいき君の所に戻ろっか」

31. レイロウシティへ

その後

だいき「お、戻ってきたか、ほのか。それでどうだったんだ？」

ほのか「私も負けちゃった。いい勝負だったとは言われたんだけどね」

だいき「ほのかはワカシャモいるから有利なんじゃないかと思つてたけど、負けちゃったか。まあ仕方ないよな。それじゃあ結果発表だな。俺から言つたほうがいいよな？」

ほのか「べ、別に私からでも平気だよ。恥ずかしくはないし」

だいき「な、なに!? そんなに自信があるって事なのか……」

ほのか「え? そ、そういうわけじゃないよ。でも、負けたのは事実だからね。しっかりと次に活かさない」と

だいき「真面目だなあ、ほのかは。まあ、いいけどよ。俺は十戦中四敗だな。最初と最後で増えちやっただよな。ほのかは?」

ほのか「私は三敗だね。えへへ、私の勝ちだね」

「だいき「くそー！ギリギリ負けか！ほのかはバトル好きなのか？」

ほのか「物凄く好きってわけじゃないんだけど、今は私の夢を探しててそれを見つけるためにいろいろな事やりたいんだ。その一つって感じかな」

だいき「夢か……。へへ、いいじゃん。俺はこの地方のジムを制覇して、ポケモンリーグに挑戦するんだ！そうして四天王やチャンピオンを倒して、俺の事を世界に認めてもらうんだ！」

ほのか「だいき君は夢がはっきりしてるんだね。カッコイイよ」

だいき「え……。ほ、本当か！ありがとな、ほのか」

れおん「俺達はこの後レイロウシテイに行くが、だいきはどうするんだ？まだここで修行するのか？」

だいき「俺もこれからレイロウシテイに向かおうとしてたんです。あ！ねえ、れおんさん、ほのか！俺も一緒に行ってもいい？いや、いいですか？」

れおん「俺は構わないぞ」

ほのか「私も大丈夫。だいき君、少しの間よろしくね」

だいき「やった!!れおんと一緒に旅できるなんて、友達にも絶対に自慢しないと！」

れおん「俺はそんなに有名なのか？自分じゃあわからないんだがな」

だいき「そうなの!?!だって、トップトレーナーだよ？たった一人にしか任されないし、実力だって凄いでしょ？ターナさんとかエレインさんとかテレビや雑誌でもよく見るじゃん」

れおん「ハハ、あの二人は別だろ。そういう職業でもあるからな。俺はただのトレーナーだよ」

ほのか「エレインさん……。聞いた事ある名前……」

だいき「ほのか、知らないのか？電気タイプのトップトレーナーで、呼び名は霹靂の

エレイン」

れおん「俺、あの人の事少し苦手なんだよな。職業はモデルさんだ。だから雑誌やテレビによく出てるんだ」

ほのか「もしかして、髪が黄色がかってて長いツインテールの方ですか？」

れおん「そうそう。その人であってるぜ」

だいき「れおんさんはやっぱり水タイプ使いだから苦手なの？」

れおん「そういうのは関係ないと思うが、俺はあの人の元気はつらつ！って感じで周

りの人を振り回してくるのがどうもな」

ほのか「確かにれおん君はそういう人苦手そうだもんね」

だいき「それじゃあこのままレイロウシティにゴー！」

ほのか「ゴ、ゴー！」

れおん「ほのかちゃん、少し明るくなつたな。だいきのおかげなのか？ やつぱり同年代の方が親しみやすいよな」

数時間後

れおん「さて、奥に見えてきたぞ。あのビルが立ち並んでるのがガルドア地方一の大都市レイロウシティだ」

二人「うわあ〜」

れおん達が歩く先に見えるのは、山や自然の景色とは違うビルが立ち並ぶ景色

ほのか「私、この街はテレビや話で聞いてただけで実際に見るのは初めてだよ！」

だいき「俺も！いやー、都会って感じだなー！俺の住んでるギツタンシティとは違うなー！」

ほのか「れおん君、早く行こう！」

だいき「そうだよ！俺、ワクワクして待ちきれねえよ！ダツシユだ、ダツシユ！」

れおん「おいおい、そんなに焦らなくても街は逃げたりしないんだぞ」

ほのか「ほら、行こうれおん君」

ほのかはれおんの手を取った

だいき「じゃあ俺、背中から押すね！」

れおん「ええ。ちよ、ちよつと。俺は別に走れるからな」

二人「ゴー！」

レイロウシティ

ガルドア地方一の大都市。他地方からの観光客や地方最先端の医療技術や商品があるため、地方内からもたくさんの方がやってくる。街はとても広く、ジム、コンテスト会場、港、水族館など様々な遊び場もあるため、一日では回りきれない。また、街の中では原則ポケモンを連れて歩く事は禁止されている。

れおん「たくっ！そんなにはしゃいでよお。そんなにここが楽しみだったのか」

ほのか「うん！子どもの頃から行きたかったんだ」

だいき「楽しみに決まってんじゃん！俺、住むならやっぱりレイロウシティがいいって思ってるんだ！」

れおん「まあ、気持ちは分かったが、まずはポケモンセンターだ。そこでポケモン達の回復と宿の確保だ」

二人「はい」

ポケモンセンター

ジョーイ「はい。ポケモン達をお預かりしました。しばらくお待ちくださいね」

プルプル プルプル

だいき「ん？ほのか、携帯が鳴ってるぞ」

ほのか「あ、本当だ。誰からだろう？あ！ターナさんだ！」

だいき「えええ!?ターナさんって、あのターナさん!?」

ほのか「そうだよ。友達になったの。待ってて、だいき君、れおん君」

れおん「おう」

だいき「やつぱりれおんさんと旅してるから、トップトレーナーの人とも知り合いになるんだ。いいなあ、ほのかは。れおんさんとほのかはどうやって知り合ったの？」

れおん「俺達はギタンシティでエアームドに襲われてるほのかちゃんを助けたのがきっかけだな。その時のほのかちゃんはトレーナーになったばかりでな、ポケモンもほぼ持っていなかったんだ。」

その後ジャーバ博士からアチャモを貰って、偶然博士に呼ばれていた俺がほのかちゃ

んにいろいろ教えてほしいというほのかちゃんのお願いで一緒に旅してたんだ」

だいき「へー、最初からエアームドに襲われるなんてほのかもドジだなー。刺激しなければ襲ってくるなんてないのに」

れおん「まあ、仕方ないだろ。そういうだいきはどうなんだ？ギツタンシティから始まったんだろ？」

だいき「俺は特に変わった事なんてないよ。ほのかと同じで、ジャーバ博士からキモリを貰ってここまで旅してきただけ。あ！俺、あのレイロウビスケット食べたい！れおんさん、奢って！」

れおん「え？ま、まあ少しならいいけどよ。ほら」

だいき「おお！やった！断られるかと思っただけと言ってみるもんだね！ありがとう！」

れおん「やれやれ、だいきはまだまだ子どもだな」

数分後

ほのか「ごめん、少し話すぎちゃったかな。って、だいき君何食べてるの？」

だいき「おお、お帰り。これ、そのカフェで売ってたレイロウビスケットだけ。ほ

のかにもやるよ」

ほのか「あ、街のお土産とかにもよくあるやつだね。ありがとう、だいき君。………
美味しい」

れおん「それで、ターナさんからの電話は何だったんだ？」

ほのか「あ、そうだった。あのね、今お仕事でこのレイロウシティに来てるんだって。それでお土産とかを聞かれたんだけど、私達もここにいる事を言ったら大喜びで、ポケモンセンターにすぐ行くって言ってたよ」

れおん「なるほどな。ほのかちゃんはターナさんに好かれたもんな。これは言葉通り
すぐに来そうだな」

だいき「え、ええ！ターナさんに会えるの!?うわ、めっちゃくちゃ緊張する」

れおん「俺の時はそんな事無かったじゃないか。まあ、俺はそれでいいんだけどよ」

だいき「やっぱりテレビに出てるから俺の中では格が違うんだよね。れおんさんももちろん凄いいんだけど、やっぱりターナさんとかの方が緊張する」

ほのか「大丈夫だよ、だいき君。ターナさんはとっても優しい人なんだよ」

ターナ「ありがとう、ほのかちゃん！」

ほのか「キャアツ！び、びっくりした。というか、もう来たんですか!？」

だいき「あ、ああ、ほ、ほほ本物だ」

れおん「やあ、ターナさん。久しぶりってほどじゃないけどな」

ターナ「そうね。元気だったみたいでよかったわ。お仕事がもうすぐ終わりで電話したの。もうレイロウシティまで来てたのね！あら？こっちの男の子はこの前見なかったわ。初めまして」

だいき「は、はい。少し前のバトル大橋でほのか達と友達になっただいきと言いますよ、よろしくお願いします」

ターナ「ふふ、だいき君ね、よろしく。知ってるかもしれないけど、私はターナよ」

だいき「もも、もちろん知ってますよ！れおんさんだけでも驚いたのに、まさかターナさんまだ会えるなんて！」

ターナ「そんな固くならないでいいのよ。それに、そこまで有名でもないれおんさんまで知ってたなんて凄いいじゃない。トップトレーナーの事詳しいのかしら？」

だいき「はい！俺、ポケモンリーグに出るのが今の夢なんですけど、それが終わったから、次はトップトレーナーの人達といつかバトルしたいと思ってるんで！」

ターナ「あら、凄いじゃない。なら、楽しみにしてるわね」

れおん「まさかの宣戦布告を受けるとはな。待つてるぞ、だいき」

ターナ「それと、れおんさん？私、君に電話したのにずっと出ないなんてどうしたの？」

れおん「え？俺に電話？……あ、マナーモードになってて気付かなかった。すまない、ターナさん」

ターナ「もう！まあ、いいわ。これからは何かあったらほのかちゃんに電話するから」

「ほのか「はい。いつでも待ってますね」

ターナ「ここにいるって事はガーネジムには勝ったのね。おめでとう！このレイロウジムは少し特殊でダブルバトルよ。ダブルバトルは二人とも慣れてるかしら？」

ほのか「はい。バトル大橋で感覚を掴んできました」

だいき「ほのかと勝負したんですけど、俺僅かで負けちゃったんです」

ターナ「へえ！やるじゃない、ほのかちゃん。後は水タイプの対策があればバツチリかしらね。まあ、れおんさんがいるしそこは大丈夫かしらね」

れおん「ん？俺は特に何も教えてないぞ」

ターナ「ええ?! いいじゃない、少しくらい教えてあげても！」

れおん「いやいや、ジムバトルをやるのはほのかちゃんだ。俺が教えてもいいが、それだとほのかちゃん自身の力になりにくいだろう。だから、俺がやるのは見せるだけ。後はそれをほのかちゃんがどう感じるかだ」

ターナ「むむ…。正論ね、れおんさんの言う通りだわ」

ほのか「まあ、れおん君も一緒にパーティーメンバーを考えてくれたり、どんなタイプの技を覚える事が多いとかも教えてくれますし、私はそれだけで十分ですよ」

ターナ「そうだったの。教えられる所はしっかり教えてるのね（あら？れおん君？ふふ、いつの間に……）」

32. 水族館

ターナ「ほのかちゃんとだいき君はこのレイロウシティに来るのは初めてかしら？」

二人「はい」

ターナ「それなら丁度よかったわ。この後、私と一緒に観光しない？いろいろな案内するわよ」

ほのか「え!?!いいんですか、ターナさん!ぜひしたいです!」

だいき「ほ、本当か!?!やった!超有名人と一緒に行動できる!」

ターナ「れおんさんはどうしますか？またあそこに行くんですよね？」

れおん「そうだな。ここに来たらあいつに会っておかないとだからな。俺は悪いが別行動にさせてくれ。ターナさん、二人ははしゃいで大変だと思うぞ？」

ターナ「大丈夫よ。可愛い弟と妹ができた気分だわ。これくらい何ともないわ」

ほのか「あそこってどこの事？れおん君」

れおん「この街にはジムリーダーが運営してる水族館があつてな。そこにはたくさんの水ポケモン達が展示されてるんだが、その中に俺がかつて手持ちに入れていたポケモ

ンがいてな。この街に来るたびに俺はそいつに会いに行ってるんだ」

だいき「え？大事な手持ちなのにどうして手放しちゃったの？」

ターナ「ふふ、そこはあまり踏み込まないであげて。れおんさんもかなり悩んで、そうせざるを得なかった事なのよ。私はれおんさんの判断は正しいと思ってるわ」

ほのか「そっか。でも、ちゃんと会いに行ってるなんて優しいんだね、れおん君」

れおん「まあな。さて、俺はもう向かうよ」

ターナ「あ、待って、れおんさん。私達も水族館に行くわ。そこまでは一緒に行動し

ましよう」

れおん「ああ、わかった。それじゃあ行こうか」

レイロウシテイ

ほのか「それにしても人が本当に多いね。今までの街とは全然違う」

だいき「そうだよな。これじゃあすぐに迷子になりそうだ」

ターナ「初めて来ると人の多さに圧巻するわよね。私も未だに慣れないわ」

れおん「この人の多さだからな。原則はポケモンを連れて歩くのは禁止されてるんだ。ポケモン達まで迷子になったら、手がつけれないからな」

ほのか「確かに。それに、人だけでも多いのに全員がポケモンを連れて歩いてたら道路が埋まっちゃうよね」

だいき「でも、なんだかいろいろ見られてるな。あ、ターナさんがいるからか！結構目立ってるのか」

ターナ「そのようね。私はもう慣れてしまったけど、二人はごめんなさいね。どうか気にしないでくれると助かるわ」

れおん「ターナさんの言う通りだな。普通に喋りながら行こうぜ」

レイロウ水族館

港の近くの公園に白い建物があり、近くにはラブカスの銅像やラプラスの船などが置いてある

だいき「ここがレイロウ水族館！テレビとかにもよく出てるよな！」

ターナ「私も久しぶりにきたわね。それじゃお金を払いにいきましょう」

れおん「すまない。大人二人と子ども二人だ」

受付「あ！れおんさんですか。それでは割引させていただきます。四人で2400円になります」

ターナ「れおんさん、私が払うわよ」

れおん「いや、気にしないでくれ、ターナさん。ターナさんはこの後二人のお世話が
あるんだからそのお礼だと思ってくれ」

ターナ「そう？それじゃあお言葉に甘えるわね」

だいき「むう……。子ども扱いされるのは嫌だな」

ほのか「でも私達は実際まだ子どもだよ？」

だいき「そうだけどさ、れおんさんだってそこまで歳離れてないじゃん」

ほのか「仕方ないよ。れおん君は凄い人なんだから」

だいき「実力があれば歳はあまり関係ないのか……」

れおん「どうした、二人とも。ほら、チケットだ」

ターナ「これで中に入れるわよ。行きましよう」

中には大きな水槽の中に、たくさんの水ポケモン達が泳いでいた。コイキング、トサキント、ヨワシ、キバニアなど群れをなすポケモン達も多く泳いでいる。他にも様々な水槽があり、ポケモン達が住みやすいようになっていいる。

ほのか「わあ〜！綺麗。海の中が再現されてるみたい」

ターナ「そうよね。こうやってポケモン達が泳ぐ姿を見られるのはあまり無い事だからそれも珍しいわよね」

だいき「いろんな所にも水槽がある。あ、写真撮つていいのかな？」

れおん「いや、流石に写真はあまり撮らない方がいい。あっちも驚いてしまうからな。俺達は見てるだけにしておこう」

しばらくして

??? 「あ！れおん君、見つけました！」

れおん「よお、みすず。また来たぞ」

黒のショートカットの女性がれおん達の前にやってきた

みすず「あ！ターナさんもいらつしやってたんですね！ありがとうございます！あら？そちらの方達は？」

ほのか「初めまして！ほのかといいます」

だいき「こんにちは。俺はだいきっていうんだ。みすずさんって、レイロウジムリーダーの？」

みすず「ええ、私はレイロウジムリーダーみすず！二人はジムチャレンジかしら？」

二人「はい！」

ターナ「今はただ観光してるだけよ。チャレンジはまた後日になるわ」

みすず「そうですか。チャレンジ楽しみにしてるね。れおんさん、マントインに会いに来られたんですね？」

れおん「ああ、また頼む」

みすず「最近元気なんですよ。ぜひ見ていつってください。ターナさん達もきていただいて大丈夫ですよ」

ターナ「れおんさん、私達もいいかしら？」

れおん「俺は構わないさ。来るか？」

だいき「うん！行きたい！」

ほのか「マンタインの事だったんだ。どんな子なんだろ」

33. マンタイン

だいき「ここって水槽の上？」

みすず「はい。ここでポケモン達の様子や体調管理などをしているんです。普通はス
タッフ以外入れないのですが、れおんさんは特別なんです」

ターナ「私も何度か水族館には来たけどここに来るのは初めてね」

ほのか「上の方ってこんな感じになってたんだ」

みすず「マンタインがいる水槽はこっちになります。ついてきてください」

数分後

みずず「つきましたよ。呼んでくるので待っててください」

そこにはマンタインの群れが泳いでいる水槽があつた

だいき「わあ。マンタインがたくさんいる！上から見ると迫力あるな」

ほのか「あ！翼にテツポウオがくつついてる。一緒に動くって本に書いてあつたけどこんな感じになつてたんだ」

れおん「……………」

ターナ「れおんさん、大丈夫？あまり思い詰めるのもよくないわ。マンタインもれおんさんのそんな顔見たくないはずよ」

れおん「ああ……。そうだな。ありがとう、ターナさん」

ターナ「気にしないで。あれは仕方ない事よ。どうか自分を責めないで」

れおん「それはもう大丈夫だ。さて、マンタインも元気らしいからな。また成長しているといいんだが」

みすず「お待たせしました。ほら、マンタイン、れおんさんよ」

みすずの近くには一匹のマンタインがいた

れおん「よお、久しぶりだな、マンタイン。元気そうだな」

マンタイン「キュツ！キュウー」

バシヤツ！バシヤツ！

れおん「ハハ、はしゃいでるな。俺も会えて嬉しいぞ。少し大きくなったんじゃない

か？」

マンタイン「クウッ」

だいき「マンタインってこんな鳴き声だったっけ？ テレビだともっと違う鳴き方だった気がするんだけど」

みずず「あれは甘えてる時の鳴き方なのよ。マンタインは様々な声を発してコミュニケーションを取るの。仲間達とする会話と今みたいに甘えてる時では鳴き方は全く変わるわ。まあ、ああやって甘えてる時の声なんてかなり珍しいから、知らなくても無理はないわ」

ほのか「へえ。マンタインって頭いいんですね」

ターナ「れおんさんのマントインは甘えんぼうなの。久しぶりに会えて嬉しいのね。羨ましいわ。私のマントインはあんな鳴き方しないもの」

みすず「個体差がありますからね。それは仕方ないですよ」

ターナ「……元気になってよかったわ。一時期は本当に駄目なんじゃないかと思つたもの。仲間達とも仲良くやつてるのかしら？」

みすず「はい。最初は全く寄ろうともしませんでしたけど、最近はよく遊んでるのをみますよ。初めてここに連れてこられた時とは大違いです」

ほのか「……なにかあつたんですよね。気にはなりますけど、あまり突つ込むのもよくないですよね」

だいき「でも、あんなに甘えてるしお互い会いたがつてるなら、また手持ちに戻してもいいんじゃないの？なんでそうしないんだろう」

みすず「ほんの少しだけならお話ししますね。れおんさんのマンタインはある事件がきっかけで泳ぐ事をやめてしまったんです。泳ぐ事が怖くなった、と言った方がいいですね」

ほのか「マンタインが泳ぐ事を怖くなった？そんな。だって、マンタインとかの魚のポケモン達は泳いでいないと命に関わるって本に書いてありました」

ターナ「その通りよ。でも、れおんさんのマンタインはそれをやめた。まるで、生きる事を諦めたように…ね。あんなに甘えているれおんさんの指示も聞かず、餌も食べない。それでマンタインは自分からどんどん弱っていったの」

だいき「そんな……。だから、れおんさんはマンタインをこの水族館に？」

みすず「いえ、れおんさんがここを訪れたのはほんの偶然だったんですよ。泳がなくなったマンタインに、少しでも海の景色を見させてあげようとして、ここに連れてきたんです。」

それをみた私がれおんさんを説得してここに残したんです。絶対にこの子を見捨てないとれおんさんに誓って」

ほのか「じゃあ、だいき君が言ってるようになって元気になったのに戻さないんです

か？」

みすず「おそらく手持ちに戻さないのは、マンタインの事を考えてだと思えます。今は元気ですけど、もし手持ちに戻してまた元気がなくなったら、れおんさん一人では中々キツイものがあります。

バトルも前みたいにはできないだろうし、泳ぐ事もようやくできるようになったくらい。それなら、ここにいた方がまだマンタインのためになると考えているのかもしれないです」

だいき「なるほど。確かに突然また泳がなくなったら、れおんさんも気が気じゃないよな」

ほのか「ゆっくりでも治っていつてるみたいだから、ここの方がマンタインにもれお

ん君にも安心なんだろうな」

みすず「私が毎日必ずマンタインに泳ぎ方や少しでもなにか技を出させるようにして
るんです。動くなら少しでも動かした方がマンタインにとって大切な事ですから」

ターナ「そのおかげでマンタインも元気になったのね。ありがとう、みすずちゃん」

みすず「いいえ、私はただ放っておけなかったんです。とつてもいい子なのに、この
ままなんて絶対に嫌だと思って」

マンタイン「キュ」

ザバア!

れおん「おお、自分から上がってくるか。どうした? マンタイン」

マンタイン「クウ……」

れおん「……ああ、久しぶりにやるか。よいしょつと」

れおんは自分の方へマンタインを動かして、お互いの頭をくつつけた

マンタイン「クウ」

れおん「これが好きだったもんな。懐かしいなあ」

だいき「凄え。あれって何か意味あるの？」

ターナ「私も知らないわね。みすずちゃん、どうなの？」

みすず「あのマントインだけがやりたがるんですけど、頭をくつつけるとあの子落ちて着くみたいなんです。なんでかはわかりませんが」

ほのか「そうなんだ。でも、可愛い。私もやってみたいかも」

ターナ「気持ちわかるけど、今は二人だけにしてあげましょう。みすずちゃん、私達はそろそろ出るわ。ありがとう」

二人「ありがとうございます」

みすず「またいつでも来てくださいね。あ、もちろんジムでもお待ちしてますね」

だいき「ねえ、ターナさん。れおんさん置いてきちやったけどいいの？」

ターナ「ええ。元から一緒に行動するわけじゃなかったもの。それに、彼のモンスタールも揺れてたわ。きつとゴルダック達もマンタインに会いたがつてるんだわ。もう少しすると騒がしくなるだろうから、私達は先に街の観光しちやいましょう」

ほのか「わかりました。観光楽しみ」

34. 緊急会議

ブーツ！ブーツ！

ターナ「!?」

ほか「ターナさん、携帯から凄いい音が出てますよ」

だいき「なんかやばそうな雰囲気ですね。大丈夫ですか？」

ターナ「ご、ごめんね。ちよつとお話するわね。はい、ターナです。……緊急会議!?わ、わかりました！場所は……はい。いつもの所ですね。すぐ向かいます」

だいき「ほのか、どうやら一緒に観光は無理みたいだな」

ほのか「みたいだね。仕方ないよ。忙しいのはわかってるもん」

ターナ「ごめんなさい。トップトレーナーの急な集まりができちゃって、これからすぐ向かわないといけないの。約束してたのに悪いんだけど、二人でなんとかなるかしら？」

ほのか「私達の事は気にしないでください。地図見ながら観光してますよ」

だいき「そうですよ。そんな謝らなくて大丈夫です」

ターナ「ありがとう、二人とも。それじゃあ、私は先に」

れおん「ターナさん！今の連絡あつたよな!? すぐに向かおう」

ターナ「ええ、私も今から向かおうとしてたわ。二人の事少し気になるけど」

れおん「確かに……。なら、少しだけなら来るか？場所はこの街にあるビルなんだ。一階で大人しくしてれば特に問題はなさそうだが」

ターナ「それもそうね。ほのかちゃん、だいき君、どうしたい？最近なにかと物騒でしょ？私達は子ども二人だけにするよりも、出来るだけ私達の手が伸ばせる所にいてく

れる方がありがたいんだけど」

だいき「どうする？ほのか。物騒なのは確かだもんな」

ほのか「じゃあ、そのビルで大人しく待ってますね。中でポケモンは出しても大丈夫ですか？」

れおん「問題ないぞ。まあ、大きなポケモンは駄目だが、そこは大丈夫だしな。それじゃあ、急いで向かおう。ターナさん、ほのかちゃんを頼んだ。だいきは俺の背中に乗ってくれ」

ターナ「まあ、それが一番早いわよね。ほのかちゃん、おいで。またピジョットに乗りましょう」

だいき「え？ポケモンって出しちゃ駄目だったんじゃないの？」

れおん「まあ、原則はな。今は少し急いでるんでね。まあ、空の移動だから他の人達に迷惑もかかりにくい。多めに見てもらおう。頼む、ペリツパー」

ペリツパー「ペリ？」

れおん「緊急事態だ。後で好きにしていいいから俺達を乗せてくれ」

ペリツパー「ペリペリ！」

ターナ「いつものビルまでお願いね、ピジヨット」

ほのか「またよろしくね、ピジヨット」

ピジヨット「ピジヨー！」

数分後

れおん「ペリツパー、あのビルの屋上に頼む」

ペリツパー「ペリー」

れおん「よつと、不安定で悪かったな。大丈夫か？だいき」

だいき「ううん！全く！ここって本部とかそういうやつ？」

ターナ「ええ。ここはトップトレーナー達を纏める作戦本部。ここに直々にポケモンリーグ運営の人達から連絡やメールが来るの。その内容をまとめて私達に指示を出す場所なの」

ほのか「うわあ……。なんか凄い所に来ちゃった。本当に私達なんかがいいんですか？」

れおん「本来は一般の人は立ち入り禁止だが、まあ二人とも俺の知り合いって事にしておく。そうすれば一階程度なら大丈夫なはずだ」

だいき「なんか緊張してきた」

ターナ「って、そんな悠長に話してる場合じゃないわね。まずはエレベーターで一階に行きましょう」

一階

受付「お待ちしております、れおん様、ターナ様。証明カードの提示をお願いします」

ターナ「よろしく」

れおん「はい」

受付「確認いたしました。あと、そちらの方達は？」

れおん「俺が今世話してる子ども達です。この街に一緒に来ていたのですが、最近物騒だからこの子達だけにしておけなくて、ここに連れてきたんです。変な子達じゃないから大丈夫だと思います」

受付「わかりました。お名前をお聞かせください」

ほのか「私、ほのかといいます」

だいき「俺、だいきです」

受付「ほのか様にだいき様ですね。それではこちらのカードを首にかけておいてください。それがここにいてもいいという証明となります。

しかし、ここ一階以外は動かないようにお願いします。自販機などでの飲食は自由ですし、ポケモンも一部を除きボールから出しても大丈夫です。よろしくお願いします」

ターナ「よかったわね。思ってたよりすぐに許してくれたわ」

れおん「そうだな。もつと色々手続きとかあると思つてた」

ほのか「れおん君達は会議にどれくらいかかりますか？」

ターナ「内容を知らされていないからなんとも言えないけど、普通ならすぐに終わるはずよ」

れおん「緊急会議は前にも数回あつたが、そんな何時間も話した記憶はない。長くて二時間くらいだろう。大丈夫か？」

だいき「まあ、二時間は少し暇だな。じゃあ、後で俺達のお願ひ事一つ聞いてよ。そんな大した事じゃないからさ」

れおん「わかったよ。それじゃあ大人しくしててくれよな」

ターナ「あと、私達以外のトップトレーナーの人達も来るから一応挨拶はしておいてね。怖い人もいると思うけど気にしないで」

ほのか「……そっか。ここってそういう場所だもんね」

だいき「ど、どどどうしよう。れおんさん達だけでもドキドキしたのに他のトップトレーナー達まで会うなんて、俺死ぬんじゃないかな?」

ほのか「大げさだよ、だいき君。挨拶だけだし、そんなお話するわけでもないんだからさ」

だいき「そ、そうだよな。挨拶だけ……挨拶だけ……。よし、落ち着こう。ふう……
ほのかはさ、れおんさんとターナさん以外のトップトレーナーは誰と会ったんだ？」

ほのか「私も全然会った事ないよ。あとはワীগさんだけだよ。ガーネシティで会ったんだ。あの街に住んで、れおん君の友達だったよ」

だいき「炎剛ワীগか！あの人、カツコよさそうだよな。ああいう熱い人、俺も好きなんだよな。でも、ほのかでも三人しか会った事ないのか。まあ、これから会う事になるわけだけど」

ほのか「まあね。でも、私は少し楽しみかな。どんな人なんだろうとか、見た目だけじゃなくてその人の優しさとかすごく興味あるの。今まで会った方達も優しかったか

ら、きっと他の人達も優しいんじゃないかなって勝手に予想してる」

そこに、紫色の髪がボサボサになっている男が来た

??? 「ん？なんだ、そのガキ共は。ここは一般立ち入り禁止だぞ。つて、証明カード。ほう、誰かの付き添いか？」

だいき「あ！こ、こんにちは！」

ほのか「こんにちは。私はほのかといって、こっちの男の子はだいき君といいます。私達、れおん君達に連れられて来たんです。驚かせてしまってすみません」

ジュード「あの青坊主にか。あいつ、いつの間にガキの面倒なんか見るようになったんだ。あいつ自身まだまだガキだろうが。おっと、俺の自己紹介をしねえとだな。俺はジュード。まあ、毒タイプのトップトレーナーをやってる。よろしく頼むぜ」

だいき「紫砕ジュード。凄い迫力……」

ジュード「けつ、こんなガキにすら知られるようになったか。ネットつてのは恐ろしいぜ。てめえらは今、旅してんだろ？せいぜいやりたい事を簡単にでもいいから見つけておくんだな。そうすりゃ、後はなんとかなる。あの青坊主が面倒見てんだ。どうとでもなる事もあるだろ」

受付「お待ちしておりました、ジュード様」

ジュード「おう、じゃあなガキ共。大人しくしてろよ」

ほのか「はい。お話ありがとうございました」

ジュードは受付を済ませ上に登っていった

だいき「うわあ、ジュードさんなんて生で初めて見た。テレビとかにもほとんど出た事なかったのに」

ほのか「そうなの？でも、確かに怖い顔してたね。ちよつとヤクザみたいって思った」

その時、緑の長い髪を束ねた女性が話しかけてきた

??? 「あら？こんな所に子ども？どうしたの？君達、迷子？」

ほのか 「こんにちは。私達、れおん君に連れられて来たんです」

だいき 「こんにちは。俺、だいきっていつてこっちはほのかといいます。あの、凜木のかなえさんですよ？」

かなえ 「あら、私の事知ってるの？うふふ、嬉しいわ。でも、そのお名前は少し恥ずかしいからやめてね。かなえで充分よ。それにしても、れおん君がこんな可愛らしい子ども達を連れてくるなんて。誰の子かしら？」

だいき「ぶふっ!!」

ほのか「え? どういう事ですか?」

かなえ「あら? 本気にされちゃったかしら? うふふ、冗談よ。れおん君の歳でこんな子どもができるわけないもの」

だいき「も、もう! ビックリしましたよ! やめてくださいよ」

かなえ「あら、可愛い。それじゃあよろしくね、ほのかちゃん、だいき君」

かなえは去っていった

ほのか「私、お母さんとお父さんの子なんだけどどういう事だったの？」

だいき「……………ほのかは知らなくていいぞ」

ほのか「???」

35. 会議2

二時間後、会議室内

ゆるいウェーブがかったピンクの髪をした女性が話していた

ファルミ「それでは緊急会議を始めさせていただきます。今回の件ですが、ご存知の方もいらっしゃると思います。各街で怪しいグループ達によるポケモンの操作の件についてです」

フェアリータイププロトプレナー、幻夢ファルミ

セイン「怪しいグループ？それは何ですか？私、初めて聞きました」

ベージユの長い髪をした男性が疑問を口にする

虫タイプトツブレナー、愛美セイン

グード「まあ、セインが知らないのも無理はない。そいつらは最近になって目撃情報、または暴動が起こり始めたのだからな」

オレンジの短髪の男性がセインの疑問に答える

地面タイプトツプトレーナー、盤核グード

ワীগ「数日前に俺の街にあるガーネ鉱山も、そいつらの仕業でめちゃくちゃになったんです。機械のようなものでポケモン達を操る事が出来るみたいです。操られるのは一部のポケモンのみで、対象になれば野生やトレーナーのポケモンだろうと問いません」

しおり「……それ……怖い」

腰まである長い黒髪をした女性が小さい声で言った

ゴーストタイプトツプトレーナー、影消しおり

かなえ「そうですよね。私のポケモン達も、もし操られてしまったらと思うと少し怖いわ」

ジュード「機械って言ってたな。それはどういったやつなんだ？」

ファルミ「それについてもお話しますね。こちらをご覧ください」

ファルミの後ろに映像が流れる

ファルミ「こちらはガルドア地方全体のマップです。報告では、今点滅している場所にそのポケモン達を操る機械が目撃されました。ハルヤタウン、下りの洞窟、オアシテイ、ガーネシテイ、ドン公園、ガジタウンです。」

さらに、オアシティではラミアという怪しいグループを束ねる人物がれおんさんにより報告されています。ここでは機械でポケモン達を操り、その隙にマージニア遺跡を荒らしたそうです。さらに、何かを調査した痕跡も見つかっています」

バロック「あれ？オアシティはターナさんが住んでる街じゃん。なんでれおんが報告してるんだ？」

黒いツンツン頭の男性が疑問にあげた

岩タイプトップトレーナー、岩城のバロック

ターナ「誠に申し訳ないのですが、その時私は仕事で街を離れていたんです。そのた

め警備が薄く、簡単に被害が出てしまったんです」

れおん「その時に俺が丁度オアシティにいて、被害は出たが騒動を抑えたんだ。その時にラミアってやつと少しだけ接触してな。まあ、俺の事を知っていたみたいですからすぐに逃げられたがな」

ミン「ふふ、れおん君を知ってるなんて珍しいのね。割と最近トップトレーナーになったばかりなのに」

藍色の髪をポニーテールにした女性が笑って答えた

エスパークタイプトップトレーナー、夢情ミン

れおん「ミンさん、それはどこかの赤髪が俺の宣伝しまくったから知り渡ったんですよ。余計なお世話つてもんです」

ワグ「お！読んだか？れおん」

れおん「反応しなくていいからな」

ファルミ「それと機械というのが見た目ではこのような形になっているそうです」

ファルミの後ろに機械の写真が映されている

れおん「色に違いはありますが、形は大体同じです。また、機械にはポケモンのタイプが書かれており、そのタイプを持ったポケモン達が操られ、暴れている事も判明しています」

シモン「ふむ。タイプ事にそれぞれの機械があると考えた方がいいね。今までに確認されたタイプはいくつあるのかね？」

白髪の男性が質問をした

氷タイプトップトレーナー、静積シモン

ファルミ「はい。不明な場所もありますが、判明しているのは炎タイプ、岩タイプ、ドラゴンタイプ、鋼タイプ、毒タイプとなっています。しかし、これらがタイプ事一つだ

けじゃない可能性も大いにあるので気をつけてください」

しょうや「おい、今ここにいないやつらはどうした？仕事かなにかか？」

スキンヘッドの男性が周りを見渡している

悪タイプトップトレーナー、滅勝しょうや

ファルミ「えっと、じゅんさんは店が忙しく来れないそうで、エレインさんもお仕事
だそうです」

バロック「あの二人は仕方ねえよな。今回はいるけど、いつもはターナさんもそつち

側だもんな」

ワーグ「リツキーの兄貴はまた修行ですか？」

ファルミ「りきやさんは連絡が取れなかつたのでジムに連絡した所、修行に行つたらしいのでそうみたいです。ですが、ドグラさんとジーニヤさんの連絡も無いんです。いつものお二人なら特に問題なく来るはずなんです」

しおり「……珍しい……」

ミン「私の知る限りでは初めてね。特にドグラさんは毎回来ていたのに」

シモン「そういえば、最近ドグラ君を見かけないのう。前まではよくわしのヒュールタウンに来ていたというのに」

ジュード「あの二人が連絡無し……。何か嫌な予感がするぜ」

れおん「ですが、あの二人はここの中でもかなりの実力者。大丈夫だとは思いますが」

ターナ「そうね。私達は何事もない事を願っていきましょう」

かなえ「ふふ、そんな心配しないの。あの二人が私達以外の誰かに負けるなんて私見た事ないもの。きっと申し訳なさそうに出てくるわよ」

「ファルミ」かなえさんはポジティブですね。ですが、私もそう思います。また、次に被害にあう街の予想とここ、レイロウシティが襲われた場合、大変な被害が予測されます。その対策も検討しましょう」

「ミン」(……………!!?)今……………何か見えた…。今見えたのは…ドグラさん？必死な表情をしていたように見えたけど……………」

36・ストラー団

その後

ファルミ「それではこれで緊急会議を終わります。ペアは決まり次第連絡をお願いします。また、先程のレイロウシテイを警備する案で出来ない人は私に声をかけてください」

ターナ「れおんさん、あなたはほのかちゃん達がいるから無理よね？」

れおん「ああ、そうだな。緊急以外では向かう事は難しいと思う。ファルミさんに報告しておこう。あの、ファルミさん」

ファルミ「はい。何でしょうか？れおんさん」

れおん「俺、実は今ある子と一緒に旅していてその子の面倒を見てやらないといけません。なので、先程のトップトレーナーが必ず二人この街に残るってやつには参加できないんです」

ファルミ「あ！先程下にいたほのかちゃん達の事ですよ？いい子達でしたねー。わかりました。それではれおんさんは含まない事にします」

れおん「ありがとうございます」

ワグ「えー、れおんは俺と組んでくれないのかよ」

れおん「悪いな。ほのかちゃん達の方が先にお願ひされてるんでね。まあ、緊急になれば流石にこつちに来るさ」

ワグ「まあ、仕方ねえか。俺はどうしようかな。兄貴と組んでもいいけど……」

バロック「ワグ、俺と組もうぜ！兄貴の下で修行した仲だろ？」

ワグ「おお！いいな、バロック！俺達の仲見せつけてやろうぜ！」

しょうや「お前達は組むんじゃねえ」

二人「え」

ジュード「お前達だとどっちも突っ走るだろうが。どっちか冷静になれる奴がいたほうがいい。ワーズ、てめえは俺と組むぞ」

ワーズ「ええ!? ジュ、ジュードさんと!?!」

ジュード「ああ? 何か文句あつか?」

ワーズ「い、いえ!! 俺、ジュードさんと一緒になれて嬉しいです!!」

バロツク「ワーグ、かわいそうだな」

ミン「バロツク君、よろしく」

バロツク「ミンさんか。へへ、よろしく」

しばらくして、一階

れおん「待たせたな。もう終わったぞ」

ほのか「あ、よかった。思ってたより長くて少し心配してたんだ」

だいき「れおんさん、遅い。待ちくたびれたじゃん！」

シモン「ほほ、子どもには少々つまらん時間だったのう。待たせてしまつてすまなかつたのう」

だいき「シモンさんだ！れおんさんつたらさつき、そんな長くないって言ったの嘘だったんですよ！」

れおん「悪かつたよ。あの怪しいやつら、ストラーク団について話してたんだ」

ほのか「ストラーク団？何？それ」

グード「先程の話し合いで名称をつけたんだ。怪しい集団、だからストラー団。今度からはその名称で呼んでいく。ほのか達も見つけたらすぐにれおんに伝えるんだぞ」

ほのか「なるほど。わかりました。説明ありがとうございます、グードさん」

ワーグ「おお、よかった、れおん。まだいたみたいだな」

れおん「ん？なんだよ、ワーグ」

ワーグ「この前の礼をしようと思ってたんだ。この後あいてるか？」

れおん「特になにもないからな。別に気にする事ないんだが」

ワグ「つてほのかちゃんもいるじゃん！よう！無事着いたみたいで何よりだぜ。こっちのガキは誰だ？」

だいき「……俺、だいきって言うんだ。ほのかとれおんさんとはバトル大橋で知り合ったんだ。よろしくな、ワグ」

ほのか「え？だ、だいき君？」

ワグ「……おい、随分舐めた口聞くな、だいき。いきなり呼び捨てはねえんじゃねえのか？」

だいき「べー！人の事いきなりガキ呼ばわりすんな！おっさん！」

ワーグ「ああ？俺はまだおっさんなわけねえだろ！そういうのはグードとかに言え！あと、てめえみてえなやつはガキで十分だろうが！」

だいき「おっさんムキになってる。ダツサ」

ワーグ「こ、こんにやろう……」

しょうや「おい、うるせえぞワーグ。子どもにムキになってんじやねえよ」

ワーズ「しよ、しよやさん。だってこいつ、俺の事おっさん呼ばわりしやがったんですよ！」

しよや「子どもから見たら俺ら全員おっさんだ。れおんが唯一お兄さんで済むんだ。いい加減自分の年齢と精神年齢を一致させるんだ」

ワーズ「ぐっ……」

ほのか「もう！だいき君。ワーズさんに失礼だよ。謝らないと！」

だいき「だってムカつてきたんだ。仕方ないだろ」

ほのか「そういう問題じゃないでしょ。ほら、一緒に謝ろう。ワーグさん、すみませ
ん」

だいき「…わかったよ。ワーグさん、おっさんって呼んでごめんなさい」

しょうや「ほら、ワーグ。てめえより子ども達の方がしつかりしてるぞ」

ワーグ「そ、そんな事ないですよ！俺も言いすぎたな。こつちこそ悪かった、だいき」

れおん「ワーグ、礼つてのは何なんだよ？」

ワーグ「ああ、忘れてた。俺が晩飯奢つてやるよ。レイロウシティの有名なクルーズダイナーだ。いいだろ？」

ほのか「ク、クルーズダイナー!? そんな立派なのがお礼ですか!？」

れおん「いいのか? まあまあ値段するぞ?」

ワーグ「構わねえさ。まあ、一人増えたみたいだがそこまで差はないからよ」

だいき「お、俺も? 流石に遠慮するよ。だってそのお礼って俺には関係ないし」

ワーグ「別に遠慮なんてしなくて大丈夫だぜ。旅してるという飯なんてほとんど食べ

ねえんだ。折角の機会だぞ」

だいき「あ、ありがとうございます…」

ワーグ「よし。そんじゃ夜に港で待ってるぜ」

ほのか「行っちゃった。いいのかな？私は特に大した事してないのに」

れおん「まあ、あいつなりに何か考えでもあると思うぞ。俺もクルーズダイナーなんて初めてだ。少しワクワクするな」

その頃、とある場所では

??? 「これで準備完了。さて、後は適当なタイミングで起動させるだけだな」

ブーツ！

??? 「ん？連絡？……なるほど、クルーズ船ねえ。了解」

37・クルーズバトルディナー

その夜、レイロウシティ 港

れおん「お、いたいた。ワグ、来たぞー」

ワグ「お、来たな。腹は空かせてきたのか？」

ほのか「別にそういうわけではないですけど、楽しみではありますね」

だいき「俺、船に乗るのも初めてだ。でかい船だな」

ワググ「それじゃあ少しこのクルーズディナーの説明をするぞ。まず、ディナーのメニューはクラス毎に分けられているんだ」

ほのか「クラス？別々って事ですか？」

れおん「なんでそんな形式になってんだ？別に同じでいいだろ」

ワググ「まあまあ、最後まで聞いてくれよ。メニューの最高ランクはAで一番下がDだ。俺達はもちろん狙うはAランク。さて、どうやってそのランクになるのか気になるかな？」

だいき「う、うん。どうやるの？」

ワーグ「これはクルーズバトルディナー！バトルで勝負して、勝ち上がる事ができればランクが上がっていくんだ！」

れおん「そういう感じのやつか。ハア、ワーグらしいな」

ほのか「そんなのがあったんですね。ですが、俺達っていうのは？団体でもいいんですか？」

だいき「あ、確かに。俺、個人戦だと思った」

ワーグ「もちろん個人戦もできるぜ。でも、ここに折角四人もいるんだ。どうせならダブル形式の方に行こうぜ」

だいき「ダブルバトルか！ジムの練習にもなるしいいな！」

ワーグ「お！俺の意図をわかったか、だいき！俺も二人のジムチャレンジを応援してるからな。少しでも力になればと思ったんだ」

ほのか「ふふ、ありがとうございます、ワーグさん」

れおん「それじゃあチームを決めようか。俺とワーグが組むと流石にまずいから、ほのかちゃんかだいきだな。二人はどっちがいい？」

ワグ 「二人の好きにしてくれて構わないぜ」

ほのか 「うーん……」

だいき 「ジユプトルの弱点は炎。それを打ち消すなら……」よし、れおんさん。俺と組んでください！」

れおん 「お、だいきか。わかった、いいぞ。よろしくな」

ほのか 「じゃあ私はワグさんですね。よろしくお願いします」

ワーグ「やったぜ、ほのかちゃんだ。ワカシヤモも気になってたしちようどいいぜ。よろしくな！」

れおん「この後はどうするんだ？もう早速乗っていいのか？」

ワーグ「少し待ってな。俺がチケットとチームを登録してくるからよ。それが終わったら船に乗れるぜ」

だいき「れおんさん、俺達でAランクいきましよう！」

れおん「ああ、どうせなら美味しい飯の方がいいもんな。頑張ろうか」

ほのか「私達は敵同士になるんですね。私達も負けないようにしないと」

しばらくして、船内

全員「おお〜」

船の中にはいくつも大きなバトルゾーンがあり、その上の階のテーブルがある場所から下のバトルゾーンが観戦できるようになっていた

だいき「凄え！船なのにバトルコートがある！しかもいろんな人に見られるんじゃない」

ほのか「なんだかドキドキしてきた。ジムみたいな感じがする」

ワーグ「ハハハ！まあ、そう固くなるなよ。確かに見られるが、気にしなきゃいいだけだぜ。バトルはバトル。飯は飯だ」

れおん「あ、そういえばワーグ。俺、ポケモンを変えないといけないな。このままだと規程に違反してしまうからよ。ボックスパソコンはあるか？」

ワーグ「ああ！俺も変えてねえ！れおん、サンキュー！パソコンはあっちだぜ」

だいき「規程？そんなのがあるのか」

ほか「前に少しだけ聞いたけど、実力差がありすぎるのはよくないからって事で、使うポケモン達に制限があるんだって」

だいき「ふうくん。トップトレーナーも大変なんだな」

その後

案内人「皆様、本日はご乗船いただき誠にありがとうございます。本日も皆様に最高の時間を過ごしていただけますよう、真心をこめて作ったお料理をご用意させていただきますました。」

ですが、こちらはバトルクルーズ。どれだけいい物を食べれるかはお客様のバトルの腕にかかっております。私達も全力でバトルさせてもらいますので、ぜひ頑張ってくださいませ。

また、こちらはダブルバトル専用となっております。もしお間違えのお客様がいらっしゃいましたら、遠慮なくスタッフにお声がけください。バトルが始まる十分前にアナウンスでお客様の番号をお呼びしますので、呼ばれた番号の方は下のバトルゾーンの方にお越しください。

最初は二番、四番、六番のお客様。この後、バトルが始まりますのでご準備の方お願いします。それでは、よい船旅とポケモンバトルを」

だいき「あ！れおんさん、俺達六番だよ。早速だね」

れおん「どうやらそのようだな。まあ、初戦だから景気よく勝ちといきたいな」

ほのか「れおん君達なら大丈夫だよ。上で応援してるね」

ワーグ 「ミスしたら上で大笑いしといてやるよ」

れおん 「うるせえ。ちゃんと応援してろよな」

だいき 「ほのか、見てろよ。俺のポケモン達の凄い所見せてやるからな！」

38. れおん&だいき

バトルフィールド

れおん「だいき、お前は何のポケモンでいくんだ？」

だいき「俺はジュプトルだよ。俺の相棒だし、今回のジムでも活躍してくれるはずだからね。れおんさんは？」

れおん「ふむ、ジュプトルか。なら、俺はシエルダーにするか」

だいき「シエルダーか。俺、まだ本でしか見た事ないや。結構可愛いやつだったよね。でも、れおんさんなら進化させてそうだけど、どうしてしてないの？」

れおん「規約には俺達トップトレーナーが戦う時は基本進化前のポケモンのみって制限があるんだ。まあ、進化させなくてもポケモンのいい所を引き出せれば関係ないからな」

だいき「へえー、なるほど。じゃあそのシエルダーもこういう時のために育ててたのか」

れおん「そういう事になるな。他の皆もそうだったポケモン達を持つてるはずだ。おっと、どうやら相手が来たみたいだな」

コック1 「お待たせいたしました。番号6の方達でよろしいですか？」

だいき 「うん、合ってるよ。よろしくお願いします！」

コック2 「ん？隣の青年……どこかで見た事あるような……」

コック1 「……ああ!!もしかして、蒼碧のれおんさんですか!？」

れおん 「あ、ああ。そうだ。驚かせてしまってすまないな」

コック2 「凄……まさかトップトレーナーの方と戦えるなんて。……あ、し、失礼しました。少々取り乱してしまいました」

コック1「お相手できるか自信はありませんが、こちらも全力でいかせていただきます。お願いしますよ、ドーミラー！」

コック2「頼みましたよ、オドリドリ！」

だいき「いけ、ジュプトル！」

れおん「頑張ろうか、シエルダー！」

コック1「いきますよ、ドーミラー、てつぺき！」

ドーミラー「ドー」

ドーミラーの防御力が二段階あがった

れおん「厄介だな。シエルダー、ドーミラーにみずでつぼう！」

シエルダー「シエダー！」

ドーミラー「ドミ…」

コック2「オドリドリ、エアカッター！」

オドリドリ「ドリー」

だいき「ジュプトル、電光石火で避けてそのままオドリドリに突っ込め！」

れおん「シエルダー、まもる」

シエルダーはオドリドリの攻撃を防いだ

ジュプトル「ジュプー！」

オドリドリ「ドリー！」

コツクー「ドーミラー、ジユプトルにだましうちです」

ドーミラー「ドーミー」

ドーミラーはジユプトルを騙して攻撃した

ジユプトル「ジユ…」

れおん「シエルダー、オドリドリにつららばりだ」

シエルダー「シエル！シエル！」

特製スキルリンクにより、五回攻撃した

コツク2「くっ！避けられますか、オドリドリ」

オドリドリ「ドリ…ドリー！」

オドリドリは攻撃に当たってしまった

だいき「ナイス、れおんさん！ジュプトル、オドリドリにリーフブレード！」

ジユプトル「ジユプ！」

コツクー「ドーミラー、オドリドリをジユプトルの攻撃から庇ってください」

ドーミラー「ドーミー」

ドーミラーはジユプトルの前に出て、リーフブレードを受けた

だいき「くっ、惜しい！」

コック1 「ドーミラー、しんぴのまもり」

コック2 「なるほど、わかりました。オドリドリ、フラフラダンスです！」

れおん 「なに!? まずい！」

だいき 「え? フラフラダンス? なにそれ？」

オドリドリ 「ドゥリゥ、ドゥリゥ」

シエルダー 「シエル!? シエルゥ」

ジュプトル「ジュプ、トツ！」

シエルダーとジュプトルは混乱状態になってしまった

ドーミラーはしんぴのまもりで防がれた

だいき「ええ!?ジュプトル、急にどうした!？」

れおん「くつ、やられたな。フラフラダンスは全体を混乱状態にする技だ。それはあのドーミラーも対象なんだが、それをしんぴのまもりで状態異常にならなくしたんだ。うまいコンビネーションだ」

だいき「そんな技だったの!?! ジュプトル、しっかりして!」

ジュプトル「ジュプ〜」

コック2「オドリドリ、エアカッターです」

オドリドリ「ドリー!」

コック1「ドーミラー、シエルダーにねんりきです」

ドーミラー「ドーミー」

だいき「れおんさん、どうしよう。相手に好き放題されてるよ！」

れおん「きのみで治すしかないな。だいき、キーの実は待ってるか？」

だいき「ごめん、それは持ってないや」

れおん「なら、俺のをやる。ほら、これでジユプトルを治してやれ。ただ、治してすぐは動けないから気をつけるぞ」

だいき「わかった、ありがとう」

れおんとだいきはキーの実を使い、ジュプトルとシエルダーの混乱を治した

コック2「オドリドリ、もう一度フラフラダンスです」

れおん「させない、間に合え！シエルダー、つららばりだ！」

シエルダー「シエル！シエル！」

オドリドリ「ドゥドゥ、ドゥドゥー！」

踊っている途中のオドリドリにつららばりが当たった

コック2 「ああ！中断されてしまった！」

だいき 「やった！ジュプトル、オドリドリにリーフブレード！」

ジュプトル 「ジュプー！」

コック1 「また庇ってください、ドーミラー！」

ドーミラー 「ドーミー」

だいき「何度も同じ手は食らわないうぜ！ジユプトル、ドーミラーにおいうちだ！」

ジユプトル「ジユプ！」

ジユプトルは途中で止まり、おいうちを繰り出した

ドーミラー「ドミ！」

ドーミラーは飛んでいった

だいき「今だよ、もう一度オドリドリにリーフブレード！」

ジュプトル「ジュプー！」

オドリドリ「ドリー！」ドサ

コック2「オドリドリ！くっ、戦闘不能ですか」

れおん「よくやったぞ、だいき。シエルダー、ドーミラーにロックブラスト！」

シエルダー「シエル！シエル！」

コックリー「てっぺきで受け止めてください！それからねんりきで攻撃です！」

ドーミラー「ドーミー、ドミ!？」

コックリー「え?どうしたのですか、ドーミラー!ねんりきは!？」

だいき「よくわかんないけどチャンス!ジユプトル、おいうち!」

ジユプトル「ジユプー!」

ドーミラー「ドミ…」

れおん「シエルダー、もう一度ロックプラスト！」

シエルダー「シエル！シエル！」

ドーミラー「ドーミー…」ドサ

コック1「ドーミラー！ふふ、お疲れ様でした。私達の負けですね」

だいき「やったー！勝ったぜ！」

コック2「これでお客様はCランクとなりました。次に勝てばBランクとなります。

ですが、次は私達より強い相手ですので頑張ってください」

れおん「なるほどな。そういう感じで上がっていくのか」

コツクー「一つ聞いてもよろしいですか？れおんさん」

れおん「ん？何だ？」

コツクー「なぜ先程私のドーミラーは途中で動けなくなったのですか？」

だいき「あ、それは俺も気になる。いきなりだったよね。なんで？」

れおん「ああ、それは俺のシエルダーの殻の中よく見てみる？ほら」

コック1「これは……王者の印!!なるほど、だから攻撃が止まったのですか。怯んだのですね」

コック2「持ち物を持たせていたんですね。確かにスキルリンクの連続攻撃と王者の印は相性がいいですからね。流石れおんさんです」

れおん「そういう事だ。まあ、確率だからあれは運がよかつただけだ」

だいき「なるほど。持ち物によってポケモンの強さも変わってくるのか。俺も少し考えなきゃな」

39. ほのか&ワグ

食事会場

ワグ「お疲れさん。見てたぜ。ちよつと危なかつたんじゃねえか？」

だいき「フラフラダンスされた時はどうしようかと思つたよ。流石れおんさんだね。ありがとう」

ほのか「お相手の方達ダブルバトル慣れてたね。技によつてあんなに強力になるんだ」

れおん「シエルダーがつららばりを当ててくれなかったらおそらくかなり追い込まれてたはずだ。思ってるよりバトル慣れしててビックリだな。ワーグ達も気を付けろよ？」

ワーグ「誰に向かって言ってるんだよ。俺がそんな簡単にやられるわけねえだろ」

ほのか「ワーグさん、私、足引つ張らないように頑張りますね」

ワーグ「ほのかちゃんに限って足引つ張るなんて事ないぜ！普段通りで大丈夫だ。俺が合わせていくからな」

だいき「ワーグさんのバトル楽しみにしてますよ。ガツカリさせないでくださいね

「？」

ワーグ「本当お前はかわいくねえな！見てろよ！ギャフンと言わせてやるからな！」

アナウンス「次のバトルの準備が整いました。1番、3番、5番、7番のお客様達は下のバトルフィールドまでお越しください」

れおん「お、7番呼ばれたぞ。ほら、行ってこい」

ほのか「行ってきますね！」

だいき「頑張れよ」

バトルフィールド

ワーグ「ほのかちゃんは誰を使うんだ？」

ほのか「ムツクルにしようと思ってます。広いし、あの子も戦いやすそうなので」

ワーグ「ムツクルか。なら、俺はバクガメスにするか」

ほのか「珍しいポケモンですね。ガルドア地方にいましたっけ？」

ワグ「いや、これは俺がアローラ地方に行った時に捕まえたポケモンなんだ。ガルドア地方には生息してないぜ。だから、バクガメスのバトルシーンを見れるほのかちゃんも対戦相手もかなりラッキーって事だ。タイプは知ってるか？」

ほのか「えっと……ほのお、ドラゴンでしたっけ？あれ？水？」

ワグ「おお！流石ほのかちゃん、よく知ってたな！ほのお、ドラゴンで正解だぜ」

ほのか「えへへ、一度本で見て珍しいタイプだったから記憶に残ってました。あ、お相手の方が来ましたよ」

執事A「おや、まさかトップトレーナーのワグさんがお相手とは」

執事B「これは私達も自慢できそうですね。先程もれおんさんがいらつしやつてたよ
うでしたし、今日は特別な日になりそうです」

執事A「それでは早速始めさせてよろしいでしょうか？」

ワーグ「おう！こつちも準備オーケーだぜ」

ほのか「よろしくお願いします！」

執事A「それでは。ナイテイト！」

執事B 「スタンバイです、ガラガラ！」

ワーズ 「暴れようぜ、バクガメス！」

ほのか 「お願い、ムツクル！」

執事A 「ネイティオ、ムツクルにエアスラッシュです」

ネイティオ 「ティオー！」

ほのか 「ムツクル、電光石火で避けて！」

ムツクル「クルー！」

執事B「ガラガラ、いわなだれです」

ガラガラ「ガラー！」

ワグ「させねえよ！バクガメス、ワイドガード！」

バクガメス「ガツメ！」

バクガメスはワイドガードでいわなだれを防いだ

ほのか「わ！凄い！当たらなかつた！ムツクル、ネイテイオにつばさでうつ！」

ワグ「バクガメス、続け！かえんほうしゃ！」

ムツクル「ピイイ！」

執事A「ネイテイオ、ムツクルにサイコキネシス」

ネイテイオ「テイオー」

ムツクル「クル!?クルー!」

ムツクルは地面に落とされた

執事B「ガラガラ、かえんほうしやを庇いなさい」

ガラガラ「ガラッ!」

ガラガラはネイティオへのかえんほうしやを庇った

執事B「そのままムツクルにずつきです」

ガラガラ「ガラー！」

ムツクル「ピイイイ！」

ほのか「あ、ムツクル！」

ワーグ「バクガメス、ねっぷう！」

バクガメス「ガメー」

執事A「厄介な技ですね。ネイティオ、バクガメスにエアスラッシュです」

ネイテイオ「テイオー」

バクガメス「ガメ…」

ほのか「ムツクル、今が隙だよ。ネイテイオにつばきでうっ！」

ムツクル「クルー！」

ネイテイオ「テイ…」

執事B 「ガラガラ、バクガメスにほねブーメラン！」

ガラガラ 「ガラッ！」

ほのか 「あ！駄目！ムツクル、はがねのつばきで叩き落として！」

ムツクル 「クルー！」

ガン！

ムツクルは急旋回して、ほねブーメランを落とした

執事B 「何と！」

ワーグ 「サンキュー、ほのかちゃん！ムツクルも凄いいい動きだったぜ！ほのかちゃん、少し耳貸してくれ」

ほのか 「は、はい。なんですか？」

ワーグ 「~~~~？」

ほのか 「ええ!?それ大丈夫ですか？」

ワーグ「大丈夫だって！俺に任せな！バクガメス、相手に向かって走り出せ！」

バクガメス「ガメー」ダツダツダツ

執事A「な、何を？ネイティオ、警戒してください」

執事B「ガラガラ、ネイティオを守る態勢でいきますよ」

ガラガラ「ガラ」

ワーグ「いくぜ、ほのかちゃん！バクガメス、そのままトラップシエルだ！」

バクガメス「ガメツ！」

ほのか「大丈夫かなあ。ムツクル、バクガメスに電光石火！」

ムツクル「クル!?ク、クルー！」

ムツクルの電光石火がバクガメスに当たり、背中のトゲが爆発しそうになる

そのバクガメスが執事達に向かい走ってきた

執事A、B「ええ!？」

ワーグ「派手に決めるぜ！バクガメス、トラップシエル発動！」

ドオオン！

執事A「ネイティオ！」

執事B「ガラガラ！」

煙が晴れると

ネイテイオ「テイオー……」

ガラガラ「ガラ」

ネイテイオは倒れ、ガラガラはまだ立っていた

ワーグ「あちゃー。ガラガラは流石に持っていけなかったか」

ほのか「本当に成功しちゃった」

執事A「まさかこんな風に使ってくるとは。お疲れ様でした、ネイテイオ」

執事B「ガラガラ、よく耐えました！私達も負けられません。あばれる攻撃です！」

ガラガラ「ガラー!!」

ほのか「わわ、危ない。ムツクル、空に逃げて！」

ガラガラ「ガラー!!」

ワーズ「おっと、こっちに来るか。バクガメス、かえんほうしや！」

バクガメス「ガメー！」

ガラガラ「ガラー!!」

ガラガラは炎の中を突き進んでくる

ワーグ「おお! 凄えな! このガラガラ!」

ほのか「感心してる場合じゃないですよ、ワーグさん! ムツクル、ガラガラの頭に張り付いて見えなくして!」

ムツクル「クルー!」

ガラガラ「ガラ!?! ガラー!!」

ムツクル「クル〜」

ほのか「頑張って、ムツクル！」

ガン!

ガラガラの攻撃は壁に当たった

ガラガラ「ガラー」

ガラガラは混乱している

ほのか「今だよ、ムツクル！つばさでうつ！」

ムツクル「ピイイイ！」

ガラガラ「ガラ…」ドサ

執事B「ガラガラ、よく頑張ってくださいましたね」

執事A「勝利おめでとうございます。これでお客様はCランクとなりました。次も勝てばBランクへ上がる事ができます。ですが、私達より強い相手となりますので頑張ってください」

ほのか「わかりました！ありがとうございます！」

ワーグ「やったな、ほのかちゃん！ナイスアシストだったぜ！」

ムツクル「ピイ……ピイイイイ!!」ピカッ！

ほのか「え!?!ムツクル!？」

執事A 「おや！進化の光！」

ムツクルの姿は変わっていき、ムクバードへ進化した

ムクバード 「クバー！」

！」
執事B 「ムツクルがムクバードへ進化いたしました。おめでとうございます、お客様

ほのか 「ムクバードだ！やった！よろしくね、ムクバード！」

ムクバード 「クバー！」

ワーグ 「早速れおん達にも見せに行こうぜ！」

ほのか 「ふふ、そうですね。戻りましょうか」

40. 大混乱、レイロウシティ

その頃、船内

??? 「カシア様。こちらにも準備が整いました」

カシア「ほう、随分と早かったな。なら、後は俺がやろう。水族館の方を起動させるのだ」

??? 「はっ！」

カチツ！

数分後、レイロウ水族館内

警備員「ん？ポケモン達の様子が……」

ガタガタガタ

警備員「な!?ど、どうした!?急に暴れ始めたぞ!あ!!やめるんだ、ギャラドス!シザリガー!水槽が!!」

パライイイン!!

パリーイイン!!

ドバアア!!

あちこちから水槽が割れ、中から水が溢れ、ポケモン達が暴れて出てくる

警備員「まずい!!すぐに知らせなければ!!」

その頃、ポケモンセンター内

ターナ「全く。ワーズのやつ、私だけ除け者扱いして。後一人いればターナも来てほ

しかったじゃないわよ!! 私だつてクルーズディナー食べたかつたわ。……あら? 外が騒がしいわね。どうしたのかしら?」

一人の男性が入ってきた

男性「皆、大変だ! レイロウ水族館からたくさんのお水が溢れて、ポケモン達が暴れ回ってる!」

全員「ええ!」

男性「ジョーイさん、ポケモン達を宥める事って出来ますか!」

ターナ「待って！ジョーイさんはここで急いで手当ての準備をしていてください！私
が何とかしてきます！」

ジョーイ「はい！わかりました！」

男性「あなたは、ターナさん!!?お、お願いします！」

ターナ「連絡しないと。こちら、ターナ。たった今、水族館でポケモンが暴れている
との報告がありました！すぐに向かいます。援助をお願いします！」

オペレーター「了解しました。すぐに皆さんにお知らせします。街にはワーグさん、
れおんさん、ミンさん、かなえさんが残っています。救援をお願いしますので、ターナ
さんはそれまで暴動を抑えてください」

ターナ「了解！（水族館のポケモン達が暴れているって事は、水タイプのポケモンがあの機械によって操られてるって事かしら？となると、れおんさん達が危ない！！）」

その頃、クルーズ船内

ビイイイイ！！

客達「な、何だ？警報みたいな音だぞ」

ほのか「何かあったんでしょうか？」

アナウンス「たった今、レイロウ水族館でポケモン達が暴れ、辺りは水びたしになっているとの情報が入りました。港は危険なため、近づく事ができないので、お客様には船内で待機するようにお願いします。

また、それに伴いバトルの方は中断させていただきます。食事は皆様にAランクのもを提供させていただくので、もう少々お待ちください」

だいき「え。あの水族館のポケモン達が？皆、大人しかったのに」

ワグ「おい、れおん！本部から救援要請が来てるぞ。ターナが今暴動を抑えてるらしいぞ」

れおん「俺も今確認した。だが、要請に答えられない。そちらに向かえないからな。

いや、ペリツパー達を使えばいけるが、この船も危ない。少し様子を見てからだな」

ほのか「もしかして、ストラー団の仕業？」

ワグ「可能性は高い。しかし、水族館を狙うなんて何考えてんだ？まあいい。れおん、俺達は取り敢えずメンバーを戻すぞ。何かあったら今のメンバーじゃどうしようもねえ」

れおん「そうだな。ほのかちゃん、だいき、大人しくしてろよ」

だいき「うん。わかった」

ほのか「すぐに戻ってきてくださいね」

その頃、レイロウ水族館前

ターナ「ピジョット、エアスラッシュ！トゲキツス、はどうだん！」

ピジョット「ピジョー！」

ヌオー「ヌオー…」

トゲキツス「トゲー」

ランターン「ターン…」

ミン「ターナ！私も来たわ。応戦する、フリーデイン！」

フリーデイン「フリー！」

ターナ「ミン、ありがとう！これ、多分だけど水族館の中にあの機械があるわ。それを一早く壊さないと、どんどん海にポケモン達が逃げていつてるの！」

ミン「それはまずいわね。任せて。フリーデイン、サイコキネシス！フルパワーよ！」

フリーデイン「フリー！」

周りのポケモン達や水、壊れたベンチや銅像までもが浮き上がった

ミン「ターナ、今のうちに水族館に入って！ここは私が引き受けるわ」

ターナ「わかったわ、気をつけて、ミン！」

ミン「ニャオニクス、あなたも手伝って。エスパーの恐怖、見せてやりましょう」

ニャオニクス「ニャクス！」

その頃、クルーズ船内

れおん「ん？ターナさんから俺宛てにに連絡が来てたのか。おそらく水タイプが操られてる。気をつけて。なるほど、それはまずいな。俺はポケモン一匹も出せないわけか」

ワグ「げ、それはまずいな。俺のポケモン達じゃあ水タイプの相手は厳しいぞ。ほのかちゃん達にも手伝ってもらわねえと」

れおん「そうだな。ほのかちゃんのハスブレロやだいきのジュプトルが鍵になるな。戻って報告するぞ」

??? 「それはいけませんねえ」

二人「!?」

そこには白と緑の横線が入って真ん中にCと書かれた服を着ている薄緑色の髪をした男が立っていた

??? 「お二人に戻られて、状況をひっくり返されるのも困りますよ。折角これから楽しいショーが始まるというのに、台無しにされたくはありませんからね。ここで自分と楽しいバトルでもしていきましょう」

れおん 「楽しいショーだ?!?この船で何をする気だ、ストラーク!」

ワীগ 「れおん、バトルは俺が引き受ける。お前は今ポケモンを出したら余計に被害が出る。ほのかちゃん達の所へ急いで戻れ。隙は作ってやる」

??? 「隙を作る？ふふ、舐められたものですね。ですが、そろそろ時間です。あなた達に間に合いますかね？ソーナンス！」

ソーナンス 「ソーナンス！」

ワীগ 「厄介なポケモンを！なら、一発でぶっ飛ばしてやる！ヘルガー！」

ヘルガー 「ガウ！」

ヘルガーの背中には宝石がついている

ワーグ「一気に行くぞ！俺達の魂の炎よ、集え！今、一つになる時！これが俺達の真の力！ヘルガー、メガ進化！」

ワーグのネックレスとヘルガーの背中にある宝石がリンクする！

ワーグ「メガヘルガー！」

メガヘルガー「ガオオン!!」

??? 「な!? 炎剛までメガ進化ができるですと!? そんな情報無かったはずだが!」

ワーグ 「メガヘルガー、あくのはどう!」

メガヘルガー 「ガウ!」

??? 「くっ! 受けきれますか、ソーナンス!」

ソーナンス 「ソー! ナンス!」

ソーナンスは飛ばされていった

ワーグ「今だ、れおん！行け!!」

れおん「おう！」ダツ！

??? 「くっ！逃しましたか。だが、れおんは今やただの一般人。向かった所で何も変わらない」

ワーグ「なら、さっさとてめえをぶっ飛ばして俺が向かってやらねえとな」

食事会場では

だいき「れおんさん達遅いね。何やってんだろう」

ほのか「さつきから船も揺れ始めたもんね。少し怖いよ」

ボタン！

電気が突然消えた

客達「キャーッ！何!?! 停電!?!」

ほのか「キャッ！こ、怖い……。なんなの？」

だいき「ほのか、大丈夫か？俺は変わらずここにいるからな」

ほのか「ありがとう、だいき君。私、暗い所苦手で」

バン！

会場の真ん中に光が照らされた

全員「!?」

そこには白と藍色の横線が入り、真ん中にCと書かれた服を着ている青髪の男が立っていた

カシア「俺の名はカシア。てめえらに最高の夜をプレゼントしてやるぜ。この船も周りの水ポケモン達も俺達の思うがままだ。トップトレーナーとやらもどうしようもねえビッグイベントの始まりだ。おら、マルマイン共！」

カシアの周りにはマルマインが何匹も現れた

女性「ま、まさか……」

カシア「今からこの船は沈む。海の中も暴れている水ポケモン達でいっぱいだ。生き残れるといいなあ？」

ユンゲラー「ユー！」

カシアの後ろにいたユンゲラーがレポートでカシアを連れ去った

客達「キヤーツ!! 誰かー!! 助けてー!!」

マルマイン達「マル!!」

ドオオオン!!

船は爆発し、真ん中から二つに割れていった

客達「ぎやあああ!!!」

ほのか「キヤーツ!!」

だいき「わあああああ!!ほ、ほのか!俺の手を離すなよ!!」

れおん「な、何だ!?!うわ!!何が起こったんだ!?!」

ワーグ「うおおおっ!ど、どうなっついてやがる!!」

??? 「ふふ、タイムアウトのようでしたね。オーベム、テレポート」

オーベム 「ベム！」 シュン！

オーベム達は消えていった

そして、船は海に沈んだ

4 1. 大混乱、レイロウシティ2

その頃、水族館内

床や周りは水びたしになっており、ガラスの破片などが散らばっている

ターナ「急いで見つけ出さないと。機械なんてあの時あつたかしら。目ぼしい所には置いてなかったわよね。もしかして見えにくい所に機械があるのかしら」

少し進むと、壁が壊れて中に進めるようになっていた

ターナ「ここ、通れるようになってるわね。しかも、奥からポケモン達の声がするわ。

行ってみないと」

その後

ターナ「あ！あつたわ！サニーゴ達が邪魔ね。かわいいそうだけど、少し退いてもらわないと。エアームド、はがねのつばさ！」

エアームド「ムドー！」

エアームドがサニーゴの群れに突っ込んでいこうとしたその時

ヒュッ！

エアームド「ムドロー!!」

死角から攻撃が飛んできてエアームドに当たった

ターナ「エアームド!!!? 誰!!」

??? 「やつと誰か来たわ。もう、こんなじめじめした場所の警備なんてつまらなくて仕方なかったわ。舞姫さん、その機械壊そうとするのやめてくださる?」

ピンクと赤が混じった髪をして、白とオレンジの横線が入った服で真ん中にCと書かれた女性が立っていた

ライチユウ「ラーイ」

ターナ「その特徴的な髪。れおんさんの報告通りなら、あなたがラミアね。この仕業はやっぱりあなた達ストラー団だったのね！すぐにやめなさい!!」

ラミア「あら怖い。でも、ここの警備はつまらないし、やめてもいいわよ。もうメイニンイベントは終わったみたいだし」

ターナ「メイニンイベント!?!何を企んでるの!」

ラミア「ふふ、それは秘密。それと、私達はストラー団なんて変な名前じゃないの。コ

スモ団。どう？素敵な響きでしょ？機械を壊されるのは嫌だけど、仕方ないかしら。カシアもうまくやったみたいだし、そろそろ退散しましょう。さよなら、舞姫さん。後は自由にしていいわ。ああ、それとクルーズ船に乗ってなくてよかったわね」

ターナ「!?それって、どういう」

ラミア「ネイティオ、テレポート」

ネイティオ「ティオー」シユン！

ネイティオがモンスターボールから現れ、ラミアと共に消えていった

ターナ「くっ！テレポートができたのね。クルーズ船で何かあったのね。破壊したら急いで戻らないと。エアームド、もう一度はがねのつばさよ！」

エアームド「ムドー！」

サニーゴ達「サニー!!」

ターナ「ごめんなさい、サニーゴ達。今のうちよ、ムクホーク、インファイト！」

ムクホーク「クホー!!」

バキバキ！

ターナ「これでよし。急いで戻るわよ！」

その頃、港付近

ミン「何て事!!船が沈んでしまった!中に乗ってた人達は!?ランクルス、急いで助け出すわよ!」

かなえ「ミンちゃん!遅れてごめんなさい!私も船の救助に向かいます!」

ミン「ありがとう、かなえ!今は水ポケモン達が暴れてるから救助に泳げるポケモン達は使えない!気をつけて」

かなえ「わかりました！」

その頃、水上では

れおん「プハア!! やつと水上に出れた! ポケモン達が暴れてるせいもあって波がおかしくなっていやがる。皆は無事なのか!？」

スバメ「スバ!! スバー!!」

れおん「ん? スバメ? こんな所に?」

スバメ「スバー！スバー！」

れおん「なんだ？こつちに来て事か？誰かのポケモンか？」

少し泳いでいくと

れおん「あ!!だいき!!ほのかちゃん!!無事だったか！」

だいき「あ!!れおんさん!よかった!!よくやったぞ、スバメ！」

スバメ「スバー」

ほのか「うう……」

れおん「ほのかちゃん!! どうしたんだ!!」

だいき「海に落ちた時、大分水を飲んだみたいなんだ。近くにドククラゲ達もいて、その毒水も飲んだのかもかもしれない。俺のジュプロもそいつらにやられちゃった。急いで港に戻らないとなのに、波で全然進まなくて」

れおん「くっ! それはまずいな。俺も戦えればいいが、俺のポケモン達は全員操られる。俺は今ほのかのポケモンを持っていない子どもと一緒にだ。ほのかちゃんは俺が代わろう。だいきは自分で泳げるか?」

だいき「うん。あまり得意じゃないけど、今はそんな事言つてられないから。ワググさんは？」

れおん「さつき、ストラー団のやつとバトルになつてな。ワググはそいつの相手をしていたんだ。だから、今どこにいるか俺もわからねえ。無事な事を祈るばかりだ。さあ、こつちだ。波の流れにあまり逆らわないようにな」

しばらく進み

れおん「ん？あそこに氷が張つてある。あ！かなえさんだ！ミンさんもいる！だいき、あそこに向かうぞ！」

だいき「本当だ！よかったー！」

ミン「ん？……かなえ！あそこにれおん君達よ！よかった、無事だったみたいね。この人達は私に任せて。助けにいける？」

かなえ「はい！トロピウス、いきましよう」

トロピウス「ピーウ」

だいき「あ！トロピウスがこっちに来る。助けに来てくれた」

かなえ「れおん君！だいき君も！無事でよかったわ。さあ、乗って」

その時

ザバア!!

ドククラゲ達「ドクー!!」

れおん「くっ！ドククラゲ達か！」

ドククラゲ達「クーラー!!」

ドククラゲ達はみずのはどうをれおんに向かって繰り出した

れおん「ぐうっ!!」

だいき「れおんさん!」

かなえ「急いで乗って!!れおん君、今行きます!」

れおん「!?駄目だ!!あまり近づくな!今の攻撃で渦が出来ようとしている!!巻き込まれるぞ!」

だいき「ええ!?でも、れおんさんが!」

れおん「かなえさん！この子を頼む！！」

れおんは抱えていたほのかを投げた

かなえ「トロピウス、ほのかちゃんを捕まえて！」

トロピウス「ピーウ！」

ドククラゲ達はみずのはどうを繰り返して続けている

そして、れおんを中心に渦潮が出来上がった

れおん「うわああああ!!」

二人「れおんさん!!!」

れおんは渦に飲み込まれていった

ドククラゲ達「ドクー!!」

トロピウス「ピウー!」

かなえ「まずいわ。ドククラゲ達のどくばりをくらっちゃった！私達も戻らないと」

だいき「でも、れおんさんが！」

かなえ「うっ……。でも、あの方なら……きつと大丈夫。私達は自分に出来る事をやらな
いと」

だいき「わ、わかった。ほのか、もう大丈夫だからな。毒も抜いてもらおうな」

かなえ「ほのかちゃん、毒にやられちゃったのね。他の怪我してる人達と一緒に急いでポケモンセンターに行かないと」

しばらくして

ミン「これで全員かしら？ 船長さん」

船長「い、いえ、それがまだ二名ほど姿が見えないのですが。れおん様とワীগ様です」

かなえ「れおん君は先程渦潮に飲み込まれてしまいました。ワীগ君は……どこに？」

だいき「れおんさんが言ってたけど、ワীগさんは船の中でストラー団の一人とバトルになってたみたい。れおんさんとも別行動になったらしいよ」

ミン「やはり船の中にまでストラー団が。ワグ君くらいなら簡単に倒しそうだけど、大丈夫かしら？」

ターナ「ミン！かなえ！船の人達は!？」

ミン「あ、ターナ。機械は？」

ターナ「少し手間取ったけど壊してきたわ。これで落ち着いてくれるはずよ」

ミン「そう、それはよかったわ。ワグ君を知らない？まだ姿が見えないの」

ターナ「ワーズが？悪いけど、ここに来るまでには見なかったわ」

かなえ「大丈夫かしら？……あら？あそこから飛んでくる方が」

ワーズ「ああ！皆やつと見つけたぜ！船の人達も皆無事か!？」

ファイアローの足に捕まってワーズが飛んできた

ターナ「ワーズ!!よかったわ、あなたも無事で」

ミン「これで全員ね。負傷者はまだ応急処置しか出来てないわ。急いでポケモンセン

ターに向かうわよ」

かなえ「そこで各々報告と情報も分け合いましょう。れおん君の事もどうするか考えないと」

ターナ「れおんさんに何かあったの!？」

ワーズ「何!?!れおんのやつ、何してんだよ!」

ミン「その話は後。さあ、行くわよ」

4 2. 計画的な犯行

その後、作戦本部内

ミン「さて、まずはワীগ、船の中で何が起こったのかわかる範囲で説明頼むわ」

ワীগ「おう。俺とれおんとほのかちやん達はクルーズバトルデイナーで普通にバトルしてたんだが、水族館のポケモン達が暴れてるって放送が流れて一時海上で待機していたんだ」

ターナ「水族館の件が先だったのね」

ワグ「それを聞いて、俺達は一時的にメンバーを変えていたからそれを何かあった時のために元に戻そうと、船の中のパソコンボックスで変えていたんだ。その時ほのちちゃん達とは別行動だったぜ」

かなえ「本来ならすぐですからね」

ワグ「変え終わって戻ろうとした時、ストラー団のやつに話しかけられてバトルになったんだ。れおんはバトルできねえから、俺が隙を作ってその場から逃してほのちちゃん達の所に向かわせたんだ。それから少しして、急に船が爆発して海にドボンだ」

かなえ「その原因はわからないのね。だいき君なら知ってるかしら？彼はどこに？」

ターナ「だいき君は元気そうだったけど、一応ポケモンセンターでジョーイさん達に

見てもらってるわ。呼んだ方がいいかしら？」

ミン「いや、それは後にしましょう。まずは各々の情報を集めるのが先。ワーズ、接触したストラー団のやつの特徴を教えてくださいるかしら？」

ワーズ「白と緑の横線の服に真ん中にCって書かれてたな。髪は緑色の男だったぜ。名前は知らねえ」

かなえ「緑色ですか。確かラミアって人は赤とピンクでしたよね。やはり他にもそういう人がいるって事ですか」

ターナ「私も報告いいかしら？」

ミン「ええ。次はターナ、お願い」

ターナ「皆は水族館の件を私が一番初めに抑えてたのを知ってるわよね？すぐにミンも合流してくれたから、私が話すのは水族館の中に入ってからね。中で機械を見つけて壊そうとした時にラミアと接触したわ」

ミン「ラミアもいたの!？」

ワグ「水族館にもやっぱリストラー団のやつが」

ターナ「でも、ワグのようにバトルにはならなかったわ。彼女はあの機械を一定時間守ってただけみたい。私が壊したのが船が沈んでからだったから、もう機械は用済み

みたいだったの。連れてたのはライチユウ。死角から攻撃された時は驚いたけど、すぐレポートで逃げていったわ」

かなえ「やはり水ポケモン達を暴れさせたのは何か作戦のためだったのね。その作戦が船の破壊なのかしら」

ターナ「その可能性が高いわね。メインイベントって言ってたし。後、あいつらは正式に名前があるらしくて、コスモ団。そう言ってたわ」

ミン「コスモ団。だから服にCがあるのね」

ワーグ「後はれおんの事だな。あいつに何があつたんだ？」

かなえ「私が早く助けなかったのが悪いんだけど、れおん君はだいき君とほのかちゃんを連れて海から泳いできていたの。それを私とミンちゃんが見つけて、私のトロピウスで助けに行ったんだけど、その時にドククラゲ達の群れがれおん君達の近くに現れて、れおん君を攻撃したんです」

ターナ「確かに他の人達にもドククラゲにやられたって人が多かったわね。毒を食らっていたり、溺れそうになっていたり」

かなえ「その一斉攻撃で海に渦潮ができてしまい、れおん君はそれに飲み込まれていってしまったんです。すぐ助けようとしたのですが、トロピウスもドククラゲ達のごぼりを食らってしまった、動きにくくなってしまっ」

ワーグ「マジかよ。れおん、大丈夫か」

ミン「でも、かなえ達もすぐ避難したのは正解だと思うわ。攻撃されていたのなら尚更。さらなる被害が出なかつただけ、まだいいわ。れおん君は泳ぐのも得意だし、溺れる事はないと信じてるわ」

ターナ「そうね。れおんさんなら潮の流れも読める。海にいても私達よりは落ち着いて行動できるわ」

かなえ「無事を祈るばかりだわ」

ミン「二人のコスモ団による作戦。しかもかなり練られてるわね。おそらく目的は港の封鎖ね。あの影響で港と水族館は壊滅的。しばらくは他地方への船での移動や物資も期待できないわ」

ワグ「なるほど。となると、次狙われるのは空港か」

ターナ「そうね。海を塞いだなら空も塞いでくるはずね」

ミン「私もそう読んでる。だから空港があるチエイロタウンは警戒しておかないと。明日この事も報告しましょう」

かなえ「あと、だいき君に船の中で何があったのかを聞かないと。まだ爆発の原因がわかってないわ」

ミン「そうね。それも聞きにいきましょう。何か知ってるかもしれない」

ポケモンセンター内

だいき「え？爆発の原因？俺、知ってるよ。というか、皆知ってると思った。あんなに堂々としてきたわけだし」

かなえ「そんなに？説明お願いできる？」

だいき「うん。れおんさん達が手持ちを戻しに行って少しした時、急に電気が消えた

んだ。それで皆して混乱してたら、中央に電気がついて、そこにカシアってやつが現れたんだよ。多分ストラー団のやつだと思う」

ワーグ「なに!? 船には他にもストラー団のやつがいたのかよ!」

だいき「そうなんだよ。それでそいつがマルマイン達をたくさん出して爆発させたんだ。そのせいで船は真ん中から折れちゃったんだよ」

ミン「そのカシアってやつの特徴は覚えてるかしら?」

だいき「えつとね、白と青の横線が入ってる服でね、真ん中にCって書かれてたよ。暗くてよくわからなかったけど、髪は藍色っぽかったなあ。あ、もちろん男だよ」

ターナ「その特徴。そいつもラミア達と同じクラスかしら。だとすると、三人による計画。徹底されてるわね」

ワーグ「ありがとな、だいき。よく無事だった。ほのかちゃんは？」

だいき「ほのかはまだ治療してるみたい。早くよくなるといいんだけど」

ミン「そうだったわ。だいき君、ほのかちゃんにも言えるんだけど、本当に悪いんだけどもう旅は少し中断してもらっていいかしら？」

だいき「え……。な、なんで？」

かなえ「まず、水族館と港の被害でこのジムリーダーのみすずちゃんも大忙しなの。しばらくジムはできないわ。またストライ団によってこれからも各地で被害が出ると思うの。」

その時に極力被害を減らしたいの。それに警備も固めないとだから、ジムリーダー達にも協力を要請するわ。だから、他の街のジムもしばらくお休み。コンテストも同様ね。」

だから、だいき君達も一度事態が収束するまで大人しくしてほしいの」

だいき「そ、そうだよね。これだけの被害だもんね。わかった……」

ミン「ごめんなさい。楽しみを奪ってしまうような事して。でも、あなた達をなんとかしても守りたいの。わかってくれると嬉しいわ」

だいき「れおんさんは？まだ見つかってないの？」

ターナ「そうね。この後、私は海を回ってみるわ。遠くまで流されてないといいんだ
けど」

ワーグ「俺も行くぜ、ターナ」

ミン「ならそつちはお願ひするわ。私達は報告書をまとめるから」

かなえ「二人とも気をつけてね」

ワグ 「ああ。ターナ、行こうぜ」

ターナ 「わかったわ」

43. 動き出す悪魔

海上

ジャバジャバジャバ

れおん「(ん……………。泳ぐ音？俺、確か渦に飲まれて気を失って…）うう…………」

ゴルダック「ぐ、ぐわぐわ」

れおん「おお、ゴルダック。お前だったか。ありがとな。操られてはないみたいだな」

ゴルダツク「ぐわ」

れおん「ここどこだ？海の……うわ、結構レイロウシティから離れたんだな」

遠くにレイロウシティの港が小さく見えている

れおん「俺も泳ぐさ。お前に頼ってばかりはいられないからな」

ゴルダツク「ぐわぐわ」フルフル

れおん「え？駄目なのか？」

ゴルダック「ぐわ」

れおん「大人しくしてろってか。はいはい、わかったよ。それじゃあ頼むぜ」

少しして

ゴルダック「ぐ？」

れおん「ん？どうした、ゴルダック。……あ、あのピジヨットはもしかして」

ターナ「れおんさん、見つけたわ！よかった、無事だったみたいね」

れおん「心配かけたみたいだな。悪かった」

ターナ「ピジョットに乗って。すぐ皆に姿を見せて安心させてあげて」

れおん「わかった。ゴルダック、戻っていいぞ。ありがとうな」

ゴルダック「ぐわ」

ターナ「はい、手に掴まって」

れおん「よつと。濡れててごめんな、ターナさん、ピジヨット」

ターナ「海にいたんだもの。それは当たり前よ。さあ、ピジヨット戻るわよ」

ピジヨット「ピジヨー」

ターナ「ワーズにも連絡いれないと。れおんさん見つかったって」

れおん「ワーズも探してくれていたか。あいつ、ストラーク団とのバトルになったんだ。無事でよかった。ほのかちゃんの容態はどうなった？」

ターナ「まだ治療中のようだったわ。戻ったら確認してみましよう」

ポケモンセンター内

ミン「れおん君無事でよかったわ」

かなえ「渦に飲まれた時は焦りましたが無事で何よりです」

れおん「なんとかかな。気づかない内にゴルダックが助けてくれたんだ。機械も壊れたみたいで操られてはなかったからな」

だいき「れおんさん！よかった…。無事だったんだね」

れおん「だいきにも心配かけたな。お前も怪我がないようでよかった」

ワーグ「れおん、お前はとりあえず風呂に入ってこい。今のままだと風邪ひくだろ」

れおん「そうだな。何があつたかはその後聞かせてもらうか」

ミン「とりあえずは今までの事は整理できたわ。これからの事は明日決めていくからゆつくり休んでて」

れおん「了解です。それでは」

かなえ「だいき君ももう夜中だわ。そろそろ寝てゆつくり休んで」

だいき「でも、ほのかが……」

ターナ「ほのかちゃんも治療が終わればそのまま寝るはずだわ。だいき君も安心して
ていいのよ」

だいき「わかった。それじゃあおやすみなさい」

ワーグ「ふう……。長い夜だったな。こんな事態になるとは思わなかったぜ」

ミン「そうね。まだやらなきやいけない事は山積みだけど、ひとまずはお疲れ様って所ね」

かなえ「ターナちゃん、ミンちゃん、助かったわ。ワーグ君、大変だったわよね。お疲れ様」

ターナ「かなえこそ救助手伝つてくれてありがとう。とっても助かったわ。今日はここで休みましょう」

ミン「そうしましょう。皆、おやすみ」

それから、とある場所では

カシア「事前準備は成功だな。港はこれで壊滅な被害が出たはずだ」

??? 「ええ、そのようです。次の作戦も成功するといいですねえ」

ラミア「次は私にももつといい仕事よこしなさいよ。今回暇で暇でしかたなかったんだから。髪も痛むし最悪」

??? 「お前達、静かにしたまえ。次の作戦を発表する」

三人「はっ！」

??? 「カシア、お前は今回は休みだ。ここに残れ。ゲルダ、今回の主戦力はお前だ。期待しているぞ」

ゲルダ 「私ですね。必ずやご期待に応えて見せましょう」

??? 「ラミアには別な仕事がある。後々に繋がる仕事だ。必ずやり遂げよ」

ラミア 「やったわ！ありがとうございます！」

ゲルダ 「して、作戦とは？」

??? 「今回で海域を塞いだ。やつらからしたら次は空を封じると考えるはず。なら、チエイロタウンに戦力が来るはず。だが、空港はまだ先だ。我々が次に狙うは、資源だ。これを我々が独占する」

カシア 「資源。食料などですか？」

??? 「ああ、そうだ。場所はエステロシティ。ここを封鎖しろ。内容はゲルダに任せる」

ゲルダ 「ほほう、貿易都市ですか。ふふ、楽しみですねえ」

ラミア 「いいわね、ゲルダ。とつても楽しそうじゃない」

??? 「ラミア、お前にはファータタウンだ。そこにある発電所を破壊してもらおう」

ラミア 「発電所？あんな街に発電所なんてありましたか？」

??? 「表向きは静かな街だ。だが、あの街には裏側がある。それを見つけ、そこにある発電所を破壊するのだ」

カシア 「なるほど。電気を他の街に届かなくさせるのですね」

ラミア 「へえ。わかりました。お任せください」

??? 「このままいけば、この地方を落とすまでそう時間もかからん。そして、私達はこ

の地方の神となるのだ」

三人「全てはディブロー様のために」

ディブロー「さあ、行くのだ。我が化身達よ」

4 4. 帰省

次の日、作戦本部 会議室

ファルミ「なるほど。昨日はそんな事になっていたのですね。れおんさん、体は大丈夫ですか？」

れおん「はい、特に違和感とかは感じません」

グード「しかし、コスモ団か。してやられたな」

バロック「だな、かなりの被害だ。これは俺達も反省しないとだ」

エレイン「相手は次の手をもう打ってくるわよね？なら、こつちも早いところ対策を
考えて手を打たなきゃ。特に守らなきゃいけない場所を重点的に」

しおり「空港とか…… 食料とか」

シモン「そうじゃな。しおりちゃんの言う通りじや。チエイロタウン、エステロシ
ティは狙われてもおおかしくなからう」

じゅん「エステロシティは俺の店がある。簡単に被害は出させません」

ミン「昨日かなえと話し合って、狙われそうな街を絞って誰を割り振るか決めたの。

それと各々の役割もある程度決めたから発表するわ。これを見て」

ミンはホワイトボードに映像を映し出した

ミン「まず、何としても守らなきゃいけないのはチエイロタウン、エステロシティ、レイロウシティ、ファータタウン、アークタウン。ここはそれぞれ空港、貿易、海、工場、鉄道があるわ。レイロウシティはやられてしまったけど、残りは何としてでも守らないと」

かなえ「他にもガーネシティ、オアシティなども候補にあがったんだけど、優先するのはこちらの方かなと思ったの。

割り振りはチエイロタウンにファルミちゃん、りきや君、しおりちゃん。

エステロシテイにはじゅん君、れおん君、ターナちゃん。

レイロウシテイに私、エレインちゃん、ジュード君。

フアータタウンにワーグ君、しょうや君、シモンさん。

アーグタウンにバロツク君、セイン君、グード君。

ミンちゃん是要請次第で自由に動いてもらう事にしたの。後、ドグラ君とジーニャちゃんにはまだ連絡がつかないの。だから、作戦には入ってないわ。本当に大丈夫かしら」

セイン「まだ連絡がつかないんですか。まさかコスモ団に襲われた、なんて事はないですよね」

ターナ「否定したいけど……。少し現実味を帯びてきたわね」

ワーグ「えええ!? あのお二人が負けるとかあんのか!? 特にドグラさんなんてめっちゃくちゃ強えのに!」

しょうや「何か罠があつたのかもしれない。なんにせよ最悪の想定はしておいた方がいい」

りきや「それと割り振りの事だが、他の街への戦力はどうするのだ? もし、違う街が襲われたら、などが不安だが」

ミン「今朝何となくだけど、予知が出来たの。地図上の街がある場所が光って見えたわ。それがこの五つ。これが正しければ、コスモ団は必ずこのどこかに現れる。」

それが違つたら少し不安だけど、一応近隣街までの移動手段がある人をメンバーに
入れたの。それで一先ずは対応してみてほしいわ。何か変更などがあればまた連絡する
わ」

ジュード「ジムリーダー共にも連絡いったんだろ？そいつらも合わせればある程度は
なんとかなるはずだ」

ファルミ「それではこの後から、向かえる人から担当の街まで向かってください」

会議室外

じゅん「れおん、ターナ、よろしくな」

れおん「じゅんさんと一緒に仕事は初めてですね。お店は大丈夫ですか？」

じゅん「流石に休みにしてきたさ。それに、俺が働いている街が狙われているとあつたら黙っていられないからな」

ターナ「じゅん、こつちこそよろしくね」

じゅん「ターナと仕事するのも久しぶりだな。最後は何年前だったかな。まあ、俺はこれからすぐに帰る。お前達はどうするんだ？」

ターナ「ごめんなさい。私はこの後、仕事先に長期の休みの申請をしなきゃなのと、れ

おんさんはこの後、子ども達を家に送り届けないとな。だから、一日か二日遅くなるわ」

じゅん「ああ。ターナは仕方ないよな。それと、話には聞いたぞ。ほのかちゃんといき君だったかな？姿を見てはないが、れおんの連れなんだろう？まあ、こんな事になったからには仕方ないよな。わかった。俺は待つてるから送り届けてきな」

れおん「ありがとうございます、じゅんさん。それではまた後日」

ポケモンセンター

れおん「ほのかちゃん、だいき。この後、二人の家に帰るぞ。俺とターナが送るからよ」

だいき「え？いいの？」

ほのか「ターナさん、悪いですよ」

ターナ「気にしないで。れおんさんが二人を気にしてるの。少しでも無事でいてほしいってね」

れおん「あまり言わないでくれよ、ターナさん」

ほのか「ありがとう、れおん君」

だいき「どっちに乗ればいいの？」

ターナ「私のピジョットは三人まで乗れるの。私は大丈夫だから、れおんさん達はピジョットに乗って」

れおん「え？いいのか？俺にも一応ペリッパーがいるぞ」

ターナ「その子、長距離用じゃないでしょ？それに二人が限度じゃない、貸してあげるわ。終わったらエステロシティまで乗ってきて。そうすれば問題ないでしょ？」

れおん「ありがとな、ターナさん。言う事聞いてくれるかな」

ターナ「大丈夫よ。ピジヨットもれおんさんには慣れてるわ。言う事もちゃんと聞いてくれるわ。それじゃあ私は仕事先に行かないと。じゃあね！」

ほのか「あ！ターナさん、今までありがとうございましたー。今度私からも連絡しますねー！」

だいき「ありがとうございました、ターナさん！」

ターナはほのか達に笑いながら手を振っていなくなつた

れおん「早速だが、行こうか。準備は済んでるよな？」

二人「はい！」

れおん「よし。頼んだ、ピジヨット」

ピジヨット「ピジヨー。ピジヨ!?」

だいき「あ、驚いてる。ターナさんじゃないからだよね」

れおん「ピジヨット、ターナさんが一時的に君を貸してくれたんだ。俺達を乗せてくれないか？」

ピジョット「ピジョー！」コク

れおん「ありがとな、ピジョット。助かるぜ」

ほのか「ありがとう、ピジョット」

だいき「重くないか？ピジョット」

ピジョット「ピジョー！」バサツ！

れおん「大丈夫そうだな。まずはだいきの家だな。ギツタンシティに向かってくれ」

ピジヨット「ピジョー！」

ほのか「わく、ピジヨット凄い！三人でも楽々飛べるんだ」

れおん「ターナさんのピジヨットはかなり鍛えられてるからな。いい育て方してるよな」

その後、ピジヨットの背中で三人は話していた

だいき「Zクリスタル？」

れおん「そう。アローラ地方でよく目撃されている物で、ポケモン達の力をさらに引き出すらしいんだ。それがここ最近この地方にもいくつか持ち込まれたんだ」

ほのか「本に書いてあった。島巡り？だっけ。それで集めていくんだよね。でも、ガルドア地方にもきたんだ」

れおん「まだノーマルZ、ほのおZ、みずZ、くさZしか確認されてはいけどな。どうやって持ち込まれたのか、またはポケモン達を作り出したのかはわかってないんだ。ほら、みずZ」

だいき「へえ、これがZクリスタル。これを持たせればいいの？」

れおん「アローラ地方のククイ博士によると、Zリングつてのが必要らしい。ククイ

博士から貰ったものがある。こうやってはめて使うらしいぞ」

れおんは腕にZリングをつけて見せた

ほのか「本物のZリングだ。そのククイ博士とは仲いいの？」

れおん「いや、そこまで仲いいってわけじゃない。前にワグと旅行に行った時に知り合った程度だ。その時に貰ったんだ」

だいき「じゃあかなり貴重なんだね。俺も使ってみたいな〜」

れおん「この騒動が終わったらアローラ地方に行ってみるといい。いい所だったぞ」

ほのか「ザ・南の島って感じだもんね。私も興味ある」

だいき「じゃあ、ほのか、いつか俺と行こうぜ！」

ほのか「え！いいの？行きたい！」

だいき「よし、約束な」

ピジヨット「ピジヨー」

れおん 「ん？おお！ギツタンシティだ。もう着くみたいだぞ」

だいき 「早いなく。もつと喋っていたかったのに」

ほのか 「飛んでるとあつという間だね」

れおん 「だいき、家はどこだ？一応報告しておかないとな」

だいき 「俺の家はねく、あれだよ！あの緑の屋根の家！」

れおん 「だそうだ、ピジョット。頼む」

ピ
ジ
ョ
ツ
ト
「
ピ
ジ
ョ
」

45・帰省2

だいきの家

ガチャ

だいき「母ちゃん、父ちゃん、ただいま」

だいきの母「あらお帰りなさい、だいき」

だいきの父「おや、そちらの方達は…？」

れおん「初めまして。れおんといいます」

ほのか「ほのかといいます。私達、だいき君と一緒に行動してたんです」

だいきの母「まあまあそうだったんですか。だいきはどんどん突っ走るから大変じゃありませんでしたか？わざわざこんな所までありがとうございます」

だいき「ちよ、ちよつと母ちゃん！俺、そんな事してないから！それよりもさ、このれおんさんってあの蒼碧のれおんだよ！」

だいきの父「……ええ!?ほ、本当ですか!?!」

れおん「は、はい。そんな大した事ではないですが」

だいきの母「だいき！あなたまさか失礼な事してないでしょうね！」

だいき「えっと……。してないと思う！」

れおん「ハハハ、大丈夫ですよ。だいきは面白くていい子でしたよ」

ほのか「随分賑やかになったもんね」

だいき「へへ、ありがとうな！」

だいきの父「それでどうして急に帰ってきたんだい？あんなに俺はリーグに出るって
言ってたのに」

れおん「その事に関しては俺の方から説明させていただきます。実は」

れおんはレイロウシティであった事とこれからの事を伝えた

だいきの母「そうだったんですか。あの港の事は私達もテレビで見ました。まさかあの場にだいき達がいたなんて……。れおんさん、だいきを守ってくださいありがとうございます
ございます」

れおん「俺は何もしてませんよ。だいき自身の判断がよかったです。ほのかちゃん、最初から最後まで君を守ってたのはだいきだったんだぞ。船が落ちて、ドククラゲ達から守って、安全な場所まで離れてっつな」

だいき「ちよつとれおんさん！そういう事は言わなくていいの！」

ほのか「そうだったの!?!だいき君、本当にありがとう」

だいき「お、おう」

だいきの父「だいきは騒ぎが収まるまではここにいた方がいいという事ですよね」

れおん「はい。今、この地方はコスモ団によりどこも安全ではなくなりつつあります。それを俺達が食い止めますが、その際に子ども達もいると巻き込まれる可能性が大きいです。子ども達に危険な事はさせられません。だからここに戻しました」

だいきの母「そうですね。だいき、一旦家で大人しくしてましよう。れおんさん達に任せてればきつと大丈夫だから」

だいき「……うん」

れおん「それでは俺はほのかちゃんの家にも行かなきゃなので、これで失礼します」

だいきの家前

れおん「ピジヨット、次はタジシテイだ」

ピジヨット「ピジヨー」

だいきの母「どうかお気をつけてください」

だいき「ほのか！暇だったらこっちに来てよな！ポケモンバトルとかやろうぜ！」

ほのか「うん。やろう」

れおん「ありがとうございます。それでは」

タジシテイ

れおん「よつと。ありがとな、ピジョット。ここはいつも海からの風が吹いてるな。気持ちいい所だ」

ほのか「久しぶりにこの景色見たな。れおん君、あの茶色の家が私の家だよ」

れおん「了解だ。テレビ電話で互いに顔は知ってるからな。だいきよりやりやすいだろう」

ほのかの家

ガチャ

ほのか「お母さん、お父さん、ただいま！」

れおん「お久しぶりです。直接お会いするのは初めてですね」

ほのかの母「ほのか、お帰りなさい。れおんさん、わざわざ送ってくださいありがとうございます
うございます」

ほのか「あれ？お父さんは？」

ほのかの母「お父さんは海に行ってるわ。なんでも海がいつもと違うとか言ってたわ」

ほのか「そっか。れおん君、少しゆっくりして行って。これから大変でしょ？」

れおん「そうだな。少し休ませてもらおうかな」

ほのかの母「それなら、最近貰ったお菓子があるんです。今出しますね」

ほのか「あ、おいでムンナ。久しぶりのお家だよ」

ムンナ「ムナ？ムナア！」

れおん「そっか。ムンナは最初からこの家にいたのか。喜んでるみたいだな」

ほのかの母「あらムンナちゃん、大きくなったわね。ほのか、他のポケモン達も見せて」

ほのか「うん。皆、出ておいで」

ワカシャモ「シャモ！」

ムクバード「クバー！」

ミミツキユ「ミツキユ！」

ハスブレロ「ブロ！」

ほのかの母「まあこんなに！皆、いつもほのかを守ってくれてありがとう」

ほのか「お母さん、恥ずかしいからやめてよ」

その後、色々と話をしていた

ほのかの母「そう。ポケモンリーグに出たいのね。応援してるわよ」

ほのか「うん。ありがとう」

れおん「ほのかちゃんはいいいセンスと観察眼だからな。知識もあるし、いい所までいくと思うぞ」

ほのか「えへへ、ありがとう、れおん君」

ほのかの母「君？ほのか、歳上にそんな呼び方失礼でしょ！」

れおん「あ、いいんですよ。俺がそれがいいって言ったんです。どうも敬語とかは慣

れていなくて」

ほのかの母「そうだったんですか。それならよかったです。あ、れおんさん、コーヒー
またいれますね」

れおん「ありがとうございます」

ほのか「そういえばお母さん達はどうしてれおん君に頼んだの?」

ほのかの母「そりゃあ知識しかないあなたがしつかり旅が出来るのか不安で仕方な
かったのよ。あの後、ジャーバ博士からポケモンをしつかり渡しましたって連絡が来た
からその事を相談したの。」

そしたらジャーバ博士から、れおんさんが近くにいると言って、トップトレーナーの方に任せるのはどうかと思っただけ、そっちの方が色々教えてくれると思ってお願いたの」

れおん「なるほど。ジャーバ博士から突然俺に連絡がきたのはそういう事だったんですか」

ほのか「お母さんのおかげで色々な事知れたんだ。本とかテレビじゃあ知れない事いっぱいあったんだよ」

ほのかの母「でしょ？旅は楽しい？」

ほのか「うん！洞窟とか夜は怖いけど」

ほのかの母「まだ治ってなかったの？」

ほのか「怖いものは怖いの！」

れおん「あ、そうだ。ほのかちゃん、本当はレイロウジムを倒したらあげようと思ってたんだが、こんな事になったからな。この技マシンあげるよ。使ってみてくれ」

ほのか「え？いいの？れおん君のじゃないの？」

れおん「そうなんだが、俺はもう使う機会も減ってきたからな。中身はかわらわりとなみのりだ」

ほのかの母「なみのり……つて秘伝マシンですよ！そんな貴重なもの本当にいいんですか!？」

れおん「はい。俺にはもういりませんから」

ほのか「秘伝マシン？聞いた事ある。どういうやつだっけ」

れおん「そらをとぶ、いわくだけ、など生活する上でよく使われる技を覚えさせるために必要な技マシンの事だ。種類は数個しかないが、覚えられるポケモンは多いのも特徴だな。

なみのりは大抵の水ポケモン達が覚えられる。それがあれば、海の上や荒れる波の上

も自由に進めるぞ。海に住むポケモン達は元からできるが、ハスボーやヒンバス、ヘイガニやバスラオなど川などに住むポケモン達はこれがないと海を長時間泳げない。ぜひハスブレロに覚えさせるといい」

ほのか「へえ。どうして貴重なの？」

ほのかの母「入手するのに本来なら条件があるのよ。ジムリーダーに認められて一定の功績があるポケモントレーナーに渡されるもの…でしたよね」

れおん「そうだな。厳密にはジムバッジ3個以上、ポケモン達のレベルが35以上、ジムリーダーの認定書持ちだな」

ほのか「厳しい！え!!私、何もクリアしてないよ！大丈夫なの？」

れおん「覚える分には何も問題ないさ。それに実はそんな条件なんかいららないんだ」

ほのかの母「そうなのですか!?!じゃあどうしてこんな条件が」

れおん「条件をつけたのは汎用性が高い技だからだ。これがあればどこだって行けるし、いろんな物を壊したりできる。悪用されないように、リーグが調整したんだ。

技も特殊なものになっていて、一度覚えたら忘れさせるにはポケモンリーグまで直接行かないといけないんだ。まあ、なみのりは強力だから忘れさせる必要はなさそうだけどな」

ほのか「そっか。結構大変なんだね」

ほのかの母「なるほど、これは勉強になるわね。れおんさんに任せて正解でした」

れおん「そんな。褒められるような事じゃないです」

ほのか「かわらわりはヒー君用？」

れおん「ああ。かくとう技として覚えさせるといい。それに、かわらわりもかくとうタイプ以外のポケモンか覚える事も多い技だ。試してみてください」

ほのかの母「こちらもお礼しますね。大したものじゃないんですけど、家の畑で取れたきのみがあるんです。持っていつてください」

バスケットにオレンの実、クラボの実、カゴの実、モモンの実、チーゴの実、ナナシの実、キーの実、ヒメリの実、ラムの実が入っていた

れおん「おお！こんなにいいんですか!?!」

ほのかの母「はい。本当はほのかに送るものだったんですけど、ほのかはこれからしばらく家にいますし、これからも畑で取れます。れおんさんに使ってもらえれば思つて」

れおん「これらのきのみはよく使うんで、消費量も多いんですね。ありがたく使わせて貰います」

ほのか「前に私に送ってくれた時より多い。今って収穫時期だっけ？」

ほのかの母「最近からよくなるようになったの。栄養あげたから成長が少し早かったみたい」

ほのか「私もこれから手伝うね」

ほのかの母「ええ。ありがとう」

46・ゴルダックとの出会い

夜、ほのかの家

れおん「すみません。わざわざ泊めてくださるなんて」

ほのかの母「いいんですよ、れおんさん。ほのかがお世話になってたんです。ぜひ我が家のように寛いでいただいて大丈夫です」

れおん「ハハ……。ありがとうございます」

ほのかの父「れおんさんはゴルダックがパートナーなんですよね。しかも色違いとお

聞きしています。少し見てみたいのですがいいですか？」

れおん「全然構いませんよ。ゴルダック、呼ばれてるぞ」

ゴルダック「ぐわ」

ほのかの父「ほう、これが色違いですか。近くで見ないとわかりませんね。確かに少し青がかってます」

ほのか「そういえば、ゴルダックとれおん君っていつ会ったの？前にコダックの時からって聞いてたけど」

れおん「俺がこいつと初めて出会ったのは俺が3〜4歳の時だな」

ほのかの母「まあ！そんな早くからだったんですか。ムンナちゃんよりずっと早いじゃない」

ほのか「まだ野生だったんだよね？どうやって仲良くなったの？」

れおん「少し曖昧なんだが、確か俺の家の近くに海があつてな。いつもそこで遊んでたんだが、その砂浜に色違いのコダックが一人で座つてたんだ」

ほのかの父「色違いのコダック。それがこのゴルダックなんですね」

れおん「はい。それを俺が誘って一緒に遊ぶようになったんです。一番の始まりはそこですね。お前の方が覚えてるんじゃないか？」

ゴルダック「ぐわ」コク

れおん「そこから友達になって、俺が大きくなったらパートナーになってほしいところにお願いで、誰にもゲットされないで約束したんです。今思えば無茶苦茶ですよ
ね」

ほのか「そんな事ないと思う。すごく素敵だよ。だってここにゴルダックがいるって事はその約束が叶ったって事だよね」

れおん「まあ……そういう事だけだよ」

ほのか「いいなあ。私も初めからそうやって仲良くなりたかった」

れおん「ムンナとはどうやって出会ったんだ？ここら辺にはいないポケモンだぞ。ムンナはマボロシ山の周辺に住むポケモンだ」

ほのかの父「ムンナは私が仕事でレイロウシティに行っただけです。その時にマボロシ山に友達と誘われて行っただけですが、そこで偶然子どものムンナを見つけまして。そこでゲットしてほのかにプレゼントしたんです」

ほのか「私が昔からポケモンほしいって言ってたんです」

れおん「なるほどな。ただ、ムンナは人とあまり仲良くするポケモンじゃない。今みたいになるには苦労したんじゃないか？」

ほのかの母「流石れおんさん。その通りなんです。最初は怖がって怖がって、全く動こうとしなかつたんです」

ほのか「懐かしい、よく覚えてるよ。フーズもあまり食べてくれなくて私達がいなくなつてから食べてたもんね」

ほのかの父「私はポケモンの性格に詳しくありませんから、まさかこんなに怖がられるとは思っていません。ほのかには悪いことをしたと思つていたんです」

ほのか「私も早く仲良くなりたくて、ずっとムンナに引つ付けてたんです。ムンナは

多分嫌がってたのかな？」

ポン！

ムンナ「ムムウ!!ムウ!ムナ!」

ムンナが突然出てきてほのかに貼りついた

ほのか「ムグ……。ムンナ、どうしたの？」

ムンナ「ムウ!ムンナ!」

れおん「ハハ！自分のこと話されて恥ずかしくなったのかもな」

ほのかの父「おや随分大きくなったね、ムンナ。しかもサイコウエーブも出さなくなつて。成長したんだねえ」

ほのか「バトルもたくさんしたもんね。今レベルいくつだっけ？」

れおん「これ使うか？」

れおんは鞆からポケモン検査機を出した

ほのか「あ、借りてもいいですか？」

れおん「ああ、ほら。頭に当てるだけだからな」

ほのか「えっと、ムンナはレベルが29、特性がシンクロ。技がサイケこうせん、月の光、さいみんじゅつ、あくむだつて」

ほのかの母「あら、そんなに強くなったのね。私のクルマユちゃんとい勝負じゃない」

ほのかの父「ムンナはどうやって進化するんだったかな」

れおん「ムンナは……。ほのかちゃん、知ってるかい？」

ほのか「うん！ムンナは月の石っていう特別な石が必要なんだよね。どこにあるかわからないけど」

れおん「正解だ。売られてないし、確かな場所も存在しないから結構珍しい石の一つだ。ただ、マボロシ山にその石がたまに落ちているとは聞いた事がある。レイロウシテイから進んだ先にあるから、騒動が収まったら行ってみようか」

ほのか「え？また一緒に旅してくれるの!？」

れおん「ああ。だいきもよかったら連れて行こう。俺もなんだかんだで楽しかったからな」

ほのか「やったー！」

ほのかの母「いいんですか？れおんさん。ほのかがまた迷惑かけるかもしれないですよ？」

れおん「迷惑なんて一度もかけられてないですよ。一人で旅するのは慣れてますが、やはり誰かいた方がこちらとしても楽しいです」

ほのかの父「それならぜひまたお願いします」

ほのか「そういえばお父さん。昼に海に行ってたよね？海が変だったの？」

れおん「あ、それは俺も気になります。力になりますよ」

ほのかの父「そうか。れおんさんなら何かわかるかもしれないね。実は最近海が少し荒れる事が多いんです。ここら辺は穏やかな海域で、荒れる事なんて台風が近づかない限り無いのですが」

れおん「ふむ……。確かにここら辺は波の流れ方からしても荒れるような事はあまりありませんよね。何か他に変化はありますか？」

ほのかの父「他に……。気のせいかもしれませんが、野生のポケモン達がよく海上にいる気がします。関係ないかもしれませぬね」

れおん「……………いや、わかりません。もしかしたら海底で何か起こっているのかも
しれません。明日午前だけなら俺も時間があります。俺も漁に行きますよ」

ほのかの父「本当ですか？忙しいのにありがとうございます」

れおん「気にしないでください」

ポン！

バイゼル「ブ、ブイ」

ほのかの父のモンスターボールから突然ブイゼルが出てきた

ゴルダック「ぐ？ぐわ」

ほのかの父「あ！ブイゼル、勝手に出てきちゃ駄目じゃないか」

ブイゼル「ブイ……」

ほのかの母「あら珍しい。ゴルダックが気になったのかしら」

れおん「お父さん、ブイゼルを持ってたんですね。女の子ですか」

れおんの父「はい。漁を手伝ってくれるいい子なんです。いつもは大人しいんですが」

ほのか「え。ブイゼルって女の子だったの？知らなかった」

れおん「どうせなら。えっと、スマホで」

シユン！

れおんの目の前にモンスターボールが現れた

ほのかの母「え!?れおんさんの前にボールが」

ほのか「あ、それって前にジュンサーさんに借りてたやつ。れおん君持ってたの?」

れおん「この緊急事態用に一定期間トップトレーナー全員に貸し出してくれたんだ。さて、フローゼル。お仲間だぞ」

フローゼル「フロー!フロ?」

バイゼル「バイ!!」

バイゼルは目を輝かせてフローゼルを見ている

ほのかの父「おお！フローゼル！ブイゼル、こうなりたいか？」

ブイゼル「ブイー！」

ほのか「アハハ。尻尾回してる。可愛い」

れおん「どれどれ、ブイゼル少し見させてくれ」

れおんはブイゼルの観察し、触り始めた

れおん「……………よし、ありがとな。バトルは得意じゃないみたいですね。泳ぐのもできそうですが、早くはないって感じですかね」

ほのかの母「触っただけでわかるんですか。流石トップトレーナーですね」

ほのかの父「そうなんです。基本魚達を追い込んでくれるくらいで、バトルはほとんどやった事ないです。泳ぐのもその時くらいで後は浮いている程度なんです」

れおん「ブイゼル、泳ぐのは好きか？」

ブイゼル「ブイー。ブイ、ブイ」

れおん「じゃあ浮かぶ方が好きか？」

ブイゼル「ブイ！」

れおん「ハハ、そうか。それなら仕方ないか。進化はまだかかりそうですね」

ほのかの父「そうですか。まあそんな気はしてました」

れおん「まあブイゼルの方が可愛いし、いいと思いますよ」

フローゼル「フロ？」

フローゼルはかまいたちの構えを取った

れおん「待て待て、フローゼル。家の中でそんな技打とうとするな。お前も充分可愛い」

フローゼル「……」

ほのか「凄い嫌そうな顔してるよ。れおん君が変な事言うから」

れおん「な、何だよ。褒めただろ？怒るなって。ほら、戻れ」

ほのかの母「あらもうこんな時間。そろそろお風呂に入って寝ましよう」

ほのか「本当だ。気づかなかった」

ほのかの父「それではれおんさん、明日お願いします」

れおん「はい。任せてください」

47. 海底の異変

次の日、タジシテイ 港

ほのかの父「これが普段私達が使っている漁船です。今日は特に予定が無いのでこれに乗って大丈夫ですよ」

れおん「わかりました。それでは失礼します」

ほのかの父「ここから離れていくとだんだん波が高くなっていつて荒れるようになるんです。近くまで行きますね」

タジシテイ 沖合

れおん 「まだ特に変化は無さそうですね」

ほのかの父 「偶にここら辺でも波が高くなる事もあったんです。今日は大丈夫なようですね。もう少し進んでみます」

れおん 「穏やかな海を変えるだけの力……。ポケモンの作業なのか？だとしたら一匹では無さそうだが」

しばらく進み

船が先程よりも揺れ、波が高くなってきた

ほのかの父「こんな感じですよ。れおんさん、どうですか？」

れおん「そうですね……。確かにこの辺りではあり得ない揺れ方です。北海などならこの揺れも当たり前なのですが。少し探ってみます。ゴルダック」

ゴルダック「ぐわ」

れおん「海の変化があつたら教えてくれ。ポケモン達に聞いてもいいし、多少遠くまで泳いでも大丈夫だ」

ゴルダック「ぐ」

ザバアン！

ゴルダックは海に潜っていった

れおん「俺も準備しておきますか。お父さん、頼んでたダイビングスーツ持ってきてくれましたか？」

ほのかの父「はい。こちらで大丈夫ですか？」

れおん「ありがとうございます。着替えますね」

ほのかの父「ゴルダックに任せただ方がいいのではないですか？荒れてる海は私達でも泳ぐのは難しいですよ」

れおん「俺なら平気ですよ。海の中は慣れてます。危なくても多少なら自分で何とかできますし、ゴルダックも援助してくれます。ポケモン達に任せるより自分で見た方が理解も早いです。」

それに、ポケモンに頼つてばかりだと情けないじゃないですか。自分で出来る事はやらなければ。いつも頑張ってるゴルダック達に失礼ですからね」

ほのかの父「……………なるほど。立派な考えです。私、感銘を受けました」

れおん「そんな。大げさですよ」

しばらくするとゴルダックが戻ってきた

れおん「お、どうだった？ゴルダック」

ゴルダック「ぐわぐわ、ぐわ！」

れおん「俺も来いつてか。わかったぜ。行こうか」

ほのかの父「お気をつけて！私はここで動かず待ってるので」

れおん「はい。お願いします」

ザバアン！

ゴルダック「ぐわぐわ」

れおん「(そっちだな。わかった)」

少し進むと

れおん「(これは!!?まさか海底遺跡か!?)」

海底に大きな遺跡のようなものがあり、潮の流れがそこで渦巻くようになっており、小さな渦潮が周りにいくつも出来ていた

れおんは水上へ上がっていく

れおん「プハア！なんだ、あれ！あんなの出来てたなんて知らなかった。ゴルダック、中を見たのか？」

ゴルダック「ぐわ」コク

れおん「何かあったのか？」

ゴルダック「ぐわぐわ」フルフル

れおん「何もなしか。………考えていても仕方ないな。荒れてる原因はわかった。報告に戻ろう」

漁船

ほのかの父「ええ!? 海底遺跡ですか!? そんなものが!」

れおん「はい。少し信じられませんでした。確かに遺跡のようなものでした。その周囲で小さな渦潮がたくさん発生しており、そのせいで周辺の潮の流れが変わり、近辺のここら辺の海が荒れているのだと思われまます」

ほのかの父「な、なるほど。わかりました。明日町の皆に伝えておきます。れおんさん、ゴルダック、ありがとうございます」

ゴルダック「ぐわ」

れおん「さて、少し時間取ったな。急いで戻ろう」

ほのかの家

れおん「それでは俺はこれで失礼します。ありがとうございます」

ほのか「れおん君、危険なはずだから気をつけてね。大丈夫だと思うけど」

れおん「ああ、俺も警戒していかないとな」

ほのかの父「またよろしくお願いします。どうかご無事で」

ほのかの母「まだ若いのにこんな事任せてしまうのは気が引けますが、どうか騒動を収めてください」

れおん「任せてください。確かに最年少ですけど、簡単に負ける気はありませんよ。ピジョット、エステロシテイまで頼む」

ピジヨット「ピジヨー」

ほのか「またねー」

れおん「ああ！」

上空

れおん「さて、ターナさんとじゅんさんに今から向かうと連絡しておこう。ピジヨット、今日までありがとな。エステロシテイにターナさんが待つてるからそこで仕事は終わりだ。ターナさんにいっぱい褒めてもらえ」

ピ
ジ
ョ
ツ
ト
「
ピ
ジ
ョ
」

48. 貿易都市エステロシティ

エステロシティ

地方最大の商店街が立ち並ぶ街。街の六割は商店街が占めている。そのため様々な物がここで入手でき、他地方からの観光客へのお土産から日用品、食料品、ポケモングッズ、技マシン、きのみ、果てはマニア向けの石やボール、きのこなども売られている。また、街の中心に立つ大きな時計塔も有名であり、街のシンボルともなっている。別名貿易都市

時計塔広場

れおん「さて、到着だな。しかしいつ来ても人が多いなあ。レイロウシティに負けないぞ」

広場にはベンチや草原で休んだりポケモンと遊んだりしている人、広場から奥に続く商店街への道にも行き交う人達で賑わっていた

れおん「ピジヨット、ありがとな。戻ってくれ」

ピジヨット「ピジヨー」

れおん「ターナさん達はまだのようだな。ここが集合場所だし、まだ大きな襲撃も無さそうだ。しばらく待っていますか」

男性「あ、あの上」

れおん「ん？俺か？」

男性「は、はい。あの、もしかして蒼碧のれおんさんじゃないですか？前に何度かテレビで見ました。チャンピオンのアビーさんと戦ってましたよね？」

れおん「おお、見てくれていたのか。その通りだぜ。俺の事知ってるなんて珍しいな」

男性「はい！俺、バトル動画とかが大好きで、リーグ戦や特別マッチは毎回楽しみにしてるんです！」

れおん「そうだったのか。俺はアビーさんにもいつも負けてるからな。情けない所見ら

れているみたいだ」

男性「そんな事ないですよ！俺より若いのに水ポケモン達だけであそこまで勝ち進むって凄いじゃないですか！尊敬してますよ！」

れおん「そ、そうか？ありがとな。少し照れるな。だが、あの特別マッチはトップブレナーが全員いるわけじゃないからな。出てない人で俺より強い人なんてたくさんいるんだぜ？」

男性「そうだったんですか。でも、確かに出てない人もそれなりにいますもんね。エレンさんとかジーニヤさんとか。あ！今ゴルダック連れてますか？俺、一度生で見たいです！」

れおん「いいぞ。ゴルダック、出てこい」

ゴルダック「ぐ」

男性「うおー！ 凄え!! 本物だ！ 色違いだ！ カッコイイ！」

男性はゴルダックの周りを触りながら回っている

ゴルダック「ぐわ……」

じゅん「おーい、れおん！」

れおん「ん？お、来たか」

遠くからじゆんとターナが歩いてきた

ターナ「あら？この方は？」

男性「ええ!!?本物のターナさん!?しかもじゆんさんまで!」

れおん「この人は俺の事知ってたみたいだな。少し話してゴルダックを見せていたんだ」

じゅん「ほう。れおんの事知ってるなんて珍しい。あの特別マッチとかでしか普通は見えないだろうに」

れおん「それを見てくれていたらしい。俺の負け試合も見られたって事だけだな」

じゅん「いつも負けてるからな、れおんは。まあ、アビー相手によくやっていると
うけどな」

男性「は！も、もしかして何か集まりとかでしたかね！俺、邪魔しましたね！れおん
さん、本当にありがとうございました！」

れおん「お、おう。こつちこそありがとな。よかつたらまた応援してくれよな」

「男性「はい！もちろんです、それでは！」

ターナ「ふふ、もちろんですつて。次も出るんでしょう？頑張らないとね」

れおん「まああの試合はいつも楽しいからな。少し頑張りますか」

じゅん「さて、れおんも来た事だし、少し俺の店で作戦を立てるか」

ターナ「そうね。警戒すべき場所や分担を決めましょう」

れおん「了解です。あ、ターナさん。ピジヨットありがとう。凄く助かった。頑張っ

たから褒めてやってくれ」

ターナ「ええ、わかったわ。ふふ、ピジヨットお疲れ様」

街の隅では

男性「さて……………」と

ベリッ！

先程の男性の顔のマスクが取れ、ゲルダが姿を現した

ゲルダ「この街には蒼碧と舞姫と猛輝ですか。中々厄介揃いのようですね。ですが、
ディブロー様のご期待に応えなければ」

じゆんの店 ディポーター

周りの店より一回り大きな店で、中には二つの売店があり、一つは傷薬やモンスターボール、技マシンやドーピングアイテムなどトレーナーに必要な物が売られていた。

もう一つには、シルクのスカーフや気合のタスキ、いのちのたま、こだわり眼鏡にしんかのきせきなど対戦の時にポケモンに持たせるアイテムが売られている。また進化に必要な際のアイテムなども見られる

れおん「本当この店はトレーナーにとってみたら神様かなってほど揃ってますよね。

この店一つで必要な物全て買えますよ。よくこれだけ揃えられますね」

じゅん「まあ、そこは俺の取引術やいい取引相手に恵まれてるからって所だな。後、バトルタワーで俺が勝ち進んで得た商品も売りに出してるんだぜ」

ターナ「バトルポイントで交換できる物の事ね。あそこはいいわよね。私もたまに利用してるわ」

れおん「じゅんさんはいいんですか？折角勝って得た物じゃないですか」

じゅん「まあな。俺もポケモン達も別に無くたって構わない。なら、必要としてる人に使ってもらったほうがいいだろ。特にこのいのちのたまやこだわり系のアイテムなんかはバトルタワーでしか取れないからな。」

バトルが苦手な人とかだと手に入れられない。そんな少しの不平等も解決ってわけだ。しかも、他のアイテムより少しお買い得にしてある。大人気商品だぜ」

れおん「確かにバトルが苦手でもこういったアイテムを使って少しは強くなるのも大事ですよね」

ターナ「ほら、じゅん。また営業顔になってるわよ。今回はお仕事があるの。そっちを優先させて」

じゅん「あ……。へへ、悪いな、つい癖だよ。奥に生活スペースがある。そこで話し合おうぜ」

49・消えゆく人々

じゅん「さて作戦だが、まずあいつらからしたらこの街の何を狙ってくると思う？」

れおん「そりゃあこの街といたら物資ですよ。何でも揃いますからね」

じゅん「そうだ。だから俺達は商店街を中心に守る方がいいと考えている」

ターナ「そうね。狙うとしたらそこだわ。でも、この街に出入りするには、必ず街の北か南にあるゲートを通らなきゃいけない。そこを封鎖した方が早いんじゃないかしら？」

れおん「確かに。じゅんさん、それは駄目なんですか？」

じゅん「街の皆にもコスモ団の存在や脅威を知っていればそれでもよかったな。だが、まだこの事は公にされてない。」

だから封鎖なんて露骨な事したら街の皆にも怪しまれるし、コスモ団からしても寄り付かなくなる。今回は少しデメリットが大きい。それに来ると確定すらしていない。だから俺達は、まだ警戒程度に留めておく事しか出来ない」

ターナ「なるほど。わかったわ。でも、警戒するにしてもこの街はレイロウシティほどじゃないけどそれなりに広いわ。何か作戦はあるの？」

れおん「妥当な案だと見回りとか聞き込みとかですか？」

じゅん「れおんの言う通りだな。人の数だけ情報があるとも言われている。あちこちで聞けば何か発見があるかもしれない。三人でまず見回りするか」

二人「了解」

エステロ商店街　ボリオスエリア

れおん「商店街の北側だな。誰でもいいから聞いてみるか」

じゅん「待て、れおん。ここは店の人に聞いた方がいい。俺もそうだが、店をやつてると客の事をよく見てるし、周りも気にしている。引き出せる情報は多いと思うぜ」

ターナ「へえ、そうなのね。確かにお店とかで買おうか悩んでると決まって店員さんが話しかけてくるのよね。やっぱり見るとそういうのがわかるものなのね」

れおん「じゃあ少し営業中だが失礼して聞いてみるか。すみません」

男性店員「いらっしやい、兄ちゃん。何か用事かい？」

れおん「少しお尋ねしたい事があるんですが、最近商店街で何か変化とかありませんでしたか？」

男性店員「変化？うーん……。悪いな、特に思い当たらねえ」

れおん「それならよかったです。ありがとうございました」

数軒聞き回った後

ターナ「あ、れおんさん。どうだった？私は駄目だったわ。騒いじやってあまり話にもならなくて」

れおん「ターナさんはそうだよな。まあ仕方ないな」

じゅん「二人とも何も無かったみたいだな。そうだ！この先に街唯一のポケモンフーズ専門店があるんだ。そこならトレーナーなら誰しも行くだろうし、行ってみるか」

ターナ「ポケモンフーズ専門店。そんなのまであるのね」

れおん「珍しいな。俺も少し買い足しておこうかな」

ポケモンフーズ専門店 ラッチェ

お店の前では茶髪の女の子が元気に声をかけていた

女の子「いらつしやいませー。あ！じゅんお兄ちゃんだ！ママー、お姉ちゃん！じゅんお兄ちゃんが来たよー」

奥から長い茶髪の女性がニコニコしながらやってきた

さよ「あの、教えてくれてありがとう。じゅんさん、今日はどうされましたか？まあ！ターナさんまで!？」

じゅん「こんにちはだな、さよさん」

ターナ「初めまして」

まい「あ、この人も見たことある。というか、三人ともトップトレーナーじゃない？」

さよの隣には短い茶髪の女の子がいた

れおん「初めまして、俺はれおんだ。こう見えて水タイプのトップトレーナーなんだ。よろしくな」

のの「お兄ちゃんもお姉さんもじゅんお兄ちゃんみたいに凄い人？」

ターナ「ええ、そうよ。じゅんとはお友達なの」

じゅん「今日は少し聞きたい事があつて来たんだ。最近この街で何か変わった事とかあるか？人が減ったとか」

さよ「変わった事ですか……。何かあるかしら」

まい「うーん……。気のせいだと思うんだけど、お客さんが減った気がする」

のの「あ！それ私も思った！」

さよ「あら、本当？私は全然気付かなかったわ」

のの「あとあの人少し前から来てない！ほぼ毎日来てたナエトル連れのおじいちゃん
！」

さよ「言われてみれば……。まあ、歳だったし外に出歩きにくくなったのかもしれないわ」

じゅん「ふむ……。覚えておくな。教えてくれてありがとな、のの、まい」

ターナ「とつても役に立ったわ」

まい「本当？こんな変なので大丈夫なの？」

れおん「そんな事ないさ。あまり気付きにくい所だ。よく見てたな。お店のお手伝いもして偉いな」

のの「えへへ、ののはお母さんの役に立つの！」

ターナ「あら、とつてもいい子ですね。可愛い」

さよ「あ、ありがとうございます、ターナさん。のの、恥ずかしいからやめて」

じゅん「それじゃあまた何かあったら教えてくれ。じゃあな！」

れおん「客足が減った……か。確かに関係ない気がしなくもないが」

じゅん「まあ頭の片隅に置いておこう。もしかしたら本当に何かあるかもしれないしな」

ターナ「姉妹でお手伝いなんてとっても偉かったわ」

じゆん「あの子達には親父がいなくてな。女手一つであそこまで育ててるんだ。だから、俺が少しだけ気にかけてるのさ」

れおん「そうか。二人とも見た目の割に偉いと思っていたが、そういう事か。さよさんだったか。大変だっただろうに」

ターナ「まあ仲良くやってるしきつと大丈夫よ。さて、次はノートスエリアに行ってみましょう」

エステロ商店街 ノートスエリア

じゅん「ここでも聞き込み開始だな。三十分くらいしたらまたここで落ち合おうぜ」

二人「了解」

三十分後

じゅん「ターナ戻ってきたか。お、あっちからはれおんも来たな。二人ともどうだった？」

れおん「俺の所はどうやら店が休みになつてい場所が多かったですね。開いている店に聞いたら何やら店主がいなくなつたとか言つてました」

ターナ「私はそこまでじゃなかったけど、お客さんの減少があるらしいわ」

じゅん「ふむ。俺も大体そんな感じだった。こっちはどうやら相当変化あるようだな。ここまで来ると偶然には思えない」

れおん「そうですね。この街にもやはりコスモ団が」

ターナ「人を拐って何してるのかしら。必ず見つけないと」

じゅん「そうだな。必ず尻尾を掴んでやる」

しかし、三日経っても怪しい人は見つけられず、いなくなったという報告だけが
おん達に届いていた

50. 目撃者

三日後、じゆんの店内

じゆん「まずいな。相手の情報が何も無いつてのに随分被害が出ている。しかも店を営んでる人達ばかりが狙われてる」

れおん「どうしますか？このままだとお店が営業できなくなってしまう」

ターナ「もうすでに影響はあるみたいよ。いくつかお休みしている店もあったわ。でも、どうして誰も攫った人物を見てないのかしら」

じゅん「そこだよな。街を歩く人達に誰にもバレずになんて普通できるか？」

れおん「……………もしかしてポケモンの仕業か？」

ターナ「ポケモン……。そうだね、テレポート!!あれが使えれば一瞬だね！」

じゅん「なるほどな。コスモ団が逃げた時もテレポートだったんだろ？それをここでも使われているってわけか。だが、わかっててもこれじゃ対策が少ないな。全部の店に張り込むなんて流石に無謀だ」

その時、店の外から声がした

??? 「すみません!!じゅん兄ちゃん!!いませんか!？」

じゅん 「ん?休みつて看板があるんだが」

ターナ 「聞き覚えのある声だわ」

じゅんが店から出ると

まい 「あ!!よかった、いてくれた!!」

じゅん 「おお、まいちゃんか。どうしたんだ?そんなに焦って」

まい「お母さんとののを見てませんか!？」

れおん「あの二人を？悪いが見てないな。まさか……」

まい「私が買い物に行つて戻つてきたら二人ともいなくなつてたの。私、どうしたらいいかわかんなくて……」

ターナ「そんな……。あの二人までいなくなるなんて」

じゅん「取り敢えず店に行つてみるぞ。何か足取りが掴めるかもしれない。まいちゃん、君も俺達と一緒に行動しよう」

れおん「お母さん達は必ず見つけるからな。安心してくれ」

まい「はい。ありがとうございます」

ラツチエ内

店は荒らされたような形跡は無く、ただ人が誰もいないだけだった

まい「お母さん達どこいつちやったの……」

じゅん「やはりテレポートだろうか。何も情報が無さそうだ」

ターナ「厄介だわ。こうも何もできずにいるのは悔しいわね」

その時、店の外を探していたれおんが何かを見つけた

れおん「ん？遠くから誰かこっちに歩いてくるぞ」

まい「え？どこですか？あ……………のの！」

遠くからののがゆっくりとこっちに歩いてきた

まい「どこに行ってたの！って、どうしたのこの傷!!大丈夫!?!」

のの髪がボサボサで体に草や泥があり傷もついていた

じゅん「おい、大丈夫か！喋れるか!?!」

のの「うう……。お姉ちゃん、じゅんお兄ちゃん。助け……。て……。」ドサ

そう言うとののは倒れてしまった

まい「のの!!のの!?!」

ターナ「大変！急いで病院へ行きましょう！」

じゅん「この街に病院は無い。医者で我慢してもらわねえと」

れおん「それで大丈夫だ。急ぐぞ！」

エステロ医院

医者「どうやら疲労が大きいです。怪我は擦りむいただけのようですので大丈夫かと。時期に目を覚ましますよ」

まい「よかった……」

じゅん「大きな怪我じゃなくて安心だな」

ターナ「ののちゃんが目覚めたら話を聞いてみましょう。何か知ってるはずだわ」

エステロ公園

四人はベンチに座って話していた

れおん「さて、大きな進展だな。これでコスモ団の足取りを掴めたらいいんだが」

まい「コスモ団？何それ？お母さん達を攫った人達なの？」

じゅん「あまり言えない事なんだがな。今この街にはそいつらが店を営んでる人達を攫っているんだ。俺達はそいつらを捕まえないといけないんだ」

まい「もしかしてちょっと前に変な事がないかって聞いてきたのはその事を知りたかったの？」

ターナ「ええ。あまり公になってないからはずきりと言えなかったの。隠してごめんなさい」

まい「ううん！そんなの気にしてない。仕方ないもん、お仕事だもんね」

れおん「そう言ってくれると助かる」

じゅん「だが、ののちゃんのあの傷は逃げた時についたか、バレて襲われたかのどつちかだな。どつちにしろ、既にののちゃんがいらない事はあつちにもわかつているはずだ。今まで目撃者を逃さなかったのがついにポロが出た。それを隠すならののちゃんはまだ狙われる可能性が高い」

まい「そんな!!のはまだ安全じゃなかったの?」

れおん「相手の事を考えると、そう動いてきてもおかしくない。だが、対策ができないわけじゃない」

ターナ「そうね。私達が今日のはのちゃんの近くにいきましょう。そうすれば何かあっても無理矢理ついて行く事もできるわ」

まい「私も……。私も近くにいってもいい？ののは妹だから、大事な妹だから！何もできないかもしれないけど、私が少しでも力になってあげたい！」

じゅん「まいちゃん……。だが、かなり危険なんだぞ。危ない事はするべきじゃない」

まい「お願い!!絶対にじゅん兄ちゃん達から離れないから！」

れおん「……わかった。何かあつたらすぐ声を出すんだぞ」

ターナ「ちよつと、れおんさん！いいの!？」

じゆん「いや、いいんだ、ターナ。ここまで言ってるんだ。それに、支えようとしてる人をあまり否定するのもよくないからな」

まい「ありがとうございます！」

51. 遺跡の戦い

次の日、エステロ医院

のの朝に目を覚まし、元気になっていた

まい「のの、体はもう大丈夫？」

のの「うん！もう痛くないし、怖くないもん。ののはもう平気だよ」

医者「元気になったようですね。特に異常も見られませんよ」

二人「ありがとうございます」

医者「はい。また体調悪くなったら来てくださいね」

その後、エステロ公園

ターナ「特に何もなくてよかったわね。のちゃんも元気になったし」

じゅん「そうだな。さて、ここからが本題だな」

れおん「ののちゃん、何があったか教えてくれるか？」

の「うん。あのね、のとお母さんがお店で開店の準備してたら、突然パツって宇宙人みたいなポケモンが現れたの！そのポケモンがお母さんとののの事連れて、またパツって別の場所に連れてったの！」

まい「宇宙人みたいなポケモン？」

ターナ「おそらくリグレーかオーベムだと思うわ。パツって消えたりするのはテレポートで間違いないわね」

れおん「そうだな。やはりポケモンによるものだったか。それでののちゃん、その後
は。」

の「そこで変なおじさんがいて、お母さんの事連れてったから私怖くなって逃げ出

したの。外は街の少し離れた所にある森の奥だったの。

なんとか帰ろうとしたんだけど、変なポケモンに追いかけて回されて思うように帰れなかったの。そしたらお姉ちゃんのもんちゃんが出てきて、私に変身してくれて身代わりになってくれたの」

れおん「変なポケモン……。それに、もんちゃんって誰の事だ？」

まい「あ、もんちゃんは私のポケモンでメタモンの事なんです。もんちゃんが今のこの代わりに捕まってるって事なのね」

じゅん「事情はよくわかった。その森の場所なら俺も検討がつく。そこには俺が案内するから、二人は店でさよさんの帰りを待っていてくれ。必ず全員連れて戻るからな」

の「じゅんお兄ちゃん達、お願い。お母さんを助けて」

ターナ「任せてちょうだい。悪いことをする人は許さないんだから」

二人は手を繋ぎ、店へと戻っていった

じゅん「よし。早速向かおう。森はノートスエリアから出た先にあるんだ。ついてきてくれ」

二人「了解」

新奥の森

じゅん「森の中にはな、使われてない遺跡があるんだ。まだ調査途中だから誰も近寄らないようにさせていたが、そこが裏目に出たな。いるとするならそこしかないだろう」

ターナ「私はこの森に入るのは初めてだわ。かなり生い茂っているのね」

れおん「そうだな。そのせいで迷子になる人も多いと聞く。俺も何回か迷いかけた経験あるしな。ここは空を飛べるポケモンを持っていればいいんだが、そうでない人はこの先にあるヒュールシティに行くには通らざるを得ない場所だ」

じゅん「遺跡はこつちだ。この草木を進んでいくとあるんだ。道はほぼないようなもんだ」

苔の遺跡

ターナ「かなり古くなってるし、苔がついてるけど確かに遺跡ね。こんな場所に遺跡があるなんて」

じゅん「踏み荒らされた跡……。間違いなさそうだな」

れおん達は目の前の階段を降りていく。その先には牢屋があり、中に今まで攫われた人達が捕まっていた。中にはのの達の母、さよもいた。

じゅん「やはりここか！皆、無事か！」

さよ「じゅんさん！よかった！助けに来てくれたんですね！」

ターナ「今助けるわ！」

男性「皆さん、気をつけてください！敵はすぐそばにいますよ！」

ゲルダ「やはり来ましたね。れおん、ターナ、じゅん」

後ろからゲルダがやってきた

れおん「お前は…あの船の時の！」

ゲルダ「何とか目を盗んできましたが、やはり厳しそうですね。本当邪魔ばかりしてくれませぬえ。計画の邪魔はしないでほしいんですがねえ？」

ゲルダの側にはネンドールとエルレイドがいる

じゅん「れおん、俺とお前でこいつを止めるぞ。ターナ、檻を壊して中の人達を安全にさせるんだ」

れおん「わかりました」

ターナ「ええ、大丈夫よ。そっちは任せたわ」

ゲルダ「ふう。あまりバトルは好きじゃないんですよ。あなた達が相手なのも問題です。仕方ありません。これを使いましょう」

ゲルダは赤い錠剤を取り出した

じゅん「れおん、気をつけるぞ。あいつ、何かしてきやがる」

ゲルダ「エルレイド、進化しなさい！」

ゲルダはエルレイドに赤い錠剤を飲ませた。すると、エルレイドは赤い光に包まれ、メガ進化の姿になった。しかし、目は赤い光を放っている。

二人「な!？」

れおん「メガ進化だど!?腕輪もストーンも無しにやるなんて!」

ゲルダ「メガ進化とは似て非なる物ですよ。これはポケモンの元から持つ力を暴走させただけに過ぎません。よって、自我はありませんよ。エルレイド、全てを破壊しなさい。そこにいる人間三人諸共!!」

エルレイド「エルツ!!!」

れおん「!!!」

エルレイドはれおんの目の前に一瞬で距離を詰め、蹴飛ばした

れおん「グハアツ!!」

ドガァン!

れおんは攻撃を食らい、遺跡に直撃する

じゅん「れおん!!くっ!なんて速さだよ!見えなかった。キテルグマ!いけるか?」

キテルグマ「グー！」

ターナ「れおんさん!!大丈夫ですか!?!じゅん!私も戦うわ！」

れおん「ゴホツ!ゴホツ!いや……ターナさん、俺は何とか平気だ。そっちは任せた」

ターナ「……わかったわ。れおんさん、でも無理しないで」

れおん「やられるだけなんてかつこ悪いだろ。こっから何とか本領発揮してやるさ。
マリルリ！」

マリルリ「ルリ！」

ゲルダ「さて、このエルレイド相手にあなたがどこまで耐えられるか見物ですねえ」

5 2. 遺跡の戦い2

じゅん「キテルグマ、あいつのスピードには気を付けろ！すてみタツクル！」

キテルグマ「クーツ！」

メガエルレイド「レイツ！」

メガエルレイドはすてみタツクルを僅かな動作で避けた
れおん「動作の隙が少ないな。マリルリ、はらだいこ」

マリルリ「ルリ！」　♪

マリルリはフルパワーになり、攻撃力が六段階上がった

メガエルレイド「エルツ!!」

メガエルレイドはまた目にも止まらぬ速さでマリルリに突っ込んできた

じゅん「消えた!?!」

れおん「!?!やべえ、マリルリ!!」

メガエルレイド「エルツ!!」

メガエルレイドはリーフブレードを繰り出した

マリルリ「ルリー!!」

ドガアン!

マリルリは飛ばされ、柱に激突する

じゅん「こうなったら素早さを下げるぞ!キテルグマ、がんせきふうじ!」

キテルグマ「クー!」

キテルグマは落ちている岩をメガエルレイドに投げつけた

メガエルレイド「エル…」

メガエルレイドの素早さが下がった

「れおん「マリルリ、平気か？」

マリルリ「ルリッ！」

ゲルダ「何をしてるのですか、エルレイド。さつきと片付けてください」

その頃、ターナは

ターナ「皆、牢屋から離れててね。ムクホーク、インファイト！トゲキツス、はど
うだん！」

ムクホーク「ホークツ!!」ドガガガガ！

トゲキツス「トローゲー！」

ガシヤアン！

ターナ「これで大丈夫よ。皆、ここから逃げましょう！」

男性「ありがとうございます！」

女性「もうずっとここで暮らさなきゃいけないのかと思ってました」

さよ「ターナさん、本当にありがとうございます！」

ターナ「当然の事よ。でも、入り口はれおんさん達が戦ってるし、どうでしょうか」

お爺さん「なあに、この遺跡は何もあの入り口だけが外に出れる場所ではない。こつちに来るんじや。こつちにも外に出れる場所がある」

ターナ「そうなんですか。私、この遺跡は初めてでわからなかったんです。ありがとうございます、お爺さん」

少し歩くと、階段があり上に出れるようになっていた

ターナ「本当だわ。皆、あそこから出れば私の鳥ポケモン達でレイロウシティまで送るわ」

さよ「よかったです！ですが、ターナさん先程のじゅんさんやれおんさんは大丈夫ですか

? 激しい音がこつちにまで聞こえてきますよ」

ターナ「私も心配だけど、あの二人だって伊達にトップトレーナーの名は持つてないわ。二人が頑張っているんだもの。私も絶対にあなた達を安全な場所まで送り届けるわ。大切な皆を守るのがトップトレーナーの役目よ」

男性「かつこいい……」

女性「この事件が終わったらぜひ私の店に来てください！ 恩人として盛大にサービスいたしますよ！」

男性「俺の店もだ！」

ターナ「あら、ありがとう。それじゃあさつきと終わらせないとね」

その時

ドオン！

ネンドール「ドー」

地面からネンドールがターナ達の前に現れた

男性「こ、こいつ！あの変な男のポケモンですよ！」

ターナ「どうやら追いかけてきたらしいわね。大人しくどいてくれるとありがたいの
だけど」

ネンドール「ドー!!」

ターナ「まあ無理よね。なら、大人しくしてもらいましょうか」

レイロウシテイさよ達の店、ラッチエでは

の「お姉ちゃん、じゅん兄ちゃん達大丈夫かな？」

まい「きつと大丈夫。だって三人とも強いもん。絶対無事に帰ってきてくれるよ」

??? 「すみません、ポケモンフーズ専門店ってここですか？」

の「お客さんだ！いらつしやいませー！」

まい「いらつしや……。ええええ!!？」

その頃、れおん達はメガエルレイドに善戦していた

れおん「マリルリ！じゃれつく！」

マリルリ「ルリ！」

メガエルレイド「エル！」

じゅん「避けるのは読んでるぜ！キテルグマ、思いつきり決めてやれ！ギガイんパクト！」

キテルグマ「キーツ!!」

メガエルレイド「!？」

ドオオン！

メガエルレイドは吹っ飛ばされ、壁に激突する

れおん「よし！ナイスです、じゅんさん！」

じゅん「おう！結構攻撃当てたもんな。メガエルレイドくらい耐久力ならそろそろ倒れても」

ドガアン！

壁に埋もれたメガエルレイドがすぐに出てきた

じゅん「マジか!!まだ元気だっというのかよ！」

れおん「いや、そんなはずないと思います。いくらメガエルレイドでもじゃれつくや
すてみタツクル、アクアジェットに先程のギガインパクト。倒れるのが普通なんです
が……」

ゲルダ「困惑しているようですねえ。言っただけでしょう？メガ進化とは似て非なるものと。これはメガ進化ではありません。ポケモン誰もが持つ暴れる力を強制的に引き出

したのです。なので、このエルレイドが暴れる事は止められません。死ぬまで暴れ続けますよ」

二人「!!」

れおん「てめえ………ポケモンをなんだと思つていやがる!!」

じゅん「ポケモンは貴様の道具なんかじゃねえんだぞ!!」

ゲルダ「ポケモンは道具ですよ。何を言っているんですか。私の言う通りに動けばいいだけです」

メガエルレイド「レイツ！」

じゅん「!?」

メガエルレイドは目にも止まらぬ速さでじゅんの目の前までやってきた

じゅん「グハアツ!!」

ドオオン!

じゅんは遠くまで吹っ飛ばされる

れおん「じゅんさん!!」

キテルグマ「キーツ!!」

キテルグマはメガエルレイドを捕まえる

メガエルレイド「……エルツ!!」

キテルグマ「グー!!」

メガエルレイドにより、キテルグマは投げ飛ばされた

マリルリ「ルリ!?ルリー!」

ドサア!

キテルグマはマリルリを巻き込んで飛ばされた

れおん「キテルグマ！マリルリ！なら任せた、ゴル」

メガエルレイド「エル!!」

メガエルレイドはれおんの後ろに回り、腕を捻り上げた

れおん「痛え!!ぐっ！ボールが……」

れおんの手からモンスターボールが落ちた

ミシミシ！

れおん「ぐあああ!!腕が……お、折れ……」

ゲルダ「ふふふ、やればできるじゃありませんか、エルレイド。そのままれおん達を

完膚なきまで破壊しなさい。私は牢屋を壊したターナの方へ向かわないですからね。おっと、このボールは邪魔ですね。それ」

ゲルダは足下にあつたモンスターボールを階段の上に向かつて投げた

れおん「てめえ……………ふざけんじゃねえぞ」

メガエルレイド「エル！」

メガエルレイドは腕に付いた刃でれおんの背中を切つた

れおん「ぐああああ!!!」

ゲルダ「いい様ですねえ。さようなら、れおん。短い人生でしたね」

ゲルダは去っていった

一方ターナの方は

ネンドール「ドー」ドサ

ターナ「これで大人しくなったわね。皆、急いで逃げましょう！」

全員「はい！」

ターナは全員連れて外に出た

ターナ「よし、ここからなら飛んでいけそうね。ピジヨット、ムクホーク、トゲキツス、チルタリス、ボーマンダ、ファイアロー。皆を乗せてレイロウシテイまで送り届けて」

女性「凄い、こんなにたくさん」

ターナ「全員三人までなら乗れるわ。自由に乗って」

さよ「ターナさんはどうするんですか？ポケモンがいなくなっちゃいます」

ターナ「私は隠れながら上手くやるわ」

さよ「!?そ、それは危険すぎます！あ！メタモンがいるんで、その子に一匹変身させます！そうすれば、ターナさんにも一匹余裕ができますよ！」

ターナ「なるほど。メタモンがいるんだったわね。ありがとう、じゃあボーマンダ、残ってくれる？あなたが一番バトル向きだから」

ボーマンダ「ギヤウ」

ターナ「これで全員乗ったわね。皆、よろしく！」

バサア！

ピジョット達は全員飛び去っていった

ターナ「さて……さつきれおんさんの叫び声が聞こえた。やっぱり苦戦してるみたいね。急いで戻らないと」

53. 助っ人登場

じゅん「イタタ。服がボロボロになったじゃねえか。あのメガエルレイド本気で殺す気なのかよ。急いで戻らねえと！」

じゅんはれおんのいる場所まで戻る

じゅん「な!?れおん、無事か!!」

れおんは倒れて動けなくなっており、れおんの背中からはかなりの血が流れている

じゅん「タブンネ!いやしの波動を頼む!」

タブンネ「タブンネ〜!」

タブンネにより、傷が徐々に塞がっていく

メガエルレイド「エル!!」

メガエルレイドが遠くからこつちに戻ってきた

じゅん「お前、あんなやつに操られてていいのかよ!」

メガエルレイド「エル!!」

メガエルレイドはインフアイトを繰り出した

じゅん「ヤレユータン! まもる!」

ヤレユータン「ユータン」

ヤレユータンはインファイトを防いだ

じゅん「ヤレユータン、トリックルーム！」

ヤレユータン「ユーター！」

周りに不思議な空間が作り出され、素早さが遅いポケモンが早く動けるようになった

メガエルレイド「レイツ！」

メガエルレイドのリーフブレード

ヤレユータン「ユターン！」

ヤレユータンは飛ばされていく

じゅん「ヤレユータン!!くっ、一撃の重さは変わらねえか！」

じゅんがヤレユータンの方を向き、メガエルレイドから目を逸らした隙にメガエルレイドはじゅんに向かってサイコカッターを繰り出した

じゅん「ガハッ！」ドサ

じゅんは脇腹を切られ、その場に倒れ込む

メガエルレイド「……………」

メガエルレイドは倒れた二人にゆっくりと近づいてくる

じゅん「ぐっ……。俺が……。何とかしねえとなのに」

その時、階段の方からモンスターボールが投げ込まれた

じゅん「??」

ポン!

ゴルダック「ぐわ!」ドバア!

中からはれおんのゴルダックが出てきてメガエルレイドにハイドロポンプを打った

メガエルレイド「!？」

メガエルレイドは避けきれずにハイドロポンプで流されていく

じゅん「れおんの…ゴルダック。だが…どうして階段から？」

??? 「おや、かなり酷い事になってますね。これは僕が来て正解だったようですね」
階段から誰かが降りてきた

じゅん 「その声……。あなたは!!」

その頃、ターナはゲルダと鉢合わせていた

ターナ 「れおんさんとじゅんはどうしたの!？」

ゲルダ 「おや、自分よりも他人の心配とは。あの二人はもう始末が完了しました。時期にメガエルレイドもこちらへ来るでしょう。すぐにあなたもお仲間の元へ送りますよ」

ターナ 「私は負けない！例え一人でも、あなたに勝ってみせるわ！」

ボーマンダ「ギャウ!!」

ゲルダ「ふむ、自分の置かれた状況がわからないようですね。それはとても残念です。
ルージュラ」

ルージュラ「ジュラ」

ターナ「ボーマンダ、ほのおのきば!」

ボーマンダ「ギャウ!」

ゲルダ「ギリギリまで引きつけなさい」

ターナ「!!駄目!すぐに引いてりゆうの波動!」

ボーマンダ「ギャウウ!」

ボーマンダは急いで切り返す

ゲルダ「後ろを見せましたね。冷凍ビームです」

ルージュラ「ジュラー!」

ターナ「旋回して避けて！」

ボーマンダ「ギャウ!!」

ゲルダ「おや、見ずに避けますか。流石は舞姫と呼ばれるだけありますねえ」

ターナ「あまり舐めないで！バトルだってそれなりに得意なんだから！ボーマンダ、一気にくわよ！すてみタツクル！」

ボーマンダ「ギャウウ!!」

ルージュラ「ジュラー！」

ドオン！

ボーマンダのすてみタックルがルージユラに当たり、二人まとめて柱へ突っ込んだ

ゲルダ「厄介なポケモンですねえ。でも、もう終わりましたよ」

ターナ「何ですって！ボーマンダ、戻ってきて！」

ボーマンダは戻ってこない

ターナ「ボーマンダ!?!どうしたの!?!……まさか」

土煙が晴れると、そこには眠らされたボーマンダがいた

ゲルダ「あくまのキッス。最初から警戒していたはずでしょう?」

ターナ「起こさないと！」

ターナはボーマンダに向かって走る

ゲルダ「させませんよ。ルージュラ、冷凍ビームで周囲に壁を作りなさい」

ルージュラ「ジュラ！」パキパキパキ！

ルージュラとボーマンダの周りには高い氷の壁ができ、入れなくなつた

ゲルダ「さあ、ゆめくいで吸い取り尽くすのです」

ターナ「くっ！まずいわね」

ゲルダ「さて、これであたもお仲間の元へ行けますね。おめでとうございます」

ターナ「れおんさん達がそんな簡単にやられるわけないわ！」

ゲルダ「何を馬鹿な事を。エルレイドにかかればあの二人など赤子も当然ですよ」

その時、後ろから何かが飛んできた

パリイイイン!!

ルージュラ「ジュラ!?ジュラー！」

飛んできた何かに当たり、氷の壁は砕け、ルージュラと共に弾き出された

ゲルダ「な、何事ですか!?! そんな……エルレイドが!!」

飛んできたのはエルレイドだった。かなり傷つき動けなくなっている

同時に奥から誰かが歩いてきた

??? 「困るんですよ。大事な人達を傷つけられるのは」

ゲルダ「誰だ貴様!!」

ターナ「この声!! もしかして、アビーさん!?!」

奥からはオレンジの髪の毛のソフトモヒカンくらいの短髪の男性がやってきた

アビー「久しぶりですね、ターナちゃん」

ゲルダ「チャ、チャンピオンだど!?何故こんな所に！」

奥からはさらにギルガルドもやってきた

ギルガルド「ガッド！」

アビー「偶然ですよ。さあ、ご覚悟は出来てますか？」

アビーはゲルダを睨みつけており、周りは威圧感に覆われていた

ターナ「(こ、こんなアビーさん初めて見た。結構……怖いかも)」

ゲルダ「くっ……。ルージユラ、戻りなさい！オーベム、テレポート！」

オーベム「ベム！」 シュン！

オーベムはテレポートでゲルダを連れ去った

アビー「逃げられましたか……。まあ、今は放っておきましょう。れおんとじゅんの治療もありますからね」

ターナ「あの二人は無事ですか!？」

アビー「中々やられていますね。特にれおんは背中をバツサリと。片腕も折れています

ね」

ターナ「そんなに……」

アビー「そのメガエルレイドはどうしたのですか？ 様子が明らかおかしいですし、主人がいなくなったというのにメガ進化が解けませんよ」

ターナ「私達にもよくわからないんです。あのゲルダってやつのが、強制的な力で進化させられたみたいですが」

アビー「なるほど……。それは恐ろしい。ふむ……」

アビーは倒れているメガエルレイドに近づく

ターナ「アビーさん、危ないですよ！」

アビー「……………いえ、どうやら死んでしまったようです。鼓動が感じられません」

ターナ「嘘!?! どうして!?!」

アビー「強制的な力はポケモンの体にとつもない負担をかけているのでしよう。進化するだけでも、かなりの負担となるものを強制的にさせるなどありません。おそらく、あの男もそれを知っていて連れて帰らなかったのでしょうか」

ターナ「なんてやつなの……。ポケモンだって生きてるのに……」

アビー「一先ずエステロシティまで戻りましょう。詳しい話はそちらで」

ターナ「はい。アビーさん、救援本当にありがとうございます」

アビー「いえいえ、ほんの偶然だったんですよ」

54. 解決

エステロシテイ ポケモンセンター

ラッキー「ラッキー」

ラッキーはじゆんの腹に包帯を巻いていた

じゆん「ありがとな、ラッキー。これで何とかなるぜ」

ターナ「じゆん！怪我は大丈夫!?!」

じゆん「おお、ターナ、アビーさん。戻ってきたか。俺はこれくらいで済んだ。ただ、

れおんは治療室に運ばれていったな。しばらく入院だよ」

アビー「あの出血と怪我ですからね。当然と言えば当然ですね。命に関わらないだけよかったです」

ジョーイ「じゅんさんもそうでしたけど、れおんさんも応急処置がされてなかったらもっと酷かったと思います。深くまで切られていたので。あの処置はどうやって？」

じゅん「れおんのゴルダックが傷を洗って、俺のタブンネのいやしの波動で傷を癒したんです。僅かでも痛みを軽減しないとイケなかったの」

ターナ「そんな隙があったの？あのエルレイドとんでもないスピードだったわよ」

アビー「あのエルレイドは僕が相手していたんです。じゆんがトリツクルームを張ってくれたので、ギルガルドのジャイロボールとかげうちで対処できました」

じゆん「流石アビーさん。あのエルレイドにほぼ何もさせなかつたもんな」

ターナ「吹っ飛んできたのがエルレイドだった時は驚いたけど、やっぱりお強いですね、アビーさん」

アビー「そんな……。じゆんさんのトリツクルームやタブンネでの対応速度を考えれば、今回一番活躍したのはじゆんさんですよ。ターナさんも捕われていた人達を無事に街まで送り届けましたし、素晴らしいですよ」

じゅん「そういえばアビーさんはどうしてあんな遺跡に？」

アビー「僕はここのポケモンフーズ専門店に用事がありまして、そこを訪れたんです。そしたら」

アビー「すみません。ポケモンフーズ専門店ってここですか？」

のの「お客さんだ！いらっしやいませー！」

まい「いらっしや……えええ!!？」

アビー「おや？子どもだけですか？」

の「えつとね、お母さん達怪しい人達に捕まっちゃってるんです」

アビー「それは大変です！場所はどこですか？僕がすぐに助けに行きますよ」

まい「いい、いえ。もうトツプトレナーのじゅんさんとターナさん、れおんさんが向かってくれてるんです。あ、でも………チャンピオンさんなら、じゅんさん達の助けになるかも。チャンピオンさん、場所を教えるんで三人の状況を見てきてくれませんか？」

アビー「僕の事知ってたんですね。もちろん行きますよ。教えてもらっていいですか？」

「アビー」という感じでその姉妹達に教えてもらってあの遺跡にたどり着いたんです」

じゅん「なるほど。のちゃん達のおかげだったか。これは感謝してもしきれねえな」

ターナ「そうね。お店に行つて感謝を伝えに行きましょう」

アビー「私もついて行きますよ。無事とは言いにくいですが、何とか終わった事と買い物もしないのですから」

じゅん「そうですね。そのためにお店に行つたんですもんね」

さよ達の店 ラツチエ

じゅん「さよさーん、まいちやーん、ののちやーん」

さよ「あ！じゅんさん！ターナさん！本当にありがとうございます！つて、あら？チャンピオンのアビーさん!？」

のの「あ、じゅんお兄ちゃん！ターナお姉ちゃんにチャンピオンさん！」

まい「あれ？れおんさんは？」

ターナ「実はね」

三人は無事に助け出したが、れおんが大怪我した事を伝えた

さよ「そうでしたか……。れおんさん、私達のせいでそんな危険な目に……。本当にすみません」

じゅん「いやいや、さよさん達は何も悪くない！全部攫ったあいつが悪いんだから気にしないでくれ」

アビー「そうですよ。皆さんは被害者ですからそんな気に病まないでください」

ターナ「それと、ののちゃん、まいちゃん。アビーさんにこの事教えてくれてありがとう。アビーさんが来てくれなかったら私達まで危なかったわ」

まい「え。そうだったの!?それは本当によかった」

のの「のの、もしかして凄いい事した？」

じゅん「ああ!ののちゃんは凄かったぞ!攫われそうな所から逃げ出して俺達にその事を教えてくれたし、俺達を助けてもくれた。ありがとな!」

じゅんはののの頭を撫でている

のの「えへへ、やった!ののも役に立てた!」

さよ「他の皆も各自お店に戻って行きました。ターナさん、ありがとうございます。あ、ピジョット達は私の店の裏にいますよ。少し疲れていたみたいなので、お店の特製ポケモンフーズあげちゃいました」

ターナ「よかった。ピジョット達って三人以上は厳しいんだけど、あの時は緊急だったからそれより多くのせて少し不安だったの。お世話までしてくれたのは本当にありがたいわ」

まい「裏はこっちだよ」

ターナ「わかったわ。ありがとう、まいちゃん」

アビー「それでは私も少し買い物させて貰いますね。ポケモンフーズ専門店というのが気になっていました」

さよ「ありがとうございます！ポケモンのタイプや性格別に用意してあります。何か望みの物がありますか？」

アビー「へえ、それは凄いですね。では、わんぱくな子にはどういったものがよいですか？」

さよ「わんぱくなポケモンですとこちらの種類ですね」

のの「えへへ」

ののは一人で笑顔になっていた

じゅん「ん？どうした、ののちゃん」

の「ののね、もしお母さんがいなくなったらどうしようってすつごく不安だったんだけど、じゅんお兄ちゃん達のおかげで皆戻ってきて、のの嬉しくて。のの、お母さんやお姉ちゃん達と一緒にこのお店で働くの大好き」

じゅん「……へへ。そうだな、この景色がずっと続くといいいな」

55. イワンコ

その頃タジシテイにあるほのかの家では、ほのかがどこかへ出かけようとしていた。

ほのかの母「それじゃあほのか、だいき君によろしくね」

ほのか「うん。行ってきます、お母さん。夜までには帰るね」

ほのかは昨日の夜、だいきから電話があり明日バトルをしないかと誘われ、ギツタンシテイにあるだいきの家へ出発する所だった。

ほのか「よし、出たおいでヒー君！」

ワカシヤモ「シヤモ！」

ほのか「今日はだいき君とバトルだって。頑張ろうね！」

ワカシヤモ「シヤモシヤモ！」

ワカシヤモはやる気に満ちているようだ

ほのか「ふふ、元気いっぱいだね。バトルは久しぶりだし、私も感覚取り戻さないと」
タジシテイを抜け、山の中を歩いていると

ワカシヤモ「シヤモ？」

ワカシヤモは何かに気づいたようだ

ほのか「ん？ヒー君、どうしたの？」

ワカシヤモ「シヤモ……。シヤモ！」

ワカシヤモは少し遠くの茂みを指している

ほのか「え？あの草むらに何かあるの？」

ほのかはその茂みに近づくと

中を覗くと中には横たわっている犬のようなポケモン、イワンコがいた

ほのか「あ!!イワンコだ!こんな山にいるの!?! って………胴体に切り傷がある。この子、怪我して動けないんだ!大変!!」

ほのかは大急ぎでバツクから傷薬を出して、傷に少し当てた

イワンコ「……ワ……ア」

イワンコは苦しそうな表情になる

ほのか「ご、ごめんね！染みるよね。でも、我慢してね。後は……ギツタンシティまで急ごう。ポケモンセンターに連れて行かないと」

ほのかはイワンコを抱き抱えようとする

ほのか「わっ！お、思ってるよりずっと重いや……」

ワカシャモ「シャモ！」

ワカシャモがほのかを支える

ほのか「あ、ありがとう、ヒー君。よし、持てた。急ごう！」

ワカシヤモ「シヤモ！」

ギツタンシテイ

ほのか「ハア……ハア……。重たーい！でもやつと着いた。ポケモンセンターってこつちだったよね」

ワカシヤモ「シヤモ」

ワカシヤモはほのかを心配している

ジャーバ「おや、ほのかちゃんじゃないかい。どうしたんだい？」

ほのか「あ、ジャーバ博士！お久しぶりです！実は山の中でイワンコが怪我しているのを見つけて」

ジャーバ「おやおや、それは大変。ポケモンセンターでもいいけど、私の研究所でも簡単な治療なら出来るよ。研究所の方が近いからそちに運びましょう」

ほのか「わかりました。ありがとうございます」

ジャーバ「いいのよ。ほのかちゃんも結構疲れているみたいだしね」

ジャーバ博士の研究所

ジャーバ「ここに置いてあげて。薬は持ってくるわ」

ほのか「はい。よいしょっ」

イワンコ「クウ……」

ほのか「大丈夫だからね。今薬にしてあげるから」

その後、イワンコの体に包帯が巻かれイワンコの苦しそうな表情は無くなった

ジャーバ「これで一先ずは大丈夫だね。それにしてもイワンコなんて珍しい。この地方では中々お目にかかれないポケモンだよ。もしかしたら誰かのポケモンなのかもしれないねえ」

ほのか「そうなんですか。どうしてあんな所に怪我したままで放置されてたのかな」

「え」
ジャーバ「野生の線は捨てられないけど、トレーナーに捨てられたのかもしれないね」

ほのか「そうですか……」

ポン！

「ミミツキュ」「ミツキュ！」

ほのか「あ、ミミツキュ。急に出てきてどうしたの？」

ミミツキユ「ミツキユ…」

ミミツキユはイワンコを見ている

ジャーバ「おや、ミミツキユ！こつちも珍しいね。どこで見つけたんだい？」

ほのか「ガーネシテイに向かう途中の森で捨てられていたんです。それを私が保護して私についてきてくれたんです」

ジャーバ「なるほどね。もしかしたら今の話を聞いて、イワンコに何か感じているのかもしれないね」

ほのか「そつか。ミミツキユもイワンコが気になる？」

ミミツキユ「……キユ」

ミミツキユはイワンコを見ながら答えた

ジャーバ「そうかい。でもね、残念だけど私達は少し離れて様子を見た方がいい。イワンコは他人を警戒しやすいの。特にこんな密室で知らない人やポケモンがいたら興奮して襲ってくるかもしれない。」

そうなったら怪我也また開いてしまう。そうならないためにも少しここから出ようかね」

ほのか「そうなんです、わかりました。ミミツキユ、行こう」

ミミツキュ「ミツキュ……」

ジャーバ「お茶を出すわ。この前だいき君も会いに来てくれたけど、ほのかちゃんも久しぶりだし、少しお話聞かせて。あのアチャモは元気？」

ほのか「はい！だいき君も来たんですね」

ほのか達は出て行った

その数分後

イワンコ「……………」

イワンコは目を開け、辺りを見回すと部屋から出て行った

三十分後

ジャーバ「さて、イワンコは目を覚ましたかしら？つて……あら!?いないわ!!」

ほのか「え!?嘘!!」

ジャーバ「逃げ出しちゃったのかしら……。でも、怪我はまだ治りきってないし……」

ほのか「私、探しに行きます!」

ジャーバ「そうだね。そうした方がいいわ。私は庭や周辺を探してみるわ」

ほのか「街の人に聞いて回ってみます！」

その時、玄関から誰かがやってきた

だいき「ジャーバ博士ー！庭のバトルフィールド貸してくださいー！」

ほのか「あ！だいき君！」

だいき「あれ？ほのかじゃん！もうこの街に来てたんだな！なら連絡してくれりやあよかったのに」

ほのか「あ、すっかり忘れてた。つて、そんな事言ってる場合じゃなくて。だいき君、イワンコ見なかった？」

だいき「へ？イワンコ？さつき見たけど、それがどうした？」

ジャーバ「そのイワンコは怪我をしててねえ。応急処置しかしてないから傷が開いてしまう可能性があるんだよ」

だいき「確かに言われてみれば包帯巻いてたかも。イワンコは山の方へ行つたよ。俺が案内するよ！こつち！」

56. イワンコとコマタナ

山の中に戻ると

ジャーバ「おや！あのイワンコだよ！」

だいき「本当に包帯巻いてる。おーい、イワンコ、戻ってこーい！」

イワンコ「!!ワン！」

イワンコはだいき達に向かって吠えた後、山の方へ走っていった

ほのか「また遠くにいっちゃった。って、あれは洞窟？」

ジャーバ「一本道の洞窟なんだけど、そこを抜けた先は道が険しくなつててねえ。危ないからあまり近寄つてはいけない場所なんだよ」

だいき「おい、待てよイワンコー！」

ほのか「ああ！だいき君が追いかけて入っていつちやった！」

ジャーバ「全く仕方のない子だねえ。私達も追いかけるよ」

洞窟を抜けると道は細く通りにくい山道となっていた

だいき「わわっ！危ないな、この道。あ、イワンコー！」

イワンコ「……………」

イワンコは何ともないように道を走っていく

だいき「何であんなに逃げるんだろう」

ほのか「もうだいき君！この道は危ないんだって。戻ってジュンサーさんに連絡した方がいいかもしれないよ」

ジャーバ「いや、ジュンサーさんは今忙しくて連絡しても来るのに相当な時間がかかるはずだよ。ここは子どもには危ない場所なの。街の大人達に任せましょう」

だいき「で、でも、たった今ここにイワンコがいてこの道を渡ってつたんだよ。今追えばイワンコに追いつきそうだよ」

ジャーバ「……………わかったわ。ただし、慎重に進むのよ。足下が不安定だからね。危険だと感じたらすぐに教えなさい」

二人「はい」

その後、山道を進むと古くなった吊り橋があつた

下には激しい流れの川がある

ほのか「あ、イワンコ！」

吊り橋の向こうにはイワンコが走り去る姿が見えた

ジャーバ「あの先は確か……この山に住むポケモン達の巣がある場所。あのイワンコも巣に帰ろうとしているのかしら？ただ、こんな近くにイワンコの巣があつたなんて知らなかつたわね」

だいき「取り敢えず追いかけてよう。そうすれば、あのイワンコがどうして怪我也気にせずここに来たのかわかるはずだよ」

ほのか「ちよつ、ちよつと怖い……。簡単に揺れるし……」

だいき「ほのか、大丈夫か？ほら、俺に掴まつてれば平気だろ？」

ほのか「う、うん。ありがとう、だいき君」

ジャーバ「所々橋が壊れてるからね。ゆっくりと進むよ」

橋を渡り切ってその先を進むと、広い場所に出た

そこには先程のイワンコとコマタナが向かい合っていた

ジャーバ「あのコマタナは……。稀に山の中でも見かける暴れん坊じゃないか。何でも傷つけてばかりでこっちも困ってたんだよ」

ほのか「じゃあイワンコの切り傷もあのコマタナが」

ジャーバ「おそらくそういう事だろうね。となると、ここまでの道を迷わず進んできたあのイワンコも、野生のポケモンの可能性が高くなってきたね」

だいき「これから何をする気なんだ？」

イワンコ「グルルツ！」

コマタナ「コマ!!」

お互い威嚇しあっている

だいき「お、おいおい。もしかしてバトルする気か？イワンコはまだ怪我してるんだぞ！」

ジャーバ「イワンコは負けた事が悔しいのかもしれないね。だからすぐにでもこう

やって再戦しようとしているんだろう」

ほのか「でも、イワンコだって危ないよ。どうしよう」

コマタナ「コマ！」

コマタナはひっかくをくりだした

イワンコ「ワン！」

イワンコはそれを避け、コマタナにかみついた

コマタナ「タナ！」

コマタナにはあまり効かず、そのままメタルクローをくりだした

イワンコ「キャン!!」ドサ

イワンコは飛ばされる

ほのか「ああ!!イワンコ!」

!!
「だいき「やっぱり今のままだと相性も合わさって勝てないよ!見てられない!俺が
!!」

だいきはイワンコ達に向かっていく

ジャーバ「あ、こら!!だいき君!!」

コマタナ「コマ?」

だいき「おい、コマタナ！イワンコをいじめるのはやめろ！このイワンコは怪我してんだぞ！」

イワンコ「クウ……」

コマタナ「タナ？」

コマタナは首をかしげている

だいき「そんなに暴れたいなら俺が相手だ！」

コマタナ「!!タナ！」

コマタナは戦闘態勢に入った

だいき「頼んだぞ、ハイガニ！」

ハイガニ「ハイ！」

コマタナ「タナ！」

コマタナはきりさくをくりだした

だいき「ハイガニ！刃は小さいんだ。挟んで投げるんだ！」

ハイガニ「ハイ！」

ハイガニは向かってくるコマタナの手にある刃を挟んで、遠くへ投げた

コマタナ「タナー！」

イワンコ「!!」

だいき「バブル光線！」

ハイガニ「ハイ！」

コマタナ「タナー！」

コマタナは走って逃げていった

だいき「よし、よくやったな！ハイガニ」

ハイガニ「ハイハイ！」

ジャーバ「全く！いきなり出て行くななんて危ないじゃないか！危険な事はやめておくれよ」

だいき「ご、ごめんなさい、ジャーバ博士。でも、イワンコがかわいそうだし」

ほのか「まあイワンコも助かったし、これでよかったと思うよ。だいき君、お疲れ様」

イワンコ「……………ワン！」

イワンコはだいきの側にやってきた

だいき「あ、お前無事か？怪我は開いてないか？」

イワンコ「ワン！」

イワンコは首についている岩を当ててきた

だいき「いてて、いてて。この岩、まあまあ痛いな」

ジャーバ「おや、このイワンコはどうやらだいき君を気に入ったみたいだねえ。どうする？だいき君」

だいき「そうなの？イワンコ、お前俺と来たいのか？」

イワンコ「ワン!!」

だいき「へへ、そっか。なら来いよ！」

だいきはモンスターボールをイワンコの前に出した

イワンコ「ワン！」

イワンコはモンスターボールに自分から当たった

カチッ！

だいき「よし!!イワンコ、ゲットだぜ!」

ほのか「ふふ、おめでとう、だいき君。いいなあ、イワンコ。可愛かった」

ジャーバ「でも、取り敢えずはこのままポケモンセンターまで連れて行くよ。怪我は治ってないんだからね」

だいき「そうだった。すぐ治してやるからな」

ほのか「じゃあ戻ろっか」

ジャーバ「ええ、そうしましょう。帰り道にはまた気をつけるんだよ」

去って行くほのか達の後ろ姿をあるポケモンが見ていた

コマタナ「……………」

57・イワンコとコマタナ2

その後、ギッタンシテイ ポケモンセンター

ジョーイ「イワンコの怪我の手当ては終わりましたよ。少し傷が開いてましたけど、一日安静にしていれば治ると思います」

だいき「わかりました。ありがとうございます、ジョーイさん」

ジョーイ「それとね、あのイワンコもう少して進化するみたいよ」

だいき「え!? 本当ですか!」

ジョーイ「はい。頑張ってくださいね」

ジャーバ「なるほどねえ。少し攻撃的なイワンコだと思ったけど、進化が近かったのね。それなら納得だわ」

ほのか「どういう事ですか？」

ジャーバ「イワンコは進化が近くなると少し獰猛になるの。暴れたい欲求が抑えられないのかもしれないねえ。」

進化が終わればそんな事なくなるんだけどね。時間帯によって進化の姿が変わる特殊なポケモンでもあるよ」

だいき「俺知ってるよ。昼に進化するとルガルガン真昼の姿、夜に進化するとルガルガン真夜中の姿になるんだよね。性格も変わるんだよね」

ジャーバ「おや、詳しいねえ。その通りだよ。それと夕方に進化する特殊な姿、黄昏の姿というのも確認されているね。殆ど見られない極めて稀な例だけだね」

ほのか「でもタイプは岩だけで変わらないんですよね。性格が変わるのはびつくりだけど」

ジャーバ「そうだね。でも、進化によってポケモンは性格が変わるのはたまにある事なんだよ。子どもが大人になると同じだからね。全く同じ性格ってのはあまり無いかもしれないね。」

真昼の姿はトレーナーを主人とする真面目な性格、真夜中の姿は自分の強い意思を持つと言われているよ」

だいき「どれになるのかな。楽しみだなあ」

その時、奥からポケモンが飛び出してきた

ジョーイ「あつ、こら!!逃げ出しちゃ駄目ですよ」

イワンコ「ワン!」

ほのか「あ、イワンコが出てきちゃったよ」

イワンコ「ワン！」

イワンコはだいき達を見つけると飛びついてきた

だいき「イワンコ、出てきちやったのか。怪我してるんだからじつとしてないと駄目だろ」

ジョーイ「ごめんなさい、だいき君。イワンコから目を離したらすぐ出ちゃって」

だいき「大丈夫ですよ」

ジャーバ「だが、だいき君の膝の上なら大人しいみたいだね」

だいきの膝の上でイワンコはだいきに撫でられている

ジョーイ「そのようですね。だいき君、悪いけど暴れさせないであげて。もう治療は終わってるから。そのままお願いしてもいいかしら？」

だいき「はい。俺のポケモンなんで俺がしっかり見てますよ」

ジョーイ「ありがとう。ごめんね。本当なら私達の仕事なのに」

だいき「いえ、これくらいなんて事ないですよ」

ジョーイは仕事に戻っていった

ジャーバ「さて、私は研究所に戻ろうかね。二人ともそれじゃあまたね」

二人「ありがとうございます」

ほのか「私もイワンコ撫でていい？」

だいき「おう！少しザラザラしてるんだぜ」

イワンコ「わふ……」

だいき「あ、そうだ。イワンコ、俺の仲間達を紹介してやるよ。お前も新しい仲間だからな。皆によろしくって言えばよな」

イワンコ「ワン！」

ほのか「あ、私もだいき君のポケモン達見たい」

だいき「いいぜ。少し外に行くか」

ギッタンシテイ 公園

だいき「よし、出てこい皆！」

ジュプトル「ジュプ！」

ヘイガニ「ハイ！」

スバメ「スバ！」

ゴンベ「グウ……」

だいき「皆、新しい仲間のイワンコだ！よろしくな！」

イワンコ「ワン！」

ほのか「ゴンベだ！初めて見たー。寝てるけど可愛い！」

だいき「俺達が前に野宿してた時、餌を欲しがってたみたいで草むらからずつとこつちを見てたんだ。それからゲツトしたんだ。まあ、寝てばっかりだけどな」

イワンコ「クン？」

イワンコは寝ているゴンベに近づいて舐めている

ゴンベ「ゴーン……………」カプ

イワンコ「!?ワン!!ワン!!」

イワンコは寝ぼけたゴンベに頭を食べられた

イワンコは驚き、だいきの後ろに隠れて吠えている

だいき「アハハハ！イワンコ、大丈夫だ。ゴンベは寝ぼけてるだけなんだ」

ジユプトル「ジユプ」

イワンコ「ワン！」

ハイガニ「ハイハイ！」

ジユプトルはイワンコの頭を撫で、ハイガニは笑顔で話しかけている

だいき「ポケモン達も仲はよさそうだな。そういえば、俺もほのかのポケモンは全部は知らねえな。どうせなら見せてくれよ」

ほのか「あ、そうだったっけ。いいよ。皆、おいで！」

ワカシヤモ「シヤモ！」

ムクバード「クバー！」

ムンナ「ムナ……」

ミミツキュ「ミツキュ！」

ハスブレロ「ブロ！」

だいき「わー、ハスブレロだ。ハスボーの進化形だよ。ハスボーなんて珍しいんじゃない？」

ほのか「その子、れおん君がくれたんだ。ルンパツパから産まれてきたんだって。ギガドレインを最初から覚えてたんだよ。ルンパツパからの遺伝だって」

だいき「えー!! いいなあ、ほのか!! ズルいぞ！」

ほのか「ずるいって言われても……。その子がいなかったらガーネジム突破出来なかったんだ。とつても助かってるの。あ、そうだ！ れおん君から貰った技マシン覚えさせないと」

だいき「技マシン!? そんなのまで貰ったのか! れおんさんめ、ほのかばっかり優遇しやがって!」

ほのか「どうせならだいき君も使う? 波乗りとかわらわりだつて」

だいき「な、波乗り!? 秘伝マシンじゃん! ほのか、条件達成したのか!」

ほのか「なんかれおん君が言うには本当は条件なんていらなんだつて。悪いやつらに使われないようにするためのものだからつて」

だいき「なるほど。コスモ団とかの対策つて事か。波乗りはハイガニに覚えさせるとして、かわらわりは……ゴンベ、いけるか?」

ほのか「試してみよっか。はい」

だいき「よし、ありがとな。よっと」

だいきはゴンベの頭にかわらわりの技マシンを当てた

だいき「お！覚えられるみたいだ。じゃあ、いやなおとを忘れさせよう」

ほのか「ハスブレロはバブルこうせんを忘れさせようかな」

その後、技マシンを交互に使って新しい技を覚えさせた

だいき「いやーありがとな、ほのか！助かったぜ！」

ほのか「どういたしまして。れおん君にもお礼言つとかないとね。あ、バトルの事忘れてた。これからやる？」

だいき「確かにそうだった！すっかり忘れてた！ただほのかの方が一匹多いよな。イワンコはまだ激しく動けないしな。誰か一匹抜かしてくれよ」

ほのか「いいよ。じゃあ寝てるし、ムンナにしようかな」

ほのかはムンナをモンスターボールに戻した

だいき「よし！バトルフィールドまで行こうぜ」

その時、街の入り口の方から誰かが走ってきた

男性「大變だ！山からあのキリキザン達が降りてきたぞ！」

女性「キリキザン!?なんで今になって出てきたの！」

ほのか「キリキザン?こんな所にそんなポケモンがいたの？」

だいき「話聞いた事がある。昔、この近くの山にいた問題ポケモンだったらしい。木とかをどんどん切られるし、家とかも関係ないから皆が山奥まで連れて行ってそこに住ませたらしい」

ほのか「もしかして……あの時のコマタナって」

だいき「!!そっか!コマタナはキリキザンの進化前!もしかしたらキリキザンの子どもだったのかもしれない!なら、俺達を探してるのかもしれない!ほのか、行ってみよう!皆、一旦戻れ!」

ほのか「う、うん!皆、戻って!」

58・キリキザン襲来

ギツタンシテイ入り口

ほのか「あ！見て、だいき君！キリキザンだよ。本当に暴れてる！」

入り口付近ではキリキザンが興奮している様子で、周りを気にせず攻撃していた

キリキザン「キツザ!!」

だいき「キリキザンはコマタナと同じはがね、あくタイプ。俺のジユプトルじゃあ少しキツイな。ほのか、ワカシヤモなら勝てるんじゃないか？」

ほのか「そうだね。ヒー君！お願い！」

ワカシャモ「シャモ！」

だいき「俺も何もしないわけにもいかない。援助するぞ、ハイガニ！」

ハイガニ「ハイ！」

キリキザン「キザ？キザー！！」

だいき「うわ、こつちにきた！」

ほのか「いくよヒー君！かわらわり！」

ワカシヤモ「シヤモー！」

キリキザン「キザー！」

ワカシヤモのかわらわりはキリキザンに当たり、軽く飛ばされていく

だいき「やったぜ、効果抜群！」

キリキザン「キザー!!」

だいき「うわ、まだまだ元気じゃん！ヘイガニ、シエルブレード！」

ヘイガニ「ヘイ！」

キリキザン「キザ！」

ヘイガニの攻撃はキリキザンにより弾かれた

ヘイガニ「ヘイ!？」

だいき「ゲツ！ヤツバ！」

キリキザン「キザ！」

キリキザンのつじぎり！

ハイガニ「ハイー！」

だいき「ハイガニ！」

ほのか「ヒー君、ニトロチャージ！」

ワカシヤモ「シヤモ！」

ワカシヤモは炎を纏い、キリキザンに突っ込んでいく

キリキザン「キザ！」

キリキザンは避けた

だいき「ハイガニ、立てるか？」

ハイガニ「ハイ……ハイ！」

だいき「よし、もう少し頑張ってくれ！なみのり！」

ハイガニ「ハイ！」

ザバア！

ハイガニの足下から波が現れ、波ごとキリキザンを押し流していく

キリキザン「キザー！」

だいき「おおー！すっげー、なみのりだ！」

ほのか「わわっ！こつちまできた！ヒー君、逃げてー！」

ワカシャモ「シャモー！シャモー！」

ワカシャモは必死に迫る波から逃げている

だいき「あ……。ごめん！ほのか、ワカシャモ！広範囲技だったな、これ！」

ヘイガニ「へ、へい……」

ほのか「大丈夫？ヒー君」

ワカシヤモ「シヤモー!!」

少し濡れたワカシヤモはハイガニ達に怒っている

だいき「ご、ごめんってワカシヤモ。もうやらないから!」

ほのか「落ち着いて、ヒー君。大丈夫、もう水はこないから」

ほのかはワカシヤモを撫でている

ワカシヤモ「シヤモ……」

キリキザン「キツザ！」

だいき「こいつまだ立ち上がるのか！ヘイガニ、かわらわりだ！」

ヘイガニ「ヘイ！」

キリキザン「キツザ！」

キリキザンはヘイガニの攻撃が出る前にヘイガニの不意を突いた

ヘイガニ「ヘイー！」

だいき「今のつて、ふいうちか！」

ほのか「ヒー君、私達も！かわらわり！」

ワカシヤモ「シヤモー！」

キリキザン「キザ……」

キリキザンは背中にワカシヤモのかわらわりを受けて膝を突いた

ほのか「そ、そろそろ落ち着いたかな？」

その時、キリキザンの後ろからあのコマタナが走ってきた

コマタナ「タナ!! タナ！」

コマタナはキリキザンを心配している

キリキザン「キザ……」

ほのか「あのコマタナ……やっぱり子どもだったのかな」

だいき「みたいだな。ん？」

コマタナはキリキザンの前に出てだいきに向けて威嚇している

コマタナ「タナッ!!」

だいき「あれ？俺、悪者になってない？」

ほのか「そ、そうみたいだね」

ポン！

イワンコ「ワン!!」

その時、だいきのモンスターボールからイワンコが勝手に出てきた

だいき「あ、イワンコ！」

コマタナ「タナ!!」

コマタナのつじぎり

イワンコ「ワン！」

イワンコは避けた

だいき「こら、イワンコ!!勝手にバトルすんなよ!お前は怪我してんだぞ!」

イワンコ「ワン!!」

だいき「イ、イワンコ……?」

イワンコは息が荒くなっており、だいきの言うことが聞こえていない

ほのか「様子がおかしいよ。戻さないと!」

だいき「あ、ああ。戻れ、イワンコ！」

イワンコ「ワン！」

イワンコはボールからの光を避けた

だいき「お、おいイワンコ……」

イワンコはだいきをまっすぐ見つめている

だいき「……………イワンコ、もしかしてコマタナとどうしても戦いたいのか？」

イワンコ「ワン！」

だいき「……ハア。仕方ないな。この後、必ずポケモンセンターで大人しくしてる約束だからな！いいな！絶対だぞ！」

イワンコ「ワン！」

コマタナ「タナ！」

コマタナのひっかく

だいき「イワンコ、避けてがんせきふうじ！」

イワンコ「ワン！」

ひっかくを避けた後、イワンコは周りに岩を作り出してコマタナにぶつけた

コマタナ「タナー！」

だいき「いいぞ、イワンコ！かみつくだ！」

イワンコ「ワン！」

コマタナ「タナー！」

コマタナのメタルクロー

イワンコ「ワン！」

メタルクローは嘯み付いているイワンコに当たった

だいき「平気か、イワンコ！」

イワンコ「ワン！」

だいき「よし、イワンコ！とおぼえで攻撃力を上げるんだ！」

イワンコ「ワオーン！」

イワンコの攻撃力があがった

コマタナ「タナー！」

コマタナのきりさく

だいき「いわおとし！」

イワンコ「ワン！」

イワンコは目の前に岩を作り出し、コマタナにぶつけた

コマタナ「タナ！」

コマタナは岩をきりさいた

だいき「がんせきふうじだ！」

イワンコ「ワン！」

コマタナ「タナー！」

コマタナは防ぎきれず、岩に飲まれた

だいき「倒したか？」

ほのか「岩から出てこないね。大丈夫かな？」

ガアン！

コマタナ「タナ……タナ……」

だいき「コマタナ、もうバトルは決着ついただろ。これ以上は危ないぞ」

コマタナ「タナ!!」

コマタナのメタルクロー

イワンコ「ワン！」

イワンコは避けてかみついた

コマタナ「タナ！」

だいき「イワンコ、キリキザンの所に投げ飛ばすんだ」

イワンコは頷き、キリキザンの方へ投げた

キリキザン「キザ……」

コマタナ「タナ！タナー！タナ！！」

コマタナはキリキザンの腕の中で暴れている

キリキザン「……………」

キリキザンはコマタナを連れて山へと戻っていく

だいき「もうあまり暴れたりすんなよー！」

キリキザン「キザ！……」

キリキザン達は見えなくなった

ほのか「結局どうしてキリキザンはここにきたんだろう？」

だいき「わかんないけど、多分コマタナが何か言ったんじゃないかな？コマタナもまだ子どもっぽかったし、わがままに付き合わされたんじゃない？」

イワンコ「ワン！」

だいき「お、イワンコ、ご機嫌だな。へへ、ようやく勝てたもんな！」

ほのか「傷が酷くならなくてよかったね」

イワンコ「ワン！」ピカッ！

二人「あ!!」

ほのか「進化だ！」

だいき「わわっ！いきなり!？」

イワンコの体は光に包まれ、形が変わっていき

ルガルガン「ガオーン!!」

イワンコはルガルガン真昼の姿へと進化した

だいき「やったー!!ルガルガンだ!カッコイイ!」

ほのか「これがルガルガン。写真でしか見たことなかった」

ルガルガン「ルガ」

だいき「よろしくな、ルガルガン!」

ルガルガン「ルガ!」

だいき「さて、約束だぞ。ポケモンセンターで大人しくしてるんだぞ」

ルガルガン 「ルガ!?!ルガー!」

ルガルガンは逃げ出した

だいき 「ああ!!こら、ルガルガン!どこ行くんだよ!約束しただろ!」

だいきは追いかけていく

ほのか 「あ、あはは……。ポケモンセンター嫌いなのかな?」

その後夕方になり、ポケモンセンターでは

ルガルガン 「……………」

ルガルガンはベットで丸くなって拗ねている

ジョーイ「どうも落ち着かないみたいなの。まあ、一日だけだから我慢してもらえないわね」

だいき「約束でしたからね。構いませんよ」

ジョーイ「それにしてもありがとう、だいき君、ほのかちゃん。あのキリキザンを山に戻してくれて。見てた人達から聞いたわ」

ほのか「そんな……お礼言われるような事じゃないですよ」

だいき「そうそう。俺達、コマタナに振り回されただけだから」

ジョーイ「暴れん坊のコマタナの事？」

ほのか「あ、そうです。ジョーイさんも知ってたんですね」

ジョーイ「ええ。あのコマタナはキリキザンの子どもだから少し有名なの。わがママで親に似て暴れやすいから私達もあまり刺激しないのよ」

だいき「わがママなのは俺達も何となくわかった。親のキリキザンも大変だよな」

ジョーイ「まあ何はともあれありがとう、二人とも」

二人「はい！」

それからほのかとだいきは少し話していたが、ほのかが帰る時間となった

ほのか「結局バトルできなかったね」

だいき「だな。まあルガルガンになったし、これでほのかと同じ匹数になったから次はバトルしようぜ！」

ほのか「うん。楽しみにしてる」

だいき「じゃあ気をつけてな」

ほのか「うん。ルガルガンによろしくねー！」

59. 報告会

エステロシテイの事件が解決してから一週間後

エステロ医院内

れおん「ふあああ。全く……暇だな」

れおんはベッドで横になっていた。片腕にはギプスがされ、胴体には厚い包帯が巻かれていた

れおん「こんな怪我じゃ動きたくても動けねえしな。皆も暇だよな？」

れおんはテーブルに置かれた6つのモンスターボールに向かって話しかける

ガラガラ

じゅん「ようれおん。おはよう。体調はどうだ？」

れおん「じゅんさん、おはようございます。体調はもうバツチリですよ。怪我さえなければこんな暇な所、さっさと出たいんですけどね」

じゅん「ハハハ、まあそうだろうな。怪我はまだ治るのに時間がかかるんだから我慢するんだ。今日は少し会議があつてな。それに参加してほしいんだ」

れおん「会議？何のですか？」

じゅん「コスモ団からの防衛から一週間だろ？各場所がどうなつたかの報告だ。それによつて作成などもまた変えなきゃならねえからな。れおんもそこに参加してほしい」

れおん「でも、俺はこの怪我ですよ。ここから出れませんし、作戦本部には行けないですよ」

じゅん「それはこっちもわかってる。れおんにはこのパソコンでモニター越しに参加してもらいたいんだ」

れおん「なるほど。パソコンはあまり得意じゃないんですけどね」

じゅん「まあ簡単だから大丈夫だ。時間になったらパソコンが起動して俺達のモニターと連動する。声や映像もそのままだからその時に何かあれば喋ってくれ」

れおん「へえ、最新のパソコンは凄いですね。それなら楽です。ありがとうございます
ます」

じゅん「ああ、それとお前のポケモン達ずっとボールの中じゃあかわいそうだろ？俺
の家の庭に小さいがプールや水槽を用意した。そこで遊ばせる事もできるぞ」

れおん「本当ですか！それはありがたいです。こいつらも暇そうにしててどうしよう
かと思ってたんですよ」

じゅん「やっぱりそうだよな。俺のポケモン達も数日ボールから出さないと不貞腐れ
て大変なんだ。気持ちはよくわかるぜ。じゃあ預かって大丈夫か？」

れおん「はい。お願いします」

じゅん「おう。それじゃあまた会議の時にな」

数時間後、レイロウシテイ 作戦本部

ミン「それでは何かコスモ団の動きがあつた街はあるかしら？」

じゅん「はい。エステロシテイではコスモ団による住民誘拐事件が発生。犯人を追つた結果、前に報告のあつたコスモ団の緑色の男と遭遇。名前をゲルダと言つておりました」

かなえ「エステロシテイが狙われたのね」

ターナ「それを私が住民の避難、じゅんとれおんさんがゲルダとのバトルになりました。しかし、ゲルダは謎の薬物のような物を自分のエルレイドに使用。その後、エルレイドはメガ進化が起きました」

全員「!!?」

シモン「メガ進化じゃと!?!わしらでさえ使える人物は限られるのじゃぞ!」

グード「それはとんでもない事態だ」

フェルミ「皆、驚くのはわかるけど落ち着きましょう。まだ報告が終わってないわ」

ターナ「ありがとう、フェルミ。続きですが、そのエルレイドはゲルダによるとメガ進化とは似て非なるものだそうで、実際にエルレイドは極めて凶暴で残忍な性格になっておりました」

じゅん「その薬物はポケモン達の中に眠る暴れる力を強制的に引き出す物だそうです。普段のメガエルレイドよりパワー、スピード、耐久力、どれもが逸脱していました。

特にスピードは凄まじく、俺達やポケモンでさえ認識するのが困難なレベルにまで引き上げられていました」

しおり「……………そんなに」

ターナ「じゅんもれおんさんも壊滅的被害を受けましたが、チャンピオンのアビーさんの助力によりメガエルレイドを撃破。しかし、ゲルダは逃走し、メガエルレイドは薬

物の力により死亡が確認されました。

「こちらも住民に被害は無かったものの、じゅんも負傷、れおんさんに至っては入院が必要となるレベルの大怪我を負いました」

ワグ「二人もそんなにヤバかったのか。でも、どうしてそんな大怪我に？ 庇ったりしたんですか？」

じゅん「いや、そうじゃない。メガエルレイドはポケモンだけでなく、俺達本人にも攻撃してきたのさ。手加減なんて全くなく、まさに殺す気だな。俺は途中で遠くまでぶっ飛ばされてれおんが途中一人で戦ったんだ。その時にその大怪我をしたんだろう」

「しょうや「トレーナーにまで攻撃してくんのか。エルレイドの性格とはかけ離れてんな」

バロック「ポケモンの力が俺達に当たったら本気で死んだっておかしくない。その薬物とやらはあまりに危険すぎるだろ」

ミン「話はわかったわ。今、れおん君の入院先と繋がってるの。れおん君、聞こえる？」

ミンの後ろにあるスクリーンにはベッドが映し出されていた

れおん「あー、あー、聞こえていますか？」

ミン「ええ、大丈夫よ。れおん君が映らないのだけど」

れおん「あ、カメラこつちか。報告はじゅんさんやターナさんのあった通りです」

ミン「そう。怪我はどれくらいで治るの？」

れおん「安静にしてれば一ヶ月かからないくらいだそうです」

ミン「わかったわ、お大事にね。れおん君はメガエルレイドについて何かある？一人で戦った時間があつたのよね？」

れおん「そうですね……。大まかな所はじゅんさん達の報告通りですけど、メガエルレイドには微かにでしたが自我が残っていました。ゲルダの言う事を僅かに聞き入れていましたから。後はエルレイド自身の判断で技を使っていましたね」

エレイン「エルレイド自身の判断……。れおん君のゴルダックのような感じ？」

れおん「俺のゴルダックとはまた違うと思いますが、大まかな所は同じです。後、住民を誘拐した目的なのですが、俺自身の勝手な考えですけど恐らく物資の枯渇かと」

ミン「枯渇？」

れおん「はい。誘拐された人達は皆、街で商売を営む人達でした。その人達を拐えば、エステロシティは貿易をする人がいなくなります。つまり、物が周りに普及しなくなるという事に繋がります。」

フレンドリイショップなどにある物も基本エステロシティから来る物ばかり。それが来なくなれば、じきにこの地方から物が無くなっていきます。

レイロウシテイのように目立つものではありませんが、大きな目で見れば壊滅的被害となる恐れがありました。どうですか？変……ですかね？」

ミン「……………いえ、どこも変ではないわ。確かにそうなれば被害は甚大。レイロウシテイよりも被害を受ける人達は数えきれないわ」

シモン「うむ。その目的も港を閉鎖させるようなやつらからすれば考えてもおかしくない」

しおり「……………流石れおんさん」

グード「そうだな。抑えられたのはかなり大きな事だったかもしれない」

れおん「ありがとうございます。俺からは以上になります」

ミン「ありがとう、れおん君。ゆっくり休んで。他に動きがあつた街はあるかしら？………無さそうね。今回はエステロシテイが狙われた。やはり私の予知は間違つてなかつたわね。」

となると、次はまた別の場所にも現れるかもしれない。また、その謎の薬物の力もある事がわかつた。皆、心してかかつて！」

全員「はい！」

60. キャラ設定2

れおんとほのか以外のキャラ設定です。

ターナ

性別 女性

身長 160cm

体重 ???

年齢 20代

見た目 長い黒髪に明るい水色のジャージやワンピースなどを着ている

飛行タイプのトップトレーナー。通称、舞姫ターナ。しつかりとした性格で責任感も強い。しかし、どこか少女さも残るような一面も。オアシティで育ち、遺跡などにも詳しい。トップトレーナーに認められてからはオアシティを担当するようになった。

ポケモンコンテスト優勝常連のトップコーディネーターであり、技や見た目を綺麗に見せる事もできる。バトルの腕もかなり高く、コンテストでは見られない激しい攻め込みの姿が見られる。パートナーポケモンはコンテストではトゲキッス、日常ではピジョット、バトルではボーマンダと分かれている

ワグ

性別 男性

身長 188cm

体重 74kg

年齢 27歳

見た目 赤い髪をオールバックにしている。よく赤い服を着ている

炎タイプのトップトレーナー。通称、炎剛ワグ。明るい性格でお調子者な所が強い。少々短気な所もある。女性には基本紳士的に接するが、下心も？ガーネシティで生まれ育ち、ガーネシティは俺の街だと豪語するほどである。基本ガーネシティにおいて、自分の炎ポケモン達は工事などを手伝っている。また自分自身も鉱山で働いている。

バトルの腕はトップトレーナーの中でも相当なもので、相性を吹き飛ばすような戦いを繰り返す。最初はれおんすらも倒せるほどだったが、れおんが力をつけてきた事で敵わない事も出てきた。れおんとは友人であり、ライバルのような関係である。

昔から体を動かす事が好きであり、そこからりきや達と仲良くしており、弟子入りし

て空手などの武道を始める。最近のブームは、体を鍛える事。パートナーポケモンは、ゴウカザル。

だいき

性別 男性

身長 143cm

体重 40kg

年齢 10歳

見た目 黒い短髪で髪が少し上に尖っている

ギツタンシティから旅を始めた男の子。バトル大橋でほのかとれおんに出会う。早とちりしやすく、勘違いも多い。しかし、ポケモンに優しく技やタイプなどの知識の収集も怠らない。バトルは頑張っている最中で夢はポケモンリーグに出場する事。

子どもらしさが抜けず、新しいポケモンや街を見ると一目散に駆けていく。れおん曰く荒削りながらもそれなりにセンスはあるらしい。ほのかと同年代な事もあり、ほのかとすぐに仲良くなる。ほのかはジム挑戦の仲間であり、ライバルである。最初にジャーバ博士から貰ったポケモンはキモリ。理由は、ビビツときたから。

また、昔からトップトレーナーの事が好きで、いつかバトルをしたいと思っている。今のトップトレーナーの人達も知っているが、昔のトップトレーナーの事も知っている……？

エレイン

性別 女性

身長 168cm

体重 ???

年齢 30代

見た目 黄色の髪をツインテールにしている。鮮やかな服を好んで着ている。

電気タイプのトップトレーナー。通称、霹靂のエレイン。非常に明るく元気な性格で、場を盛り上げたり楽しませる事が多い。仕事はモデルをしており、大人気女優でもある。レイロウシティではよく彼女のCMや雑誌などが売られている。

バトルはトップトレーナーの中ではそこまでだが、それでも周りよりは圧倒的に強い。性格上、相手を振り回しがちになるがエスコートされたり紳士的な男性に会うと乙女のような性格になる。パートナーポケモンはデンリユウ。

ジュード

性別 男性

身長 183cm

体重 77kg

年齢 36歳

見た目 ボサボサの紫色の髪をして、紺色のパーカーを好んで着ている。

毒タイプのトップトレーナー。通称、紫碎ジュード。かなり目つきが鋭く、口調も荒いため大抵の人からは怖がられている。ドンマータウンで育った。仕事は特に何もし

ておらず、いろいろな街を点々としている。オンとオフの差が激しく、オフの時は大抵気だるそうにしている。

バトルの時もやる気がないと簡単に済ませるが、一度火がつけば相手のポケモンを全て倒すまで止まらない。その時のバトルの腕はトップトレーナーの中でも相当なもので、四天王を倒せるレベルである。パートナーポケモンはニドキング。

かなえ

性別 女性

身長 157cm

体重 ???

年齢 ???

見た目 緑色の髪を束ねて色々な髪型にしている。緑色のワンピースを着ている。

草タイプのトップトレーナー。通称、凜木のかなえ。優しい性格で周りからは母のよ
うな感覚で接されている。どんな事も優しく笑っているため、ファンの人も多い。仕事
は自然保護団体の組長をしており、モラックタウンの町長でもある。仕事が無い日は近
くの森の中で草笛を吹いている姿がよく目撃される。

バトルは得意ではなく、サポートが仕事。しかしダブルバトルとなると本領が発揮さ
れ、相手の妨害や味方のサポートが最大限に発揮される。草タイプらしく、ツタや葉を
用いる妨害が特徴的。パートナーポケモンはメガニウム。

フアルミ

性別 女性

身長 154cm

体重 ???

年齢 33歳

見た目 ピンクの髪をウェーブ状にしている。ワンピースやTシャツなど様々な服を着ている。

フェアリータイプのトップトレイナー。通称、幻夢フェルミ。性格はしっかり者。リーダーとして纏める事も多く、作戦の指揮を任される事も。しかし頑張り過ぎる事も多いため、周りからよく心配されている。仕事はファータ美術館の館長。また、街の事にも詳しく迷子になる人も多いため、案内人もやっている。

バトルはそれなりに出来て、基本に忠実な戦い方をする。しかし変化技を多用する傾

向が多い。パートナーポケモンはクレツフイ。子ども好きでもあり、保育園などに通う事もある。絵本などを読み聞かせさせたりして、子ども達と交流を深めている。

セイン

性別 男性

身長 178 cm

体重 62 kg

年齢 36歳

見た目 ベージュの長い髪をしている。黄土色や深緑色などの服やコートを着ている。

虫タイプのトップトレーナー。通称、愛美セイイン。穏やかな性格で怒る事はほとんどない。周りからは怒りの感情がないのではと噂されるレベル。仕事は有名な作曲家であり、作詞なども手掛けている。音楽や映画などに使われる音などをよく担当しており、仕事もそれなりに多い。

バトルはそこまで得意でもないが、出来なくもないといった所。一度本気を出した時に四天王を倒したという噂はある。ただ、バトル自体好まない様子で、その姿はあまり見かけない。パートナーポケモンはテツカニン。

グード

性別 男性

身長 190cm

体重 87 kg

年齢 41歳

見た目 オレンジ色の短髪。茶色のシャツをよく着ている。

地面タイプのトップトレーナー。通称、盤核グード。真面目な性格で自分を厳しく評価している。そのせいかワীগなどからは堅物なおっさんなどと呼ばれている。仕事は警備員をしており、いろんな街を駆け巡っている。

バトルはかなり得意で、相手の攻撃を受け止め反撃する事が多い。ワীগが苦手な相手だったりする。年下であるワীগやれおんにどうい話をしたらよいかわからない事も多い。一部の女性からは可愛いなどと言われている。パートナーポケモンはワルビアル。

しおり

性別 女性

身長 160cm

体重 ???

年齢 ???

見た目 かなり長い黒髪をしており、やろうと思えば顔まで隠せるほど。服は白いワンピースを着ている。

ゴーストタイプのトップトレーナー。通称、影消しおり。性格は臆病で引込み思案。声が小さいため、聞き取ってもらえない事も珍しくない。話す事も苦手で、慣れない人だと緊張してしまいうらしい。仕事は図書館を営んでおり、本の管理などをして

バトルは性格とは違つてかなり激しく攻めてくる。実力も申し分なく、四天王も倒すほど。ポケモンの事となると非常によく喋り、ハキハキとしている。しかし一度落ち着くと恥ずかしくなり、黙りこんでしまう。パートナーポケモンはシャンデラ。

バロツク

性別 男性

身長 162cm

体重 73kg

年齢 26歳

見た目 黒い髪でツンツン頭。よくオレンジの帽子を被っている。服は赤だったり

オレンジだったりと明るい色をよく着ている。

岩タイプのトップトレーナー。通称、岩城のバロック。性格は明るく、何事にも騒ぎやすい。かなり短気で、特に身長に関してには地雷であり、馬鹿にした人には本人からの大激怒を貰う。れおんが初めて彼と会った際に思わず小さいと言ってしまう、立ち上がれなくなるほどボコボコにされる。

仕事は建設員であり、いろんな街に行っている。特にガーネシティには何度も行っている。バトルの腕はトップトレーナーの中でも相当なもので力でゴリ押ししてくる。何度かチャンピオンのアビーと戦った事もある。

若い頃は何やらやんちゃをしていた様子で、体を動かすのが得意である。武道もかなりのもので格闘家のりきやも認めるほど。ワグと揃ってジュード達から馬鹿コンビと呼ばれている。パートナーポケモンはバンギラス。

ミン

性別 女性

身長 164cm

体重 ???

年齢 37歳

見た目 藍色のポニーテール。黒いシャツをよく着ている。

エスパイタイプのトップトレーナー。通称、夢情ミン。真面目な性格で状況判断能力に長けている。作戦をたてるのはいつも彼女で、先を読みながら考案する。仕事は占い師をしており、よく当たると評判。本人曰く集中すると少しだけ相手の未来が見える……とか。実際予知夢などを頻繁に起こし、大抵それは当たる。

バトルはトップトレーナーの中ではそれなりに出来る方で、れおんが苦手としている相手。相手の先読みなどを判断し、それを妨害する。数年前から見た目が全く変わらな
いという噂が……？パートナーポケモンはフーデイン。

シモン

性別 男性

身長 156cm

体重 60kg

年齢 71歳

見た目 白髪と髭が特徴で青と白のコートやシャツを着ている。

氷タイプのトップトレーナー。通称、静積のシモン。穏やかな性格で個性的なトップトレーナー達を遠くから見守っている。仕事はもうしておらず、今はヒュールタウンで暮らしている。息子が跡を継いだ育て屋をたまたまに様子を見に行く程度。ドグラと交流が昔からあり、ドグラに尊敬されている。

バトルはトップトレーナーの中でも相当な腕前で周りのトップトレーナーより頭一つ抜けている。チャンピオンのアビーとも何やら面識が……？ワグやれおんなどの若い人達からはおじいちゃんなどと呼ばれる事もある。本人も満更でもない様子。バロックを子ども扱いしても怒られない二人のうちの一人。パートナーポケモンはユキメノコ。

しょうや

性別 男性

身長 184cm

体重 75kg

年齢 31歳

見た目 スキンヘッドで黒いスカージャンパーを好んでいる。ジーンズもよく履いてくる事が多い。

悪タイプのトップトレーナー。通称、滅勝しようや。性格は不器用で見た目や口調と合わさって怖がられている。しかし、実際は人やポケモンに優しく面倒見もいい兄貴肌。昔、やんちゃしていたそうだが今ではすっかり鳴りを潜めている。仕事は警察官。ジュンサーなどを纏める立場である。

バトルはかなり出来て、ポケモン毎の性格や考え方などに則った戦い方をする。作戦

もかなり立てられるほうで、ミンやフェルミからも頼りにされている。バロツクを子ども扱いしても怒られない二人のうちの一人。パートナーポケモンはサザンドラ。

じゅん

性別 男性

身長 175 cm

体重 80 kg

年齢 32歳

見た目 茶色い髪に白いエプロンをよくつけている。

ノーマルタイプのトップトレーナー。通称、猛輝じゅん。性格は明るいがちやっかりしており、抜け目がない。エステロシティに自分の店、ディポーターを構えており、トレーナーにとって欠かせないお店となっている。地方外のトレーナーも来るほど人気な店で忙しさのあまり作戦本部にはあまり行くことが出来ない。

バトルの腕はかなりの物で誰が相手でもバランスよく戦える。トップトレーナーでも店に来たら客として、私情を抜きにして扱う。緊急時以外にじゅんがトップトレーナーを助けたりすると後にお金が請求される。本人は半分冗談だが、真面目な人が多いので払ってくれる事も多い。パートナーポケモンはハピナス。

りきや

性別 男性

身長 186cm

体重 93kg

年齢 39歳

見た目 黒髪のスーツ刈り。インナーか半袖のシャツをよく着ている。

格闘タイプの特撮トレーナー。通称、破拳のりきや。面倒見のいい優しい性格。ビルジャータウンに住んでおり、格闘タイプのジムリーダーでもある。格闘家であり、修行が大好きでふらつとどこかに行つては修行している。

バトルは特撮トレーナーの中でも相当の腕前で相手の隙を逃さない。最近ではれおんに負けて以来、修行に明け暮れているという。ジムチャレンジャーにはトップトレーナーに対してよりは甘くなるが、それでも難関の一つとして数えられている。

バロックの武道の腕前を見込んでおり、よき相手として試合をしている事もある。ワーグが弟子入りした人でもある。二人からはリツキーの兄貴などと呼ばれている。

パートナーポケモンはローブシン。

ドグラ

性別 男性

身長 172cm

体重 67kg

年齢 47歳

見た目 灰色の短髪。黒と黄色のマントを着ている。

ドラゴンタイプのトップトレーナー。通称、龍永ドグラ。無口な性格であり多くの

事は喋らない。冷静に物事を判断し、周りにアドバイスする。仕事はドラゴンタイプ最強の技を伝授する事をやっており、偶に手持ちのポケモンに覚えさせようとするトレーナーが訪れる程度。

バトルはトップトレーナーの中でダントツであり、追隨を許さない。また、シモンの事を尊敬しており、ヒュールタウンによく訪れて彼と楽しそうに喋る姿も目撃されている。パートナーポケモンはガブリアス。

ジーニャ

性別 女性

身長 158cm

体重 ???

年齢 40代

見た目 黒髪のショートカット。白衣をよく着ている。

鋼タイプのトップトレーナー。通称、鋼刃のジーニヤ。熱心な性格で気になった物はとことん調べないと気が済まない。研究者でもあるため、一度研究に没頭すると数日出てこない。連絡はこまめにするタイプなのであまり心配されてないが、かなえは時折研究者に行き、心配している様子。

バトルはトップトレーナーの中でもかなりの腕前で、得意な相手には滅法強い。研究は様々なものをしており、ポケモンの事や生態系、工場の管理や情報技術など多岐に渡っている。そのため、多忙な時は作戦本部に来れない事もある。パートナーポケモンはジバコイル。

61. 旅、再会

ガルドア地方のとある場所では

ゲルダ「申し訳ございません、デイブローロ様。あと一歩だったのですが」

デイブローロ「チャンピオンの邪魔が入ったか。仕方あるまい。だが、あの錠剤の力は正解だったようだな」

カシア「何やってんだよ、ゲルダ。まさかお前が失敗するなんてな」

ゲルダ「お黙りください！私だってこんな屈辱になるとは……！」

デイブローロ「まあよい。ラミアからも報告があつたが、どうも難航しているようだ。トップトレーナーどももかなり警戒しているようだな。まさか先々で待ち構えているとは……少々計算外だつた。

迂闊に動いて変な事を掴まれても敵わん。ここは一先ず様子見だな。警戒が解かれるまで派手な事は控えよう。その間、あの研究をしておけ。捕らえた女も利用してやるのだ」

二人「はっ！」

それから一月が経つた

レイロウシテイ 作戦本部

ミン「この一月動きは無し……か。あちらにも警戒しているのが伝わったのかしら」

ターナ「その可能性が高いと思うわ。機械すらも見られない点からもそう判断できる」

グード「ふむ。なら、一先ずジムリーダーへの協力は止めよう。何も無いのにあまり警戒し続けていれば、街の人からも疑問の声が出る」

ファルミ「そうですね…。でも、それが狙いな可能性が高いんですよね」

しょうや「ジムリーダーがいなくても、何かあればすぐに対応できるようにしてもらおうようお願いしておけばいい。そうすれば、あいつらも街の顔の一つ。すぐに飛んでくれるだろ」

ミン「……………わかった。ジムリーダー達には戻ってもらって、何かあればすぐに動けるようにしてもらいましょう。私達は今みたいに三人じゃなくても最低一人はいるようにしましょう」

シモン「まあ、そうじゃろうな。じゃが、街に残る必要のなくなった者はどうすればよいんじゃ？」

かなえ「普段通りに戻ってもらって大丈夫です。何かあればすぐに連絡がいきますので」

バロツク「了解だ。仕事が出来ないってのも少々困ってたからな」

ミン「それじゃあこれで終わり。街を担当する人が決まったら私に教えて」

その後、エステロシティ 医院内

会議の内容をじゆんがれおんに報告していた

じゆん「つてわけだ。明日、退院だろ？れおんも自由にしてもらって大丈夫だぜ。この街は俺が担当する事になったからよ」

れおん「なるほど、わかりました。他の街は誰が担当になりましたか？」

じゆん「えつと……レイロウシティはミンが。チエイロタウンはファルミ。ファータ
タウンはシモンさん。アーグタウンはグードだ」

れおん「了解です。報告ありがとうございました」

じゅん「いや、気にすんな。れおんはこの後どうするんだ？例の子ども達と旅を再開するのか？」

れおん「そうですね。一時中断になってたんで。旅していればいろんな街にいつて情報を集める事も出来るので、何かあったら報告します」

じゅん「確かにそれは旅のメリットだよな。何より楽しいしな。じゃあエステロシテイに来たら俺の店に寄ってくれよな」

れおん「はい。きっとほのかちゃん達も喜ぶと思うんでぜひ」

じゅん「そんじやあなー」

れおん「さて……と。ほのかちゃんどだいきに連絡しておかねえとな」

その後、タジシテイ ほのかの家

ほのか「お母さん!!れおん君から連絡あつて、来週には旅がまたできるつて!」

ほのかの母「まあ!よかったわね、ほのか」

ムンナ「ムウ!ムナ!」

ほのかの母「あら、ムンナちゃんも喜んでるわね」

ほのか「レイロウシティに集合って言われてるから早めに出発しないと」

ほのかの母「あら、それは残念。来週からならもう少しいられると思ったけど、レイロウシティに集合なら仕方ないわね。明日には行くの？」

ほのか「うん。だいき君にも連絡したんだって。だからだいき君と二人で行くの」

ほのかの母「そう。子ども二人だけで大丈夫？」

ほのか「ポケモン達もいるからね。なんとかなるよ」

ほのかの母「そうね。あ、そうだわ！ほのかの新しいテントがあるの！それ持って
行って。前よりポケモン達も入れるように大きくしたの」

ほのか「本当!?わーい！」

次の日

ほのかの母「それじゃあ気をつけてね。また連絡しようだね」

ほのかの父「こつちからも偶にほのかにきのみとか送るからな」

ほのか「うん。じゃあね！行ってきまーす！」

ギツタンシティ ポケモンセンター前

入り口前ではだいきとルガルガンが待っていた

だいきは腕に袋を持っている

ほのか「あ！だいきくん！来たよー」

だいき「お、ほのか！」

ルガルガン「ガウ！」

ほのか「ルガルガンも久しぶり。だいき君、それ何？」

だいき「実はさつきジャーバ博士と偶然会つてな。また旅する事伝えたらこれを俺とほのかにつけてくれたんだ。中身見たんだけどよ、カッコいい腕輪だぜ」

だいきは袋から一つ取り出してほのかに渡した

白い腕輪で真ん中に何かはめ込む部分がある

ほのか「本当だ。でも……ここに何か入れられそうだよね。何だろ？」

だいき「ジャーバ博士は後々わかるつて言つてたぜ。しかもれおんさん達を驚かせてあげて、とか。俺もよくわかんないけど、れおんさんに聞けば何かわかるんじゃないか？」

ほのか「なるほど。それもそうだね」

だいき「それにしても昨日突然れおんさんから連絡きてビックリだよ。結構バタバタしちやったよな」

ほのか「そうだよね。れおん君ももう少し早めに教えてくれればよかったのに」

だいき「しかし、何でレイロウシテイに集合なんだ？前みたいに迎えにきてくれると思ってた」

ほのか「確かに。何でだろうね」

だいき「まあいいや。それじゃあ行こうぜ！まずはハルヤタウンだな」

ほのか「うん。ハルヤタウンも懐かしいな。デンチュラ騒動があつたんだよね」

だいき「デンチュラ騒動？何だ？それ」

ほのか「だいき君はわかんないもんね。じゃあ向かいながら教えるね」

夜、ハルヤタウン ポケモンセンターの部屋内

だいき「大変だったんだな。ぬしポケモンといきなり戦う事になったのか」

ほのか「そうなの。大きくてビックリしたし、たくさんデンチュラばかりで凄かつ

たんだよ」

だいき「俺が来たのは多分それより前だな。何も無く、普通にナブさんとバトルして終わったからよ。あ、観光はしたけどな」

ほのか「そっか。またナブさんとも会いたいな。私の事覚えてるかな？」

だいき「時間あるし、明日少し顔出してみるか」

ほのか「そうだね。それにしても、初めて来た時はれおん君と二人だったけど、今度はだいき君と二人なんだね」

だいき「俺なんて一人だったけどな。まあ、今はほのかがいるけど」

ほのか「一人で野宿してたんだよね？怖くなかった？虫とか」

だいき「俺は別に大丈夫だったぜ。ほのかみたいに暗い所が怖いわけじゃないからな」

ほのか「あ！馬鹿にしてるでしょ！」

だいき「可愛くていいと思うぜ」

ほのか「ふん！だいき君だって子どもっぽいつて前にれおん君に言われてたの知って

るんだからね！」

「だいき「れおんさんそんな事言ってたのかよ。もう子どもじゃないのに」

「ほのか「あ、そろそろ寝る時間だね。喋りすぎちゃったみたいだし、寝ようか」

「だいき「そうだな。また明日な、ほのか。おやすみ」

「ほのか「うん。おやすみ」

62. レイロウシテイを目指して

次の日、ハルヤタウン

ハルヤジム前

ジム前にはナブが立っていた

ほのか「あ、丁度ナブさんがいる。ナブさーん、こんにちはー」

ナブ「んん？…… おお！ほのかちゃんか！それに、だいき君だったんだかな。久しぶりじゃな。どうしたんじゃ？」

だいき「覚えてたんですね。この街に久しぶりに戻ってきたんでちよつと顔見せに来

ました」

ナブ「そうじゃったか。わざわざありがとう。れおん君はどこじゃ？姿が見えんがのう」

ほのか「あ、今れおん君は別行動中なんです。レイロウシティで待ち合わせする事になつてて」

ナブ「ほう、そうじゃったか。じゃが、子どもだけで大丈夫かの？コスモ団などという輩が最近暴れておったからのう」

だいき「ジムリーダーは流石に知ってますよね。でも、俺達だつてコスモ団と少し縁がありましたし、れおんさんが旅してもいいって言ってるんで大丈夫ですよ」

ナブ「そうかの……。そういえばほのかちゃんも知つとるあのデンチュラ達はコスモ団の作業じゃったんじや。洞窟に謎の機械が設置されておつての。それで操られていたらしいんじや」

ほのか「そつか。確かにそれなら納得です。オアシティとかガーネシティでも似たような事あつたんです」

だいき「……ほのかって結構ドタバタしてたんだな。俺なんて平和だったぞ」

ほのか「そ、そうなのかな？ほら、れおん君がいたから私も安全……。だった時もあったよ」

ナブ 「まあ、巻き込まれんように気をつけるんじやぞ」

だいき 「はい。ナブさんも頑張ってくださいね」

その時だいきの腕についていた腕輪にナブが反応した

ナブ 「うん？その腕輪……」

だいき 「あ、これジャーバ博士から貰ったんです。カツコイイですよね」

ほのか 「そういえば、ナブさんの腕輪と似てるような……」

ナブ「なんと……………。お主達、この腕輪を持っておるとは。この腕輪が何か知つてるかの？」

だいき「知らない。え？ナブさん知ってるの？」

ナブ「ああ、そうじゃよ。ほのかちゃんは一度見た事あるのう。それはメガリングと呼ばれる物じゃ。それを使って一部のポケモンのメガストーンという物をはめればそのポケモンを更なる進化、メガ進化をさせる事ができる」

二人「メガ進化!!？」

ほのか「嘘!!メガヘラクロスみたいになれるの!!？」

だいき「それってこの地方には珍しいって言われてるやつじゃん！」

ナブ「そうじゃよ。ジムリーダーの中で使える者は二人。わしともう一人だけじゃ。しかも、トップトレーナーでも持つておらんやつもいるんじや。」

じゃが、肝心のメガストーンが無ければ発動はできん。それに、メガ進化できるのは一部のポケモン達だけじゃ。と思つておつたが、二人はそのポケモンを持つておつたな」

二人「え？」

ナブ「ほのかちゃんはアチャモの最終進化バシャーモが、だいき君はキモリの最終進化ジユカインがそれぞれメガ進化する事ができる」

ほのか「えー！凄い！」

だいき「じゃあ後はそのメガストーンってのを集めるだけ!？」

ナブ「いや、大事なのは道具だけではない。そのポケモンとの絶対的な絆や信頼関係じゃ。お互いの気持ちを一つにさせなければメガ進化させる事はできんぞ」

ほのか「お互いの気持ちを……一つに、か」

だいき「結構難しそうだね。ポケモンの言葉ってわかんないからさ。まあ、気持ちが大事なんだ。いつか出来るようになるといいな」

ナブ「頑張るんじゃないぞ。どれ、わしはそろそろジムに戻ろうかの」

ほのか「あ、ナブさん色々ありがとうございます！」

だいき「ありがとうございます！」

二番道路

ほのか「メガ進化……。私達が出るのかな？」

初の間間だからな！」
だいき「きつと出来るだろ！俺はそう信じてるぞ！何たって俺とジュプトルは旅の最

ほのか「まあ、そうだけどき。よくわかんないなあ。気持ちの一つひとつのがさ」

だいき「きつとこう、グワー！つてくるんだろ。それにまだまだ先の話だろ。それまでもっと勉強しておけばいいんだよ」

ほのか「ふふ、そうだね」

だいき「あ、この先下りの洞窟だぞ。ほのか大丈夫か？」

ほのか「あ……………。だ、だいき君掴まっていい？」

だいき「へへ、だと思った。まあ、大丈夫だぜ」

下りの洞窟

ピチヨン！

ほのか「ヒイツ!!」

だいき「うおっ！ほ、ほのか……くつつき過ぎだろ。もう少し、離れてくれ」

ほのか「ええ!?!酷い！めちやくちや怖いのに!!」

だいき「くそっ……。これはさっさと抜けた方がいいな。ほのかのためにも、俺のた

めにも…）」

ズバット達「ズバー！」

バサバサ！

ほのか「いやー!!怖いー!!」

霧の森

ほのか「ハア……ハア……。やっと出れた!!」

だいき「全くだ。こんなに疲れるとは思わなかった」

ほのか「あ、もう夕方だね。ここら辺でキャンプしようか」

だいき「だな。場所決めて準備してだから、今くらいからが丁度いいな」

その後、夜になり

だいき「おお！ほのかの作ったカレーー美味しいな！」

ほのか「えへへ、ありがとうだいき君。れおん君も美味しいって言ってくれたの」

だいき「俺も少しは出来るんだけどさ、大して美味しくなくてよ。ご飯が美味しいとやっぱいいいな！」

ほのか「ふふ、じゃあこれからはずっと一緒だから大丈夫だね」

だいき「え？そ、そうなのか？」

ほのか「あれ？違ったの？れおん君が旅をまたする時はだいきも誘おうって言ったから一緒だと思ってた」

だいき「あー、なるほど。悪いけど、俺はほのか達にはついていけないよ。自分一人で行く」

ほのか「そ、そっか。まあ仕方ないよね」

だいき「あ……。お、落ち込ませてごめんな？でもよ、ほら。俺とほのかはライバルだからさ。手の内とか、戦法とかはあまり見られたくないんだ」

ほのか「ライバル……。かあ。友達じゃ駄目なの？」

だいき「そりゃあ友達だ！でも、どうせならお互いを高め合った方がいいだろ？」

ほのか「確かに……」

だいき「だから俺は一人で頑張るさ。また街とかでほのかを待つてるからよ。そしてら、毎回とは行かなくてもバトルしようぜ。お互い成長してるか確かめるためによ」

ほのか「わかった！私もだいき君より先に着いたら待ってるね」

だいき「ああ！何かあつたら連絡してくれよな」

63. レイロウシティに向けて2

次の日、霧の森

だいき「相変わらずここは霧が濃くてよく見えないな」

ほのか「れおん君は道自体は単純って言ってたな。えっと、ここを真っ直ぐでしばらく先が右で、その後も右かな」

だいき「……………それ、こんな森の中じゃ役に立たないんじゃないか？」

ほのか「……………き、きつと何とかなるよ」

だいき「俺、ここ抜けるだけで一日かかったんだ。大変だったんだぜ」

ほのか「私はれおん君について行ってただけだから、詳しくは……」

二人「……………」

だいき「まあ……何とかなるだろ……多分」

ほのか「あ!! そうだ! 出ておいで、ミミツキュ!」

ミミツキュ「キュ?」

だいき「何でミミツキュ？」

ほのか「ミミツキュとはこの森で出会ったの。ミミツキュはかなり長い間この森にいたみたいだから、道は詳しいかも。ミミツキュ、ここからガーネシティまでの道ってわかる？」

ミミツキュ「キュ〜……。ミツキュ！」

ミミツキュはしばらく周りを見渡した後、ほのか達の前を歩いていった

ほのか「やった！ミミツキュわかるみたい！」

だいき「おお、ミミツキユやるなー！」

二時間ほど歩くと霧が薄くなってきた

だいき「あ、霧が薄くなってる。出口って事だ！」

ほのか「そうみたい。……あ！遠くにうっすらとガーネシティが見えるよ！」

だいき「いや、よかった！ほのかに任せてたら、また一日かかるんじゃないかと思っ
たぜ」

ほのか「うゝ！だいき君だって道知らなかつたくせに！」

だいき「そりゃあ俺の時は必死だったからよ。覚えてる余裕なんて無かったんだ。ほのかは余裕たっぷりだったのに覚えられなかったんだろ？」

ほのか「そんな風に言わなくたっていいじゃん！だいき君の意地悪！ミミツキユ、先
行こ！」

ほのかはミミツキユを抱いて先に走っていった

だいき「え……。ま、待ってくれよほのかー！俺が悪かったってば！」

ガーネシティ ポケモンセンター内

ほのか「……………」

だいき「……な、なあ、ほのか。この通り。からかって悪かった」

だいきは拗ねてるほのかに向かって精一杯謝罪している

ほのか「……………じゃあ、あれ」

だいき「ん？」

ほのかはカフェメニューにあるケーキセットを指している

ほのか「あれ買ってくれたら許してあげます」

だいき「……………あ、はい！わかりました！」

ミミツキュ「キュ〜？」

ほのか「……ふふ、少し面白くなっちゃった。ミミツキユは気にしなくて大丈夫だからね」

少しして、だいきがケーキセットを持ってきた

だいき「これで許してくれるか？」

ほのか「うん。まあそこまで怒ってなかったしね。少し面白がっちゃった」

だいき「え!!何だよー!それならそうと言ってくれよな!」

ほのか「意地悪するのが悪いんですー」

だいき「ぐ……」

その時、後ろから誰かが話しかけてきた

ワーグ「なんか見覚えある後ろ姿だと思ったらほのかちゃん達じゃねえか！」

ほのか「あ、ワーグさん！お久しぶりです！」

だいき「ワーグさんだ。どうしてここに？」

ワーグ「そりゃあここ、ガーネシティは俺の街だからな！どうしてここに、は俺の質問だぜ」

ほのか「私達れおん君に旅がまた始められるって聞いて、レイロウシティで待ち合わせする事になってるんです」

だいき「そう。だからその日に間に合うように、ギツタンシティからここまで来たんだ」

ワーグ「マジかよ。何事もなかったようですよ良かったが、この時期まだまだ子ども二人だけで旅なんて危ねえだろ。たくっ！れおんのやつ何馬鹿な事考えてんだよ」

だいき「れおんさんは俺達の事を子ども扱いしてないって事でしょ！ワーグさんはわかってないな。俺達はもう子どもじゃないの！」

ワグ「まだたったの10歳だろうが。何が子どもじゃないだよ」

だいき「子どもだったら一人でここまで来れないしー！」

ワグ「……………ハア。だいきは本当可愛くねえな。ほのかちゃんを見習えよな」

ほのか「あ、あはは……………。ワグさんはお仕事ですか？」

ワグ「今までな。夜中の仕事だったんだ。お陰でまだ寝れてねえけどよ。まあ、一日休みだし平気だぜ」

ほのか「れおん君がどうしてレイロウシティに集合って言ったのかわかりますか？」

ワーグ「あー……。それは本人次第だから俺が絶対こうだって言えるもんじゃねえけど、実はれおんは今回の騒動で入院する大怪我になったんだ」

二人「入院!!？」

ワーグ「そう。それでエステロシティで入院しててよ。退院したのもつい数日前だ。それが関係してんじゃねえかな」

だいき「そんな大きな事があったなんて知らなかった。何でニュースとかにならないの？」

ワীগ「ほんの一部だからだ。この騒動はあのレイロウシティの騒動に比べたらまだ被害は少なかった。放っておいたらそれ以上の被害が予想されてたけどな。まあ……要因は他にもあるが」

ほのか「あまり周りに知られてないからニュースにもならないって事ですか。でも、れおん君大怪我したなんて一言も言っただけでなかった」

ワীগ「まあ、カツコつきたいんじゃないか？子ども達の前でくらいよ。ま、俺みたいな大人からしたらどつちも変わらねえけどよ」

ほのか「“そういえば”ワীগさんの方が年上でしたもんね」

「だいき」 「そういえば」 「そうだったな！」

ワグ 「……………ほのかちゃん、わざとか？」

ほのか 「え？何がですか？私、変な事言いました？」

だいき 「いやいや、ほのかは何も間違えてないぞ。ワグさんとれおんさんが同い年のように見えるのは仕方ないって」

ワグ 「よし、だいき。お前は確実に馬鹿にしてるな。大人を馬鹿にするとどうなるか思い知れ！」

ワグはだいきの脇に手を入れくすぐり始めた

だいき「ギャア！アハハハハ！！や、やめて！！アハハハハ！！」

ワーグ「おりやあ！！大人を舐めるなー！！」

だいき「アハハハハ！！い、息が……アハハハハ！！」

ほのか「ワ、ワーグさん！皆さん見えますから、あまり騒がしくしたら駄目ですよ！」

ワーグ「おっと、そうだったな。それじゃあ残念だがこれくらいにしておいてやろう」

だいき「ハア……………ハア……………」

ワーグ「そうだ。この後、ほのかちゃん達はレイロウシティに向かうのか？」

ほのか「はい。ゆっくりしてもいいんですけど、早めにレイロウシティに着いた方がいいかなって思ってる」

ワーグ「なら、短いが俺がレイロウシティまで護衛してやるよ。何も無いとは思いますが、何かあったら困るからな」

ほのか「いいんですか？さっきまだ寝てないって」

ワーグ「別に今日一日休みなんだ。少しくらいなら大丈夫だぜ」

ほのか「ありがとうございます」

ワーグ「ほら、だいき。さつきとほのかちゃんみたいに感謝しろよ」

だいき「ハア……くそ、こんなやつが大人とか信じらんねえ……」

ワーグ「仕方ねえな。ほら、一緒に行く時にくすぐりはもつとしてやるから光栄に思っておけよ」

だいき「ふざけんな!!絶対近寄らねえからな!」

ほのか「それじゃあジョーイさんに預けてたポケモン達をもらいに行つてきますね」

だいき「あ、待てほのか！俺をこんなのと二人きりにすんな！俺も行く！」

ワーグ「……やれやれ、嫌われたか」

64. レイロウシティに向けて3

ガーネシティ前

ワーグ「お、そうだ！どうせならもう一人呼んでもいいか？」

ほのか「もう一人？誰かいるんですか？」

だいき「俺達の知ってる人？」

ワーグ「二度くらい会った事あるはずだぜ。こつちだ」

工事現場

ほのか「ここって工事してる所ですよ。入って大丈夫なんですか？」

ワグ「邪魔しないし大丈夫だぜ。さて、休憩のようだな。見つけた！おーい、バロツクー！」

バロツク「ん？おお、ワグか。あれ？れおんの連れてた子ども達じゃないか」

奥からはオレンジのタンクトップをして白のタオルを首にかけてバロツクがやってきた

だいき「あ！バロツクさん。会議の時以来ですね！お久しぶりです」

ほのか「こんにちは。もう一人ってバロツクさんの事だったんですね」

バロツク「もう一人？何の話だ？」

ワグ「バロツク、今休憩中だよな？ちよつと俺につきあつてくれよ」

バロツク「別に構わねえがどこに行くんだ？」

ほのか「私達れおん君とレイロウシティで待ち合わせしてるんですが、ワグさんが危ないから、とレイロウシティまで護衛してくれるそうなんです」

だいき「子ども扱いだよな！本当やめてほしいんだよ」

バロック「なるほどな。まあ、ワーズの意見はわかる。コスモ団の件が完全に片付いたわけじゃねえからな。それに、ワーズだけだと俺も不安だ。少し待ってな。ちよつと俺だけ休憩延長してもらってくる」

ワーズ「さつすがバロック！話がわかる男だぜ！」

だいき「……………バロックさんってさ思ってるより小さいよな」

ほのか「そ、そう？でも、男の人だと小さいかもね」

ワーズ「お前ら、それバロックの前で絶対言うなよ？特にだいき。バロックは身長の方が地雷なんだ。バロックに向かってチビとか言ったやつはもれなくバロックにフル

ボツコにされるぞ。れおんも一度口を滑らせたが、酷い有様だったんだぜ」

だいき「あ、それは怖いや。絶対言わない」

ワীগ「短気な所を直せばバロックはいいやつなんだがよ。別に小さいくらい気にする事でもねえのによ。もうあれ以上大きくなる事も年齢的にありえねえってのに」

ワীগの後ろに誰か立っている

ほのか「ワ、ワীগさん………後ろ………」

ワীগ「んあ？後ろ？」

バロック「……………」

ワーグの後ろにはバロックがニコニコと笑いながら、指をボキボキと鳴らしていた

ワーグ「あ……………」

数分後

バロック「さて、だいきとほのかだったな。レイロウシティまではそこまで距離は無いが仲良くいこうぜ」

だいき「は、はい！バロックさんと一緒に動けるなんて、俺光栄です！」

ほのか「……………ワ、ワーグさん置いてきちゃいましたけどいいんですか？」

バロツク「ワীগ？あれはもう故人だぜ。放つとけよ。それにしてもよくここまで何事もなかったな。まあ、それだけコスモ団も動きにくくしているって事なんだろうが」

だいき「エステロシテイでれおんさん達がコスモ団と戦ったんですね。それ以外は特に何もなかったんですか？」

バロツク「よく知ってるな。あの赤い馬鹿から聞いたのか？まあ、その通りだ。れおんのやつが大怪我したらしいな。鍛え方が足りねえんじやねえか？」

ほのか「あ、ワীগさんが走ってきた」

ワীগ「だぁー！追いついグヘツ！」ドサ

後ろにいたワググにバロックが後ろ回し蹴りを当てた

だいき「ヒツ……」

バロック「何か言うべき事は？」

ワググ「ず……すびばせん……バロック様」

ワググは地面に伏せながら絞り出すように謝罪している

バロック「次はない。いいな？」

ワググ「はい」

バロツク「ふう……。怖がらせたか？悪いな」

だいき「ちよつ、ちよつと怖かったかな……」

バロツク「二人の旅の目的はジムとコンテストか？」

だいき「俺はジムだけど、ほのかは違うよ」

ほのか「私もジムに挑戦してるんです。やっぱり女の子だと変ですかね？」

バロック「おお、そうだったか。確かに女の子でジムチャレンジは珍しいが変な事じゃない。寧ろかつこいいんじゃないか？応援してるぜ」

ほのか「ありがとうございます、バロックさん」

ワーグ「そういや、レイロウジムってまだチャレンジできないんじゃないか？」

だいき「え!?! そうなの!?!」

バロック「そういやそうだったな。水族館が壊滅して、ポケモン達の被害などでかなり忙しいらしい。まあ、ジムに順番は特にならない。しばらくしてチャレンジできるようになったらまた来ればいい」

ほのか「そうだったんですか。それだと次のジムはどこだろ」

ワーグ「レイロウシティから近いジム……。あー……。あいつか」

バロック「ゴウさんだな。メグドタウンにあるメグドジム。炎タイプのジムだ」

だいき「げげ、炎か。俺のジユプトルじゃあ敵わねえや」

ほのか「私もハスブレロがいるけど、苦戦するかも」

ワーグ「俺、あいつ嫌いなんだよ。俺を見るたびに勝負しかけてきてよ」

「バロック「仕方ねえだろ。炎タイプのトップトレーナー争いでお前に負けたんだ。あつちは勝手にライバルだと思ってんじやねえか？」

ワーズ「同タイプは苦手だ」

「ほのか「そんな事あったんですね。トップトレーナーって何人か候補があるんですか？」

「バロック「そうだな。無い場合もあるし、本人がやりたいかどうかに関わる。そこで被ればバトルや実績で決着をつけるって感じになる」

だいき「それでワীগさんとゴウさんがバトルの結果、ワীগさんが勝ったんだ」

ワীগ「そういう事だ。まあ、炎使いから一つアドバイスを言うなら、炎タイプでも自分の火を対処できるやつは少ないって事だな」

だいき「んん？ どういう事？」

ワীগ「それは自分で考えろよ。まあ、応援してっからよ」

ほのか「何となくわかったかも。ワীগさん、ありがとうございます」

バロツク「さて、バトル大橋だな。バトルはするのか？」

だいき「ここで俺とほのかは会ったんだよな」

ワーグ「どうせならタッグバトルなんてやってみたらどうだ？ やった事あるか？」

だいき「あ、俺やった事ない！ ほのか、いいか？」

ほのか「私は一度れおん君と。でも、それ以来だからやってみたいかも。やろうか、だいき君」

バロック「二人のバトルの腕前を見るのは初めてだからな。楽しみにしていようか」

65・タツグバトル

バトル大橋

「だいき「ほのかは誰でいくんだ？」」

「ほのか「そうだなあ……。ムンナ、起きてる？」」

「ムンナ「ムナ！」」

「ほのか「よかった、起きてた。ムンナにするよ」」

だいき「わかった。といつても、ムンナだと弱点をカバーできるやつが俺の中にはあまりいないんだよな。速く動けるスバメにするか」

スバメ「スバ！」

ほのか「それじゃあ誰かに声かけようか」

ワীগ「俺達は応援してるからなー」

バロック「楽しみにしてるぜ」

だいき「なんか緊張するな。あのー、すみません。バトルお願いしてもいいですか？」

男性「ん？バトルかい？いいよ。ダブルバトルかい？」

だいき「はい。俺達は一匹ずつ出すので、お兄さんは二匹出してください」

ほのか「よろしくお願いします」

男性「わかったよ。親切に教えてくれてありがとう。それじゃあ、ゴー！ドンメル！
ドッコラー！」

ドンメル「ドーンー」

ドツコラー「コツド！」

男性「教えてくれたお礼に先手どうぞ」

だいき「じゃあ俺だな！スバメ、ドツコラーにつばめがえし！」

スバメ「スバ！」

ドツコラー「コツドー！」

男性「ドツコラー！ビルドアップ！」

ドツコラー「コラー！」ドツコラーの攻撃と防御が上がった

ほのか「ムンナ、ドンメルにさいみんじゅつ！」

ムンナ「ムナー」

しかし、ドンメルには当たらなかった

男性「わわっ！危ない技持つてるな！ムンナを優先するぞ！ドンメル、はじけるほのお！」

ドンメル「ドン！」

ムンナ「ムナ！」

スバメ「スバ!？」

ムンナに当たった炎は飛び散り、スバメにも当たった

だいき「うわっ！何だあの技！こっちにまで飛び火したぞ！」

ほのか「はじけるほのおはそういう技らしいよ。ダブルとかでは有効なんだっけ。本に書いてあったよ」

男性「そういう事！ドツコラー、いわなだれだ！」

ドツコラー「コツド！」

スバメとムンナの頭上から岩が降り注ぐ

だいき「やべっ！スバメ、必死で避けるんだ！」

スバメ「スバー！」

ほのか「ムンナ、そこから動かないでサイケ光線で頭上のだけ壊して！」

ムンナ「ムナア！」

ドガアン！

だいき「スバメ、そのままの勢いでいけ！ドツコラーにつばめがえし！」

スバメ「スバー！」

ドツコラー「コッドー！」

ほのか「ムンナ、ドツコラーがチャンスだよ！サイケ光線！」

ムンナ「ムナー！」

男性「好きにさせないで、ドンメル！ドッコラーの前に出てド忘れ！」

ドンメル「ドーンー？」

ドンメルはムンナのサイケ光線を代わりに受けた

ほのか「だったらドンメルにさいみんじゅつ！」

男性「まずい！」

ムンナ「ムーンナー」

ドンメル「ドン!?……
Z Z Z」

ドンメルは眠ってしまった

ほのか「やった！命中！」

だいき「ナイスだ、ほのか！今のうちにドツカラーを叩くぞ！」

男性「くっ！ドツカラー、ビルドアップ！」

ドツカラー「コツド！」

だいき「スバメ、つばめがえし！」

ドツコラー「コツド……」ドサ

ほのか「ドツコラーが倒れた！後はドンメルだけ！ムンナ、あくむ！」

ムンナ「ムナームナー」

ドンメル「ドン……ドン……」

ドンメルはうなされ始め、体力が蝕まれている

男性「うわー、だから狙ってたのか」

だいき「スバメ、あんな隙を逃すなよ！全力でつばめがえし！」

ほのか「ムンナもサイケ光線だよ！」

ドンメル「ドーン……」ドサ

男性「ハハハ、負けちゃったな。強いね、二人とも。特に女の子の方は見かけによらず嫌な事をしてくるね」

ほのか「あ、あはは……。すみませんでした、汚い事して」

男性「いやいや、あれも立派な戦略。これからも頑張つてね」

ワググ「いやー、二人とも勝利おめでとう！よかったと思うぜ！」

バロツク「いわなだれによく対処出来たな。スバメの飛行速度を生かしたのもよかつたし、ほのかの落ち着いた対処もかなりよかつたぜ」

だいき「ほのかはどうするんだろうと思つたけど、まさか動かないで対処するとは思わなかつたな」

ほのか「ありがとうございます。前にれおん君に、いわなだれは上に降ってくるから慌てず、自分の真上だけの岩を注意してれば当たりにくいし対策も簡単って教えられたので」

ワーグ「なんだ。あいつあまり教えてないとか言っておきながらしつかり教えてるんじゃないか」

バロツク「だが、教えたからすぐにできるってわけじゃない。ムンナとの連携力だな」

ムンナ「ムナ！」

ほのか「えへへ、よかったね、ムンナ。もう一戦やる？それとももう行く？」

バロツク「悪いが俺の休憩時間も迫ってきていてな。すまないが、このままレイロウシティに向かってほしいんだ」

だいき「あ！そうだった！バロックさんは少し無理してるんだった！わかりました！ほのか、楽しかったぜ！またやろうな！」

ほのか「うん。そうだね」

レイロウシテイ ポケモンセンター内

ほのか「ワーグさん、バロックさんわざわざありがとうございます！ありがとうございました」

だいき「今度会ったらバロックさんのポケモンも見せてくださいね！」

バロック「ああ、いいぜ。また今度な。それじゃあ俺はこれで。旅頑張れよー」

ワーグ「れおんに会ったらよろしくなー！」

だいき「さて、行っちゃったな。どうする？」

ほのか「まあ、まずはれおん君に着いた連絡とジョーイさんにポケモン預けてこよう」

だいき「そうだな。スバメ、お疲れ様」

その後、カフェ内

だいき「れおんさん何か言ってた？」

ほのか「まだ着いてないんだって。明日の夕方には着くっていったからそれまでどうしよっか」

だいき「じゃあさ、明日一緒にこの街の観光しようぜ。前はターナさんと回るはずだったのがドタバタしちゃって無くなっちゃったじゃん」

ほのか「それもそうだね。気になる所たくさんあるし」

66. マボロシ山

次の日、レイロウシテイ 夕方

れおん「さて、ようやくついたか。ほのかちゃん達に連絡しないとな。まずはポケモンセンターに行くか」

ポケモンセンター内

入り口付近のソファにほのかとだいきが座って話していた

れおん「あ、ほのかちゃんにだいき。ちょうどよかった。今連絡しようとしてたんだ」

ほのか「あ!!れおん君、久しぶり！」

だいき「遅いよ、れおんさん。大人ならもつと早く行動しないと」

れおん「悪かったな。少々時間かかってな。よくここまで無事に来てくれたな」

ほのか「うん、他の人にも言われた。れおん君、今着いたばかりでしょ？疲れてない？どうせなら部屋で話そうよ」

れおん「そうだな。少し喉とかも乾いてるんだ。部屋取ってくるな」

だいき「……………どこも怪我してないね。大怪我したって聞いてたけど」

ほのか「退院したんだから治ってて当然だよ。色々報告しよ。メガリングの事もさ」

だいき「だな！あ、ルガルガンも見せよつと！」

その後、れおんの部屋内

れおん「マジか!!?メガリング!!」

だいき「ふっふっふん！どう！凄いでしょ！」

ほのか「まだ腕輪だけだから使えないんだけどね」

れおん「この地方だとギツタンシティにしか存在しないんだ。管理もジャーバ博士が

担当してるから、手に入れるにはジャーバ博士から特別な許可が必要なんだぜ」

だいき「そんなレアな物だったんだ。やったぜ！」

ほのか「いいのかな？ 私達がそんなもの貰っちゃって」

れおん「ジャーバ博士がくれたんなら大丈夫だろ。それにしても、よく使い方知ってたな。誰かに教えてもらったのか？」

ほのか「ハルヤタウンでナブさんに教えてもらったの」

だいき「あと、ガーネシティからワーズさんとバロックさんとも行動したんだ」

れおん「へえ。二人ともまあまあ忙しいのによく許してくれたな。まあ、ワーグならほいほいついていきそうだが」

だいき「あとね、俺の新しい仲間を紹介するね！出てこい、ルガルガン！」

ルガルガン「ルガ！」

れおん「おお!!ルガルガンじゃないか！真昼の姿か！。ガルドア地方ではかなり珍しいポケモンだ。俺はアローラ地方でしか見た事なかったな」

だいき「カッコいいでしょ！」

ほのか「私はどっちかといったら可愛いって思うかな」

れおん「バロツクも喜んだだろ？岩タイプ好きだからな」

だいき「あ……。しまったー!!そうじゃん！バロツクさんは岩タイプのトップトレジャーじゃん！見せればよかったー！」

ほのか「すっかり忘れてたね」

れおん「なるほど。まあ、次会った時に見せてやれよ。バロツクもルガルガンを持ってたはずだ。真夜中の姿だったけどな」

だいき「うん！あ、あとさ明日からまた旅をするわけじゃん？それで、れおんさんは俺がついていくと思ってる？」

れおん「別に？旅は自由だからな。人数がいた方が楽しいのはあるが、一人で進んだって何も問題ないだろ。一緒に来たかったか？歓迎するぞ」

だいき「ううん！俺はほのかのライバルだからな！ライバルと一緒に行動してたら作戦とかたてられねえじゃん。だから俺はまた先に進もうかなって」

れおん「わかった。ほのかちゃんも知ってるのか？」

ほのか「うん。私と話して決めたの。少し寂しいけどね」

だいき「まあ街に着いたら待つてるから少しの間だけだ」

れおん「レイロウジムがまだチャレンジ出来ない状況だからな。明日はレイロウシテイから出て、しばらく先にあるメグドタウンに向かうぞ」

ほのか「炎タイプのジムなんですよね。ワーズさんとバロックさんが教えてくれました」

れおん「そうだ。情報が早いな。ほのかちゃんはまた厳しそうだが、だいきはハイガニもルガルガンもいる。案外何とかかなりそうだな」

だいき「でも、少し特訓してから行かないと。ルガルガンも俺達のバトルに慣れても
らわないとだから」

れおん「俺達も寄り道するからよ。だいきはマボロシ山は行かないのか？」

だいき「マボロシ山？……ああ、途中にある大きな山の事か。特に行こうとは思っ
てないかな」

れおん「そうか。なら仕方ないな。ほのかちゃん、俺達は明日マボロシ山に向かうか
らな。前の約束だ」

ほのか「はい。ムンナが進化できるかもしれないですね。月の石落ちてるといい

な」

だいき「へー、ムンナって月の石で進化するのか。ムシャーナってやつだよ。見た事ないけど」

ほのか「そうそう。月の石ってかなり珍しいんだけど、たまにマボロシ山に落ちてる時があるんだって」

れおん「そこで修行も兼ねるか。炎タイプ対策のな」

ほのか「うん。お願い」

だいき「それじゃあ明日から俺は別行動だな。れおんさん、ほのか、メグドタウンで会おうな！」

ほのか「うん。ちゃんと待っててねー」

れおん「負けるなよー」

67・ムシヤーナ

次の日

れおん「それじゃあここから分かれ道だ。メグドタウンはあっち、マボロシ山はこっちだ」

「だいき「そんじやあ頑張れよな、ほのか」

ほのか「うん。だいき君もまたメグドタウンで会おうね」

れおん「それと万が一コスモ団に出くわしたら絶対に逃げるんだぞ。一人だと敵わない可能性が高い。危険な事はするな。だいきの親にも心配をかけられるんだからな」

だいき「そうだね。流石に危険なやつらなのはわかったから絶対逃げるよ。あ、何かあったら連絡するね」

れおん「ああ、そうしてくれ。じゃあな」

山道沿い

ほのか「山なのに結構ゆるやかな道なんだね。歩きやすい」

れおん「道自体は険しくないし、初心者向けの山でもあるからな。ただ、ほのかちやんにとっては厳しいと思うぞ」

ほのか「え？そんな事ないよ。私だつてこれくらいの道なら簡単に歩けるよ」

れおん「そういう意味じゃないんだが……まあ、いいか」

ほのか「??」

マボロシ山

れおん「さて、この中からマボロシ山だ」

ほのか「……………洞窟……………」

二人の目の前には大きな洞窟が広がっていた

れおん「だから言っただろ？ほのかちゃんには厳しそうだつて」

ほのか「うう。れおんさん、またくつついていいですか？」

れおん「まあこつちもほのかちゃんが怖がるのはわかってたさ。ランターン、また頼んだ」

ランターン「ターン？」

ほのか「あ、ランターン久しぶりだね。これなら明るくて大丈夫。ありがとう、れおん君」

れおん「よいしょつと。ふう、重てえなあ、お前」

ランターン「ターン！」ビリッ

れおん「うおっ！ビリッってきた！怒るな、怒るな！軽いなー、ランターンは」

ほのか「れおん君、女の子にそんな事言っちゃ駄目なんだよ」

れおん「女心ってやつだよな？難しいなー」

ポン！

ムンナ「ムナ？」

ほのかのモンスターボールからムンナが勝手に出てきた

ほのか「あ、ムンナ。急にどうしたの？珍しいね」

ムンナ「ムナ……」

ムンナは周りを見渡している

ほのか「ムンナ？」

れおん「様子がおかしいな。どうしたんだ？」

ムンナ「ムナア！」

ムンナは奥へと進んでいく

ほのか「え！ちよつとムンナ、どこにいくの！」

れおん「待ってくれほのかちゃん。俺、こいつが重たくて走るのが遅くなるんだ」

ランターン「ターン!!」ビリビリ!

ランターンは十万ボルトを繰り出した

れおん「ギャアアア!!」プスプス

ほのか「あ、また怒らせた。もう！ランターンも気にしてるんだから言っちゃ駄目

だつてば」

れおん「ううう……。すまねえ、ランターン」

ほのか「あ、ムンナを見失っちゃった」

れおん「そ、それじゃあムンナを探さないでだな」

ほのか「急にどうしちゃったんだろう、ムンナ」

れおん「この先は道なりだ。そこにいてくれるといいが、しばらく進むと分かれ道になつている。それまでには見つけたいな」

その後

ほのか「あ……。ここがその分かれ道なんだ。結局ムンナ見つからなかったね。どっちにいったんだろう」

れおん「二手に別れるか。俺は左に行く。ほのかちゃんは右側を頼んだ」

ほのか「それがいいかもね。見つけたら抱っこしてあげれば大人しくなると思うよ」

れおん「わかった。ランターンはほのかちゃんに渡しておくな。だが、何かあったら心配だ。俺の手持ちをもう一匹貸すよ。ラプラスだ」

れおんはモンスターボールをほのかに渡した

ほのか「ラプラス!! かなり賢いポケモンだったよね。いいの? 私の言うこと聞いてくれるかな?」

れおん「そこは問題ないはずだ。特に指示を嫌がるとかはないからな。あ、一度出してみてくれ」

ほのか「わかった。お願い、ラプラス」

ラプラス「(お呼びしましたか? マスター)」

ほのか「ええ!! こ、声が聞こえてきた! 何これ!？」

れおん「テレパシーだ。エスパークタイプのポケモンや知能が高いポケモン、伝説のポケモンなどは使えるという。この事を説明しておきたくてな」

ラプラス「(お初にお目にかかります。ボールから見えておりました。ラプラスと申します。よろしくお願ひしますね、ほのか様)」

ほのか「う、うん。よろしくね、ラプラス」

れおん「ラプラス、何かあったらほのかちゃんを守ってくれ。この子のポケモンのムンナがいなくなつたんだ」

ラプラス「(了解しました、マスター。ほのか様、バトルやポケモン同士の通訳は私に

お任せください」

ほのか「通訳も出来るんだ。頼りにしてるね、ラプラス」

れおん「ランターンもそのまま持っていてくれ。それじゃあまた後でな」

ほのか「うん。ラプラス、私達はこっちだよ」

ラプラス「はい。ついていきます」

ほのか「ランターンがいてくれると周りが明るくて本当助かる。一人だったら怖くて進めないもん」

ランターン「ターン」

ラプラス「ほのか様は暗い場所が苦手なのでしたね。ランターンも役に立てて喜んでいますよ」

ほのか「そうなんだ。ランターン、ありがとう。ラプラスって凄いな。どっちの言葉もわかるなんて」

ラプラス「(そんな…。私は凄くありません。私達からすれば普通な事です)」

ほのか「そう? だって本に人間の言葉を話せるポケモンって凄く珍しいって書いて

あつたよ」

ラプラス「確かにそれはそうですね。ですが、話せないではなく、限られた一部の人間にのみ聞こえる会話というものもあります。私のようなテレパシーや、ルカリオというポケモンが使える波動を使ったコミュニケーションなどは信頼した相手のみで会話が行われます」

ほのか「へー、じゃあ周りには聞こえてないけど私には聞こえてるってわけなんだ。……え!? 私の事信頼してくれてるの!？」

ラプラス「はい。ボールからずっと見ておりましたが、ほのか様はとてもお優しい方ですから、私のような珍しい力を悪用するような方とは思えませんので」

ほのか「あ、悪用!?そんなのしないよ!」

ラプラス「(ですので信頼してこの力を使っているのです)」

ほのか「あ、ありがとう……。えへへ、ちよつと嬉しいな」

ランターン「タン?」

眠そうにしていたランターンが何かに気づいた

ほのか「ランターン? って、ラプラスまで」

ラプラスはほのかの前に出た

ラプラス「（お下がりにください、ほのか様。何か近づいてきます）」

ほのか「え……。な、何だろう。ズバットの群れとかかな。怖いなあ」

??? 「ムナア！」

ほのか「あれ？この声って」

ムンナ「ムナア!!ムナ！」

ほのか「ムンナ！よかった！探してたんだよ」

ラプラス「(いえ、どうやらムンナだけではないようです)」

ほのか「え？」

ゴゴゴゴ!

何かが転がるような音が聞こえてくる

ほのか「な、何?この音」

ムンナ「ムウウ……」

ゴローン達「ゴロー!!」

奥からゴローン達が転がってきている

ほのか「キャアアツ！こ、こっちにたくさん転がってきてる！」

ラプラス「ラプー！！」

パキン！

ラプラスは冷凍ビームを出して、氷漬けにした

ラプラス「（この程度。私の敵ではありません）」

ほのか「わあ、ありがとう、ラプラス！ほら、ムンナもお礼言つて」

ムンナ「ムナーア！」

ラプラス「(可愛いですね。あら?)」

ほのか「どうしたの？」

ラプラス「(まだ何かこちらへきております)」

ほのか「え? な、何だろう」

??? 「ムシヤ〜」

奥からはピンクの体に花柄模様のポケモン、ムシャーナがやってきた

ムンナ「ムナ！」

ほのか「あれってムシャーナだよね。野生のポケモン？」

ムシャーナ「ムシヤ！シヤナ〜」

ムンナ「ムウ！ムナア！」

ムンナはムシャーナにくっついてる

ほのか「ど、どういう事？」

ラプラス「お母さんと言っていますね。この子の母親なのでしょう」

ほのか「え？ムンナの………家族？」

68. ムンナ、別れの時

ムシャーナ「ムシヤ〜」

ムンナ「ムムウ！」

ムンナはムシャーナと共に去っていく

ほのか「あ！ま、待ってよムンナ！」

ラプラス「（私達も追いかけた方がよさそうですね）」

しばらく進むと

ほのか「こ、ここって……………」

広い空間になっており、周りにはムンナやムシャーナがたくさんいる。その真ん中には一際大きな黒く光る石の塊がある

ほのか「ムンナ達の家……………なの？」

ラプラス「おそらくはそのようなものかと。集合場所のようになっているみたいですね。ただ……………」

ムシャーナ「ムシャ!?ムシャー！」

ムシャーナ達がほのかに気づくと攻撃しようとしたり、子どもを隠そうとしている

ほのか「え、ちよつ、ちよつと待って！私達、あなた達に何かしにきたわけじゃなく

て」

ムシャーナ「ムシャ！」

ムシャーナはシャドーボールを繰り出した

ほのか「キャアツ！」

ほのかの足下に当たり、ほのかは倒れる

ラプラス「くっ！あなた達、何もしてない人間を攻撃するなんて卑怯ではありませんか!?ほのか様、ここは少し危険です。引いた方がよろしいかと」

ほのか「でも、ここには私のムンナがいるはず。お願い！私達は何もしないから！絶対何もしない！信じて！」

ムシャーナ「ムシャ……」

ムシャーナ達は動きを止めた

ほのか「ありがとう！ここに一匹のムンナがムシャーナがムシャーナに連れてこられたはずなんだけど見てない？あの子、私の大事なポケモンなの」

ムシャーナ「シヤナー」

ムシャーナが奥を見ると、そこにはムンナ達が一匹のムンナを追いかけて遊んでいる
ムンナ「ムウ！ムウ！」

ムンナ達「ムムウ！」

ほのか「あの中にいるの？でも、どれが私のムンナだろう」

ラプラス「(モンスターボールからの光線を当ててみてはいかがでしょう。本人であれば戻るはずですよ)」

ほのか「なるほど。じゃあ、戻ってムンナ！」

ムンナ「ムウ？」

ほのか「あ、この子じゃないみたい。ごめんね、ムンナ」

ムンナ「ムムウ！」

少し遠くにいたムンナがほのかに走ってきた

ほのか「あ、もしかしてムンナだよね？もー！急にこんな所まできちやって」

ムンナ「ムナー！」

ムシャーナ「シャーナー」

一匹のムシャーナがほのかに寄ってきた

ほのか「ん？どうしたの？ムシャーナー」

ムシャーナ「ムシャー。ムシャ、ムシャー」

ラプラス「（このムシャーナは先程の母親のようです。もうムンナを私から引き剥がさないでくれと言っています）」

ほのか「え？ど、どう言う事？」

ムシャーナ「ムシャー。ムシャー。シャナー、ムウ」

ラプラス「(数年前に自分の娘のムンナが遊びに行つてから帰つてこなかったんです。友達によると人間の男にゲットされたと言っており、私達はとても悲しかったです)」

ムシャーナ「ムシャー。シヤナー、ムシヤ」

ラプラス「(あなたのムンナは間違いなくゲットされた私の娘のムンナなのです。私達の大切な娘なのです。どうかここに残してはくれませんか?と言っています。………ほのか様、どうされますか?)」

ほのか「え……。そ……。そんな……。その男の人ってお父さんの事なの?じゃあ、ムンナは……。大事な家族と離れ離れで……。今まで過ごしてたの?私……。そんなの知らなかった」

ほのかは呆然としながらムンナを見ている

ムンナ「ムナ?」

ムシャーナ「ムシヤ…………シヤナ、シヤナー」

ラプラス「娘をここまで成長させてくださった事は感謝いたします。ですが、この娘には家族との触れ合いが足りません。ここからは私達がしつかりと育てていきます。と言っています」

ほのか「そう……………なんだ。ぐす……………うつ、うつ……………ごめんね、ごめんね、ムンナ。知らない場所から…いきなり私の家に来て……………怖かったよね。家族と会えなくて……………つらかったよね。知らない人ばかりで嫌だったよね。」

私が……………ポケモンがほしいなんて言ったからお父さんが、他の誰よりも私が、あなたに苦しい思いをさせ続けてたんだね」

ほのかはムンナを抱きしめ、泣きながら言っている

ムンナ「ム……ムウ？」

ほのか「私……何にも知らなかった……。あなたの事も、このムシャーナ達の事も。本当に馬鹿よね……。ムンナにだつて帰る家があつて……。こうやって今まで待つてた家族がいたのに……。

私は呑気に考えて、遊ぶ事ばかり……。ムンナは家に帰りがつた時もあつたよね？ごめんね、ムンナ。ごめんね……。……。

ムンナとは……。ここでお別れ。私、ムンナと今まで過ごさせて楽しかった。

これからは……。家族で仲良く楽しく暮らすんだよ。私の事なんて忘れていいよ……。大事な友達で家族でもあつたあなたにづらい事しかさせてあげられなかつた私なんて、忘れて。

さよなら、私の初めてのお友達」

そう言い終わると、ほのかはムンナのモンスターボールを置いて走っていった

ラプラス「(あ!!お、お待ちくださいいほのか様!)」

ムンナ「……………ムウ」

しばらくして、先程の分かれ道

ほのか「うああああああっ!!」

ほのかは大声で泣き、悲しい気持ちを抑えきれずに涙が零れ落ちる

ラプラス「……………」

ランターン「……………」

ラプラスとランターンは困ったように顔を合わせている

ザツザツ!

れおん「ほのかちゃんの泣き声が聞こえると思ったら本当に泣いているじゃないか! おい、どうした、ほのかちゃん。何があつた」

ほのか「れおんぐん……。うわああああんん!!」

れおん「あー……。えつと、取り敢えず外に出るぞ。俺の方が行った道は外になつていた。一先ずそこで休憩だ。ラプラス、何があつた」

ラプラス「(少々ムンナの事でトラブルが起きまして。歩きながらお話させていただきますね)」

69. ほのかとムンナ

マボロシ山 山頂近くのベンチ

ほのか「ううっ……………ムンナ……………」

れおん「……………そっか。そんな事があったのか。あのムンナは確かに初めて会った時から幼いと思っていたが、まさか家族がここにいたとはな」

ラプラス「ムンナはどうやら理解できていなかった様子でしたが、おそらく説明されればわかると思います。ムンナにとっては……………どちらにるのが正しいのでしょうか」

ほのか「これで……いいの。ぐすつ……ムンナは最初からこの山で暮らしてた。それを……私のわがままであの家に連れて来ちゃっただけ。だから、ムンナにとってみれば私は、大事な家族達から引き剥がした最悪の人間。ムシャーナも、もう引き剥がさないでつて言つてたもん。だから……これで……いいの」

ほのかは下を向き、涙を零しながら言っている。手は強く握り締められている

れおん「……そうか。だが、最悪の人間つてのはやめておけ。それは絶対に間違つてる。もし本当にそうだとしたら、警戒心が強い種族のムンナがあんなにほのかちゃんや家族に懐くわけがない。少なくとも、ほのかちゃんはムンナにとつても大事な家族で友達だったはずだぜ」

ラプラス「そうですよ、ほのか様。ムシャーナもあなたに感謝していたではありませんか。ここまで育ててくれてありがとう、と」

ほのか「そ……そうかなあ……。私、ムンナに初め嫌な事たくさんしたのに……。
いっぱい怖がらせて、驚かせて……」

れおん「ムンナと仲良くなりたかったんだろ？警戒心が強いから仕方ない。それに、
今まで仲良くやってきたじゃないか。俺にはムンナはほのかちゃんが好きに見えた。
その心配は必要ないさ。俺が保証する」

ほのか「……………ありがとう、れおん君」

れおん「そろそろ夜になる。ここなら見渡しもいいから野宿にはピッタリだ。ほのか
ちゃんはまだここにいていいぞ。俺は少し食料やテントを作ってくる」

ほのか「う、うん。ありがとう」

れおん「それじゃあ戻れ、ラプラス、ランターン」

しばらくして、ムンナ達の家では

ムンナ達「ムウ！ムナア！」

ムンナ達が遊んでいる中で、ほのかのムンナだけは自分のモンスターボールを持ちながら下を向いていた

ムンナ「……………ムウ」

ほのかのムンナはふよふよと出口に向かっていく

ムシャーナ「ムシヤ？シヤーナ」

ムンナ「ムナ……………」

ムシャーナに遮られて先にいけなくなり、元の場所へ戻される

ムンナ「……………ムムウ」

夜中、れおん達のテント

ほのか「……………眠れないや。危ないけど、ちよつとだけ外に出よう」

ほのかはポケモン達のモンスターボールを持って外に出た

ほのか「ハア……………。ムンナ……………」

ボン！

ワカシヤモ「シヤモ？」

ほのか「あ、ヒー君。ごめんね、起こしちやった？」

ワカシヤモ「シヤモ……」

ワカシヤモはほのかの膝に手を置き、心配そうに見つめている

ほのか「ふふ、心配してくれてるの？ありがとう。ごめんね……こんなトレーナーで」

ワカシヤモ「シヤモシヤモ！」

ワカシヤモは横に首を振っている

ほのか「あ、こんなって言っちゃったから怒ってる？」

ワカシャモ「シャモ！」コク

ほのか「そっか。ヒー君は優しいね。……………少しだけ、ムンナ達の所にいってみようかな。でも……………暗いの怖いなあ」

ワカシャモ「シャモ！シャモ！」

ワカシャモは上を向き、口から小さい炎を出している

ほのか「ぶっ……………あはははは!!ヒー君、何それ!!面白い!!」

ワカシャモ「シャ……………シャモ…」

ワカシャモは照れてやめてしまった

ほのか「アハハハハ！ふう……………でも、明かりになろうとしてくれたんだよね？じゃあ
お願いしてもいい？」

ワカシャモ「シャモ!!シャモ」

ワカシャモはまた同じように口から小さい炎を出した

ほのか「ぷつ……………だ、だめだめ。頑張ってくれてるんだから、笑っちゃだめ、ほのか」

その頃、ムンナ達の家では

ムンナ達「スウ……スウ……」

ムシヤーナ達「zzz……」

全員寝静まっている

しかし

ムンナ「………ムウ」

ほのかのムンナは起きてブーツと坐っていた

その時

ガリガリ……ガリガリ……

ムンナ「ムナ？」

どこからか音が聞こえてきた

ガリガリ……ガリガリ……

ムンナ「ムウウ……」

ほのかのムンナは怖がって近くのムシャーナに隠れた

ムンナがそこから覗くと

ヤミラミ達「ヤミー、ヤミヤミ」

真ん中にある大きな黒い石の近くにヤミラミ達がおり、石を削っている

ムンナ「ムナ……ムウウ……」

ムシャーナ「zzz………シヤナ？シヤナー」

ムンナ「ムナ！ムナア！ムナア！」

ムシャーナ「ムシャ？………シヤナー！！ムシャー！ムシャー！」

ムシャーナは真ん中の石が削られているのを見ると飛び上がり、周りのムシャーナ達を起こす

ムシャーナ達「シヤナー！」

ヤミラミ達「ヤミ？ヤミ、ヤミヤミ」

ムシャーナ達「シヤナ……………」

ヤミラミ達に怯えてムシャーナ達は手が出せない

ヤミラミ達「ヤミヤミヤミ！」

ヤミラミ達はニヤニヤしながら削った石を食べている

ムシャーナ「……………シヤナー！」

一匹のムシャーナがヤミラミ達に突っ込んだ

ヤミラミ達「ヤミ！」

しかし、ヤミラミ達には当たらなかった

ムシャーナ「ムシャー！」

ムシャーナのさいみんじゅつ

ヤミラミ「ヤミヤミ！」

しかし、ヤミラミには当たらなかった

ヤミラミ達「ヤミー！」

ヤミラミ達のシャドークロー

ムシャーナ「シャナー！」

ドガアン！

ムシャーナは飛ばされて壁に激突する

分かれ道

ほのか「何とかここまでこれたね」

ドガアン！

ほのか「え!? な、何!? 怖いよ!!」

ワカシヤモ「シヤモ! シヤモシヤモ」

ほのか「え? な、何? 何?」

ワカシヤモ「シヤモ！」

ワカシヤモはほのかの手を掴み、走り始めた

ほのか「キヤアアア!! 待って、ヒー君!! 和、まだ心の準備がー!!」

70. 真夜中の戦い

ムシャーナ達の家

ムシャーナ「ムシャ……………」

シャドークローを食らったムシャーナは傷つき倒れている

ヤミラミ「ヤミヤミ！」

ヤミラミ達はムシャーナを煽っている

ムンナ「ムウウ……………」

タツタツタツ！

ほのか「待って、ヒー君!!暗いってば!!怖いー!!」

全員「??」

遠くからこっちに駆けてくる足音と一緒に叫び声も聞こえてきた

ムンナ「ムナア!!」

ワカシヤモ「シヤモー!」

ほのか「キャツ!きゅ、急に止まらないでよ。あ、あれ?ここってムシヤーナ達の
………って、どうなってるの!?!」

ほのかは周りに驚いている

ヤミラミ達「ヤミ!？」

ほのか「ヤ、ヤミラミ達だ。どうしてこんなところに」

ワカシヤモ「シヤモシヤモー!」

ヤミラミ達「ヤミー!」

ヤミラミ達はほのかとワカシヤモに襲いかかってきた

ほのか「ええ!?!、いきなりなんなの!?!」

ワカシヤモ「シヤモー！」

ワカシヤモははじけるほのおで応戦している

ほのか「た、戦わないと駄目みたい。ヒー君、いくよ！そのままはじけるほのお！」

ワカシヤモ「シヤモー！」

ヤミラミ「ヤミー！」

ヤミラミにはのおが当たると周りのヤミラミ達にもほのおが飛び散る

ヤミラミ達「ヤミヤミー！」

ほのか「効いてるよ、ヒー君！」

ヤミラミ「ヤミー！」

ヤミラミはあやしいひかりを出した

ワカシャモ「シャモ!? シャモ、シャモ」

ワカシャモは混乱してしまった

ほのか「あ!! ヒー君! 今のはあやしいひかり!」

ヤミラミ「ヤミー!」

ヤミラミのシャドークロー

ワカシャモ「シャモー！」

ほのか「あ、ヒー君！早く混乱を治さないと」

ヤミラミ「ヤミー！」

ヤミラミはほのかから鞆を奪った

ほのか「キヤアツ！あ!!か、返してよ！それ私の鞆！」

ヤミラミ「ヤミヤミ！」

ヤミラミは遠くに放り投げた

ほのか「もう!! 嫌な事ばかりして!!」

ムンナ「ムナー!」

ムンナは放り投げられた鞆を持ってほのかの元へきた

ほのか「あ! ムンナ! ありがとう!」

ムンナ「ムウ!」

ほのか「ムンナ、戦える?」

ムンナ「ムナ！」

ほのか「ムンナ、サイケ光線！」

ムンナ「ムナー！」

ヤミラミ「ヤミー！」

ほのか「いいよ、ムンナ！今のうちにヒー君にラムの実を。ほら、ヒー君大丈夫？」

ラムの実でワカシャモの混乱が治った

ワカシャモ「シャモ!? シャモー」

ヤミラミ「ヤミー」

ヤミラミはあやしいひかりを出した

ほのか「ムンナ、それは見たら駄目だよ！」

ムンナ「ムナ！」

ムンナには当たらなかった

ほのか「ムンナ、サイケ光線！ヒー君、はじけるほのお！」

ムンナ「ムナー！」

ワカシャモ「シャモー！」

ヤミラミ達「ヤ……ヤミ……ヤミー！」

ヤミラミ達は倒れた仲間達を引っ張って逃げていった

ほのか「な、何とかなったのかな。ヒー君、戻って休んでて。あ、ムシャーナ大丈夫？今傷薬使ってあげるね」

ほのかはムシャーナにいい傷薬を使った

ムシャーナ「ムシャ……」

ムシャーナの傷が回復した

ほのか「これで大丈夫。急に来ちゃってごめんね。でも、危なかったなら助けられてよかった。……………それじゃあ、さよなら」

ほのかは立ち去る

ムンナ「ムナ!!!」

ムンナはほのかの足にくっついた

ほのか「え?ム、ムンナ?」

ムンナ「ムナ!!ムナア!ムウ!!」

ほのか「駄目だよ。ムンナは……………ここで幸せに暮らすの。家族がいるんだよ。ずっと

離れ離れだったんだよ？だから、ここに残らないと」

ムンナ「ムナ!!ムンナ!!」

ムンナはほのかから離れない

ほのか「ムンナ……………」

ムシャーナ「シヤナー……………」

ムシャーナ達もどんどんやってきた

ムンナ「ムナア!!!!」

ムンナは涙を流している

ほのか「……………ムンナも……………離れたくないの？私と……………一緒がいいの？」

ムンナ「ムナア！」

ほのか「ムンナ!!! 私も……………私ももつとあなたといたい!! ずつと一緒がいい!! これからも一緒に旅して、強くなって、仲良くしたい!! お別れなんて嫌だよ!! ムンナは私の大切な友達!!! もつとこれからもずつと、ずつと一緒にいる!!」

ムンナ「ムナア……………」

ほのかはムンナを抱きしめている

ムシャーナ達「……………」

それを見ていたムシャーナが話しかけてきた

ムシャーナ「シヤナー」

ムンナ「ムナ？」

ムシャーナ「ムシヤー、ムシヤ」

ムシャーナはムンナを連れて大きな黒く光る石の前にきた

ほのか「どうしたの？ムンナ」

ムシャーナ「ムシヤー」

ムンナ「ムウ……………」

ムンナはその石に触れる

ムンナ「ムナア!!」ピカア!!

ムンナは光に包まれる

ほのか「キヤツ!こ、これって……………進化の光!!」

光に包まれたムンナの姿は変わっていき

ムシャーナ「ムシャー!!」

ムンナはムシャーナへと進化した

ほのか「ムンナが………ムシヤーナに……進化。この石って、まさか………月の石!?!? こんなに大きかったの!?!?」

ムシヤーナ「ムシヤー」

ほのかのムシヤーナはほのかの元へ戻ってきた

ほのか「ムンナ、ううん。ムシヤーナ、進化おめでとう!」

ムシヤーナ「ムシヤ、ムシヤー」

ムシヤーナはほのかを押している

ほのか「え? ムシヤーナ………どこにいかせようとしてるの?」

ムシャーナ達「シヤナー」

ムシャーナ達はほのか達を見送っている

その顔は笑顔だった

ほのか「もしかして……………私と、来てくれるの？」

ムシャーナ「ムシャー」

ほのか「……………えへへ、ありがとう、ムシャーナ。これからも一緒だね。またよろしく、私の初めてのお友達」

ムシヤーナ「ムシヤ、ムシヤ」

71. エスパール

次の日の昼

れおん「まさか真夜中にそんなに話が進んでいたのか。俺も起こしてくれてよかったのに」

ほのか「私もほんのちよつとした行動がここまで変化するなんて思わなかったもん。でも、これでよかった。ムシャーナが帰ってきてくれたんだもん」

ムシャーナ「ムシャー」

ほのかとムシャーナは抱き合っている

ポロツ

ほのか「あれ？ムシャーナから何か落ちたよ」

ほのかはそれを拾う

ほのか「凄い綺麗な石だね。ピンク色だよ」

ムシャーナ「ムシヤ!!?ムシヤー!!」

ムシャーナは驚いている

れおん「……………ま、まさか……………それって」

ほのか「れおん君知ってるの？」

れおん「確信がもてない。ラプラス、ムシャーナの言葉を頼む」

ラプラス「(はい。私達のお宝。お母さん達に渡されたやつ落ちちゃった、だそうです。そちらの石からはとても不思議な力を感じます)」

れおん「やはり…… エスパ―Zなのか？」

ほのか「エスパ―Zって……… Z技の事!？」

れおん「ああ、そうだ。だが、このガルドア地方って発見されているのはノーマル、水、炎、草Zの四種類だけだ。もし本物なら凄い発見だぞ」

ほのか「ええ!? そ、そんなに!? ムシャーナ、これ本物?」

ムシャーナ「ムシャー」

ラプラス「Zってのはよくわからないけど、なかよしのトレーナーに渡すものって長老が言ってた。だそうです。おそらくZクリスタルで間違いないかと」

ほのか「そ、そうだったの……。えへへ、なかよしだつて」

れおん「凄いな、本当に。おそらくほのかちゃんとムシャーナならもう条件は満たしているって事か。ほのかちゃん、試してみるか? ムシャーナとの全力技。エスパ―Z

を」

ほのか「でも確か本にはZリングも必要って」

れおん「前に見せただろ？俺のやつがある。使ってみな」

れおんはカバンから自分のZリングを取り出した

ほのか「い、いいの？」

れおん「俺も一応使えるんだが………ちよつとやりにくくてな。ポーズを決める必要があるんだ」

ほのか「ポーズ？」

れおん「そう。タイプ事に分かれたポーズがあつて水Zを発動させるためのポーズ、エスパ―Zを発動させるためのポーズで違うんだ。俺はエスパ―Zのポーズは知らないから、ある人に聞いてみようか」

ほのか「そんなのがあるんだ。ある人つて？」

れおん「もちろんクイ博士だ。前に話したと思うが、ワ―グとアローラ地方に行つた時に少し知り合つたんだ。連絡先を知ってるから今連絡してみるさ」

ほのか「そっか！クイ博士つてアローラ地方でZ技とかの研究してるんだっけ。本にも載つてた」

れおん「そうそう、その人だ。さて、パソコンは慣れてないから不安だけど何とかなるか？」

ほのか「れ、れおん君。これ、多分テレビ電話になつてるよ？」

れおん「あ、あれ？普通にメールをやりたかつたんだが、まあいいか」

ピコン！

ククイ「アローラ！誰かと思ったら随分久しぶりじゃないか！れおん君！」

れおん「あ、ククイ博士。お久しぶりです。お元気そうで何よりです。突然の連絡す

みません」

ククイ「そんなの気にしないでくれ。それでどうしたんだい？俺に何か聞きたい事でも？」

れおん「あの、これを確認してほしいんですけど、エスパーZのZクリスタルで間違いないですか？」

れおんはパソコンにエスパーZを向けた

ククイ「んん？これは、そうだね！間違いない。エスパーZだ！ガルドア地方にはほぼZクリスタルは無いと聞いていたがどうしたんだ？」

れおん「実は野生のポケモンが持っていたんです。それでこれを貰ったトレーナーに

エスパークを発動してみたいと言っているんです」

クワイ「ほう！それはまた面白いな！Zクリスタルがどうやってできたのかはアローラ地方でもはっきりとはわかってないんだ。ただポケモン達が持っている事も少ないから、もしかしたらポケモン達の間で生成されるものかもしれないね。」

それでエスパークを発動させるのはいいが、Zリングとポーズが必要だ。ポーズは教えられるが、Zリングはそっちにはれおん君とワグ君以外持ってないだろう？大丈夫かい？」

れおん「はい。Zリングは俺のを貸します。なのでクワイ博士にはポーズを教えるはして」

クワイ「わかった！そのトレーナーさんは近くにいるかな？」

れおん「はい、いますよ。ほのかちゃん、挨拶だ」

ほのか「は、はい。初めまして、ククイ博士。私、ほのかといいます。Z技は本などで知っているのですが、ポーズまでは知らないんです。教えてください！」

ククイ「おお、女の子だったか。可愛らしいじゃないか。アローラだ、ほのかちゃん。あ、アローラっていうのはこっちは挨拶の言葉なんだ。それでエスパークのポーズの前に少し聞きたい事がある。ほのかちゃんはZクリスタルを貰ったという事は、野生のポケモンに認められたという事。」

そして、Zクリスタルを扱うにはそのポケモンとの信頼関係が必要不可欠だ。ほのかちゃんはZクリスタルを使うポケモンを信じてあげているかな？また、同時にそのポケモンからも信頼されているかな？」

ほのか「は、はい！ムシャーナとはずっとお友達ですし、このZクリスタルを貰う前にもムシャーナと私はお互い大事な存在だっただってわかったんです。信頼されているかは確信できないけど、私はムシャーナを絶対に信じてます！」

ククイ「うん！いい返事だね！それなら安心だ。そのムシャーナも近くにいますかい？」

ムシャーナ「ムシャー？」

ククイ「お、いるみたいだね。アローラ、ムシャーナ！それじゃあポーズを教えるよ。俺の真似をしてみてくれ」

ククイ博士はエスパーZのポーズを取った

ククイ「出来るかい？」

ほのか「えっと腕を合わせて、回して、頭に手を当てて、こう？」

ククイ「うんうん。いい感じだ。もう少し自信を持ってやってみようか」

ほのか「はい！」

ほのかはエスパーZのポーズを取った

ククイ「オーケーだ。ポーズは難しくはないからね。それと、Z技はポケモンとトレーナーが放つ全身全霊技。ポケモンとほのかちゃんの体力を多く使うから、ここぞと

「いう場面のみで使うんだよ」

「ほのか「わかりました！」

「れおん「一度つけてやってみるか？」

「ほのか「そうですね。やってみます！」

「ククイ「広い場所でやるんだぞー」

「その後

「れおん「ここならいいだろう。といっても、技を受けるやつがいるよな。誰かやりた

いやついるか？」

ラプラス「（私がいきましようか。耐久には自信があるので）」

れおん「わかった。悪いが頼むぞ、ラプラス」

ほのか「ごめんね、ラプラス」

ククイ「エスパータイプの乙技はマキシマムサイブレイカー。さあ、見せてくれ！ほのかちゃんとムシャーナの全力を！」

ほのか「ムシャーナ、行くよ！」

ほのかのZリングが光り出す

ククイ「今だ！ポーズを決めろ！」

ほのか「ムシャーナ、決めるよ！私達の信頼を力に！全力を!!」

ほのかはエスパークのポーズを取った

ムシャーナ「ムシャー!!」

ほのか「マキシマムサイブレイカー！」

ラブラス「(キヤッ!)」

ラプラスは浮き上がり、周りに張り巡らされた光の壁に何度も反射される

ラプラス「(くうっ!)」

パリーイイン!!

周りの光の壁は全て割れた

ククイ「決まったな!今のマキシマムサイブレイカー、よかつたぜ!ほのかちゃんとムシャーナの信頼関係が生み出した技だ!」

ほのか「ハア……ハア……。結構疲れる、これ。こんなに力を使うなんて」

れおん「大丈夫か?ラプラス。耐えられてはいたみたいだが」

ラプラス「はい、何とか。しかし、Z技というのはかなり強力ですね」

れおん「ゆつくり休んでくれ。ククイ博士、ありがとうございました」

ほのか「私も！ありがとうございます！とつても勉強になりました！」

ククイ「気にしないでくれ。こっちこそ久しぶりにれおん君と話せてよかったし、いZ技も見せてもらった。また今度アローラ地方にも遊びに来てくれ！」

ほのか「はい！ぜひ！」

れおん「それでは突然すみませんでした。切りますね」

パン！

ほのか「ふう………ムシャーナ、疲れちゃったね。でも凄かったよね、あの技。私達、あんな技使えるようになったんだ」

ムシャーナ「シヤナ……」

れおん「この技ならメグドジムにも使えそうだな。しばらくはそのZリングほのかちゃんに貸すさ」

ほのか「ええ!?いい、いいよ。私もいつかアローラ地方に行った時に貰うから」

れおん「いや、俺の事は気にしないでくれ。実は……………ポーズが恥ずかしくてほとんど使っていないんだ」

ほのか「ええー、勿体無い…………」

れおん「だからこんなやつが使うよりかはほのかちゃんが使った方がいいだろ？」

ほのか「……………そうかもしれないけどさ」

れおん「まあほのかちゃんがアローラ地方に行く事になったら返してくれ。それまではレンタルって事で」

ほのか「……………わかった。ありがとう、れおん君」